

どきどき防衛戦争

この星は大部分が熱エネルギーと岩で構成されており、生ける者たちは熱のエネルギーを活かし活動している。そこへ、水の軍団が進軍してきたのは今から38の朝と夜を巻き戻した頃、宇宙より飛来した巨大な船は星の炎を塗りつぶし、冷え固まった岩の上に拠点構えた。船の中から現れた大勢の兵士は様々な放水機を用いて、次々と侵略地を拡大。炎の星に闇をもたらした。

ここ、フレイムタウンという街は活火山の近くに位置し、加えて水の軍団が構えた拠点から離れていた為、これまでには消火の被害とは無縁であった。だが、近隣国である帝国ガイアが制圧された事により、今回の攻撃対象となる。フレイムタウンに住む炎の民も応戦を試みるが、水の力を前にして炎は弱く、防衛隊員たちは時間稼ぎの為に力を尽くし、住民たちは忍びながらも街からの避難を開始する。

そのような状況の中、フレイムタウンの近くにある山道を駆け登る少女が一人。彼女の名前はメラといい、フレイムタウンの自衛隊に所属する一般隊員である。このような危機的状況の中、なぜ単独行動をとっているかといえ、それは彼女の友人が唯一の原因である。

友人の名はジェリーといい、メラとは幼き頃より知った仲である。ジェリーは炎の民には珍しく、水に強い興味を抱いている少女であった。友人はメラの他に知らず、山奥の古い建物で水についての研究……水科学の研究に没頭していた。親しい人が少ないとはいえ、人並みの優しさは持っているようで、山奥の研究施設を選んだ理由も、水の苦手な炎の民に配慮しての事であった。

崩れかけている階段を3段ばかり登った先、四角い赤土のブロックを積んで作られた研究所が現れる。メラは穴が空いている場所から研究所へと入り、部屋の右奥にあるハシゴを降りて地下へと潜った。そして、自分の靴底がハシゴと噛みあっているか確かめながらも、下へ向けて声を落とす。

「ジェリー？下にいるんでしょ？」

メラが出した強気な声も空しく、返ってきたのは響いた自分の声だけ。火の灯りが地下に見えてくると、メラは何度か高さを確認してから一気に飛び降りる。地中には大きな空洞が広がっており、浅く水の入った容器を覗いている黒い髪の少女がいた。彼女を見つけると、メラは憤慨した様子で声を掛けた。

「いるんなら返事してよねー！」

「あつ……メラメラ。どうしたの？」

「悠長に話をしてる場合じゃない！さつさと避難しないと、ここも危ないんだよ！」

「……どうして？」

「話はあとあと！」

メラはジェリーの手を強引に引き、ハシゴのある場所まで連れて行く。そこで、ハシゴの上から落ちてきた物が顔に当たり、メラは後ろにいるジェリーへと背中を寄り掛けた。

「つめたいつ！な……なんだこれ？水？」

「水……？」

冷たさで顔が真っ赤になったメラを見て、ジェリーは服の上に来ている青いコートのフードを被った。これはジェリーが水科学の実験を行う際に着ている物である。ただし、この星で水を手する事は極めて手間な理由で、どれほどまでの水に耐えられるのかは未知数。また、市場に出回っている商品ではなく、ジェリーが個人的な用途の為に自作した服である。

「ずるい！あたしも入れて！」

メラはジェリーのコートをまくりあげて中に入り、ジェリーの胸元あたりから顔だけをのぞかせていた。成長が遅れているせいも、もしくは成長が終わったのか、メラはジェリーよりも身体的に未熟であり、それ故に成せた合体である。

ハシゴを伝って水が流れ込んでくる。ジェリーは爛々として、メラは気持ち曇った表情で見上げていた。その後、おもむろにジェリーがハシゴへ近づくと、メラは足腰に力を入れてジェリーの体を押し戻した。

「ちよちよ……大丈夫なの？こんなコート一枚で……」

「手袋もあるから」

ジェリーは両手に装着している黒い手袋をメラに見せつけると、ゆっくりとした動きでハシゴへと足を掛けた。メラはコートの中を移動し、ジェリーの背中に抱きつく姿勢を取った。幾ら力の強い火の民とはいえ、一人おぼつてハシゴを登るのは容易ではない。だが、メラの体格が人並みよりも貧相であり、あんまり問題はなかったのだ。

ハシゴを上り終えるまでには少し時間が掛かり、ジェリーが研究所の床へ足を付けた時に見えた光景といえ、天井が崩れ落ちている水浸しの部屋と、灰色に沈んだ空の色であった。ただ、それらには驚く様子も見せず、ジェリーは床にできた水たまりを踏みつけたりしていた。

「上に着いた？着いてるよね？よいしょ……わっ！み……水だ！」

地上へ着いた事を一人で何度も確認した後、メラはジェリーのコートから体を出した。しかし、ジェリーが水たまりの上に立っていたせいで、危うく滑って尻もちをつくところである。

「あぶない！ほら、こっち来なさい！」

「あ……あぁ」

メラに袖を引かれてしまい、ジェリーは水たまりから退散した。その後、研究所の外に誰もいない事を確認すると、メラは故郷の現状について細かく語り出した。

「夜が来る前を狙って、水の軍団が責めてきたの。ここが壊れてるのも多分、そいつらのせいだと思う。今は防衛隊が街で戦ってくれてるけど、勝てるかは解んない。街の人達も避難を始めてるし、早く避難しないとダメなの！解った？」

「……そつか。たいへんね」

「たいへんなの！う……うわっ！」

メラとジェリーは爆発音を聞きとり、崩れかけている研究所の壁に隠れながらも音の元を探した。すると、音と共に遠のいていく巨大な物体が空にあった。謎の物体は大量の水を小刻みに地面へと向けて噴射させ、それを推進力として飛行している。水を落とした先には地面があり、多量の水が弾けるに従って、細かな岩を溶かし破裂させていた。

「研究所を壊れたのも、あれの仕業ね！」

「すごい……水で飛んでる！」

「こら……感心してる場合じゃない。こっちくるかも知れないんだから、こんな所からは退散退散」

「あ、ちよっと待って」

ジェリーが研究所の一角に置いてある箱をさぐっており、メラは足と手だけを走らせながら足踏みしている。しかし、あまりにもジェリーの用事が長引いたせいで、メラは面倒ながらも箱の中を見降ろす事となった。

「……なに探してるのよ」

「発明品。役に立つかもしれないから。メラメラ、これ」

「……予備のコートと手袋？長さ……じゃなくて、ウエストが合わないけど……ないよりはマシね」

ジェリーの着ている物とは色の違う黄色のコートを受け取り、ぶつくさと言いながらもメラはコートを被り着た。サイズはジェリーに合わせてあるらしく、コートの裾はメラの靴に当たっている。メラがコートの裾を気にしている内にも、ジェリーはポケットやカバンに様々な道具を詰め込み、出発準備を完了させた。

「うん。早く行こう」

「散々、あたしを待たせたくせにく。ところで、その背中の大きい何なの？」

「安全に水を汲む道具」

「持っていく必要がある……？」

「……解らないけど、一応」

「邪魔になったら捨てて行きなさいよね」

「うん」

ジェリーの背中には『安全に水を汲む』用途の道具があり、それはジェリーの体と同じ程の長さを誇っていた。形は筒状をしていて、先端が針のように細長くなっている。より鮮明にイメージを伝えるのであれば、巨大な注射器という言葉の一つで片付け代物である。

まずは街の様子を確認すべく、湿り気のある土を踏み、2人は山道を下っていく。道は高低差が激しく、研究所から街へと辿る道のりも直線ではない。深さの知れない谷底を回避しつつ街へと向かう道中、なだらかで広い

地形の場所と出会った。そこに見慣れない影を見つけ、メラはジェリーの背中を引つ張つて岩陰へと隠れた。

「……どうしたの？」

「静かに！さつき飛んでいった変なのがいる！」

大体の場合、静かにしろと言う方の声の大ききもので、あちらに気づかれなかったのは幸いである。平地には先程の飛行物体が2つ設置してあり、その大きさはジェリーとメラが隠れている岩を1として、推定30はあるものであった。しばしメラが監視を続けていると、物体の中から人の姿をした何者かが現れた。

「アマカゼ隊長！目標地点に到達を確認！指示をください！」

一般兵の出で立ちをした男に呼ばれ、背の高い厳格そうな男が物体の内部より現れた。その様子を見て、やつとメラは物体が乗り物である事実に気づく。

「どうして唐突に水の軍団が現れたのかと思つたら、あんな乗り物が用意してあつたのね。でも、街から外れた、こんな場所で、何を企んでるんだらう……」

「位置、方向、地形の傾斜、よーし！準備が整い次第、街へ向けて放水を始めろ！」

「了解！」

乗り物の前面には水を排出する大きな口があり、ゆつくりと手前に倒れる形で蓋が引き下げられている。アマカゼという人物と兵士の会話を盗み聞き、ジェリーは敵の目的を察して知る事が出来たようで、まれに見る慌てようでメラへ何かを言い伝えていた。

「街に向けて、水を放出するみたい」

「……なんの為に？」

「……街を壊すつもりかも」

「こんな遠くから？」

「……」

口で言っても重大さが伝わらないと感づいたらしく、ジェリーは実験に使っている皿のような物をバックの中から2枚だけ取り出した。一枚目の皿で地面の水たまりから水をすくい、斜めにした2枚目の皿へと水を流した。ちよろちよると零れ落ちていく水を2人で見つめた後、メラは口を尖らせて物申した。

「こうなるの」

「……つまり、どうなるの？」

「水……ななめの場所だと速く流れ落ちるの。だから……」

「……」

街のある場所と山の斜面と敵の乗り物を見つめている内、情報の足りなかったメラにも危機的状況が理解できたらしい。メラは何かを急かすようにして、ジェリーの肩をゆすり始めた。

「どどど……どうするのよ！あんな大きなのに入ってる水に襲われたら、街は一巻の終わりじゃない！今すぐ、防衛隊に伝えなきゃ！」

「間に合うかしら？」

「それは解らないけど……」

「放出開始まで、残り300カウント！299……298」

「ごめん！やっぱ間に合わない！もう、どうしたらいいんだ……」

敵兵の一人が水の放出へ向けてカウントダウンを始め、乗り物からは大勢の兵士が駆け下りてきた。諦めて座りこんだメラを見て、ジェリーは迷いながらも背中の巨大注射器を抱え持った。

「まだ、出来る事はあるかも」

「……そうかなあ」

「うん」

「……そうだね。まず、やれる事をやらなきゃね！で、それでなにをするの？」

「これをこうして……ハイドロバスター！」

注射器の先端を地面の水たまりへと向け、ジェリーが謎の呪文を力強く唱える。すると、道をふさぐ程だった水が一瞬で注射器の中へと吸い込まれた。咄嗟にジェリーの口を抑えたメラだったが、敵に気づかれていないのを確認して手を離れた。

「ビックリしたあ……音声スイッチ式の装置なんなら、先に言いなさいよ」

「……ごめんささい」

「でも、これ使えるんじゃない？これで、あの乗り物の水を全部、吸い取っちゃえばいいんだよね？」

「……え？」

「……え？無理？できなさそうなの？ううん……よし、次だ」

「うん」

この道具に使い道はないと見て、メラは次の道具を出すようジェリーに促した。さて、次に取り出したのは小ビンに詰まった茶色の粉。この粉を水に少量だけ加え、ゆっくりと混ぜていくと、水が固まってプルプルになり

ました。

「すつごーい！世紀の大発明ね！この粉の名前は役立たずにしましようよ！」

メラの心ない発言を受けて、ジェリーは心を打ち砕かれたように、しゃがみ込んでいた。

「……ごめん。ウソウソ……次、いつてみよう！」

「うん……」

ジェリーはバググの中から鉄の玉を取り出し、それを泥で汚れている水の中に転がし入れた。

「だんだん、水が綺麗に……」

「なんで、それを出してきたのよ！このタイミングで！」

「100……99……」

「ああ、もう時間がない！もう！こうなったら行くしかない！」

メラは腰に下げていた機械を構え持ち、大勢の敵が待機している道の先へと走り出た。これは火科学で作られた武器であり、火科学というものは火に関する研究の賜物である。その内容は炎の扱いを初歩とし、火に強い素材や弱い素材の活用法、溶炉の製造にも及ぶ。

メラの所持しているものは『砲火器』という名を持ち、一般的に支給されている隊員用の武器となっている。その構造は単純であり、機器内部に備えられている玉が人の声を振動で判別。持ち主だと認識した後、発せられた言葉に応じて様々な形状の炎を引き出すというものだ。つまり、必殺技を叫ぶと技が出る。

「くらえ！ファイアーアロー！」

細長い武器の先にある銃口より、矢のような形の炎が飛び立った。水の軍兵を2人だけ倒したが、すぐさま他

の兵が水撃兵器で応戦。かき消されてゆく火の矢を見届ける事もなく、メラは小さな岩陰に逃げ込んだ。乗り物を押さえていた敵兵は背中の武器を持ち直し、次々とメラの方へ攻撃を向ける。

「こんな大勢が相手じゃ、勝てる訳ないじゃん……」

「メラメラ……大丈夫？」

岩陰をつたって、ジェリーがメラの元へと駆けつけた。しかし、ジェリーは戦闘の心得がない為、心配した様子でメラに叱られていた。

「危ないから、あつちで見てて！う……うわっ！」

敵兵の撃ち出す水が岩に当たり、バリバリという音と共に壁が破壊されている。音が止んだ時を見計らい、ジェリーは小声で何か言っている。

「もしかすると、水は重いから、高い所までは届かないかも……」

「そうなの？解った。やってみよう！」

メラは敵の目を引くように岩壁から転がり出ると、軽快な動作で高い場所へと飛び上がった。腰を下げつつ武器を上に向け、敵への攻撃を再開した。

「メテオスコール！」

大きな炎が空中で分散し、広い範囲を燃やしている。水の軍も下から水を放っているが、放物線を描く弾道はメラの立ち位置まで届かない。また、敵兵は大量の水を背負っている為に動作が重く、メラを追い掛ける事も叶わない様子であった。

「ここは安全だけど……すぐに炎が消されちゃう！」

乗り物を守る兵士が手薄になり、街へ水を流すカウントはストップしている。だが、下から迫る水の応酬に炎は敵わない。敵が自分の場所から離れ始めている事を知り、メラは更に体勢を低くして少し遠くの敵を狙い撃つた。ただ、敵を倒す事に意識を集め過ぎたのか、敵の放水によつて足元が脆くなっていると気づかなかつた。

「わっ！」

メラが転がり落ちたのを好機と見て、敵兵は大勢で一斉に彼女を取り囲み、その一人はメラの手から離れた武器を足で踏みつける。倒れたメラに銃口を押しつけながらも、髪の毛の長い隊員が乗り物の近くにいるアマカゼ隊長へと呼びかけた。

「隊長！こいつ、どうしますか！？」

「捕虜にして使い道はないが……捕えておけ」

「了解！」

「やめて……メラメラに手を出さないで！」

いてもたつてもという様子でジェリーは日陰から飛び出し、巨大な注射器状の水くみ機を敵の集団に差し向けた。その正体を知っている者からすれば滑稽な絵であるが、なにせ形状だけはバズーカ砲に匹敵するインパクトを持っているもので、水の軍団も動揺を隠し切れない。そこで、まずは脅しをかけようと、敵兵の一人がメラの腕をつかまえ……ようとした寸前の事。

「おいっ！こいつの命が惜しくば……」

「は……ハイドロバスター！」

「うおっ！」

交渉の余地はなく、ジェリーの所持している水くみ機から水が発射された。その威力は凄まじく、撃ち抜かれた敵兵は空の彼方へと消え、投げ飛ばされたメラは近くを転がっている。すぐさま、メラは跳ねるように体勢を立て直すと、自分の武器を拾うために走り出し叫ぶ。

「な……なんか解んないけど、どんどんやっちゃって！」

「う……うん。ハイドロバスター！」

ジェリーは発射した水の勢いで尻もちをついていたが、メラの声に気づくと再び攻撃を開始した。その一方、メラも砲火器を手にとると、すぐさま反撃の言葉を口にした。

「ファイアーアロー！」

戦況が変わったと見て、ついにアマカゼ隊長が乗物から降りてくる。

「我が軍に2人ぼっちで挑むとは、笑止……」

「ハイドロバスター！」

「ふんっ！効かぬわ！」

数秒ほど水圧に耐えた後、隊長は山の向こうへと吹き飛ばされていった。隊長を倒された事により、敵軍は撤退を始めている。兵士が全て乗り物に乗り込んだのを見届けると、ジェリーは注射器に残っている全ての水を放出して乗り物へと攻撃した。

「……ハイドロバスター！」

巨大な機体は棒の先で突かれた玉のように飛び、落ちた音さえも聞こえない場所へと消えていった。他に誰もいなくなった山道で、ジェリーとメラは啞然とした表情をしている。それから時間をおかず、眼下に見える街の

火が輝きを失った。そこで、2人はフレイムタウンが攻め落とされた事を知った。

「街が。どうしよう……メラメラ」

「ほら、見張り台に煌めきの石が置いてあるでしょ。あれが光っていたら、街の人達が避難を終えてる合図なの。きつと、みんな無事よ」

「そっか。よかった……」

「……よかったわよ。早く行こう」

もの聞きたそうな顔でメラはジェリーの注射器をチラチラと見ていたが、そんな事は後回し。街の人達が待っている避難場所へ向かうべく、ジェリーの手を引いて歩きだした。

メラはフレイムタウンの防衛隊員であるが、実際に敵を迎えて戦ったのは今回が初めて。興奮か恐怖かも定かでない気持ちが胸につかえ、避難場所へ足を急がせている最中は言葉が出てこなかった。普段から訓練しているメラでも気が動転するのだから、非戦闘員であるジェリーが足を震えさせているのも当たり前である。

住民たちが避難した先は街から少しだけ離れた火山の中で、普段は鉱物の採掘が行われている場所である。炎の民にとつて食料となる白石が豊富な上、街の人々が逃げ込めるだけの広さを持ち、マグマによって高温が保たれている事から、水の軍団が責めてくる可能性も低いと見られる。ジェリーとメラは山の入り口にあるトンネルを通り、坂道の先にある熱気エレベータへと乗り込んだ。

「動くかなあ……」

壁に備え付けてあるスイッチをメラが全体重で引き下げると、エレベータはガタンともゴトンとも言わない。

そこへ、髭まみれで色黒の老人が現れた。

「メラ、生きてたが。隊員の人数が足りんが、誰がいねえのか解らんど、防衛隊総長が齒軋りしとったど」

「ジェリーを探しに行くって言って行っただけどなあ……ところで、エレベータが動かないんだけど」

「そんなら、ここだ。うりゃ」

男の人がエレベータの下にある石を足で退かすと、ゆらゆらと揺れながらもエレベータは上に引かれ始めた。メラとジェリーが乗り込むまで男の人はエレベータを抑え、自分も乗り込むとエレベータの隅に置いてあるイスに腰かける。その後、何を言っているか解りにくい声でジェリーに話し掛けた。

「街にいねえがら心配しとったげども、ジェリーは、どこに行ってただ？」

「……街の……外」

「この人、工房長のジガーさんだよ。ジェリー……何回か会ってるでしょ」

誰と話しているのか解っていないと見て、メラがジェリーに名前を教える。ジガーは特に気分を害した様子もなく、メラへと別の話題をほうっていた。

「そりゃ、着てるのが変な服だが。家がら持ってきただが？」

「そうそう！あたしたち、水の敵をやっつけたの！すごいでしょ！」

「そうだか。早いどこ、隊長に報告しどけ」

「うん！」

話が噛み合わないのは普段の事であり、ご愛敬である。エレベータが止まるのを待ち、メラはジェリーの手を引く張って外に出た。山の4合目あたりにマグマの溜まり場があり、その熱の立ち上った先に鉄の足場が組まれている。体の冷えた者は温かい場所に集まっていて、その他の人々は不安げに立ち話などをしていた。

「あつ、お父さん！ジェリーいたよ！」

「メラ……よく、無事に戻った。ジェリーも、ケガはないようだな」

採掘場のゴンドラが下がり、戦闘員らしくない雰囲気を持った男の人が降りてきた。彼はメラの父親であり、防衛隊の司令官を務めている。ジェリーはメラの家に居候している為、同時に彼はジェリーの保護者でもある。「たった今、我々の現状を街の皆に報告したところだ。メラが避難を終えた事は、私から隊長に報告しておく。

エリザ君、2人を案内してあげてくれませんか？」

「承知しました」

メラの父親は隣にいる若い女の人へと2人を託し、白い金属で出来た厚い扉を開けて別の部屋へと向かった。エリザと呼ばれた女の人は街の東側を守る防衛隊の副長であり、長い刀身のある砲火器を肌身から離さず持ち歩いている。主に面倒事を全て任せられている司令官から零れた面倒事を押しつけられている事から、基地内でも司令官とペアでいる事が多い人物であった。メラとは基地などで多く会うが、ジェリーとは面識が薄く、やはりジェリーは2、3歩だけ後ろを歩き、会話はメラに任せる事とした様子である。

「エリザさん！教えてもらった通り、ちゃんと武器を使えました！」

「それは良かった……しかし、砲撃を出すたび、あの凝ったキーワードを口にしたのですか？」

「はい！」

「そ……そうですか。しかし、どこで砲火器を使用したのですか？」

「水の軍団と戦闘になっちゃいました……」

「水の軍と!?なぜ、そのような無茶な真似を……怪我はないですか?それに……ここへ避難していると気づ

かれては……」

「あの……大丈夫です！それは」

ここまで大袈裟に心配されるとは思わなかったようで、メラは都合が悪そうにエリザへと言い訳を始めた。

「いや、あたしは……大して戦ってなくて、本当はジェリーが敵を追い払ってくれて」

「ジェリーさんは砲火器も武器も使用できないでしょう……怒ったりはしませんので、本当の話を聞かせてください」

「本当なんですすよ！ジェリーからも説明してよ〜！」

「……え？」

フレイムタウンの人々はジェリーの研究について詳しくなく、メラの言葉だけでは事の成り行きを信じてくれない。仕方なく、ジェリーがエリザに謝罪する。

「あの……勝手な事をして、すみません」

「では、水の軍団を撃退したというのは……本当なのですか？」

「それは本当ですよ。こんな状況で嘘ついてても、しょうもないですし」

ジェリーの代わりにメラが視線も強く訴えると、エリザは信じたいという表情のまま余所見をしていた。そして、自然と止まっていた足を動かしながら、ひとまず話題を締めくくっていた。

「にわかには信じられませんが、のちのち司令官へ報告します。まずは奥さまの所へ案内しましょう」

「ほんとなんだけどなあ」

「行きましょう」

なにやら納得いかない様子を見せながらも、エリザは2人を台所へと案内した。採掘場の手前に位置しており、鉱夫の昼食を用意する為に設けられただけの小部屋である。だが、本日は避難した街の人々への食料を供給しなければならず、調理師は交替制で引つ切り無しに料理を作り続けていた。

「奥さま。娘さんたちが、お見えになりました」

「あら？まあ、遅かったわね！」

メラの母親は男達に交じって料理をよそつていたが、エリザの声を聞くと皿を持ったまま走ってきた。料理を落とさない器用な仕草で彼女がメラとジェリーを抱きしめると、周囲の視線が勝手に集まってしまう訳で、すぐにメラは腕の中から抜け出して反感を見せていた。

「はずかしい……やめてちょうだい」

「心配させたんだから、そのくらい辛抱なさい。その点、ジェリーは素直よ」

「……」

「緊張して逃げ出せないだけでよ……」

ジェリーが体を固くしており、それに気づいたメラの母親は腕から彼女を解放した。その後、思い出したかのように料理を差し出した。

「今が一番、熱いから、食べなさい」

「あたしたちは後で良いよ。他の人が待ってるかもしれないし」

「そう？じゃあ、運ぶの手伝って」

「わた……私も手伝いましょう！」

「……エリザさん。あなたは、お休みしなさい。寝てないのでしよう？」

手伝いに名乗り出たエリザだったが、見るからに疲弊していたせいでメラの母親から寝るよう言われていた。結局、メラとジェリーだけが休む事なく仕事を引き受け、一段落ついて食事をとったのは空が明るむ頃であった。地面に鉄が敷いてある場所へと座り込み、メラとメラの母親とジェリーは白い砂利を口に含んでいた。やつとの事で心安らいだせいか、メラが荒げた息と共に本音を吐き出している。

「つかれたよ。そもそも、水の軍団が来なければ、こんな事にならなかつたのに……やつら、何者なの!？」

「あの人……パパがいうには、空の彼方から現れたと聞いたけど……誰なのかしらね」

「じゃあ、宇宙人って事？この星を侵略しに来たのかも……あたしが強かったら、追いついてやるんだけどなあ。ジェリー、その水をすくう機械って、もつと作れないの？」

母親から敵の情報を仕入れると、メラは明らかな憤りを見せながらジェリーに提案した。すると、ジェリーは口をこもらせながら短く返答した。

「ううん……無理。設計図を紛失したから」

「そつか……そもそも、あたしたちじゃ水の事が解んないから、ちゃんと扱えるか解らないよね」

「あ……でも、水を弾く服なら、時間をかければ作れるかも」

「水を弾く服って、2人の着てる変わった服？」

「うん」

メラの母親はジェリーとメラが来ているレインコートをまじまじ見つめると、メラにレインコートのフードをかぶせながら軽い口ぶりで言う。

「うん。にあつてるわよ」

「うーん。水に濡れないのは良いけど、少し大きいのが嫌だなあ……」

「よければ、あとで下の方、切つてあげるわ。ジェリー、構わないかしら？」

「うん」

ささやかな食事を終え、メラとジェリーは寢床を探して歩き始めた。家族の居る者は広間に集まり、その他の者は男女で別れ、西と東の大きな通路に場所を確保している。それらに習つて移動し、ジェリーとメラも東の通路に腰を落ち着けた。相当な疲れを溜め込んでいたのか、メラは座つたと同時に体を横に倒した。

「もう動けない。あたし寝る」

うつ伏せで床に頬をすりつけていたメラだったが、ジェリーがカバンから何か出し始めたのを知ると、だらしなく倒れたままジェリーを見上げた。

「……なにそれ？」

「水の兵士が落としていった武器。何か参考になるかと思つて」

「まあ、ちやつかりさん。で……見て何か解りそうなの？」

「……すごい機械だと思つう」

「すごいのか？」

「……よく解らないけど」

「よく解らないのに凄いの」

「よく解らない物は、凄い物だから……」

「うん……」

ジェリーの言葉が足りないせいとか、メラが研究者ではないせいとか、いまいちメラは心に入ってこない様子であった。しかし、こういった場合に追及しないのがメラの性格であり、今回も後を濁さず話が進んで行く。

「ジェリーは科学者じゃなくて、本職はウエイトレスだから……一人だと解んない事も多いよね」

「うん……奥さまの店、壊れたりしてないかな」

「どうだろう。山から街を見た時は、そこまで崩壊してたイメージないけど」

メラの母親は食堂を経営しており、その店でジェリーはウエイトレスとして働いている。つまり、科学者としてはアマチュアである。なお、メラも防衛隊員であって研究者ではない。

「……まあ、いいや。今は考えるのも面倒だし、壊れてたら修理すればいいの。いつ街に戻るかだって解んないんだし」

「そう……だよ。あ……コートの裾を切っておくから、貸してちょうだい」

「うむ、頼む。じゃあ、おやすみ」

メラはコートだけ脱ぐと目を閉じて、今度こそ本当に眠ってしまった。メラの寝顔を見つめた後、ジェリーは水の兵隊が持っていた道具を解体し始めた。

それから、2人にとつては短い時間が経ち、メラは辺りが騒がしくなった事に気づいて目をさました。

「んんん……何かあったの？あれ……ジェリー、まだ起きてたの？」

「うん。なんだろう」

「……あの、すみません。何かあったんですか？」

近くを走っていた防衛隊員にメラが尋ねてみると、彼は急いでいると言わんばかりの早口で説明してくれた。

「隊歴の長い者に招集が掛けられた。街の様子を偵察に向かうようだ」

「そうなんですか。ありがとうございます」

走り去っていく隊員を見送ると、メラは壁に背をつけて座りなおした。まったく動く様子のないメラを見て、ジェリーは呟くように質問した。

「行かなくていいの？」

「だって、あたし隊に入ったの、ちよつと前だもん」

「意外と短いのね」

「あんだ……さては、あたしに興味ないでしょ」

「そうじゃないけど……もつと前から基地へ行ってたような」

「遊びには行ってたけど、ちゃんと入隊したのは最近だからね……お祝いで良い物、食べたでしょ？」

「……あ」

「ほら、思い出した。あたしの事より料理の事の方が憶えてるんだー。もういいよー」

「ごめんなさい……怒らないで」

メラは隊の様子を見に行くようで、ぴよこと立ち上がって通路を歩き始めた。その後ろをジェリーがオロオロと歩いていくのだが、その数秒後には普段と同じく横並びで歩いていた。

ゴンドラの設置してある広間には防衛隊の精銳が集結しており、隊列の前には第一支部の隊長と司令官が起立していた。各部隊の隊長が隊長に向けて手を上げると、総隊長であるアバは憤りを解き放つが如く叫んだ。

「諸君！我が故郷が攻め落とされた！これは、紛れもない我々の失態である！この屈辱と、炎の民としての威厳を胸に！フレイムタウンをいざ、奪還せよ！」

隊長への信頼と、出撃へ向けての気合を込め、隊員たちが咆哮にも似た声を上げている。その振り上がった拳を静めつつ、司令官が話を続ける。

「……本件は偵察任務となります。自己防衛以外での戦闘は禁止です」

「司令官！お前、負けたままで恥ずかしくないのか！」

「皆さん。念の為、砲火器に燃料は補充しましたか？」

「……あつ！失念しておりました！」

「エリザ君……ただちに補給してきなさい。そして、食料は隊から支給されている弁当箱に入る分だけです。その他は置いて行くように」

「おい、司令官！腹が減っては戦が！」

「本日は偵察任務になりますので」

メラの父親が総隊長と隊員一派をまとめており、この様を見た一般市民が、一様に司令官を『司令官先生』と呼ぶのである。『家族に行つてきますを言ったか』から、『カバンの口が閉まっているか』まで確認した後、やつの事で司令官は出動の合図を出した。

「第1部隊の隊員より、順に出動してください。では、鉾山へ残る隊員は、街の人々を頼みます」

第一支部の隊に付いて司令官も出動し、指令の通りに他の隊も足を動かした。第4部隊と第5部隊の隊員は住民を護衛する為に残されるらしく、安堵している者や不服そうな者も見受けられた。メラも残された隊員の一人

であり、周りの動向から自分のすべき事を探ろうとしている。

「さてと、あたしは何をしたらいいかなあ」

「メラメラ。奥さまが手を振ってる……」

「う〜ん……また、昨日と同じ仕事かあ〜」

案の定、ジェリーとメラは料理を運ぶ役目を受けたのであった。父親の安否を思う間もなく働き続け、しばらくの時を経て休憩に入った。少しでも外の様子を知りたいのか、2人は鉱山の上層にある窓つきの部屋で食事をとった。

「お父さんも、みんなも無事かなあ」

「メラメラ……そこから、なにか見える？ 私には何も見えないけど」

「いや、ぜんぜん。もう、街の辺りに着いた頃だろうか」

目を凝らしても凝らしても、ゴツゴツとした風景しか見えず、ふてくされた仕草でメラはヒザを抱いていた。母親の作ってくれた弁当箱には温めた白石と、赤鉄の細巻き、砂岩で作った小さなケーキが詰めてあり、ジェリーとメラは一塊ごとに摘まんで口へと入れていた。しかし、メラは赤鉄の細巻きが好みでないのか、会話の合間に何気なく、ジェリーの弁当箱へ入れようとしていた。

「メラメラ……奥さまが作ってくれたのだから、自分で食べないとダメよ」

「……これ、ツルツルしてて嫌い。食べたら、頭が痛くなっちゃう」

「じゃあ、せめて……半分は食べて」

「どうせ残しちゃうんだから、もったいないよ。全部あげる」

「そんな事、言わないで。一つだけでも……」

「だって、あたしが口つけたのは……食べたくないでしょ？」

「ん……」

「でしょ？ダメにしちゃうより、食べれる人が食べた方がいいよね？」

「いや……あれ……あれ？メラメラ……あれ、なに？」

ジェリーが窓の外へと顔向きを逃がしたところ、火山の方へ飛んでくる大きな影を見た。最初は話をはぐらかされたと思ったメラだったが、異常事態だと気づき弁当箱をバッグへと片づける。そして、ジェリーに簡単な指示を出した後、すぐに仲間の元へと報告に走ったのであった。

「ジェリーは下にいる人達の所に行つて、一緒に避難して！あたしは隊に報せてくる！」

「う……うん。解つた」

昨日に見た物と同じ乗り物が火山の上へと飛んで行くのをながめてから、ジェリーは一般市民の避難場所となっている火山の中腹へと向かった。ゴンドラから降りた場所に防衛隊員がいて、どこへ行けば良いのかジェリーに指示を出してくれた。

「敵は火山上層の東側へ着地した。なんとしても我々が食い止めるからして、下にあるマグマの溜まり場まで避難せよ！」

「……解りました」

壁際の階段を下つた遙か先、火山の中央ではヘドロのような溶岩が紅色の光を放っている。溶岩を縁取っている地面には男の人達が立っており、火山の更に下へと他の住民たちを誘導していた。

「君は確か、司令官の家に住んでいる……奥さまには先に下の空洞へと避難してもらった。早く行つて顔を見せてあげなさい」

「……奥さまは無事なのね。よかった……教えてくれて、ありがとう」

メラの母親が無事であると宿屋の主人から告げられ、ジェリーは安堵の息で感謝を伝えた。その後、街の人々が避難している階層へと急いだ。

火山下層部の空洞は溶岩が溜まっている場所の下にあり、分厚い天井岩を越して溶岩の熱が下がってくる。この火山は惑星にある中でも最大級であり、付近の大地に溶岩の熱を伝え、一定以上に保つ役割を担っている。その温度は凄まじく、少量の水は熱に負けて気化してしまう程である。敵が水で責めてくる以上、ここよりも安全な場所は見つからない。

ジェリーが他の住民たちに交じつて空洞へと降りると、すでに空洞の中へは手を広げる事も難しい程の人数が避難していた。そんな中、メラの母親は怯えている人々と、状況が把握できていない子ども達に優しい言葉を掛けていく。そこへ参加していく勇氣はなく、ジェリーは壁際に背をつけたまま、不安げな表情で天井を見つめていた。

しばらくした後、上の階で騒がしい声が聞こえてきた。すぐに男の人がハシゴを飛び降り、街の皆に状況を報告した。

「溶岩が黒く固まっている！手の空いている者は上に来てくれー！」

降りてきた男の人の声を聞き、戸惑いを露わにしながらも数人の若い男の人が上へと向かった。人の声が止んだところで、ジェリーはメラの母親へと話し掛けた。

「奥さま……無事だったのね」

「ああ……ジェリー」

メラの母親は走り寄ると同時にジェリーを抱きしめ、少しの間だけ彼女の体温を確認してから、顔を上げて語りかけていた。

「あなたが見つかった良かった……あの人もメラも、今頃は……」

「……」

かける言葉に迷ってジェリーが目をそらすと、空洞内の気温が急激に下がっているのを感じ取った。周りの人々も体が冷えてしまい、深刻な表情を更に俯かせている。先程の憂鬱な言葉を振り切るようにして、ジェリーはメラの母親へと伝えた。

「水についての問題だったら、何か……役に立てるかも。私、上の様子を見てくる……」

「……そうね。ううん。絶対、みんなも無事なはず！私は大丈夫だから、ジェリー……行つてあげて」

「……うん」

メラの母親が肩から手を離してくれるまで待ち、ジェリーは人の間を縫うように歩いて上の階へと続くハシゴまで向かった。念の為にレイコンートのフードを被り、まだ熱の残っている鉄製のハシゴを登る。上の階には溶岩の光がなく、青黒くなった岩壁だけがジェリーの目に映り込んだ。

溶岩のある場所まで登り着き、ジェリーが辺りの様子を見まわしている。ねばねばと動いていた溶岩は冷えて固まり、表面に薄い水たまりを作っている。それを男達はシャベルで取り除いているのだが、水は上から流れ込み続けていて、取っては増え取っては増えの際限ない作業と化していた。水の出どころを確かめるべく、ジェリー

―は忙しそうな男達を横目にしながらも上の道へと向かった。

「……わぁ」

上の階は下よりも水びたしとなっていて、その光景を見てジェリーは思わぬ声が出る。このままでは歩くにも不慣れた道で、ジェリーは背中中に担いでいた巨大注射器を手で持ち直した。

「ハイドロバスター！」

波打っていた水は全て注射器へと吸い込まれ、入った水は注射器の発する淡い光に当たって輝いていた。水の流れてくる場所は更に上らしく、静かな火山内に水の流れる音が響いている。ジェリーが足を動かすと、曲がり角の方から聞きなれない声が届いた。

「お前、敵兵か！」

「は……ハイドロショットガン！」

「うごお！」

敵の一員と見られる身なりの男の人が現れ、重そうな水撃銃をジェリーの方へと向けた。しかし、射程範囲へ入り込むよりも早く、注射器から放たれた水の弾丸を体を受ける事となった。

男の人は道の奥にある出入口から火山の外へと投げ出され、その際に武器だけをその場に落としていく。敵の武器は大きかったために拾い上げる事はできなかったが、ジェリーは武器のコアとなる部品だけを取り出して手に入れた。

注射器が正常に機能したからか、ジェリーは僅かばかりの自信を足取りに見せながらも先へと進む。ここから先は道が幾つにも別れていて、鉄板を張り付けただけの看板に導かれて歩かねば行き止まりとなる。ただ、ジェ

リーの目的は水の出どころを知る事である為、今回は水の流れ来る方向を見て進行した。

ジェリーの息が切れてきた頃になり、うめくような人の声が道の先から聞こえてきた。壁の角に隠れながらジェリーが大部屋をのぞき見たところ、ヨロイを着た隊員達の倒れている姿が発見でき、ジェリーは敵がいないのを確かめながらも歩み出す。街で会った事のある男の人を近くに見つけ、ジェリーは怖々とした口調で話し掛けた。

「何が……ここで起きたの？」

「あんた……こんな所まで、危ない。しかし……下は、ど……どうなった？」

「きゅ……急に溶岩が固まってしまつて。様子を見に来たの」

「水と共に、透明な冷たい岩が押し寄せ……その後、敵は退散したようだが……が。それが、達成すべき目的だったのか……」

男の人も周りの隊員たちも、身動きがとれないくらい寒さで体を震わせていた。思い出したようにジェリーは隊の中を歩いてみるが、やはりメラの姿が見当たらない。来る途中に会っていない以上、まだ前線に取り残されている可能性が高い。何かを考える様子もなく、ジェリーは火山の上層へと急いだ。

広い火口が、徐々に頭上へ近づいてくる。あと少しだけ登ると頂上という場所で、ジェリーは火山の山肌にある道へと出た。山をぐるりと周回するように歩いて行くと、水の弾ける音が激しく聞こえる。何人かの防衛隊員が敵と対峙しており、やはりメラの声が最も映えて響いていた。

「ああー、もう！他の人たち、どこ行っちゃったのよ！」

水の銃弾を岩の柱で防ぎながらも、メラは防戦一方な戦況を叫んでいる。防衛隊員の何名かは寒くて動けない

らしく、主に反撃しているのはメラと他2人ほどであった。彼らがいる場所はジェリーのいる場所から離れており、敵兵はメラ達の方を攻撃するのに集中している。となれば、隠れて攻撃したくなるというものである。

「……ハイドロショットガン！」

「うわーっ！」

「どうした！伏兵か！？」

「おつ、チャンス到来か！メラ、ケガ人を下へ避難させてくれ！俺が、お前らを守る！」

水の軍団がジェリーの攻撃に怯んでいる隙を見て、特徴のなさそうな少年が単独で責めに転じた。彼の口ぶりは大いに立派であったが、3秒後にはケガ人となって戻ってきた。

「ちっ……守れなかった……」

「何をしているのよ！さっさと後ろに下がちなさいよ！」

「……はい」

少年は背中を小さくしながらも、他のケガ人と一緒に後方へ控えた。そんな事をよそにして、ジェリーは火山の下の方で敵から奪取したパーツを注射器へとセットし、新たな機能のポテンシャルを攻撃がてらに確かめた。

「ハイドロ……ボム！」

注射器の先に溜めた水の玉を投げ込むと、敵の兵隊たちは別々の方向へとバラバラに吹き飛ばされ、悲鳴さえ残さずに空の星となって消えた。それを見送りながらも、ジェリーはメラが隠れている場所へと向かった。

「メラメラ……それと、防衛隊の人達。大丈夫？」

「ジェリー……こんな所まで、何しに来たのよ！」

「ごめんなさい……でも……」

「……もう、何も言わなくていいわよ。助かっちゃったし」

「……」

じれったい会話が行われている最中、空からチラチラとした霧のような水が降ってきた。たまらず、ジェリーとメラ以外のレインコートを着ていない人達は山の中へと逃げ込み、残った2人は何が起きているのかと天を仰いでいた。

空には水の噴射で浮いている機体と、白い冷気を出しながら飛んでいる乗り物が2台あって、前方についている窓のような場所から、それぞれ男の人と女の人が顔を出している。男の人の方は前に街へ水を流し込もうとしていた……アマカゼ隊長と呼ばれていた人物であった。

「見当たらないと思いきや、こんな所にいたのか！炎の民の水使い！」

「……」

アマカゼ隊長から呼びかけられているのに気づかず、ジェリーは呆けた顔で飛行機を見つめていた。ちよつと気まずいと思つたらしく、メラはジェリーの耳に言伝した。

「……呼ばれてるよ」

「……えっ？」

「ねえ……アマカゼ。任務は全うしたんだし、早く戻るべきじゃない？」

のんびりとした会話に耐えかねて、飛行船に乗っている女の人がアマカゼ隊長を急かした。しかし、アマカゼ

隊長には危惧している事があるようで、まだ帰るのが躊躇われる。

「やつは、どのような技術を秘めているか不明である故、早めに始末しておくが吉かも知れん。それに加え、我が部下のリウメ、コタケ、マツジ、ウナジュウ、トクジョーが見当たらない。置いていく訳にも行かん」

「……それ、さつきジェリーが吹っ飛ばしたやつらかと。さつきは4人しかいなかったけど」

「なに！？よくもリウメ、コタケ、マツジ、ウナジュウ、トクジョーを！許せん！という訳でシャーベットよ！戦う理由ができた！お主、先に帰還しろ！」

白い冷気を発している乗り物に乗っていた女の人はシャーベットという名前であり、アマカゼ隊長より先に帰るよう言われていたが、言われた時には先に帰って姿がなかった。

「ここは地形が悪い。山の頂上で待つ」

山の頂上へと飛んでいく乗り物を眺め、その姿が見えなくなつて一呼吸おいてから、準備していたかのようにメラはジェリーを怒り始めた。

「……ほら、面倒な事になつたじゃないか！今までは不意打ちで倒せたけど、正面から戦ったら勝てる見込みある訳ないじゃん！」

「ごめんなさい……でも、私も奥さまも、メラメラが心配だったから……」

「……まあ、いいや。さつき、さり気なく照明弾を打ち上げておいたの。すぐに偵察部隊が帰ってくるだろうから、みんなで戦闘に望めば怖くないはず」

「さすがつ。でも……私たちは水を防ぐ上着があるけど、他の人は……」

メラと一緒に戦っていた人達を一瞥したところ、上から降ってきた少量の水を受けて肌もヒリヒリと悶絶して

いた。そこで全てを諦めたのか、メラは苦い物でも食べたような顔で決断した。

「い……行こう。2人で」

「う……うん」

途中に出来ている水たまりで注射器を満たしながらも、ジェリーとメラは火山の頂上へと足を動かした。火山の頂上は真ん中に火口があり、それを縁取るようにして輪状の道が作られている。山が山だけに山頂も広く、下手な事をしなければ中に落ちる事もない。

「……着いたけど、どこにもいないじゃん。きつと待ちくたびれて帰ったのね。そうに違いないよ」

「よく来たな！だが、これにて、おしまいよ！」

火山の上に雲のようなものができており、メラの声に応じてアマカゼ隊長の声が返ってきた。雲をかきわけて登場した乗り物が、一直線にジェリーとメラの元へと水をまとって落ちてくる。

「ジェリー！上！」

「……え？あつ！」

「ブーストファイア！」

メラが武器から発した炎の推進力を使って、なんとか2人は敵機の体当たりを回避。だが、敵の巨大な乗り物は再び雲の中へと隠れてしまい、どこを飛んでいるのか解らなくなってしまった。

「なんなのよ！あのモヤモヤしたのは！」

「水が熱くなると、煙みたいになるの。火山が冷やされたから、その時の水が煙になったのかも……」  
「……また来た！ブーストファイア！」

砲火器の先から強い炎を放ち、それに跨ってジェリーとメラは宙を飛んでいる。しかし、砲火器からはギユンという怪しい音が発せられており、10秒ほど飛んだ後にメラは地面へと足を下ろした。

「こんな使い方した事ないから、武器が壊れそう……あと、高い所は怖い！」

「助かったわ。メラメラ、ありがとう」

「どういたしました！お礼に、なにか作戦を考えて！」

「えっと……降りてきたところを攻撃してみる？」

「任せた！」

再度、敵の乗り物が落ちてきた。同じ方法で2人は攻撃をかわし、ジェリーはメラの武器に乗ったまま注射器の先を敵へと向けた。

「ハイドロショットガン！」

「効かん！」

着弾する間際、敵の機体は一瞬だけ水の膜を張った。膜が衝撃を吸収し、ダメージを最小限に抑える。

「こちらとて、水を操る者。遅れは取らん！」

「ハイドロショットガン！」

「効かぬ！」

「ハイドロショットガン！」

「う……」

「ハイドロショットガン！」

次々と放たれる水の弾丸を受け続け、やっとの4発目にて敵の機体はガードを損なった。敵が地面に落ちたところを狙い、メラが体当たりを仕掛けた。

「……もしかして、チャンス？ よーし！ バーニングアタック！」

メラは砲火の炎を自分たちの体まで広げ、最大スピードを保ったまま、武器の先を敵の機体に激突させた。よろめいていた敵の乗り物は勢いよく撃ち出され、火山の外へと転がり出していった。

「……あれ？ 終わり？」

「た……多分」

敵の姿が見えなくなり、辺りが静まり返る。いつしか、火山の周りまで雲が降りてきており、視界が不透明な状態となっていた。2人は地に足をつけた後、しばし敵の排除に成功した余韻を感じていたが、何か不審な機械音が聞こえてきたのを知り、下ろしていた武器を再び高く持ち直した。

「なんの音だろう……うわっ！」

「ハイドロボム！」

水の発射される音を聞き、咄嗟にジェリーは音がした方向へ水の玉を投げつける。ジェリーの投げ込んだ水が起こした衝撃で、火山の外側から撃ち込まれた水撃が散り散りとなった。

「よもや、ここまでやるとは……帰る為に必要な水が足りなくなる可能性を考え、この手段は使いたくはなかったが……」

「……な……乗り物の形が変わってる！ なんか……やばいんじゃない？」

「あら、本当」

雲を割って現れた敵の乗り物は砲台や翼が増えており、攻撃に特化した姿へと変貌していた。これが、世に言う第二形態というやつである。

「一斉射撃、用意！敵を殲滅せよ！」

「うわわわ……ブーストファイア！」

レーザーを思わせる直線的な水が幾つも発射され、執拗なまでにジェリーとメラを追い続ける。速度が足りないと判断し、メラは炎の威力を上げた。

「セカンドバースト！」

「メラメラ……武器がバチバチって鳴ってるけど」

「やむをえないの！しっかり捕まってなさい！」

今のところは辛うじて当たっていないが、このままではメラの武器が壊れるか、敵の攻撃に捕まるか、敵の水が尽きるか、どれか一つの結末が待っているだけだ。メラは飛行に専念しており、策を練る余裕も見えない。ジェリーもメラの飛ぶスピードが速いせいで、攻撃の狙いが定まらない様子だ。

「追いつかれるかも！」

「……メラメラ。もつと高く飛べる？」

「え？まあ……うん」

「あの煙の中、あそこへ連れて行って」

「……え？それじゃ、なんにも見えないじゃん」

「メラメラは、すぐに逃げて。出来るだけ遠くに……お願い」

「……なんか解んないけど、やってみる！サードバースト！」

ジェリーに言われた通り、メラは雲の中へと突っ込んだ。敵も雲の中では視界が不良となるらしく、砲台は雲の方へと向けたまま宙にて動きを止めていた。

「隠れたか。姑息な真似を」

静寂の中、敵は下から先制攻撃を狙っている。その後、雲の隙間から飛び出した影を見つけ、太い水の砲撃を複数、一気に放った。

「落ちろ！」

「もう無理！落ちる！」

アマカゼ隊長たちは落とすつもりで攻撃したが、メラは武器の限界を感じて自分から落下した。その思わぬ動きに対応する間もなく、隊長たちは上から何かが迫っている事実を知った。

「……た……隊長！上から……何か！」

「なに？う……うおああ！」

雲の水分を注射器で吸い取り、大きな水の塊を注射器の先に携えたままジェリーが落ちてくる。ゆうに乗り物の2倍はありそうな体積の水を振りおろし、ジェリーは火山の中へと乗り物を叩き落とした。

「ハイドロ……ハンマー！」

先程の怪我した人達が知らせたのか、火山の火口下にいる人々は避難した様子だ。隊長たちが乗った乗り物はドゥンという音と共に火口の中へと落下し、固まった溶岩に大きな穴を開けた。岩の下には熱い溶岩が控えており、押し留められていた圧力を解放するが如く噴火した。

「私が……やぶれるだとお！おとおお！」

噴き上がってくる溶岩の上では、ジェリーが成す術もなく落下している。噴火に巻き込まれる直前、最後の力を振り絞って飛行したメラに救助された。

「……キャッチ！ジェリー、生きてるかー？」

「あ……メラメラ」

「……なんて無茶をするんだ」

「……でも、メラメラが助けに来てくれるって信じてたから」

「……何を呑気に言ってるんだ君は」

遠くへ飛ばされていった敵の乗り物を眺めながらも、ジェリーとメラは火山の火口付近に足を下ろした。噴き出した溶岩によって体温が回復したのか、下で倒れていた隊員たちが上がってきた。火山に残っていた隊長格の隊員が2人を発見し、なにか事情を聞いた気に話し掛けてくる。

「敵はいなくなったのか？なんとというか……なぜ君たち2人だけで、こんな場所へ？しかし、火山から溶岩が出てくれて助かった。これも炎の神が起こした奇跡か……おっ？おっ？」

隊長が物語っている内にも、噴火は次第に弱まりを見せ、数秒後には煮込んだカレーのように下でグツグツとしていた。とはいえ、山の気温は高く保たれている訳で、皆も一大事の後にしては一樣に心おだやかな様子であった。

それから間をおかず、偵察へ出ていた部隊が火山へと帰還した。すぐにジェリーとメラは事の説明を求められ、火山の上層に構えられた応接室へと呼び出された。しかし、2人が何を語り出すよりもまず、室内には反省会の雰

困気が流れ始めた。総隊長が司令官に怒鳴り散らしている。

「おい司令官！この度の失態、どう説明をつけてくれる！」

「火山の熱ならば敵の攻撃を弱められると判断していたが、あちらが巨大な冷却装置を有しているとは考えが甘かった。さいわい死人はなく、軽傷を負った者も3人だけで済んだが、今後は細心の注意をはらって対処する必要ががありますね」

「冷静に説明をするな！」

「それより、私たちが留守の間に、メラとジェリーは何をしたのだろう。話して聞かせなさい」

「あたしは戦いたくなかったんだけど、ジェリーが」

「父親の前と思つて、まったりするな！しかも、人のせいにしおつて」

司令官が父親であるのを良い事にして、まったりしているメラが総隊長に怒られている。メラは幼い頃より総隊長と接しているおかげで、あしらい方を心得ている。ただ、いきなり話を振られたジェリーは上手く隊員たちと話せず、何か言おうとしている動作のままメラの後ろへと隠れ……体格大小の問題で隠れられなかった。

「あの……メラメラ……」

「……しようがないわね。なんか、ジェリーが変な装置を作つて、それが強かつたの。で、あれよあれよと様々な事が上手く進んじやつて……敵を撃退した感じなんだ」

「あれよあれよ……だど？」

「総隊長……食いつく所そこじゃないです。ひとまず、変な装置とやらを見せて欲しい」

ジェリーは照れくさそうな表情で、水をプルプルにする粉を司令官に見せつけた。

「……それじゃない。それじゃない」

出して2秒でメラに注意された。そうして、ジェリーは代わりに背中中の注射器を抱えて出した。

「これ……」

「……ん？娘。その用途は？」

「水……水を吸い込んで、発射……」

総隊長の質問にジェリーが答えきるより早く、ある者はテーブルの下へと隠れ、ある者は手に近い物で防御態勢をとった。どれほどまでに炎の民が水を恐れているのか再現したところで、注射器の中に水が入っていない事を知った者から、はずかし気に姿勢を元に戻していた。

「その筒、敵への攻撃に役立てられるのか？どれ、貸してみろ」

「総隊長。これも音声スイッチですから、ジェリーにしか使えないんですよ。だったよね？」

「うん」

メラの言葉を聞き、隊長が腕を組んで座りなおす。すると、続いて司令官が父親らしい物言いでメラに尋ねた。

「私は、おそろいのコートを買ってあげた記憶はないが……そのコートは？」

「ジェリーが作ったんだけど、これで水を少し防げるから、ずっと着てるんだ」

「攻撃に使える装置もコートも、似た物を作る事は可能なのだろうか？」

「装置は無理っぽいけど、コートは作れるんだっけ？」

「2つ作ったら……私の、おこづかいが……なくなっただけ……」

「重いコートだなあ……」

コート作りに掛かった金額を思い、メラは被っていたコートのフードを後ろに退けている。しかし、ウエイトレスとして働くジェリーの所持金程度で装備が作れるとなれば、実行すべきと司令官は判断した。

「まずは性能を計り、効果が確認でき次第、コートの制作を始めます。メラ、ジェリー、少しの間、コートを貸して欲しい」

「つかぬ事をお聞きしますが、ピンク色は作れますでしょうか？」

コートを作ると聞き、急にエリザがカラーの要望を出してきた。そこで、皆は下を向いて黙り込んでいたが、重そうな声で司令官が言った。

「……エリザさん。あなたは、別の色が似合いますよ」

「そうそう……お父さんは服選びのセンスが良いので、別の色にした方が良いでしょう」

「そうでしょうか？私はピンクが好きなのですが……」

「……お前は……緑にしろ」

遠まわしな言葉ではピンクが似合わないと言わらず、総隊長がエリザへとダイレクトに告げている。隊の人々にレインコートを貸し出し、ジェリーもメラも久々に普段通りの恰好で風通しが良い。

用事が済んだところで2人は会議を抜け、再びメラの母親を手伝いに向かった。しかし、メラの母親は壁際の椅子で休んでいて、2人も一緒になって座りこんだ。

「お母さん、お仕事は良いの？」

「主婦の皆さんが代わる代わる手伝ってくれてるから、今は休憩中。隊の人達が頑張ってくれてるんだから、私たちも力を合わせて頑張るわ」

「そうだね。あたしは……料理とか、全然できないけど……」

「メラは何でも早く終わらせようとするから、自己流が過ぎていけないわ。何事にも、理由があつて、順序があるものよ」

「せっかちだからね。あたしは。その点、ジェリーは何事も丁寧でよろしい。料理も出来て、男の人から受けが良さそうだけど、浮いた話の一つも聞かないのは不思議だ」

「……私は、別に興味ないから」

そりゃ、ひつきりなしに小砂利のような娘が付いて回っているのだから、話し掛けるチャンスも見当たらない。その娘、急に話題を変える程の、おてんばぶりである。

「そういや、あんまり人がいないけど、どこに行ったんだろう。お母さん、知ってる？」

「みんな、寒いからつて火山の下の方に行ったわよ。言われてみれば、少し冷えるわね」

「あたしら、コート着てたから解らなかつたのかも。水を防げるんだから、防寒も備わってるよね」

「防寒……防塵……防音……がんばつて作つたから」

「会話が出来てたんだから、防音は出来てないでしょ……」

「……あつ」

コートに防音の効果がないとメラから教えられた矢先、追いかけるように走ってくるエリザの姿が見えた。何用かと、メラがエリザに問い掛けている。

「どうしたんですか？」

「会議の結果が出まして、お二人に、お話があります」

「絶対、会議してないよなあ……」

大体の場合、会議で真つ当な意見を言うのは司令官のみである。その為、話し合いが異様に短く、あつと言う間に結論が出る。これがフレイムタウンの名物、超高速会議である。

「とにかく、先程の部屋へ来てください。要件を伝えます」

「解りました。ジェリー、行こう」

「うん……奥さま、行ってくるね」

「私には、なんの話か解らないけど、行つてらっしゃい」

「奥さま。お二人をお預かりします。では」

エリザの後に着いて道に戻り、会議をしていた応接室へと入った。先程と同じ席に座っている隊員たちと対面し、さつきと同じ調子の司令官と総隊長に向き合った。

「よくぞ来た。これは金のクッキーだ。食え食え」

「う……総隊長が優しい。怪しいぞ」

「……クッキー？」

「こちら。食べたらか、面倒事を押しつけられるぞ」

クッキーに釣られそうなジェリーを引きとめ、メラは本題について父親へと聞く。

「それで、お父さん。何かあったの？」

「ああ……悪いのだが、あのコートを使わせてもらいたい。そして、ジェリー……君にも頼みがある」

「私……？」

司令官は頷いた後、立ち上がって歩きながら語り出した。

「……水の軍団が攻めてきてからというもの、火山の気温が急激に下がってきているのは気づいているだろうか？ 街の近くには未だ敵が残っており、戻る事もできない。今の状態で火山の活動が停止したとなると、我々は居場所を失ってしまう」

順番に説明しながらも司令官はテーブルの板を取り、下に隠してある熱い石が入った釜を自分の席へと引っ張っていた。そうはさせぬと総隊長、釜の取っ手を捕まえる。こう着状態のまま、司令官は語り続けている。

「……火山の活動が弱まって以来、たびたび空から細かな水の粒が降り注ぐようになった。このままでは安全に外を歩く事もできない……だが、ジェリーの作ったコートを作るには多くの工程を要する。そこで、あのコートを着られる者、誰か2名に炎の神殿へ向かってもらい、そちらの様子を見てきてほしい、と……総隊長！ あなたは鎧の下に熱伝導板を幾つも仕込んでいるでしょう！ 私は最近、膝が冷えるのです！」

「膝が冷えるのは、お主の専売特許ではない！」

総隊長と司令官は火山に残していこう。そういう表情をしていたメラだったが、すぐに意識を本題の方へと切り替えた。

「で、誰が行くの？ あたしが着てたコートじゃ、着れる人も限られるよね？」

「それなのだが……一人はジェリーに行ってもらいたいと考えている」

「……私？」

司令官の言葉に聞き返してはいるものの、あまりジェリーに緊張感はなさそうだ。続けて、司令官は理由を述べた。

「我々の脅威となつてゐる水についてだが、あまりにも知識が不足し過ぎている。少しでも詳しい者がいれば、安全に道を行く事ができるだろう。残りの一人だが……」

「司令官！私が！」

他の隊員達が目をそむけている中、元気いっぱい立候補したのはエリザである。武器を扱う腕も立ち、任務に対する責任感も強い。体が細い為、メラが着ていたコートに袖を通せなくもないが、その他の部分に不安な点がある。

「……えーと、エリザ君には……無理なんじゃないですか？誠に申し上げにくい」

「司令官！やってみなければ解りません。コートをお貸しください！」

「やめておけ……非常に言いにくいだが、パツツンパツツンになる」

「ば……パツツンパツツン！？どこがですか！総隊長！」

「どことは言わないが、パツツンパツツンになる」

総隊長いわく、パツツンパツツンになって、コートがダメになるとの事。どこがかと言えば、主に胸回りである。

「……しようがないな。よっこいしょ！ここで、俺の出番って訳か」

腕に巻いている鋼のギブスを外しながら、一人の青年が重々しい動きで立ち上がった。彼は山頂付近の戦いで特攻し、すぐさま退散した隊員。その名もジータ。

「街の危機、旅立ち。こんな展開には、俺がいらないとな！」

「メラ。お前に行ってもらいたい。様子を見てくるだけで良い。敵の影を見つけた場合、すぐに撤退して構わ

ない」

「え〜……でも……まあ、ジェリーを一人では行かせられないもんね」

「メラメラ、ありがとう」

「……では、予定が決まり次第、追って2人に伝える。これにて、集会は解散とします。長い時間、お疲れ様でした」

司令官の仕切りで会が終了すると、隊員たちは『お疲れ様でした』と言葉を交わし、各々が気ままに退室した。皆が部屋からいなくなった後、司令官はドアの前で振り向き、立ちつくすジータへと短く告げた。

「ジータ隊員。お……お大事に」

「司令官……俺は、一体どうすれば」

「……」

司令官は無言のガッツポーズをジータ隊員へと送り、逃げるような足取りで部屋から撤収した。その後、ジータ隊員が自分とは何なのかについて哲学し始めた事は、ここで解説する必要のない事柄である。

隊の集会が終了し、メラは自分たちが向かう場所である炎の神殿について、父親に質問をしたりしていた。

「お父さん。炎の神殿って、どんな所なんだっけ？遠い？近い？」

「ここより東の方角に赤の水晶畑という場所があり、その中央にある階段を下りた先が炎の神殿。メラはブロンズフラワーの採集任務へ出た際、赤の水晶畑を見た事があるはずだ」

「……もしかして、山の上から見えた真っ赤な場所の事？あれ、赤砂の湖じゃなかったんだ」

「行って戻ってくるとなれば、おそらく……二度は朝がやってくる」

「それじゃ、野宿は確定か……」

「野宿……」

頻繁に山や洞窟へ出ているメラと違い、ジェリーの行動範囲は街から研究所の範囲に限られる。その理由でジェリーは野宿に慣れておらず、短い旅ながらも不安を感じている。すると、その会話を聞きつけた総隊長がやってきた。

「炎の神殿へ向かう道中、隊の基地が設置されている。そちらを使うが良い」

「そっか……よかった」

「隊長。それは私の別荘です」

ジェリーの安心とは別にして、司令官は自分の別荘が避難所と呼ばれる事を快く思っていない。そこへ、隊長に続いてエリザがやってきた。

「何か、相談をしているのでしょうか？」

「あつ、エリザさん。炎の神殿に行くのに、どのくらい掛かるのかって話してる所で……」

「ああ。あそこでしたら、途中で避難所がありますので」

「エリザ君。そこは、うちの別荘です……あつ、さては無断で」

メラの言葉を聞き、エリザが隊長と同じ発言をしている。もちろん、司令官は同じく注意。これから隊長とエリザへの抗議が始まる為、司令官はメラとジェリーを遠ざける事にしたようだ。

「メラ、ジェリー……ここを出るのは次の朝で良いかな？」

「うん。ジェリーも、いいよね？」

「はい」

「食料は、うちの別荘に備蓄してあるから、それ以外で必要な物を支度しておくように。私は総隊長とエリザ君に言つて聞かせなきゃならない話があるから、席をはずしてくれ」

「解つた。行こう。ジェリー」

「うん」

なにやら叱る口調で語り出した司令官には構わず、メラとジェリーは出かける準備をする為に走り出した。とはいえ、ここは一時避難している火山の中。有り物は街と比べて少なく、外へ持ち出す物を選ぶ余裕もない。迷う事なく、2人は燃料保管室へ向かった。

燃料保管室には発火岩と呼ばれる岩が並べられており、この岩は強い熱を加えると勢いよく燃え上がる性質がある。メラが使用している砲火器は発火岩を燃料としている為、出かける前に中身を満たしておく必要があるのだ。

「細かく砕けば、隙間なく詰め込めるからね。ジェリーも手伝つて」

「任せて。えいっ！えいっ！」

鉄の棒で発火岩を押し潰し、2人は粉っぽい岩をコロコロと砲火機へ流し込んでいる。こんな単純作業をしていると考えが捗るもので、メラは今まで全くもって忘れていた記憶を取り戻した。

「あつ……」

「えいっ！えいっ！どうしたの？」

「あ……いや、ちよつと……街に忘れ物しちゃつたなつて」

「何を？えいっ！えいっ！」

「うん……それがね」

「えいっ！えいっ！」

「……」

「えいっ！えいっ！」

「あーもう！えいえいやめて！ちよつと話、聞いて！」

「えいっ！あ……うん」

掛け声を止めさせてまで話すとなれば、話の内容はジェリーに関わる事である。改めて向き合い、少し気恥ずかしそうな表情でメラは話し始めた。

「あのね。あたしが入隊する前の夜にジェリーがくれた、おまもりのペンダント……家に忘れてきちゃった」

「……ああ。そうなの？」

「……あれ？怒んないの？」

「取りに戻るのも危ないから、仕方ないわ」

「え……なんか寂しい。それに、あたし……あれがないと、ちよつと心細いし……」

今までは持っている気がしていたようで、気持ちを強く保っていられた。ご察しの通り、ペンダントに特別な力がある訳でなく、単なる心持ちの問題なのである。ただ、普段は強気なメラが肩を下げていると見て、ジェリーは暫しの沈黙を挟んだ後、思い直したようにメラへと伝えた。

「……ペンダントはないけど、私がいるから」

「……そうだよね。ちよつと頼りないけど、ジェリーも一緒だもんね」

「頼りないけどね」

「あたしが、しつかりしないと……」

メラが持ち前の元気を取り戻したところで、2人は砲火器に燃料を詰める作業へと戻った。武器の透明だった部分が、燃料のエメラルド色に変わる。メラは手に付いた岩の粉をはたきおとしつつ、気合などを入れている。

「……よしっ！これで襲われても戦えるぞ。戦うつもりは全くないけど」

「うん。他に用意する物はある？」

「食べ物別荘にあるって言ってたし……特に必要な物は無い気がする」

「そう。じゃあ……どうするの？」

「早めに寝ちゃおう。あたし、いい場所を知ってるんだ」

「どこ？」

「下の方。行ってみよう」

睡眠をとるのに適した場所があると言い、メラはジェリーをつれて火山の下層部へと向かった。エレベータで下へと降り、つるはしなどが置いてある物置き部屋を通った先、資材が保管されている広い部屋へと入った。大きな箱に並々と砂が溜めてあり、はしごを使って2人は上へと乗り込んだ。

「ここなら、床に寝るよりマシだよね。あたしたちは明日から遠出だし……独占しても悪くないよね？」

「あんまり広くないから、そんなに人は入れないものね」

「よーしっ。そうと決まれば、さっさと寝よう。先に起きた方が起こしてね」

「うん」

ジェリーとメラは柔らかな砂の上へパタンと倒れ込み、寄り添いあつて眠ってしまった。いつもの通り、太陽が空へ昇った頃に起床したのはジェリーで、起こされるまで延々と眠り続けるのはメラである。うつ伏せの状態ですべて眠っているメラの背を控えめに押さえ、マッサージをするような動作でジェリーが起こそうとしている。

「メラメラ……起きて」

「う……ううん。なあに？」

「そろそろ出発しないと」

「……もう、そんなに経ったの？寝たりないなあ」

メラは気だるそうに体を起こし、服の隅々に入り込んだ砂を払い落している。その暇にジェリーは部屋の中を見ていたのだが、そこで見慣れない小さな機械を発見し、不思議そうに持ち上げていた。すると、聞かれるより早くメラが説明を始めた。

「それ、ボムハンマーってやつだよ。機械の中で燃料が爆発すると、その反動で先についてる杭が押し出されるから、固い岩にヒビをいれたりするのに使うの」

「知らなかった。触って見てもいい？」

「どうせ、見始めるとキリがないんでしょ？持っていきなよ。そんなに重くないし……」

「解った」

機械を片手で持ってバッグに入れ、ジェリーは小走りでメラの元へと向かった。2人で部屋を出てエレベーターに乗り、なかば防衛隊の臨時基地となっている広い場所へと出る。そこでメラは父親の姿を見つけ、出発前の連

絡を済ませた。

「お父さん。今から行ってくるね」

「……気をつけて行ってらっしゃい。道が解らなくならないよう、夜は足を止めるんだよ。そして、無理はしないように」

「うん。解った」

「それでは、ジェリー。メラを頼んだよ」

「……はい」

父親に自分の事を頼まれ、ふてくされたような顔でメラが訴えている。

「それじゃあ、ジェリーの方が、しっかりしてるみたいじゃん……」

「メラ。ジェリーを頼む」

「了解」

貸し出していたレインコートを父親から受け取り、メラとジェリーはボタンをしっかりと留めた。その後、メラは母親の行方について父親へと尋ねた。

「お母さんは、どこにいるか知ってる？」

「先ほどまでメラ達を探していたが……今は火山の下層を探しているかもしれない。呼び出してみよう」

火山内の至る所に金属管が突出していて、それらは全て奥で繋がっている。そこへ声を吹き込むと、広い範囲で放送を掛ける事が出来る仕組みであるが、どこまで伝わるかは音量によってマチマチ。よって、メラの父親が全力で声を出しても、場所によっては聞こえない場合がある。

『連絡します！メラとジェリーが火山を出ますので、アルヴィアは火山の東出入り口へ！』

「お父さんの声、ちゃんと聞こえたかなあ……」

「おや、司令官。放送ですか？自分が再放送しましょう」

放送を聞きつけたのか、防衛隊員のエリザが再放送に立候補してきた。司令官も自分の声に少々不安があるのか、エリザに再放送をお願いしていた。ちなみに……アルヴィアはメラの母親の名で、それちなみに司令官の名はシルバという。

『アルヴィア様——！お子様方が下山しますので！火山の東出入り口へ！お越しください！』

自分から役を引き受けただけの事はあり、言葉の節々まで聞きとれる大きな声であった。しかし、あまりの声の大きさに周りの人々は耳を押さえていた。

「しっかりと伝えましたので、奥さまにも聞こえたはずですよ。どうぞ……」

『エリザ！静かにしろ！鼓膜が切れる！』

期待した通り多くの人に声は聞こえたようで、防衛隊の総隊長が放送で怒りをぶつけてきた。そんな事は気にも留めていない様子で、エリザはジェリーやメラ、司令官と共に火山の出入り口へ向かった。

エレベーターの規定乗員数は4人までとなっている為、2人の出発に立ち合おうとする人々は順番を待つて下へ降りなければならない。となれば、それを見越して階段で下りていた総隊長の判断は正しい。結果、両親や防衛隊員、それ以外の知人、およそ30人に見送られ、メラとジェリーにとっては照れくさい状況であった。

「……はい。これ」

「……お弁当？」

「そう。食べ物があれば、ちよつとは安心でしょう?」

母親から手渡された金属の箱を見て、メラが苦々しい顔をしている。なぜかといえば、メラのカバンには以前の弁当が入っており、苦々な食べ物を入れっぱなしにしているからである。メラと同じ物をジェリーも受け取り、肩から提げているバッグの中へと入れている。

「絶対に、無理はしないように。無事に帰る事を一番に考えるんだ」と、司令官が言う。

「空から水さえ降らぬならば、俺が山を登つのだが。憎いものよ」と、総隊長。

「やつぱり……ここは、お前らに任せるよ。ケガも治ったし、俺は自分に出来る事を精一杯するしかないんだ。そう気づいた」

と、水の軍団との戦闘で負傷していたジータ隊員。

「それでは、お気をつけて……行つてらっしゃい!」

なぜか、勝手に見送りを締めくくったエリザ隊員。その元気な声と、両親の不安げな笑顔に背を押され、鈍い足取りでメラとジェリーは歩み出した。

しばらくは振り返りながら歩いてきたものの、巨大なトゲ状の岩が徐々に増え始めたところで、メラとジェリーは目の前の道と向き合った。地面は舗装されている割に凹凸が激しく、よく野外へ出ているメラにとっては慣れたものだが、ジェリーからすれば歩きにくい道である。しかも、岩や土が軽く湿気を帯びており、ぬかるみを確かめながら歩かなければならなかった。

「……ジェリー。ほんとに大丈夫なの？」

「……ハイドロバスターもあるから、水たまりも平気」

「それ、その名前で決定したんだ。まあ、いいけど」

巨大注射器の固有名詞が発覚したところで、空からはサーサーと細かい雨が降り始めた。それに気づき、2人はレインコートフードを被る。メラは足を止めないまま、雨の話へと切り替えた。

「なんで、急に水が降ってくるようになったら。水の軍団が、宇宙から水を持ってきてるのに関係してるのかな？」

「多分……この星は熱いから、空と陸で水の循環が激しいのかも」

「……そもそも、あいつらが、この星から熱を奪うのは何でなんだろう……自分たちが生活しやすい下地作りとかなのか？あたしたちだって急に追い出したりはしないんだから、ちよつとは話し合う態度があってもいいのに」

「理由は解らないけど……作戦が強行突破ばかりだから、なんだか急いでる感じがする」

「そうかなあ……あ、そろそろ街が見えてくる頃かな？」

メラは低い岩場を登り、つま先立ちで視線を上げる。すると、思いがけない物を見つけたような声でジェリーへと伝えた。

「……なにこれ？水……水が道をふさいでる。それも凄い量だ」

「えっ？どれどれ……わっ。水が流れてる」

大量の水が山の下へ向けて流れ、その流れによって道が塞がれている。防水している2人でも、さすがに歩く

に無理な勢いであり、迂回する道がないかとジェリーはメラへと相談している。

「……流れてくる元へ行った方が良い？それとも、水が流れてく下の場所を回っていく？」

「上から水が流れてるって事は……流してる人達が上流にいるのかもしれない。遭遇は避けたいよね」

「じゃあ……下に行く？」

「下には、あたしたちの街があるけど……とりあえず、様子を見に行ってみよう」

「うん」

水の流れに沿う形で、メラとジェリーは坂道を下り始めた。依然として水の流れは弱まらず、2人の横を追いぬいてゆく。下へ下へと向かって歩く内、遠くに見えていた町並みが近づいてくる。水の終着地点も、行き着くと同時に判明してしまった。

「やっぱり……街が浸水してる」

建物の下半分が水に沈んでいる街を見て、メラが引いた態度で呟いている。しかし、このような状況になっていると予想はできていたようで、くやしそうながらもショックは大きくない。メラは頭をかいているが、代わりにジェリーの方が悲しげであった。

「メラメラ……これじゃあ、もう街には」

「……でも、建物は壊れてないじゃない？水の軍団を追っ払って、水を取り除けば……ハイドロバスターもあるし、きつと街に戻ってこれるよ」

「あつ……そつか。よかつた」

「水の軍団もないみたいだし、早く回り道して行こう！」

うまくジェリーをなだめ、メラは先を急ごうと口にする。街は半ば湖のようになっており、その淵を回るにも時間がかかる。自分たちの故郷が侵されていくのを長々と見るのは酷であり、メラとジェリーは話もしないまま、空だけを見て移動していた。

「……………あれ？あの……………メラメラ」

「……………どうしたの？」

「水……………とまったみたい」

「……………ん？」

街へと流れ込んでいた水が弱まり、遂には水が途絶えていた。それを見て、メラが色々な意味で怒り出した。「……………なんだよお！わざわざ遠まわりまでさせて、あげく街はビショビショ。疲れて足も痛くなってきたし、お腹も減ってきた！もう！頭にくるなあ！」

「ほんと……………酷い酷い」

さっきまでのポジティブな気持ちはなんだったのか、たまっていた感情が爆発している。隣にいるジェリーも他に言葉が見つからないのか、とにかくメラに同調して頷いていた。

「さっさと行こう！ここにいてだけで腹が立ってくる！」

「……………あ……………あれ？メラメラ」

「……………今度は何！？」

「な……………何か……………今度は、白い岩が転がり落ちてきたけど」

「……………ん？」

先程まで水が通っていた場所を転がり、家一軒と同じくらしい大きさをした丸い物体が落ちてきた。それが着水し、街に溜まっている水が大きく波を立てる。正体の解らない物体を発見し、メラとジェリーは立ち止まって観察していた。

「……あ。ヒビが」

「な……なんか出てきた！なにかの卵だ！」

すべすべとした白い殻を押し破り、中から出て来たのは白くて長い謎の生物。体長は卵より少し小さく、どこにも目があるのかも解らない。体の表面からは粘り気のある体液が出ており、体を動かすたび水が泥のように固まってしまう。その全体を見届ける間もなく、メラはジェリーの手を持って逃げだした。

「か……怪獣だ！」

今まで生きてきた中でも出した事のない全速力で、メラとジェリーは怪獣と距離を取った。その後、振り返ったメラが別の事に気づいた。

「もしかして……こつちに追ってはこないけど、大きくなってる？」

「なってる……あんなに大きい生き物、見た事ないわ……」

「……あたしたちの街を怪獣の巣にするつもりかな」

「……巢？」

立ちつくしているジェリーとメラに見向きもせず、謎の生物は更に巨大化。街の大通りをふさぐ程の大きな体でもって、街の建造物を押し倒している。生き物の体から出る粘液のせいで水が冷え、辺りには白い霧が浮かび始めていた。

「……」

悔しそうに街を見つめるメラの横で、ジェリーが悲しげに気持ちをくみとっている。ようやくメラが街から目をそむけ、行くべき道へ歩き出そうとすると、その手をとってジェリーが伝える。

「メラメラ……まだ間にあうかも」

「……ん？」

「まだ、街は全て壊されていないから……」

「え？あつ……」

メラをかかえ上げ、ジェリーは巨大注射器に足を掛けた。

「ハイドロドライブ！」

注射器の先を逆さ向きにし、水を発射する勢いで飛び立つ。白い霧を裂き、ジェリーはメラを持ったまま街にある建物の上へと降り立った。

「……乱暴だなあ。で、何か倒す作戦でもあるの？」

「なんにもないけど……でも……」

「でも？」

「……うん」

ジェリーは本当に何も考えがいらしく、困った顔で『うん』していた。それで察しがついたのか、メラも呆れたように頭をかいている。

「しょうがないなあ……勝てなさそうだったら、すぐ撤退するから、気を抜かないように」

「うん」

「よし、行くぞー！ブーストファイア！」

メラは砲火器に飛び乗り、怪獣に最も近い建物の屋根を目指した。白い霧のせいで視界は悪いが、ここはメラとジェリーが暮らした街だ。建物の位置や地形は把握が済んでいる。

怪獣の方もメラの姿に気づき、口しかない顔を上へと向けている。メラは空中で砲火器から降り、落下しながらも攻撃を開始した。

「いけっ！ファイアーボール！」

砲火器から大きな火の玉が撃ち出され、怪獣の頭や体を焦がす。それに対して反撃するでもなく、怪獣は煙を噴き出しながら走り出した。

「……あれ？思ったより気弱だなあ。ジェリー、そっちに行ったよ！」

「うん……ハイドロバスター！」

怪獣が逃げた先を追い、別の場所でジェリーが攻撃を開始した。しかし、せっかくメラの攻撃で僅かに小さくなった怪獣が、ジェリーの放った水によって再び巨大化してしまった。

「……あら」

「なにやってるのよ。もう、ジェリーは黙って後ろで見てなさい」

「は〜い……」

ジェリーの武器が役に立たないと解り、メラはジェリーに後方で待機するよう伝えた。やはり怪獣は水が得意な生き物であり、炎の方が効果てき面。ひるむ相手にも容赦なく、メラは火炎の攻撃を仕掛けた。

「それ、焼き尽くせ！ビッグバーナー！」

メラは飛行した状態で回転し、広い範囲に届く火で怪獣の体を切りつける。あぶられた怪獣は苦しげにもがきながら、徐々に体を萎めていく。

弱まった炎を再点火しようと、メラが攻撃を強制的に中止した。怪獣は暴れるように四肢を動かし、小さくなった体を水の中に隠してしまった。

「あつ！待てー！」

待てと言われて待つはずもなく、怪獣は姿をくりました。どこを泳いでいるのか、姿が小さくなっていて認識もできない。それでも、メラは必死で街の下に溜まった水を見つめている。

「どこいったんだ……もう少しで倒せそうだったのに」

「……また大きくなって出てくるのを待つのか？」

「それじゃ、キリがないじゃん……何か良い方法を考えてよ」

「うん。考えておく」

ジェリーへと作戦だてを任せ、メラは怪獣を探す作業へと戻る。そこへ、2つ向こうの一軒家をへし曲げ、巨大化した怪獣が姿を現した。

「ああ……長い歳月をかけて手作りしてた総隊長の家が……怪獣め！許さないぞ！」

隊長のかたきを討つべく、メラは武器に足を乗せて飛び立とうとした。しかし、怪獣の様子が変わっているのに気づき、ひとまず足を下ろした。

「……ん？」

次の瞬間、怪獣のいる場所から氷のトゲが飛び出した。その攻撃で足場となっている家が破壊され、メラは瓦礫と共に水へと落下する。

「うわっ！うわわっ！」

粘つく水に体が飲み込まれ、メラは死にも狂いで抜け出そうとしている。だが、水に入っても無事である事と気づいたのは数秒後の事。水に浮かんだまま、ジェリーの方を見つめた。

「多分……防水のコート着てるから、水に入っても大丈夫」

「謎な技術だ……とか言ってる場合じゃない！早く助けてよ！」

「……うん。解った」

砲火器をビート板のように使い、バタ足でメラが泳いでいる。その後ろからは怪獣が迫っている。ジェリーは注射器の先をメラに向け、つかまれとばかりに差し出していった。

「もうちよつとで届きそう……ひゃっ！うわあ！」

バタバタと走り来る怪獣が波を立て、押し流されてジェリーとメラは水に引き込まれた。すぐにジェリーはメラの体を捕まえ、水の噴射で空へと脱出した。

「は……ハイドロホバー！」

先程とは飛び方が変わり、水を下に吹きつけて空中浮遊している。怪獣の攻撃が届かない場所まで避難し、ジェリーとメラは様変わりした怪獣の姿を目にした。

「た……助かった。ありがと、ジェリー……」

「……うん」

「……あれ？あの怪獣、体の周りが透明な石みたいなので守られてる。さっきまで、あんなのなかったよね？」

「体に透明なトゲが生えてる……さっきの飛んできたのも、怪獣のトゲかも……」

「なるほど。あれじゃ、炎も効かないかな……」

「……あつ、水がなくなっちゃうから、下に降りるわね」

巨大注射器の水が無くなる事に気づき、ジェリーはメラと一緒に近くの高台へと降りた。それを知った怪獣は再び体からトゲを発射し、高台の中ほど部分を破壊する。すぐにメラが飛行役を交代し、ジェリーをつれて飛び去った。

「ブーストファイア！」

「ごめんなさい……水が足りなくて」

「あんなに水があるんだから、ちゃんと補充しておいて欲しいものだ」

「……水がネバネバしてて、ハイドロバスターじゃ吸い込めないみたい。だから、無理」

「……なるほど。それにしても……あの怪獣がきてから、急に冷え込んできたなあ」

「メラメラに触ってるから、私は寒くないけど……」

「人の体で、ぬくぬくと……」

怪獣から遠く離れ、3階建てを誇る町長の家へと飛び乗る。3階のベランダへとジェリーを下ろし、メラは飛び立つ準備をしながら告げた。

「ここに隠れてて。何か解ったら、頑張って呼んで」

「解った」

頑張つて呼んで、という無茶な要望にジェリーが応じると、メラは勢いよく怪獣へと向かっていく。半端な火力では怯ませられないとみて、メラは武器の火力を引き上げて攻撃に臨んだ。

「シャイニングフォース！」

砲火器の中で高めた熱を集中させて放出し、レーザーのようにして怪獣へと撃ちこむ。しかし、放出できる時間は短く、敵の装甲に一点の穴を開けただけで途絶えた。怪獣は二、三步だけ後ずさるも、体を震わせながら水へと浸かり、開けられた欠点を氷で埋めてしまった。

「ダメかあ……あ！うわっ！」

怪獣が水から背を出すと、そこに生えていた無数のトゲが飛び出し、メラの立っている建物めがけて一直線に迫った。避ける事は叶わないと知り、すぐにメラは次の技を口にした。

「……レッドドロップス！」

メラは炎の塊を真下に飛ばし、自分に落とす。敵の飛ばしたトゲは熱へと近づくと小さくなり、幾つかは消失し、また幾つかはツブテとなって建物にヒビを入れた。一難が去って、メラは再び空へと逃げ出し、怪獣もトゲを再生させる為に水の中へと逃げ込んだ。

攻撃手段が消えた怪獣を上から見て、メラは弱点を探っている。ただ、メラの攻撃では先程のレーザーが最大出力であり、更なる高温を出せる技は他にない。

「中身は弱そうだけど、あの殻が面倒だなあ」

「……」

「……ん？」

「……メラメラ！待って！」

声には全く気づかなかったが、水の噴き出す音でメラは後ろを飛んでいるジェリーの存在に気づいた。怪獣から離れた場所へ足を下ろすと、先にメラがジェリーへと質問した。

「あれ？水は補充できないんじゃないの？」

「メラメラが炎を出してた時あるでしょ？その時……その周りだけ、水が元に戻ってたから。多分、怪獣の水を固める能力も、熱くなると消えてしまうんだと思う」

「……試してみよう！それっ！ファイアーアロー！」

鉄の桶に溜まっているゼリー状の水へと向けて、メラが勢いよく炎の矢を撃ちこんだ。すると、立ち上る湯気の中に滑らかな水が残った。

「ほんとだ……って、そういえば、あたしが炎を出した時、近くにいたの？あんな状況で、よく水が戻ってるって気づいたなあ……」

「呼んでも届かなかったから……あとね。怪獣の作るプルプルの水、私の作った粉で固めた水に似てるから、もしかしたらと思っ……」

「ジェリーの作った粉？えーと……ああ、初めて水の軍団を見つけた時に使ってた、あの役立たずの粉かあ」

「役立たず……」

「ああ、ウソウソ！それで……」

「あつ……ハイドロドライブ！」

メラの背後に走り来る怪獣を見つけ、ジェリーはメラを抱えて急いで飛び立った。旋回しながら怪獣の遙か上

へと逃げ、そこで空中浮遊へと移行した。

「ハイドロボバー！」

「あ……ありがと。でも、なんでジェリーの武器って、そんなに必要な時に使える技が揃ってるんだ？大量に登録しておいてるの？」

「……え？あ……私のは、戦いながらプログラムしてるから。でね。さっきの」

「ええ！そんな事できるの？！だったら……」

「メラメラ……聞いて……」

「ああ……うん」

テンションが上がりがり気味なメラを落ちつけさせ、ジェリーは水を固める砂の話へと戻した。

「私を作った粉と、怪獣の能力が凄く似てるの……似てるだけかもしれないけど、でも……だけど、弱点も見つけたから倒せるかも……」

「あたしの攻撃じゃ殻を消すだけで精一杯だし……その作戦は自信あるの？」

「じっくり敵を観察してたから、私は自信があるけど……メラメラに手伝ってもらわないといけないの。とても危険な目にはあわせてしまうかも。この戦いは、避けようと思えば避けられる戦いだから……」

「……なによ。お父さんからもジェリーの事を頼まれてるし、争いごとなら、あたしの方が慣れてるんだぞ」

「……あとで怒られるかも」

「怒られるのはヤだけど……それはジェリーも一緒でしょ？」

「……うん。解った。メラメラ……私を守って。そして、近づいたら、怪獣の体全体を一気に温めて」

「了解！」

それだけで作戦は伝わったらしく、メラはジェリーの後ろに乗り込めるよう移動した。あとはホバーを解除して、ジェリーが怪獣の方へ飛行を開始すれば良い。

「……」

「ジェリー、怖いのか？」

「……メラメラは、怖くないのか？」

「あたしは……ちよつと怖いけど、ジェリーがいるし大丈夫」

「……うん」

そこで決心がついたらしく、ジェリーは後ろにメラを乗せて急降下。作戦を執行した。

ジェリーとメラの動きを知り、怪獣が空へとトゲを発射する。すかさず、メラは蓄えていた熱エネルギーを膨らませて投げつけた。

「レッドクリスタル！」

怪獣と同じ程の大きさを持つ薄い炎へと入り込み、それと共にジェリーは怪物の懐を目指して飛ぶ。溶かし切れなかったトゲがジェリーとメラの近くをかすめるが、それでもジェリーは勢いを殺さない。

「逃がさないぞ！」

トゲを攻撃に使い果たし、怪獣は逃げ出そうとしている。感づき、メラは炎の塊が落ちる場所を調整。ジェリーに頼まれた通り、怪獣の全身を一気に熱した。

体温の上昇によって怪獣は暴れているが、無防備な腹の下へとジェリーは急ぐ。

「……ハイドロバスター！」

ジェリーは水面でメラと分かれて水中へ入り、泳げないながらも飛び込んだ勢いに任せて弱点へと辿り着く。ジェリーは注射器の先を怪獣へと突き立て、怪獣の体にある水分を一気に奪い取った。粘り気を失った水は、渦を巻いて注射器へと吸い込まれていく。

「……ふあ！」

先に水面から顔を出したのはメラであり、そこには怪獣の姿もジェリーの姿もない。5秒ほど遅れて、ジェリーが水中から出てきた。彼女の上げた手を見ると、手のひらサイズに縮んだ怪獣のシッポを捕まえていた。

2人はレインコートの浮力で岸へと辿りつき、小さくなった怪獣を改めて眺めていた。先程の仕返しとばかり、メラが指で突いている。

「よくもやってくれたな！こいつめ！」

「もう暴れないよう……ビンに入れておくれ」

ジェリーはカバンに入っているビンを取り出し、その中へと小さな怪獣を滑り込ませた。そのままフタをする。と息苦しそうに見えたのか、ジェリーは再び怪獣をビンから取り出してメラへと渡した。

「……少し持っていて」

「……え？それ、触っても大丈夫なの？かぶれたりしない？」

「手袋していれば、大丈夫」

いやがるメラに怪獣を任せ、ジェリーはピックのようなものでビンのフタに小さな穴を開けた。その後、ビン。を怪獣の下へと持っていき、メラの手から直に落として入れた。怪獣は元氣よく、ビンの中をはいずり回って

る。それを2人は別々の表情で眺めていた。

「……………うわあ。気味が悪いなあ」

「……………」

「……………ジェリー、ちよつと可愛いと思ってるでしょ」

「……………え？ううん。メラメラは、いつも可愛いよ」

「夢中じゃん……………」

なにくわぬ動作でジェリーがピンをカバンに収めると、2人は再び炎の神殿を目指して歩き始めた……………のだが、すぐにメラは立ち止まり、ジェリーをその場に立たせたまま街へと戻って行った。

「あつ……………ジェリー、少しだけ待ってて。すぐに戻るから」

すぐに戻ると聞かされたジェリーだったが、ゆうに30分は待たされた。ジェリーが怪獣の鑑賞や注射器の改造で暇を潰していると、嬉しそうに走りながらメラが戻ってきた。

「おまもりのペンダント、無事に見つかって良かった！」

「……………ああ、それを取りに行っていたの？」

「うん！これがないと、落ち着かないんだ！」

メラはペンダントを首から下げ、レインコートの中へと入れた。ちなんだ話題などを取り出しながら、先へ進もうとばかりに歩き始めた。

「……………そういえば、このペンダントに使われてる銀色の石、どこから拾ってきたの？見た事のない綺麗な石だけだ」

「よく解らないけど……気がついたらポケットに入っていたのよ」

「そっか。産地はジェリーのポケットか」

「正確には、私がメラメラの家に行った時から持っていたのだけど、私も凄く元気をもらったから……今は必要ないから、今度はメラメラにあげようと思ったの」

「そうだったんだ。もらっちゃってよかったの？」

「うん。大丈夫」

しばらくは岩の突起が多い地面を進んでいたのだが、そこを抜けると凹凸の少ない土地へと出た。代わりに緑色の石が散らばっており、ところどころで石が着火して火の粉を出している。これはファイアーフラワーと呼ばれており、メラが所持している砲火器の燃料となっているものである。それにジェリーが気づき、燃料の補給を勧めている。

「これ……メラメラの武器に入ってる石よね？補充した方がいい？」

「ここの地表に出てる石は熱をまとってるから、入れると中で勝手に発火しちゃうんだ。だから、入れておける石は冷めてるものって決まってるんだよ」

「へえ〜」

「それと、この辺りにはファイアーフラワーを食べる獣がでるから、まちがってナワバリに入ると面倒なんだよね」

「……どう注意して歩けばいいの？」

「ほら、このことか……」

ジェリーの質問に答える形で、メラが地面を指さしている。そこは立ち上る火の粉が少なく、掘り返された跡が僅かに見て取れる。

「こうして、食べた跡が残ってるから、そこを避けながら歩くのが得策だね」

「メラメラ、見て見て」

メラが真面目に説明しているそばから、ジェリーは近くにいた小さな動物を持ち上げている。メラはジェリーから動物を取り上げると、押し出すようにして逃がしてあげた。

「こんな所にいると、凶暴なのに襲われちゃうぞ。すみかへ戻るんだ」

「ああ……行っちゃった」

「残念そうな顔しない。あれは安全な動物だから良かったけど、危ないのもいるんだから勝手に触らないように」

「……ごめんさい。ところで、天空の岩場というのは、どこにある場所なの？」

「ここを超えた先にあるんだけど、とっても高い岩の柱が多い場所なのよ。隠れやすいから、小動物達の隠れ場になってるんだ」

「そうなの？行った事がないから、楽しみ」

メラにとつては見知った場所だが、インドアなジェリーにとつては初めての場所も多い。それ故にジェリーは楽しげで、メラはジェリーの先を歩いている訳である。その先もメラがジェリーを誘導し、危険な獣とは遭遇せずにファイアーフラワー地帯を抜けた。

大きな山が景色の中で目立っており、そこが天空の岩場である事はジェリーにも想像がついた。しかし、山肌

が崖のようで登るのは困難だという事、滑らかな質感のドーム状になっている事が、近づくにつれて解ってくる。天空の岩場を麓から見上げ、ジェリーは岩場攻略の策をメラに尋ねた。

「登るのも、中に入るのも難しそうだけど……いつも、どうしているの？」

「防衛隊で入り口を作ってあるんだけど……あ、あっちの方だと思う」

小動物が開けたと思しき無数の小さな穴を見つけ、その近くをメラは屈みこんで探っている。少しして、メラは岩場の表面にある窪みへと指を入れ、扉のようにして重く引き開けた。

「う……うあゝ！とりゃ！」

「こんな所に入り口が隠してあるのね」

「ここから中に……うわっ！水だ！」

岩場の中から水が流れ出し、扉が閉まらないよう支えていたメラが後ずさる。水の出が収まってから中を見ると、暗がり広がっていた。湿気の多そうな場所にメラが怖気づいているのを見て、ジェリーが先に水へと足をつけて入った。

「真っ暗で何も見えないわ……」

「ちよつと待って。今、照らすから……ファイアーリード！」

メラの武器から赤い光が発せられ、継続的に暗闇を押しつけている。明るくなって初めて、2人は岩場の中が水浸しであると知った。そこで、メラはファイアーフラワー地帯に小動物がいた理由を考えた。

「なるほど……これじゃ暮らすにも不便だし、小さい動物が外へ食べ物を取りに出る訳だ」

「じゃあ、水の軍団が来てるのかしら？でも、どうして、この場所を攻めたのか理由が解らないわ」

「ここは拠点でもないし、火山みたいに熱源がある訳でもないからね。静かだから、もう誰もいなそうだけど……」

溜まっている水を蹴って進んでいくと、遙か上の方から日の光が入っていた。その光にジェリーとメラが目を見めると、なにやら見覚えのある乗り物が岩場に引っかかっているのを見つけた。

「……あれってさ。ジェリーが火山で吹っ飛ばした、水の軍団の乗り物じゃないの？」

「言われてみれば、そんな気も。あれの中から水が流れ出したのかも」

「つまり、ほんの少しだけ、あたしたちのせいじゃん……」

責任の大部分は水の軍団に引き渡し、メラは足元に溜まっている水を改めて見降ろした。そこで考えが決まったらしく、ジェリーに相談を持ちかける。

「よし。この水を片づけて行こう。ハイドロバスターなら、簡単に外へ持っていけるでしょ？」

「うん。でも……」

「どうも……」

「これだけの水を外に出すのなら……どこかに水を溜める場所がないと、他の場所が水浸しになってしまうわ」  
「……なるほど。うん……どこに持って行っても邪魔な水だなあ」

この星は元より水が少なく、つまりは並々とした水に耐えられる場所も限られる。運ぶ先の目星も立たぬ内、ジェリーは水の軍団が乗っていた乗り物を指さして言った。

「ひとまず、あの乗り物をどうにかしない？岩場が崩れて落ちてくると危ないから……」

「そうだね。とはいえ、下へ降ろすのも一苦労。なにせ、かなりの大きさだし」

「任せて」

ジェリーはハイドロバスターを水で満たした後、絶妙なバランスで岩間に引つかかっている乗り物の下へ移動。注射器の先を地面の水へとつけ、上を確認しながらハイドロバスターのスイッチを押した。

「……ハイドロタワー！」

水が柱のように沸き、岩場の隙間から乗り物を持ち上げた。さすがに天井までは水が持たないようで、一つだけ高い岩場へ乗り物に乗せると、ジェリーは噴き上げた水を回収した。完全に観客の視線で、メラがジェリーと同じ場所から上を眺めている。

「……器用だなあ。これは流石に、炎じゃ真似できない」

「この調子で上の穴から外へ出すから、メラメラは上の様子を教えて」

「解った。了解」

湿っている岩場を登り、メラが四つん這いの体勢で見降ろす。あとは上の地形を見ながら、ジェリーが巨大な乗り物を少しずつ持ち上げて行けばいい。

「ハイドロタワー！」

「……こつち、ぶつかるよ！そつちに動かして！」

「こつち？」

「……もうちよい、あつち！ここが危ない！」

「うん」

大雑把なメラの指示を受けながらも、ジェリーは乗り物だけを見つめながら運搬している。乗り物より先回り

し、メラは更にも上へと登って行く。ただ、こちらでも乗り物の方ばかりを見ていたせいで、岩の足場をくずして落下させるといふ、考えつく限りでも最も大失態をやらかした。

「……………わっ……………と！あ！ジェリー！あぶない！」

「……………え？なに？わわっ……………ハイドロセイントガーディアン！」

岩に押されて落下してきた乗り物から身を守ろうと、ジェリーは適当な技を作って適当に水でガードした。心配したメラがジェリーの元へと降りてくるも、ジェリーが無事である事は一目で理解できた。

「大丈夫……………そうでなによりだ。ごめんごめん」

「とっさだったから……………変な技、作っちゃった……………」

「とっさの割にカッコイイの出たなあ……………」

「とにかく……………もう一度、下から運びなおすね」

最下層まで転がり落ちていった乗り物を追い掛け、ジェリーが危なっかしくも岩場を降りて行く。下に到着したジェリーから呼ばれ、メラが足場の隙間から下をうかがっている。

「……………ねえ。メラメラ？」

「今度はなんなの〜？」

「……………この乗り物、なんだか数字みたいなものが出てるんだけど」

「……………え？」

ジェリーの指さした部分を見つめようとし、メラが必死で目を細めている。すぐに状況が判断できたらしく、メラは減っていく数字を指さしてジェリーへと伝えた。

「……それ！絶対に爆発する！早く逃げよう！」

「待つて。山の入り口が、さつき落ちてきた岩で塞がってるわ」

「こんな時に！なんて事をしてくれたんだ！」

なんて事をしてくれた人の口ぶりからすると、山への入り口は先程の一つしかないらしく、出口は先の先にあるようである。こうなったら、爆弾と化した乗り物を追い出さなければ、山ごと爆破される恐れがある。

「やばい！ジェリー、急いで上から放り出そう！」

「解った。ハイドロアッパー！」

パス、とばかりにジェリーは水をはね上げ、乗り物を上の方へと打ち出した。巨大な鉄の塊が宙を舞っており、それが落ち始める前にメラは考えるのを止めて行動した。

「ファイナルヴォルケーノ！ジェリー、任せたよ！」

「うん。ハイドロスプラッシュ！」

ジェリーは巨大注射器に乗って水流で飛びあがると、メラが全力の炎で持ち上げた爆弾に追いつき、巻き上げるかのような水で更に持ち上げた。山の頂上に空いている穴まで残り僅か。しかし、メラが爆弾に追いつかない。

「うう……ごめん！間に合わない！」

「大丈夫！ハイドロロケット！」

「わ……うわっ！」

武器の炎で飛びあがろうとしているメラを小脇に抱え、ジェリーは水を身近に纏ったままロケットの様子で飛び出した。そのまま、重力に引かれ始めている爆弾へと体当たりし、爆発する水の勢いで山の頂上にある穴へと

押し込んだ。

「なんで、あたしまで……」

「ごめんなさい……抱えやすそうだったから」

「……あつ！あれ！」

「え？」

メラが上を指さし、つられてジェリーも上を見た。なんと、爆弾が山の頂上にある穴へとハマっており、外へ出ていない。

「あそこから入ったんだから、出ないのおかしいじゃん！」

「でも、たまにあるよね……っ！ハイドロセイントガーディアン！」

爆発のタイマーが0になるのを確認し、ジェリーは注射器内の水を全て使って自分とメラの体を守った。水の軍団が乗っていた乗り物は白く輝くも、特に爆発は見せぬまま穴に固定されていた。

「……爆発しないじゃん！」

「……中身が空だから、爆発に使う水が無かったのかも」

「それもそうだ。早く言っただけ良かった……」

ジェリーの見解を受け、メラは納得と安心を両方とも手に入れた。しかし、そもそも爆発しそうだったのか……という真実は、いまや水の軍団のみぞ知る。爆発事件が解決したと見て、ジェリーは山の最下層から水を補給。乗り物を良い具合の方向から射ぬき、山の外へと転がし落とした。同時に水を隔離する案も浮かんだようで、腕組みながらに事を見守っているメラへと相談した。

「……………この水は乗り物の中に入っていたのだから、乗り物の中に戻したらどうかしら」

「ば……爆発するんじゃない？」

「あ……爆発しないよう、私が先に見ておくわ」

「うむ。頼む」

山の真上だけは天気が良く、ぽっかりと雲に穴が空いたような晴れ模様である。山の中にある水を乗り物へと移すには4回程の移し替え作業が必要であり、ジェリーは乗り物の上側から注射器の先を挿しこみ、水が漏れないうように注意しながら注いでいる。一方、メラは一つとしてする事がなく、ジェリーの横に座って空ばかり見ながら雑談していた。

「ねえ、ジェリー？」

「なに？」

「あたしたち、結構がんばってるよね。帰ったら、何かもらってもバチはあたらないと思うんだ」

「……何が欲しいの？」

「ジェリーは何か欲しい物ある？」

「特にはないけど……」

「うん。あたしもない」

なぜ、その話題を切り出したのか。続いて、メラは気だるそうな声でジェリーに質問している。

「あと何回で終わりそう？」

「あと1回だと思っう」

「あつ……山に動物たちが戻って行くぞ。ゆかいだなあ」

特に面白い話もなく、こんな会話がジェリーの作業終了まで続いた。山に溜まった水を移し終え、改めて入った山の中は非常に歩きやすい。その体験を、すぐにメラが言葉へと変えている。

「さつきまでは水が膝を浸していたけど、これなら歩きやすいぞ。足が軽い」

「……出口は、かなり先なの？」

「うん……昼いっぱいくらいはかかるかな。ここは危険な動物もないから、ゆっくり進もう」

「メラメラ……灯りはつけられる？」

「ああ、ごめんごめん。ファイアーリード！」

メラは砲火器の先に火を灯し、それを高くは上げられないながらも高く上げながら、空洞となつて山の中を照らした。先程までは水浸しで見えなかったが、地面には鉄の杭が打ち込んであり、出口までの最短ルートを示してある。それに火の灯りをぶつけながら、2人は平坦な道を軽快に進んだ。

メラが前を歩いている訳だが、後ろを歩いているジェリーが何か手作業している。後ろを向いたまま歩き、メラがジェリーの手元を気にしている。

「今度は何してるのさ」

「うん。水の軍団の乗り物から部品を取る事ができたから、また新しく改造してみてるんだけど……」

「歩きながら、器用なものだ。それだけ器用なら、なぜ家の食器を頻繁に割るのか」

「それは……考え事をしながら洗っているからかも」

「なに考えてるの？」

「……なるべく楽しい事」

「なにそれ。どうせ、水の研究についてでしょ？」

「まあ……うん」

楽しそうなメラへと困り笑顔で返答し、ジェリーは数秒の間を置いて話題を持ちかえた。

「水の軍団の人達、もう山の中にはいないみたいね……」

「さつき、あれだけ大きな音を立てても出てこないんだから、もうとつくに上の穴から避難してるでしょ。きつと。それにほら、動物たちも隠れる様子がない」

「……それも、そうね。でも、ここを出て、どこへ向かったの？ 仲間の誰かに迎えに来てもらったのか……近くに拠点があるのかも」

「あ……ここから先、どこが占拠されてるかも解んないもんね。ここを出たら、隠密行動を心がけよう」

珍しく実のある会話をしつつ、2人は休まずに先へと進む。なぜ、この場所が天空の岩場と呼ばれているかというと、その由来は山の中央付近にある風景から見えてくる。岩壁全面が白い水晶で覆われており、合間合間から突き出た黒岩が浮かんで見えるのである。

「綺麗ね……」

「空に岩が浮かんでるように見えるから、天空の岩場って名前を付けたんだって。総隊長が」

「……え？ 総隊長さんが名づけたの？」

「ジェリー。そんな驚いちゃ失礼だぞ。総隊長は結婚した時から100回の朝晩が巡ること、奥さまに贈り物をされる律儀な方だ」

「逆に……メラメラの、お父様と……お母様は、祝ってるのを見た事がなかったから……」

「うちは……あれじゃん。お母さんの方も忘れてるし」

「……ああ。それはそれで、気が合っているのね」

「そういう事。ここまで来たら、2分の1くらいは進んだ感じかな」

「外側からの入り口は見つけにくかったけど……出口は内側から見つけられる？」

「来た方の入り口は防衛隊が作ったものだけど、逆側は最初から穴が空いてるんだ。だから、手を使わないで出られる」

「そっか」

山の中を先へ先へと進み、メラが言っていた出口の穴を発見する。メラは両手を上げて伸びをしながら外へ、ジェリーは頭をぶつけないよう脱出した。

山を出た場所から少し行くと、眼下に広い平原が現れた。平原と言っても草は生えておらず、さらさらとした砂が岩場の所々に溜まっている。平たい地形を囲む形で、高低差の激しい丘が突出していた。

見るからに歩きやすそうな道を見つけ、ジェリーは考える様子もなく足を出す。すぐさまメラがジェリーを後ろから引き、近くの丘に、うつ伏せさせた。

「ストップストップ！隠れて！」

「……c？」

「あれ。あそこ、誰かいる」

「……c？」

メラが指さした先にジェリーは目を凝らす、あまりにも遠い場所を指している為、どうにもジェリーには人影が見えない。その結果が、このセリフである。

「メラメラ、目がいいのね」

「うん。見たところ、水の軍団の服装に似てるけど……まったく動く様子がないな」

「……死んでるの？」

「う……それは見たくないものを見たかもしれない。あつ……動いた」

「よかった」

「よかったけど……あつ、こっちに手を振ってる！」

「見つかった？」

「逃げよう！」

「うん」

勢いよく立ち上がると、メラは武器を攻撃態勢で構えながら逃げ出した。ジェリーもメラを追おうとするが、ふと振り返って足を止めた。

「……あれ？」

「どうした？」

「もしかして、あの倒れてるのが、水の軍団の人？」

「……そうだね。なんだろう」

「動かないけど……死んでる？」

「……それはやだなあ」

死んだ予想の一点張りを続けながらも、ジェリーとメラは水の軍団の団員を観察している。団員は丘の下にある窪みのような場所で倒れており、武器は投げ出し、寝がえりをうって仰向けになったまま、空へと手を伸ばしてみたりして、非常に絶望的な空気をもっていた。おとり作戦の線を踏まえ、メラは辺りに他の敵がいなか確認をしながらも、ジェリーをかばいながら男の人の元へと近づいた。

「おーい。生きてるかー」

「……」

メラの声が聞こえ、男は寝そべったまま視線を動かした。

「俺が敵だと知りながら近づくとは、なかなか見上げたものだ……それも若さか」

「おい！よくも、あたしたちの街に変な生き物をけしかけたな！おかげで、死にそうな目にあっちゃったんだぞ！」

なぜ近づいたかと言えば、これを言いたかったからに違いない。前振りもなく、メラは街での一件を切り出した。しかし、男は受けつけない。

「ここで会ったのも何かの縁だ。話を聞いてくれないか？」

「なんだよう。偉そうな態度で」

「偉そうな態度なのは承知だが、それには深い訳がある」

「一応だけど……偉そうなのは態度だけじゃないぞ」

全くの無害とみて、メラは武器の先端を引っこめた。男の人は態度を改めず、無気力な声で続けた。

「俺たちは水を飲んで生きている……俺は動けない。それだけの話だ」

「……はほん。さては、水がなくて餓死寸前って訳か」

「ま、そういったところかな」

そういったところではない。そうなのである。その確信を得て、今度はメラが強気に出た。

「交換条件だ！水を分ける代わり、知っている事をあらいざらい話してもらおうぞ！」

「……それだけで良いのか？俺は、死ぬ寸前レベルでピンチだぞ？」

「死ぬ寸前の割に口は達者だなあ……ジェリー、なにか要求はある？」

「いえ……特には」

「だよね。あつ……武器だけは取り上げさせてもらおうぞ。じゃあ、ジェリー。水あげて」

「うん。ハイドロポンプ！」

攻撃にならない程度の勢いで、ジェリーが男に向けて放水する。念願の水を浴びて、男は奇声を上げながらタバタと喜んでいた。

「うひゃ〜！水だあ！うめえうめえ！」

「う……ほんとに水を浴びて喜んでる。信じられない光景だ」

炎の民は水が苦手であり、水を体に取り入れる事など絶対にならない。気持ち悪そうにしながらも、メラは珍しいものを見る目である。ジェリーは無表情で放水していた。

体の健康を取り戻すと、男の人はジャンプと共に置き上がり、リズムカルにステップを踏みながらジェリーへと話しかけた。

「助かった！異星人ながら、ナイス放水だ！」

「メラメラ……」

「こら！ジェリーが怖がるだろう！こつちくるな！そこに座れ！」

「はいはい」

メラに言われた通り、男の人は穴場の隅に座りこんだ。一つ咳などして見せて、メラは男への質問を始めた。

「異星人って言ってたけど、あんたたちは別の星から来たんだよね？」

「そうだけだ」

「何が目的なんだ？」

「さあ？」

「知らないで侵略してきたのか……じゃあ、次！仲間は、どこに行ったんだ？」

「おいおい。知らないと言ったから質問を止めるんじゃない、何も聞き出せないぞ？見たところ、お前は何かの隊員のようなが、そこんところの教育は足りていないようだな。親はパン屋か何かか？」

「ば……パンってなんだ？」

「さあ？」

「ジェリー！やっちゃええ！」

「ハイドロバスター！」

「うひゃ〜！いてえいてえ！」

相手の方が口では達者と見て、メラはジェリーに攻撃を頼んだ。強い水圧で壁に張り付けられ、男は膝から崩

れ落ちるようにして倒れた。

「ちゃんと答えなさい！さもないと、ジェリーが黙ってないぞ！」

「解った……手荒な真似はよせ」

「で、パンってなんなんだ！」

「食べ物だ……だが、もつと他に聞くべき事があるだろう……」

「何が目的だ！」

「それは解らん……」

「ジェリー！」

「やや！それは本当だ！本当に知らん！」

「知らないのに二度、聞かせたのか！」

「ごめんごめん」

メラは息も絶え絶えに尋問を続けており、もはや尋問というか脅迫の範疇である。

「メラメラ……攻撃は良くないわ」

「そ……そうだ。攻撃は良くない。聞けそうな事は聞いたし、あたしは攻撃をやめるぞ！」

そもそも、攻撃していたのはジェリーであつて、メラではないのだが、それは重要ではない。メラは男と気が合わないといった仕草で振り返り、さつさと平原を歩き始めてしまった。ジェリーはメラを追うより先、男の持っていた武器を地面へと置いた。

「これは返すわ。武器としては使えなくさせてもらったけど……水をくむぐらいはできると思う」

「ありがたい！山の中にある水を使えば、しばらくは安泰だ！」

「水は片づけてしまったけど……山の反対側にある飛行船に入れてきたわ」

「そういや……なんで、あんたは水の機械を扱える？この星の物とは、動力から仕組みが違うんだぜ」

「……」

「ジェリー！そんなのの相手してると、しまいには舌を抜かれちゃうぞー！」

メラが手をぶんぶんと振りながら、もたもたしているジェリーを呼んでいる。ジェリーがメラの元へと走りだそうとした手前、呼びとめる風でもない声で男が言った。

「放水機は出口を細くすりゃあ水圧が上がる！逆もしかりだ！なるべく便利に使えよ！」

男の声を背中で聞きながら、ジェリーはメラのいる場所まで辿りついた。何か2人で話をしていたと見て、メラは疎外感を露わとしている。

「なにをこっそり、話をしてたのよー」

「……山の裏にある飛行船の事と、こぼれてた水の話をしてたの。水がないと、これから困るでしょ？」

「すっかり言い忘れてた。でも、言い忘れてても後悔はしない」

「……そろそろ空が暗くなってきたわ。メラメラの家の別荘は、まだ先なの？」

「ここを抜けた所だよ。夜より早く到着するだろう」

それから間もなく平原は終わり、平和だった地形は岩山へと変わっていった。

「……そうそう！この崖を渡った先だよ！」

ジェリーに聞かれるともなく、メラが記憶を修正している。遙か下に流れる砂の川を鑑賞しつつ、2人は岩の

谷を抜ける。すると、次に待っていたのは巨大な階段を思わせる形状の山で、どう見ても別荘がありそうには見えない。

「……」

「あそこの灰色の岩の裏まで行ったら、別荘に到着だよ。きつと」

メラの信用に関わる発言であったが、そこは裏切る事なく別荘へと辿りついた。しかし、岩の影に立っている別荘はメラの記憶していた物よりも半分ほど小さく、それは半壊していると言いつた事もできた。

「これは、また……綺麗に半分だけ壊れたなあ」

「もう乾いてるけど、ここにも水が落ちてきたみたいね。メラメラ……どうする？」

「う……うん！大黒柱が残ってるから、一晩くらいなら大丈夫！ここはリゾート地だし、危険な生き物も出ない！」

「暗くなったら、水の軍団も移動はしなさそうなものね」

「そうと決まれば、寝る場を確保しよう！」

何が残っていて使えそうなのかを確かめるべく、恐る恐るといった足取りでメラとジェリーは室内へ。建物は全てが石で作られていて、歩いても床が軋んだり、建物が揺れるといった事はない。1階はリビングが残っており、幸いにも2階には寝室が一部屋だけ残っていた。疲れていたとあって、ジェリーは寝室を見て安堵している。

「……よかった。でも……ベッドは1つしかないわ」

「2人で寝ようよ」

「う……うん」

2階の探索が終わり、別荘から剥き出しとなっている階段をおりる。その頃には空が暗くなっていて、大きな星が白い光を優しく降らせていた。別荘は高地に構えており、下へ下へと視線を落とした場所には赤色のキラキラが溜まっている。それをじつと見ているジェリーの後ろで、メラがキラキラの正体を明かしていた。

「あれが水晶畑だね。あそこに炎の神殿があるんだ」

「……………そうなの？」

「そうそう。あれの調査は次の日の、あたし達に任せよう。くたびれた今日は、ご飯を食べて寝る」  
いざ、保存食を頂こう。その直前になり、メラは別荘にキッチンがない事実を知った。

「あ……………あれ？台所がないじゃん」

「……………メラメラ、料理するの？」

「食料は台所に備蓄してあるの！だから……………」

「……………ああ」

「あ……………ガツカリ」

もう何をする気力もないと言わんばかり、メラは横長い椅子に倒れ込んでいる。ただ、ジェリーはメラの母親から貰った弁当箱を思いだしたようで、ツルツルとした質感のバッグから小さな箱を探し出した。

「お弁当……………奥さまから、貰っていたのを思い出したわ」

「それも忘れてないけど……………うちの母は、あたしの嫌いな物を入れる事に余念がない」

「まあ、贅沢さん」

贅沢な発言とは裏腹、メラも夕食を頂くつもりは満々である。ただ、生きながら死んだような目をしていた

のは開ける時までで、弁当箱の蓋を開けると意外そうな表情になる。

「……あつ、めずらしくマシなものが入ってるなあ」

「マシな物って……どれも美味しそうよ？」

「しいていえば、量が少ない」

「でも、食べるんでしょ？」

「食べるけどね」

文句しか言わない娘である。この後も食べ物の一品一品を辛く評価しながら、非常に美味しそうな様子で食事を終えた。

「……たりない！ さつさと神殿の調査を終わらせて、火山へ直帰したい。よければ、今すぐにでも帰りたい」  
「解る。お腹が空いてると、心が引き締まらない時ってあるよね……バッグの中に残り物があつたような……」

「火山で食べてた残りかあ……」

「食べないんでしょ？」

「そ……そんな目で見てもあげないわよ」

「食べないんじゃないの？」

「食べないけど」

状況が変わると言う事も逆になるものか、とても考えが柔軟である。食べるだけ食べたなら眠くなつたらしく、メラはジェリーを誘うようにして、振り返りながら階段を上がっていった。一階のランプを消した後、ジェリーもメラを追って二階へと向かった。

二階のベッドは枠組みの上に薄い鉄の板を何枚かハメた物で、乗ると僅かに板がしななって良い寝心地である。ふとんにあたる物はなく、気温が低い場合はベッドの下に火のつく石を入れる。まだベッドは暖まっていないが、メラは誰に気を遣うでもなく、ベッドの真ん中に大の字姿で寝そべっていた。

ジェリーは居場所に困った仕草でベッドの脇に腰かけ、何も言わずに巨大注射器をいじり始めた。まだメラは眠っていないようで、寝がえりをうちながらジェリーへと話しかけていた。

「……コートを着てると、あつたかいけど、なんか落ち着かないなあ」

「……でも、寝ている時に水が降ってきたら危ないから」

「それはそうだけどー……」

何秒かの沈黙を挟んだ後、今度はジェリーがメラの方を見ずに話題を持ち出した。

「……私、炎の神殿に行った事があるかも」

「……え？」

「よくは憶えてないけど……」

「そうだよね！あたしも、そうなんじゃないかと思ってた！」

バツと起き上がり、食いつくようにメラがジェリーの横へ移動した。思いがけない答えを受け、ジェリーは困惑した様子でメラを見つめている。

「……ジェリー。ジェリーは、どこから来たの？」

「うろおぼえだけど……さつき水晶畑を見て、前に見た事があるような気がしたの……」

「ジェリーは、あたしが小さい頃に……」

「……」

「今も小さいだろ、とか思っただろう……はいはい。あたしが、もっと幼かった頃。遠征に行った、お父さんがね。急にジェリーを家に連れてきたんだ」

「そうそう。どうしてかは解らないけれど……」

「てつきり、修羅場になるのかと思っただけけど、お母さんもジェリーに優しいし……深く考えれば考える程、訳が解らなくて聞けなかつたんだ」

「メラメラ……おませな子だったものね」

父親の浮気や隠し子の線を気にしていたメラだが、ジェリーの口調が穏やかなのを知ると、組んでいた足を解いて楽に座り直していた。最悪な予想が外れてくれたからか、メラは更に堂々とした言葉でジェリーに尋ねた。

「……あの日、お父さんたちが調査に行ったのは炎の神殿だったんだ。とすると、ジェリーを見つけたのは炎の神殿とフレイムタウンの間」

「なるほど」

「つまり、迷子になってたからつれてきて、ほんとの家を探してあげてたんじゃない？」

「そうかも」

「そうだよ。なくんだ。そうと解ったらスッキリした！これで今夜も、まくらを高くして寝られる！」

「うん。私も」

それ以上の考えは及ばないのか、はたまた考えたくもないのか、強引に結論を出してメラは再び横になってしまった。ただ、ジェリーの方は心につかかったものがあるのか、弱気な笑顔のままメラを見つめていた。

眠る前は離れて寝ていた2人だが、ベッドが温かくなるまでに時間が掛かったらしく、次の朝にはメラがジェリーに寄り添っていた。やはりメラは自分じゃ起きず、またまたジェリーがメラの肩を揺すって起こしている。

「……早く行かないと、火山に戻るのが遅くなってしまおうわ。起きて」

「うう〜ん……ごはんは？」

「カバンの中に入ってるわ……」

「あれは食べないぞ……」

執拗に食べ残しを責められるとみて、メラはジェリーの体を登るように起き、そのままジェリーの背中へと、のしかかった。おもりをするように1階へと、ジェリーがメラを運び、用途の解らない大きな箱の上へメラを乗せていた。

「ゴミ箱の上に置かれた……」

「それ、ゴミ箱だったの？」

しづしづゴミ箱から立ち上がると、メラは出発の準備としてカバンと砲火器を持ち上げた。困り顔ながらに巨大注射器を背負い、ジェリーはメラの気力が出るのを待っていた。

日本の時間而言えば15分くらいダラダラした後、やる気の發揮されたメラに手を引かれてジェリーも別荘の外へ出た。昨日に比べて天気が悪く、敷き詰めるように雲が空を覆っている。雨は降っていないが、2人はレインコートのフードで頭を覆っている。

目的地は常に見えている訳で、迷う訳もない。巨大なブロックを積んだような地形から飛び降りつつ進み、土に混じり始めた赤水晶の欠片を意味もなく拾い上げながら歩いていた。敵の気配は全くなく、風の流れる音だけ

が辺りに響いていた。

水晶畑の中央に道が出来ており、そこを呑気に進むと炎の神殿へ行きつく。とはいえ、炎の神殿は地下に位置しており、見えてきたのは下へ降りる階段のみである。そこをのぞきこんで、メラは青ざめた顔で後ずさっている。

「うわ……水が溜まつてる。道がヌかるんだから、なんとなく想像はしてたけど……」

「これじゃ、神殿にいる神様も弱っているかも」

「神様？そんなのいるの？」

「……え？いないの？神殿なのに」

「あたしは見た事ない。だから、いない」

神はいない。その結論にジェリーも納得したようで、メラを見つめたまま無言で頷いていた。とにかく、これでミッションは完了。そこで、メラは次の目的を口にした。

「帰ろう」

「そうね」

2人が踵を返すと、呼びとめるかのように地鳴りが起こった。2人は気にせず行くこうとするが、やたらと騒がしい地鳴りがする。

「なんだろう……うるさい地鳴りだなあ」

「調べに行く？」

「……これは、あたしの、お腹の音だよ。調べる必要ないよ」

「お弁当の残りなら、カバンに入っているけど……」

「ごめん……嘘だ。しかし、うるさい地鳴りだ」

あれこれ言っている間も、地鳴りが会話をさえぎって仕方ない。再び2人は神殿の入り口を見つめ、今度はジェリーがメラへと言い聞かせた。

「私、少し中を見てくるわ。メラメラは外で待ってて」

「……あたしも行くわよ。一人やだもん」

「うん」

数段ばかり降りた先は水の世界となっていて、どの程度の深さまで水があり、息継ぎをするポイントがあるのかすら不明だ。ジェリーはザブザブと水に浸っていくのだが、まだメラは水に対して恐怖を抱いているのか、足だけ入浴させて安全を確認していた。

いざ、水中へ。メラが水の中で目をつむっていて、その手をジェリーが引いて先へと進む。始めは下り階段にそって続いていた道だが、広い部屋へ出ると天井が高くなっており、上の方へと浮かび上がって空気を口に含んだ。

「……ふうっ！息ができるぞ！」

「……水が隣の部屋や、あちらこちらの窪みまで入り込んでる。これじゃあ、水を吸い出そうにも時間が掛かるわ」

「ここで暫く過ごそうにも、食料もない訳だし、みんな来て水を排除するしかないんじゃない？」

「そうね……」

再度、2人が水へ潜り込もうとするも、もの凄い振動が水に波を立てた。続いて、下の方にある狭い通路へと水が引き込まれ、その水流にメラがさらわれていった。

「あつ……うああ！」

「ああ、メラメラが流されていく……」

意を決してジェリーも追跡するが、泳いだ事など今まで一度もない人達である。やはり成す術もなく流れ流され、神殿の奥へ奥へと引かれていく。その末、2人は水が浅く溜まっている場所へと吐き出された。

「……ビックリしたなあ。ここは、どこなんだろう」

メラが周りを確かめ始めて数秒後、後ろで、うつ伏せになって倒れているジェリーを発見。慌てて体を起こしあげ、メラはジェリーを水のない場所まで引つ張り出した。

「ほら、こんな事が起こるから、あたしは神殿に入りたくなかったんだ！目をさませー！」

「……」

水に溺れた時の対処法など知るはずもなく、メラはジェリーの背中をしばいている。あまりにも慌てていたせいか、背後の暗闇から生温かな風が吹いている事にも気づかない。風の送り主は更に顔を近づけ、メラの髪をなびかせた。

「やかましい風だなあ。それどころじゃ……んん？わ！うわー！化け物トカゲだあー！」

それどころではないが、風に顔を向けてしまえば、それどころである。白い巨岩と見間違えそうなものがメラの面前にあり、視線をぐっと上げて行けば、それが恐るべき大きさのトカゲであると判明する。

何かが張り裂けたような絶叫を耳元で受け、ジェリーが、しかめた表情で目をさました。メラの発した声に怖

気づいたのはジェリーだけではないようで、羽のある大きなトカゲもサッと顔を後ろへ下げていた。

「ほら！ジェリーの方が美味しいから！」

と言つて、目覚めたばかりのジェリーをメラが差し出ししている。ただ、ジェリーの方は慌てる様子もなく座りなおした後、自分の肩を抱く姿で否定している。

「メラメラ……前は美味しくないって言つてたのに」

「その言い方じゃ、まるで、あたしがジェリーを食べたみたいに聞こえるじゃないか……」

「……寝ぼけて私のベッドに入ってきて、一晩中……私の指をしゃぶった後、錆びた鉄の味が口に広がってるなんて、起きてから言つてたのに」

「……ごめん」

「もう！どっちも食べないから、静かにしてよね！もう！」

大きなトカゲは口を開き、見た目に似合わない高音で2人の話を割った。その口調が女の子の子供の子供過ぎていて、誰が喋り出したのかとメラが辺りを見回している。

「こつちよ！こつち！目の前のラブリーなドラゴンが話を始めたの！」

「ラブリー！？」

「その黄色い服の方、何を疑つてるのよ！まったく……誰か来たと思つて必死で呼び寄せてみたら、こんな人達だったなんて、悲しくなるばかり！」

「じゃあ、さつきから鳴つてた地響きは、あなたが起こしたもののなの？」

「そう！その青い服の方、正しい！」

「声、高っ！」

「黄色い方！今更、何に気づいてるのよ！やめて！」

黄色い方がメラで、青い服の方がジェリーである。

「まあ、いいわ。突然だけど、私を助けて！」

「いやです」

「無理……」

どう助けて欲しいのか告げる間もなく、即答で断られた。メラからは珍しく、敬語で断られた。しかし、ここが踏ん張りどころ。聞こえなかったふりをして、ドラゴン話を続ける。

「水の軍団が神殿へ入ってきて、中を水浸しにしていたの！それだけでも酷いんだけど、私に大量の水を飲ませてきたの！これじゃ、重くて体が動かせない！」

「たしかに、お腹が膨らんでるなあ。パンパンだ」

「でしょ？だから、水を出す方法を考えて欲しいの！」

「いやです」

「そこをなんとか……」

「メラメラ……かわいいそうだから、考えてあげましょう」

「しようがないなあ」

「そうこなくちゃ！青い方、優しい！」

やる気がなさそうだった割にメラは真剣なようで、腕を組んだまま穏やかに歩き始めた。暫しの時間をおいて、

メラは両手を腰に当てて提案した。

「おいしくないものを食べたなら、水も一緒に吐き出されるかもしれない」

「なるほど！それで、私は何を食べればいいの？」

「……なんだろう。ジェリーとか？」

「メラメラ……」

「ごめん……」

まずい物が周りに見当たらなかった訳で、あえなく案は却下された。続けて、メラが別の作戦を取り出す。

「お腹を全力で攻撃してみたなら、水が口から出てくるかもしれない」

「痛いのは嫌！」

「わがままなドラゴンだなあ……じゃあ、何か他に思いつくのか？」

「そうねえ……あつ！そこに大きな職台があるじゃない？」

「うん」

「それを使って」

「うん」

「私の中から水をくんできてくれないかな？」

「……帰ろう」

お椀型の職台を持って体の中へと入り、水を運んで欲しいとドラゴン。すぐさまメラはジェリーの手を引き、流されてきた道へと歩き始めた。

「ああん！待って待って！私の喉、広いから入りやすいのよ！」

「入りやすいなら入ってみようかな〜……なんて思う訳ないでしょうが！すつとこどつこいなドラゴンだなあ！」

「おねがい、おねがい！」

「可愛く言っても、ダメなものはダメ！そこまで、可愛くもないし！」

「かわい……かわいそう。助けてあげましょうよ」

「……ええ？じゃあ、なに？ドラゴンに自ら入っていくの？言い変えれば、死だよ？」

「絶対に飲み込まないから！しゃっくりもしない！」

ジェリーの提案を受け、メラは彼女が正気じゃないと思っている。あまりにもメラが動揺しているからして、ジェリーはガッツポーズで最終手段を伝えた。

「……飲み込まれそうになったら、胃に穴を開けるから大丈夫」

「それなら安心だ。行ってみよう」

「またまた〜。2人とも御冗談を。あれ……冗談だよね？」

どちらにとつても命懸けの作業となり、どちらかと言えばドラゴンの側が気を張り詰めさせている。ドラゴンの口から滑らかな銀の舌が下ろされ、メラとジェリーは足をくじかないよう登ったのだ。だが、吹き付ける温かな息が受け付けないと、メラが口の中で無茶苦茶な事を伝えている。

「……吹き飛ばされそう息だ。口息だけ止めれないの？口は閉めなくていいから」

「口を開けたまま口の息だけ止めるの？難しくない？」

「簡単だよ。あたしは出来るもん」

「そ……そうなの？やってみる！」

「メラメラ……そろそろ行きましょう」

嘘つきを見るような目でジェリーがメラを誘い、広いと言った割には少し狭い喉の奥へと踏み出した。体内とはいえ炎の竜という事もあり、あちらこちらが、どことなく明るい。ドラゴンの首は長く、内部は細かな凹凸のある管が奥まで続いている。なんとか足がかりを見つけて、水の溜まっている胃へ急ぐ。

『……いたっ！なんか刺さった！』

「何かしら……」

ジェリーの背負っている巨大注射器がドラゴンの食道を小突いているものの、それには気づかず奥へと進む。道が上へと反り上がっている場所へ行きつき、上を見つめながらメラはドラゴンへと告げた。

「……道が上にいっちゃってるぞー！どうやって進めばいいのさー！」

『……これでどう？』

ドラゴンが体をくねらせると、登る事の出来なかった高い場所が下り、今度は奈落へと代わり果てる。

「行き過ぎだよー！もうちよつと、体を転がしてー！」

『解った！そ……それ』

「うーん……あと少し右に傾けてー！」

『こ……こ……』

「もう一声！」

『は……恥ずかしい……』

「うむ。これで進めるぞ」

メラから言われるがままに体を転がしていたら、いつの間にか股を開いた仰向けになっていて、ドラゴンは気持ち恥ずかしい。ドラゴンを辱めながらも段差をよじ登り、メラとジェリーは末広がりな場所へと辿りついた。どこまで行けばいいのかと、メラがドラゴンに尋ねている。

「結構、先に進んだつもりなんだけど、まだつかないの？」

『そんな事いわれたって、どこにいるのよ!』

「あちこちの壁に緑色のピカピカが埋まってる場所!ここ、どこなのよ!？」

『自分の体の中なんて、見た事ある訳ないでしょ!もう!多分、肺とかよ!肺!』

「適当なドラゴンだなあ。早く目的を達成して、外へ出よう」

「メラメラ……そろそろ、水のある場所に着くみたい」

「なんで本人に解らない事が、ジェリーに解るのよ」

「この子が、はしゃいでるから……きつと、もうすぐ」

フレイムタウンでゲットした謎の生物が入っているビンを取り出し、その様子をジェリーはメラへと見せつけている。

「すっかり忘れてた……まだ生きてたんだ……」

「ちよつとずつ水をあげてたから、すごく元気」

「育ててるの?うくん……先を急ごう」

謎の生物から目をそむけ、メラは壁についた穴へとよじ登る。四つん這いの体勢で2人が穴の先へと進んでいくと、やつとの事で水の溜まっている胃に到着した。そこで思い出したらしく、ドラゴンは慌てた声で2人に声を掛けていた。

『……あっ！2人とも、水をくむ職台を忘れていつてる！』

「大丈夫。ハイドロバスター！」

小さな湖とも似ている水たまりへと注射器の先を入れ、ジェリーは胃の中から水を取り出し始めた。どれぐらしかかるのかと、メラが作業時間をジェリーに質問している。

「……一度じゃ無理だよ。何回かかりそう？」

「2回で、全て取り除けると思う」

『あっ……ちよつと、お腹が軽くなってきた！』

「前から思ってたんだけど……ドラゴンを動けなくさせる程の水が、なんでジェリーの注射器に入るんだろう。不思議だ」

「……うん」

ぼんやりと、こもつて聞こえてきたドラゴンの声を聞き、ささいな疑問をメラが芽生えさせている。なお、繊細な作業をしている最中なので、ジェリーからは無視された。

かなりの時間をかけた末、残り少しで注射器が満タンになるようで、そのタイミングを見てジェリーがメラへと返答している。

「……水の粒を並び替えて、狭い場所に収まるよう詰め込んでいるの」

「……ん？さっきの話？」

「うん。私は水を外へ持って行って、また戻ってくるけど……メラメラは、どうするの？」

「中の方が、あったかいから、あたしは中で待ってよう」

「住み心地はよさそうよね。家賃は高そうだけど」

『……住んじゃダメ！ダメったらダメ！』

「……じゃあ、私は外へ行ってくるわね」

「うん。行ってらっしゃい」

メラをドラゴンの胃に残し、ジェリーは来た道を一人で戻り始めた。ただ、水を移す場所が思いつかないらしく、どこか候補はないかとジェリーがドラゴンへ質問している。

「水なのだけど……どこか溜めておける場所はない？」

『神殿の天井を開けるから、そこから外に捨てて！よいしょ！』

ドラゴンが体を動かすと、石が擦れる音が鳴り響いてきた。古い神殿だが稼働システムは劣化していないようで、神殿の全体を強く震わせながらも、ゆっくりと天井を開く。

ドラゴンいわく肺な場所、そこまでジェリーが戻り、低めの段差を降りる。その足が着くか着かないかというタイミングで、ドラゴンの体を強い浮遊感が襲った。とっさに何か解らない管へと手を掛け、ジェリーは体を飛ばされないよう、しがみついている。そんな中、メラとジェリーが状況を尋ねるより早く、ドラゴンが外で起こっている出来事の実況を始めた。

『水の軍団が攻めてきた！飛んで外に逃げる！』

「ええ？こんな神殿に、あと何を探しにきたっていうのさ」

『そんなの知らないわよ！』

「……えっ？ドラゴンさん、なにが知らないの？」

『何を探しに来たのか！』

「え？何を探しに来たのか解ったって？一体、なんなんだ？」

『解んないって言ってるでしょ！もう……わっ！敵も飛べる機械で追ってきた！』

メラの声がジェリーに聞こえず、ジェリーの話がメラに届いていない為、ドラゴンが逃げながら2人と会話してて器用である。その間にもジェリーはドラゴンの体内を戻り、喉の奥から外の様子をのぞく。

「本当に飛んでる……」

必死で逃げ飛んでいる訳で、敵の姿はドラゴンの喉からじゃ見えない。対抗手段を見つけようと、今度はメラがドラゴンへと提案している。

「炎の神殿に居付いてるドラゴンなんだから、ファイアーブレスとかで追い払えないの？」

『居付いてるって、私は秘密兵器を見張るっていう、大事な仕事があるんだからね！』

「ほら、ファイアーブレスー！ファイアーブレスー！」

『体が冷えちゃって、そんなの出ないわよ！息するなって言ったり、息しろっていったり、忙しいな！もうっ！』

「……え？ドラゴンさん、何が出ないの？」

『だから、ファイアーブレス！』

「だったら、私が攻撃してみるから、相手の方を向けるよう急旋回できる?」

『……怖いけど、やってみる!』

ジェリーから作戦をもちかけられ、ドラゴンが右に傾きながらUターン。ジェリーはドラゴンの喉奥で体を伏せ、敵が現れると思われる方向へ巨大注射器の先を定めている。

『あれが敵!』

「ハイドロレーザー!」

肉眼で認識できるか出来ないかという細さの水を発射し、水を振りまきながら飛行している乗り物の下側を狙撃。空いた穴から水をこぼし、その機体はクルクルと回りながら、ゆっくり地面へと墜ちてゆく。

『やったじゃない!でも、まだ何体もいるわ……わっ!あぶない!』

敵の攻撃を回避しようと、ドラゴンが羽を振り上げて上昇する。ジェリーはドラゴンの奥歯につかまっているが、奥にいるメラの身が自分よりも心配なようで、ドラゴンを経てメラの安否を確認していた。

「メラメラは無事なの?大丈夫?」

『どうなの?生きてる?』

「生きてるわよ!あたしも今から、口の方に行く!」

『まだ生きてて、口の方に来るって!』

「来ない方がいいわ……だって、メラメラ……軽いから飛ばされるかも」

『来ない方がいいって!い……痛い!』

理由を教える間もなく、敵の一斉射撃がドラゴンの背中に当たる。よろめきながらも飛行する体勢を立て直し、

再びジェリーに狙い撃ってもらおうよう頼んでいた。

『お願い！他のもやっつけて！』

「解ったわ。また、敵の方を向いてくれたら、攻撃してみる」

『オッケー！』

「うわぁー！なんだ……ひやぁー！」

ドラゴンは急上昇からスムーズに逆さ飛びへ移行し、アクロバット飛行で敵の背後へ回り込んだ。先程と同じくジェリーが狙い撃つも、敵は機体から発した水でボディを包み、ジェリーが撃った水をかきけしてしまう。これは火山で戦った敵が使用していたものと同じ技で、すぐにジェリーが名前をつけた。

「ダメ。相手のハイドロガードで、攻撃が防がれてしまうわ。もつと近づかないと」

『よーし！』

強く羽を風へと打ち付け、ドラゴンが敵の機体へ接近を試みる。すると、敵はコクピットの部分を回転させ、ドラゴンへ向けて主砲の照準を定めた。慌ててドラゴンが羽の向きを変え、敵の攻撃はドラゴンの腹をかすめた。

『危ないから近づけないかも！』

「メラメラを呼んでくれば、あの水を炎で焼いてくれるんじゃないかしら」

『呼んでみよう！胃にいる黄色い方、いる？』

「……」

『返事がない！』

返事がない。先程の大袈裟な悲鳴は、メラのものだったらしい。

「私、助けに行ってくるわ」

『ちょ……待って！私、一人じゃ心細い……』

「……」

ドラゴンの発言を受け、ジェリーは何かを指摘したくてたまらない様子だったが、ちよつとの沈黙をはさんで優しく説得した。

「少しだけいなくなるけど、一緒にいるから、大丈夫」

『う……うん』

ジェリーは不思議な言い訳をドラゴンへ渡し、歯やら歯茎やらに手をつきながら奥へ。しかし、敵の攻撃が激化しており、おびただしい水の弾を避けるドラゴンの動きも機敏。360度、不規則に角度が変わり、なかなかジェリーも先へ進めない。

「……あまり動かないで欲しいのだけど」

『無理を言わないで！ん……あれ？なんか……』

「どうしたの？」

何が起こったのか、ドラゴンの体内が真っ赤に輝き始める。ドラゴンの体が熱くなっており、奥からパチパチと炎の生まれる音がする。それを知り、ジェリーはドラゴンの喉元にある窪みへと避難した。

『よく解らないけど、力が出てきた！よし、ファイアーブレス！』

近くに浮いている雲の中でターンし、ドラゴンは炎の息と共に敵の一団へと体当たり。5体あるうちの2体をはねとばし、また距離をとる為に急降下する……と見せかけて、燃えている尻尾で別の2体を殴りつけた。攻撃

された機体は遠く、見えない場所へと消えていく。

『あと一体！大きいのを倒せば、おしまい！』

「相手を倒してから、安全にメラメラを助けに行った方が早そうね。すぐに倒せそうなの？」

『任せて！や……変形した！あれは手ごわそう……』

「私も口まで戻るから、それまで頑張つて」

このままでは奥へ進めないと判断し、ジェリーはドラゴンの口まで引き戻し始めた。何度もファイアーブレスがジェリーの横や上を通つていったが、なかなか苦戦している様子。その後、ジェリーがドラゴンの口から見たものといえば、今まさに正面衝突しようとしている敵の姿であつた。さすがに危険だと考えたのか、ジェリーは水で敵を撃ち、敵との接触を避けようとする。

「……ハイドロキヤノン！」

爆発力のある攻撃で敵の動きを変える事は出来たものの、敵の撃とうとしていた主砲が狙いをブレさせ、ドラゴンの脇腹へと砲撃。撃ち上げられる形でドラゴンは宙を浮き、背を下にして落下する。敵はロケットの如く撃ちあがり、ドラゴンへ体当たりをこころみる。

「……落ちて行くけど……どうしたの？」

「……」

擦れ違いざまに受けた攻撃で、ドラゴンが意識を失っている。ジェリーは緊急事態であると知り、ドラゴンの口へと入り込む風に吹かれながらも、周りを忙しく見回している。とにかく、敵の方を向く必要があるとみて、ジェリーはドラゴンの口先へと移動。その位置から水を放出し、ドラゴンの体を回転させようとする。

「ハイドロジェット！」

ゆつくりとドラゴンは回転し、2秒後にジェリーは高速で飛び上がる敵の姿を発見。それから3秒で危機を察知し、ぶつかる刹那に斬撃を發した。

「ハイドロカッター！」

なるべく細く、可能な限り細く噴き出した水を振り下ろす。巨大な水の刃が敵の中央から少し外れた場所を通り、敵の機体を二分。分かれた機体の右半分と左半分、それと2人の搭乗員が、勢いのままにドラゴンの後ろへ飛んで行き、パラシュートを広げて落ちていく。

まっさかさまにドラゴンは落下し、そのまま赤の水晶畑へ。地面へ着く間際、ジェリーが地面へと全力で水を發射し、地面へと当たる衝撃をやわらげた。

咲いていた赤水晶の破片が飛び散り、土煙が辺りを覆う。地響きと揺れが静まるまで待ち、ジェリーはメラを助ける為にドラゴンの奥へと走り出した。すると、ドラゴンが苦しそうに咳をし始め、二度目の咳でジェリーが、三度目の咳でメラが吐き出された。すぐさまジェリーはメラへと駆け寄り、メラの背中を支えて起こした。

「メラメラ……大丈夫？」

「うん……なんとか」

「どこにいたの？」

「さっき、肺つぽいところまでは戻ったんだけど、そこで大きく揺れて……あとは……よく憶えてない」

「む……小骨つぽいのが……がほっ！」

メラの武器がドラゴンの口から飛び出し、メラの足元を転がる。その燃料がゼロになっている事から、これが

全開で火を噴出させ、ドラゴンの体を温めていたと解った。

結局、メラは活躍が一つもなく、外で何が起こっていたのかも知らない様子。それを察して、ジェリーがドラゴンに問い掛けている。

「……あの人たち、どうして神殿を再び攻めてきたのかしら。なんとか撃退は出来たみたいだからよかったのだけだ」

「なんでだろう……もしかして、神殿の宝物をとりに来たのかも！」

「宝物？それは、なんなんだ？」

「行ってみよう！」

急いでいると言わんばかり、メラの疑問に答えぬままドラゴンは立ち上がった。それから、ぐぐつと力を溜める素振りを見せ、ドラゴンは体をまばゆく光らせた。メラとジェリーが目を細めながら見守っていると、光の中から羽とシッポのある、鱗のような服を着た幼い女の子が現れた。

「早く行こう！」

「……なんだこれ？小さいのが出てきたぞ」

「……誰？」

「私よ！ファイアドラゴンよ！あと、あなたには小さいって言われたくない」

メラからは『これ』と呼ばれ、ジェリーにも何者なのか尋ねられ、女の子は非常に遺憾な態度で地団太を踏んでいる。その姿に違和感を持ち、ジェリーが心配そうに声を掛けた。

「お腹が大きく膨らんでいるけど……苦しくないの？」

「水が入ってるの！ちよつとずつ出してくから、気にしないで！」

そんな事は問題ではないと、すぐに女の子は神殿の入口へとダッシュ。そこに水が溜まっている事を知ると、来て欲しそうな顔でジェリーを見つめていた。

「この水、排除して！おねがい、おねがい！」

「……解つた。やってみるわ」

「……人の姿で言われる方が、まだ違和感ないな」

メラはドラゴンの姿に慣れたようだが、ジェリーのテンションが微妙に低い。なぜかというと、彼女は変な生き物好きが好きなのである。あと、小さい子どもが苦手という事ではない。

神殿の入り口に溜まっている水をジェリーがハイドロバスターで吸いつつ、3人は階段を下っていく。すると、幾つもの部屋へ繋がる広い部屋に出るのだが、どの扉にもドラゴンは向かわず、部屋の隅にある石床の上でピョンピョンと飛び跳ねて楽しげである。

何が目的なのか問いかけようと近づくも、メラの踏んだタイルが重みで下がった為、それを発見したドラゴンが駆け寄ってきた。

「そこだ！そこが引つ込むから……えーと、ここの壁の絵を見ながら……」

壁の絵がヒントになつている風な発言をしながら、ドラゴンが次々と床を踏みつけている。10枚のタイルを引つこませると、部屋の隅にある壁が愉快な音楽を鳴らしながら開いた。どのような仕掛けだったのかは、ドラゴンが勝手に説明を始めてくれたので、それを聞いて欲しい。

「10個の床を順番に押さないと開かない、昔の人が作った高度なギミック！」

「仕掛けは別に凄くないけど、音楽が鳴る辺りにロストテクノロジーを感じるぞ」

「……ちよつと待つて。ここ、古代文明の遺跡だったの？」

「そうよ」

メラにすら凄くないと言われる仕掛けを作った古代文明、ここが、その遺跡であると、ジェリーの質問により発覚した。ドラゴンは開いた壁の奥へと進み、2人を奥の部屋へと案内する。奥の部屋は高い場所に大きなクリスタルが4つあり、ドラゴンはクリスタルを指さしながら、あれを攻撃して欲しいとメラとジェリーへ伝えていく。

「あれを全部、攻撃すると、次の部屋に行けるの！壊れない程度に攻撃して！」

「あー……あたしの武器、燃料が切れちゃってるから。ジェリー、任せた」

「うん。ハイドロアロー！」

遠くのものに当てるくらいは朝飯前なのか、ジェリーは一発たりとも外さずに鋭い水を当てていく。ダメージを受けたクリスタルは白く光り、全てが光り輝くと4つ合わせて回転を始めた。右にある柵が上がるように見せかけて、中央の変な銅像が横に動く。その下に階段があり、3人で更に奥へと進む。

長い階段を降りながらも、メラがドラゴンに宝物の事を尋ねている。この道も少量の水が入り込んでいて、ジェリーは水の片付けに苦労している。

「そういや、宝物ってなんなんだ？金目の物？」

「私も見た事ないの。この先の扉の開き方は教えてもらってないし、ただ守って欲しいって頼まれてただけ」

「これだけ面倒な仕掛けを突破しないといけないなら、よっぽどの謎解き好きが来ない限りは取られる心配な

いね」

「そう。だから私、長い間、眠ってたの！起きてたら、お腹が空くでしょ？」

「それは、守ってたって言わないだろ……」

「階段が終わったわ。そろそろ最深部かしら……」

ジェリーから先に階段を降り終え、暗くて奥の見えない通路に進む。ここからはメラが先導するようで、武器を振って、燃料の粉を下へと集め、弱々しい灯りを掲げながら進む。

「どこまで続いているんだか……あれ？これ、扉じゃないの？」

「……ほんとだ！」

「もしかして、開いてるんじゃないの？これ」

「……ほんとだ！」

メラが細い通路の脇にある鉄の板を照らしていて、それを見てドラゴンがビックリ仰天している。怖い程に自然と扉が開いていたもので、そういうアートじゃないかと3人が疑いの目を向けているのだが、どう見ても開きっぱなしの扉である。

「大変！宝物が取られちゃう！」

と言いながら、ドラゴンが部屋の中へ。それに続いてメラとジェリーも入室する。部屋の壁は真っ白く塗られており、今まで通ってきた通路とは違い未来的である。置いてある物も少なく、部屋の中央に割れた大きなガラスケースが置かれているのみ。もちろん、中身はありません。

「この割れたガラスケースが宝物かな？」

「違うに決まってるでしょ！きつと水を使う人達に取られちゃったのよ！取り戻さなきゃ！」

一人でドラゴンが張り切っていて、部屋の扉がある場所の前で出発した気に足踏みしている。ただ、何をすればいいのか、その一点をジェリーは知りたい。

「取り戻すって……何を？」

「宝物よ！」

「……宝物って何？」

「知らないって言ってるでしょ！」

「……どこに取り返しに行くの？」

「解んない！」

「そう……じゃあ、落ち着きましょう」

「解った！落ち着く！」

ちゃんと座らせて、ドラゴンへの事情聴取を始める。まず、知るべき事は一つ。それをジェリーは真っ先に問いたです。

「宝物は……なくなると困る物なの？」

「この星に、もしもの事があった時の最終兵器って、昔の人は言ってたけど」

「……最終破壊兵器？」

「もしもの時って、絶対に今だね。それか、星が爆発でもしそうになった時かな」

「きつと、それを取り戻せば、悪い人たちを追い払えるのよ！」

よく解らない物事をメラが都合のいい方向に解釈し、それにドラゴンが便乗してきた。ジェリーは釈然とした表情のまま、思いつく限りの最悪な予想を語り出した。

「最終破壊兵器を奪われたのだから、それを使われてしまったら一巻の終わりなんじゃないの？最終破壊兵器よ？」

「……はっ！そうかも！」

今更、ドラゴンが危機的状况に気づく。ただ、最終破壊兵器だなんてドラゴンは言っていない。そうしたら、またメラがポジティブシンキングを発揮してきた。

「この星の最終破壊兵器なんだから、使い方が解る訳ないよ。だから、どうしようもなくて返しに来てくれるよ。そうに決まってる」

「……さすがに、それはない」

一言で否定しつつも、ジェリーは自分たちに出来る限りの事を提案する。

「……私たちでは対応する手段が見つからないわ。メラメラの、お父さんに相談をしてみましよう」

「……これの父親でしょ？頼りになるの？」

「……趣味がクイズやパズルの人だから、いい考えをくれると思うわ」

「ふん。話してみる価値はありそうね」

「あたしは、もう帰ればなんでもいいや」

すでに疲れ果ててしまったようで、メラは火山へ帰る事に専念している。この後、ドラゴンで飛行して帰れると知るまで、メラの心は無気力なままであった。

「おーっ！速い！速いぞー！今まで歩いてたのがバカらしくなるな！」

「すぐに到着しそうだけど……このまま火山へ行ったら、みんな大騒ぎになるかも……」

「それもそうだ。おーい！火山から少し離れた場所に降りて欲しい気持ちだぞー！」

「あの辺でいいかな？そろそろ降りるから、齒につかまって！」

口の隙間から空だけを見ながら、メラが着陸場所をドラゴンへオーダーしている。ドラゴンが着陸する準備に入ると、メラとジェリーは口の中にある謎の触手を掴んだ。

「わ……くすぐりたい！どこ触てるのよ！ん……見えない！」

「自分の口の中を見ようとしないでいいから、前を見ながら飛んでほしいのだけど……」

「解った！ああ……ぶつかる！」

ジェリーに注意されるも時すでに遅し、ドラゴンは飛行状態のまま火山へと頭突きしている。反動でドラゴンは坂を転がり落ち、メラとジェリーも口の中から投げ出された。すぐさまジェリーが水を使って、空中に飛んでメラをキャッチする。ジェリーの膝に乗せられながら、メラが恥ずかしそうに文句を言っている。

「あ……ありがとう。でも、燃料があったら、自分で対処できたからね」

「うん……ところで、ここはどこ？」

空中から山肌を見つめるも、そこはメラもジェリーも知らない場所である。持てる力を使い果たしてしまい、少女の姿になったドラゴンが、飛んでいる2人へと手を振っている。地上へ降りると、メラは吐き捨てるように言う。

「どこだ、ここは……」

「ここらへんで、一番の大きな火山でしょ？ここじゃないの？」

「ううん。知らない場所ね……」

「悠長な事を言っていないで、早く飛ぶ準備を始めなさいよ」

「え〜！無理を言わないでよ！寝てた黄色コートと違って、私は水の敵と戦ったのよ！もう体力の限界！」

「寝てたんじゃなくて、意識不明になってただけだ！」

戦闘の最中で戦闘不能に陥った2人が、五十歩百歩な発言をしている。ともかく、こんな事をしていても埒が明かない。次なる行動のヒントを得ようと、ジェリーはドラゴンに近辺の情報を尋ねている。

「この辺りには来た事がないのだけど、近くに町などはあるの？」

「そうねえ。ここに来る途中、人のいそうな集落を見たの。とりあえず、そこに行ってみる？」

「そうしましょう……本当に飛べないの？」

「お腹すいて、もうへトへト。大きい姿だと疲れるのよ。お腹も重いし」

「こつちが元の姿だったのか。じゃあ、あつちはなんなのさ」

「どつちが元とかは解んないけど、元気な時は大きくなるわよ」

少し気を許すと、すぐに話を脱線させるメラ。ただ、ドラゴンが街のありそうな方へ歩き出した為、メラとジェリーも移動を始めた。

とどこどこに巨大水晶が露出している下り坂をずつと降りて行き、山を降りてからは砂の溜まっている道を進む。徐々に砂溜まりが薄れてくると、湖のような場所が目の前に現れた。もちろん、それは水ではなく、透明な石で出来た地面だ。

靴底が地面の石とカチ合い、パリパリと音が鳴っている。ドラゴンは他の2人と歩幅が合わないようで、なにも言わずジェリーを乗り物にしていた。水風船のような腹部が後頭部に当たっていて、ジェリーは妙な顔をしている。地面の石が格別の透過性を見せており、メラは映り込んだ自分の顔を自己評価している。

「綺麗な地面だなあ。あたしの顔が輝いて眩しく見えるぞ」

「ほんと、すごく綺麗な地面ね」

「あたしの顔は？」

「すごく綺麗な地面……」

メラを視界に入れないよう、ジェリーが上向きで地面を褒めている。ただ、あまりにも広々としている地形に気づくと、辺りを見回しながらメラへと問い掛けた。

「ここ、隠れる場所がないのだけど……のんびりと歩いてて大丈夫？」

「こんなベストタイミングで、敵とか来ないよ……おや？」

言ったそばから、空高く水の弾ける音がする。その後、やっぱり敵の乗り物が上空に現れた。

「しまった！ジェリーのコートに隠れるんだ！」

メラの発案を受け、ドラゴンもメラと一緒にジェリーのコートへと隠れる。青いコートで地面の色に同化しようとする作戦。

「……行ったか？」

音が通り過ぎ、コートの中に身をひそめていたメラが出てくる。だが、安堵の呼吸も済まぬ内に敵が戻ってきた。3機いた中の1機が再来し、他の2機は目的地へと急いだ模様。一機だけ、怪しかったので戻ってきた様子。

「まずい！走れ！」

現状、燃料切れの武器を持った役立たずな人と、力を使い果たした役立たずなドラゴンが一名ずつ。2人を守りながら戦うのは分が悪いと判断し、すぐさまメラが逃走を促す。敵の機体は戦闘機のような鋭い形をしており、着陸なのか墜落なのか解りにくい勢いで落ちてくる。

正しい着陸方法なのか、敵の戦闘機が先端を地面に突き刺している。花が開くように戦闘機は開き、中から戦闘服に身を包んだ男の人が3人も降りてきた。ジェリーの背中であそびをしているドラゴンが後方確認し、敵が追ってきていると伝えている。

「追ってきてる！頑張つて逃げて！」

「すでに死ぬ気で逃げてるわよ！」

「撃ってきた！ジャンプして！」

「うるさ……うわあ！」

素直にジャンプしたジェリーの足元を水の弾が通り、なにか言い返そうとしていたメラの尻にはバシッという音が撃ちこまれた。ヘッドスライディングよろしく、メラは先程まで眩しく輝いていた顔を地面に打ち付けている。

「……ああ、メラメラ！」

転んだメラを助けようと、一斉砲撃に向かってジェリーが引き戻している。しかし、ジェリーの踏み出した一歩が地面を叩くと、地面に入っていたヒビが広がり、出現した大きな亀裂へと敵味方の一同は落下した。

曲がりくねった穴を転がり、深く落ちて行く。穴が分岐していたようで、ジェリーが目を開けた時、近くには

ドラゴンしか見当たらなかった。

「……あら？メラメラは？」

「途中でいなくなつたみたい。頭いたた……」

「そう……早く合流しないと」

ジェリーが立ち上がると、自分と似た人物が周りに大勢いるのを知った。それは薄明かりで壁に反射して映つた自分の姿なのだが、あまりにも鮮明に写り込んでいて、頭で理解するに時間が掛かった。

まず、上を見つめてみる。手を掛ける場所すらなく、登る事は叶わないだろう。次に横道を探してみるが、壁は鏡の世界のように目を惑わす。他の脱出方法も見つからず、ジェリーは壁に手をついたまま当てもなく歩き出した。その後ろをドラゴンが、とことこ歩いてくる。

敵の動向が読めない以上、大声を出して呼ぶ事もままならない。道は幾つにも分かれている。なにか進むヒントがほしいと、ドラゴンが壁に額をつけて、奥に何かあるのか探ろうとしている。

「ドラゴンさん。何か見えるの？」

「んん……このドラゴンアイをもつてしても、何も見えない……」

「そう……とにかく、足音が聞こえないか気をつけて歩いてみましょう」

「そうしよう」

そうして、敵の足音が聞こえないか歩いていたら、曲がり角の先に誰か倒れているのをジェリーが見つけた。

「……誰かいるわ」

「敵の人だ。倒れてる……死んでるのかな？」



懇願している男の人の頭部へ向け、メラが砲火器を振り下ろしている。彼女は一発で敵を気絶させると、砲火器を腰へと下げ直した。コートを脱いでいたせいで、ドラゴンはメラが誰なのか解らないようだ。

「あ……あれが魔物！？わあ、魔物こわい……」

「メラメラ……無事で良かった」

「ジェリー、来てたの？ちよつと待って」

そつなく敵の手をワイヤーで封じ、左腕につけて盾代わりとしていたバッグを取ると、メラは道脇に置いていくコートを着直した。ジェリーの元へと走り着き、何か聞きた気なジェリーの質問を待つ。

「……メラメラ、魔物みたいな生物は見えない？」

「いや？いたとしても、これだけ動きまわって出てこないなら、きつと襲ってこないよ」

「それもそうね……でも、どうしてコートを脱いでいたの？」

「黄色いコートは色が目立つからね。あたし、こういう狭い所で敵をしとめる戦いは教え込まれてるんだ。手ごろなナイフも手に入ったし、そんなに難しくなかったよ」

割れた水晶の破片を手元でクルクル回しながら、メラが敵を全滅させたと報告している。地の利を活かした戦いならば、お手のもの。姿の映る壁も使いようで、自分の居場所を隠して攪乱させるのに便利である。ただ、頑張った理由は意外と命懸けじゃないようである。

「……そろそろ良い所を見せとかないと、そいつに役立たずだと思われそうで」

「そんな事はないけど……」

「おまけの人かと思ってたけど、案外やるじゃない」

「そうぞ。少しは尊敬するように」

「解った！今度から、危なそうな事があつたら、まつさきに頼むようにする！」

「……」

ドラゴンからの評価は相変わらずで、にくたらしさをメラは目で伝えている。すでに和やかなムードだが、まだ地下からの脱出というミッションが残っている。どこかで出口を見なかったか、ジェリーがメラに聞いている。

「とにかく、ここから出ないと。メラメラ……出られそうな場所は見なかった？」

「そういや、あつちに怪しいものを見つけたんだ。でも、出口とは関係なさそうだから、出る方法を早く探しに行こう。お腹もすいたし」

「ここが狭いのならば、水をいっぱいに溜めれば浮いて出られるかしら」

「広くはないみたいだけど、高さがあるんだ。ドラゴンの胃から取った水じゃ心もとない」

「まだ水が、お腹に入ってるみたいだけど……それも、使えないかしら？」

「……それより、あつちで怪しいものを見たんでしょ？気にならないの？」

「そんな大きな、お腹で言われても困るわ……」

「お腹はいいの！はずかしいから、何も言わないで！」

お腹いっぱいのお腹は怪しい物を見たがっており、空腹のメラは早く人里へ逃げ込みたい。ただ、折れた方が早い事もあると知っているようで、メラは子どもをなだめる口調でドラゴンに伝えた。

「ちよつとだけなら、見てきてもいいよ。早く帰ってきなさいよね。ほら、あつち」

「解った！ちよつと見てくる！」

早く帰ってこようとして、重そうな腹を抱えてドラゴンは走っていく。しかし、おぼつかない足取りに見えて仕方がなく、結局はジェリーが抱えていく事となった。すると、自動的にメラもついてくる訳で、鏡映しの迷路を3人で進んでいく。その奥には天井の高い場所があり、光沢のある透明な壁を見ると、中で何か小さなものが光っていると解る。

「なにかしら……」

「……これ、取って！おねがい！」

「取って……どうやって取るのよ」

「おねがい、おねがい！」

メラは取り方が解らず、ジェリーは取って欲しい物の正体すら解っていない。ドラゴンの、おねがいも手慣れたてきたようで、今回もジェリーが何か良い考えをひねり出してくれるようだ。

「……おそらく、水晶に水の軍団の人達が乗り物を突き刺したから、上で地面がヒビ割れたんだと思う。だから、同じように鋭利な物を突き刺せば、壊せるんじゃないかしら」

「鋭利な物？」

「これとか……」

鋭利な物とメラに聞かれ、ジェリーは背負っている注射器の先をメラへと見せた。火山を出る時、火薬の爆発で杭を打ち込むボムハンマーを持ってきていたのだが、いつの間にか注射器の中に吸収されていて、何か新システムの材料とされていたのだ。

「勝手に組み込んで……」

「爆発で水が出るようにプログラムするから、少し待って……」

注射器の脇にあるスイッチを親指でカチカチと連打し、数秒してからジェリーはメラとドラゴンに下がるよう言う。

「危険だから、下がっていて……ハイドロニードル！」

まずは火薬の爆発する音が籠って聞こえ、追って爆発音と共に細い水が壁を突き刺した。水の粉が散った後、壁に小さな穴が空いた事を確認。そこへ目がけて、ジェリーは少しだけ離れてから再び攻撃した。

「ハイドロエッジ！」

穴へと水が突きささり、拳を広げるように開く。そこを中心にしてヒビは瞬く間に広がり、攻撃された場所の周辺が風穴となった。そこから、不思議な輝きを放つ赤い石が転がり落ちる。それをメラが覗き込み、うごめく模様を見つめている。

「すごいなあ。炎が封じられてるみたいだ」

「これをどうするの……欲しかったの？」

「……」

ドラゴンは石を両手で持ち上げると、しばしは不思議そうに見つめていたのだが、何を思ったのか、それを口に放り込んだ。しかも顔で力強く噛みつけており、ゴリゴリと音を立てて。自分より先に食べ物へありついているドラゴンが憎たらしいようで、メラはドラゴンを見下ろしながら投げ捨てるように言った。

「お腹は、水でいっぱいだろう？ 食い意地の張ったドラゴンだなあ……おや？」

「ん〜……!!」

石の中身が出てきたのか、ドラゴンは辛い物を食べてしまった甘党みたいな表情をしながら、シツポを土に突き刺している。うろたえたようにメラは後ずさっているが、ジェリーはドラゴンの背を撫でつけている。すると、ジェリーが何かに気づいたようで、メラにも背を触るよう伝えている。

「温かい……メラメラ、触ってみて」

「やだよ……なんか、体から煙でてるし」

「温かいのに……」

ジェリーが暖まっているのは別として、ドラゴンの体からは白い湯気が立ち上っている。お腹に入っていた水が熱によって、一気にドラゴンの中から出ていってしまう。お腹が軽そうになると、ドラゴンは振り返って2人に元気を見せつけている。

「元気になった！飛べるかも！」

「ええ？こんな狭い場所です？」

「いくぞー！」

メラの当たり前な疑問をはねのけ、ドラゴンはメラとジェリーの体に抱きつく。そのまま体を光り輝かせると、竜の姿へ変身しながら地面を突き破り、一気に大空まで飛び上がった。口の中に入れられたメラとジェリーは知る由もないが、ドラゴンの体は大きさを増している。先程の燃える赤い石が影響を与えているのか、それはドラゴンすら知る由もない。

「今度は間違えないで飛んでよねー！」

「大きい火山なんて、そんなに何個もないから間違えないわよ！もうすぐ到着よ！」

あつと言う間というか、メラが『今度は間違えないで飛んでよねー』と言う間に火山が近づき、徐々にドラゴンがスピードを落としていく。安全に降りられる場所を探し、ドラゴンは火山から少し離れた場所へと着地した。ドラゴンの口から出て外の景色を見ると、そこは一面に灰が溜まっている場所で、どこへ着いたのかメラも解らない表情。しかし、うっすら遠くに見える火山の形を見て、なんとか居場所が把握できた様子だ。

「ああ……火山の裏か。ほんとに突拍子もない方から戻ってきたんだなあ」

「じゃあ……火山の向こう側がフレイムタウンなのかしら？私は火山の後ろまで来た事がないから」

「そうそう。ただ、この灰の降り方からすると……今さっき火山が噴火したばかりなんだと思う。何かあつたのかもしれない」

「噴火？早く行ってみよう！」

人間の姿になったドラゴンがメラとジェリーの会話を聞き、嬉しそうに足踏みをしている。なにはともあれ、知っている場所まで無事に戻ってこられて、ジェリーは顔色こそ変えないものの気分が良さそう。逆にメラは疲れが押し寄せたらしく、2人の背中を見ながら弱った姿勢で歩み出した。

メラの言う通りに歩いて行くと、やけに錆びついた大きな扉の元へ辿りつく。しかし、それには手を掛ける場所もなければ、動かせそうな蝶つがいもない。岩場にハメ込まれた、ただの鉄の板だ。開け方を知りたい顔で、ドラゴンがメラの方を見ている。

「正しいリズムでノックするんだよ。コンコンコンコン、コンってね」

「やってみよう！」

「どうぞどうぞ」

ドラゴンにノックを任せてみるが、言われた通りに叩いても扉は揺れもしない。すると、今度はメラが不思議そうに扉の前へ。細めた目で扉を上から下まで眺めた後、ドラゴンと同じテンポで扉を叩いた。今度は上手く通じたようで、重い挙動ながら扉が僅かに横へと開き、隙間から輝きのない目が覗いた。

「……お前かよ。その子は誰だ？」

「出先で拾いました。敵じゃありませんよ」

「……ほら、通れ」

臆面ない様子でメラが問いに応じると、細身な男の人が扉の隙間を広げた。その顔が目を張って動かししており、ジェリーとドラゴンが足を揃えて怯えている。2人の様子に気づき、メラが男の人に質問を投げている。

「ガラムさん……どうして、先程のノックには応じなかったんですか？」

「……力加減が街のやつとは思えない」

「寝不足ですか？」

「……そろそろ、番を交代する」

寝不足で機嫌が悪そうなのだと思われ、ジェリーとドラゴンは少々ながらも恐れが薄れたのだろう。男の人から遠い場所を通ろうと心がけながら、2人も火山の中と進んで入った。暗く狭い道を行き、男の人が見えなくなつた時にジェリーは小声でメラへと話しかけた。

「……知り合いなの？」

「防衛隊の人だよ。支部隊長とかじゃないんだけど、隊長勢よりも戦ったら強いと思う」

「え？そんなに強い人なら、隊長になつた方がいいんじゃない？」

メラの説明に違和感を覚え、次にドラゴンが声をはさんできた。そこは曰くつきのようで、そうなった根本から解説を始める。

「昔、無敵で無敗だったフレイムタウン防衛隊が、一度だけ他の国に落とされた事があるんだ。その時の作戦が、火山の裏側から穴を掘って、見えないところから奇襲を掛ける方法だったから、それ以来、手だれの隊員を火山の裏の監視員に配置してるんだって……バーク第三支部隊長が言ってた」

「そっか。だったら、黄色コートや、青コートよりも強いのか？」

「あたし達と比べてどうするんだ……ジェリーは戦闘員ですらないし」

「でも、黄色コートより青コートの方が強くない？」

「あれだよ。あの人も、たまに模擬戦に来てくれるんだけどさ。あの人とエリザさんは相手にしたくないんだよ……その時だけは本当に死にそうになるし。さっきも、変な武器の持ち方してたし……」

ドラゴンの生意気な発言はスルー。ジェリーも不審を込めた声で、普通じゃない武器の持ち方について尋ねている。

「……武器？私には見えなかったわ」

「じゃあ、怯えてる人達に対する気づかいなんだろう……後ろで逆手に持ってた」

ジェリーは武器を持っていた事実気づき、メラも何気ない優しさを垣間みた。道を先へ進み続けると、ハシゴがある小部屋へと到着し、そこを上がった場所には一本の道が通っている。ここはメラとジェリーが睡眠をとった資材置き場へと繋がっており、エレベーターがある場所まで続く。そこへ向かう途中で、工房長のジガーと遭遇した。

「あれ？ジガーさん、前にも、ここで会いましたよね？」

「おめえら、帰ったが。上で、じつとしてみんのも性にあわん。なにが、つぐれるもんねえがと、ひつがきまわしとるどいだ」

「なるほど。何かありました？」

「ばぐだんでよけりゃあ、そこの持つてげ」

前にメラとジェリーが火山へと避難してきた時も、ここでジガーと会った。何か出来る事がないかと探しているのだが、今は爆弾を作る事しか出来そうにない。ジェリーは爆弾が欲しい様子で、それを見たジガーも、ぶつきらぼうに勧めている。

「ログをとつで、スイツジを3がい押さんと、ばぐはつはせん。もつでげ」

「……うん」

3個だけ爆弾をもらい、ジェリーは申し訳なさそうながらも嬉しそう。『また変な事に使おうとしてる……』とメラは呆れているが、その横でドラゴンも爆弾を一つ、くすねていた。そのドラゴンの無邪気な顔からして、使道は特にない。

ジガーは忙しそうであった為、詳しい火山の現状は上で隊の者に聞くとするようだ。珍しく不具合なく動いているエレベータに乗り、3人で火山の中腹部へと上がる。司令官を探するのは骨が折れると考えたのか、どんと構えて奥にいるはずの総隊長を探す。

会議をしていた部屋へ入ると、また意味もなく会議をしている最中で、扉を開いた瞬間に視線が集中してしまう。すると、メラの後ろに隠れてしまう人がいる訳で、ジェリーの後ろにも隠れてしまうドラゴンがいる訳で、

メラは面倒事が増えただけである。

せつかく防衛隊が会議のような事をしようとしているのに、司令官のみが不在である。それを知り、何も言わずメラは扉を閉じた。

「お父さんがいない。入るのはやめよう」

「そうね」

一人いないだけで話が、ややこしくなってしまう事をメラとジェリーは知っているのだ。そそくさと大部屋から離れ、今度は司令官を探す3人。メラの母親がいるであろう厨房へ足を向けてみるのだが、その途中で会った老隊員から父親の居場所を知らされた。

「……メラ隊員、帰っていたか。司令官ならば、火山上部の展望室だ」

「あれ……爺さん。会議に参加してないんだ？」

「会議では何も決まらなないと知って以来、こここのところは参加していない」

「ですわね」

その結論に至るまで長くかかったと思うべきか、途中で気づいた事を賢明だと思うべきか、それを悩みながらもメラはジェリーとドラゴンを展望台のある場所へ連れて行く。火山の壁際にラセン状の道があり、いくらか上がっていくと洞窟のような通路に変わる。足が疲れたなあ……そんな事をみんなが思い始めた頃、ようやく展望室のある場所まで行きついた。

「お父さん、会議にも出ないで何をしてるんだろう。お腹でも痛いんだろうか」

「きつとメラメラが心配で、何も手につかないのよ」

「んな訳ないよ……」

メラが扉に手をかけると、中から司令官である父親の声が届き、メラは握ったドアノブを思わず手放した。

「では、メラとジェリーの捜索へ向かう。君は、2人の帰りに備え、寝床などを整えてあげてほしい」

「あなたがいなくなつて、防衛隊は大丈夫なの？」

「おそらく、緊急事態には迅速に対応できないだろう。しかし、2人を出勤させてしまったのは私だ。総隊長にも了承は得ている。君こそ、一人で平気なのか？」

「みんながいるもの。私の事は気にせず……行つてらっしゃい」

「行つてくる」

別れの会話を終え、内側から扉が開く、現れた司令官……と思われる人物は上から下まで防水コートを着込み、顔はマスクで覆われている。司令官は部屋を出てから、すぐ下にいるメラの姿を見て2歩だけ退いた。

「……おっと。か……帰還していたのか」

「……ただいま」

メラは驚いた表情で父親を見つめているのだが、マスクを外した父親の方は稀にみる穏やかな笑顔である。ただ、着込み過ぎて抱きしめても体温を確認できない為、その役目は後ろにいる母親へと託した。

「メラ、ジェリー……よかった。無事に帰つてきてくれたのね」

「……おや、そちらは？」

母親はドラゴンを近所の少女くらいに思ったようだが、見慣れない顔であると司令官は気づく。紹介しようにも話が長くなると予想し、メラはジェリーとドラゴンを誘って、父親と母親のいた展望室へと入った。

さて、仕切り直してメラが声を出そうとすると、勝手にドラゴンが自己紹介を始めたから、メラは父親の理解に全てを任せる事とした。

「あなたが黄色コートの、お父さん？私、ドラゴン！」

「なるほど。どこから？」

「炎の神殿から来たの！宝物が奪われちゃったんだけど、水を使う軍団が、どこにいるか解る？」

「それは解りかねるが……先程より、火山が再び活性化を始めた。空にある白い煙が消失した事もあり、防衛隊も探索に出られるだろう」

「ありがとう！頑張つてね！」

「まだ、感謝される事は何もししていない。ところで、メラとジェリーに聞きたい。炎の神殿の様子は？」

「あたしたちが行った時は水浸しで……いや、まるで水没してて、ジェリーが少し片付けてくれたんだけど、まだまだ水は残ってた」

「すると、炎の神殿の水が減少した事で、地熱が温度を上げたのだろうか……いや、考えている暇はないな。水を排除する道具が調達でき次第、炎の神殿へ隊を派遣する」

「まだ聞きたい事があるの！赤い石は、この辺りにない？」

「赤い石？」

大雑把な質問をドラゴンから投げかけられ、司令官が顎に手を当てて悩み始めた。すぐさま、ここに来る前の事をメラが語り出す。

「ドラゴンに赤くて炎みたいな石を食べさせたら、急に元気になったんだ。ここまで帰ってくるのにもドラゴ

ンに乗ったから、あると助けてもらえるんじゃないかな？」

「この子に乗ってきたのか？」

「こんなんだけど、元気になると大きくなるんだよ」

「なるほど」

絶対、このまま巨大化すると思ってる……そんな顔をしながらも、メラは言いたい事を説明し終えた。わずかに沈黙が挟まると、何か伝えたくて仕方なさそうなジェリーが司令官へと話しかけた。

「そのコートだと……水に耐えられないかもしれないわ」

「ジェリーのコートを模して作ったのだが、欠陥があるだろうか？」

「うん……ここでは素材が足りないと思うけど、クロルジャツペルがあれば」

「それも探さねばな。よし、これからの活動内容を隊員たちに報告してこよう。君たちは休みなさい」

火山へ戻ってきた3人とメラの母親を展望室に残し、司令官は厚手のコートを脱ぎながら退室。司令官がいなくなるのを待って、メラの母親が3人を休憩室へ案内しようと立ち上がった。

「休める場所に案内するわ。あの人も、あなたたちが帰ってきてくれて安心しただろうし、気兼ねなく休みな  
わい」

「あの人は心配してたんじゃないわ、出勤しなくて済んだから安心したに違いない」

「それもありそうね」

妻と娘からの信用は薄い、心の内ではメラとジェリーの事を思っただけで気が気じゃなかった父親である。その父親は言い忘れた事があったらしく、ドアの隙間から顔だけ出して、メラの母親へ願い出る。

「……悪いが、エリザ君とセグ隊員を見かけたら、炎の神殿へ向かう作戦は中止になったと伝えてほしい」

「了解」

「では、失礼」

「お父さん……豪傑と豪傑で両脇を固めて出動するつもりだったのか」

あまりにも強固なチーム編成を聞き、メラが呆れている。ただ、ジェリーはセグ隊員について知識がなく、誰なのか知れたそうにメラを見ている。

「……ああ、セグさんはガルムさんと同じで、火山の裏を警備してる人なんだよ……って事は、セグさんが交代に来ないって、ガルムさんに言い忘れてるんじゃないかな」

「あらら……お父さんも、あわててたのね。あとで、お母さんが教えに行くわ」

「休憩室の場所だけ教えてくれれば、あたしただけで行くよ。女の人達が集まっている場所の近くだよね？」

「場所はフロアー9の南にある採掘道具の置き場なのだけど、付近に隊員さんたちが小部屋を臨時で作ってくれているの。そこが、いくつか開いているはずだから、誰かに言っただけでも貸してもらいなさい」

「うん」

展望台から出て坂を降りた場所で母親と別れ、メラとジェリーとドラゴンはフロアー9方面を目指す。すると、今度は防衛隊のエリザ隊員が駆けてきた。早速、メラは自分たちが帰ってきた事を告げる。

「あつ、エリザさん。ただいま帰還しました。炎の神殿へ向かう任務も、一旦は中止となったみたいです」

「ああ、無事で良かった……非戦闘員のジェリーさんと共に出たので、敵と遭遇でもしたらと心配で」

「黄色コートより青コートの方が戦ってた気がするけど……」

「……そちらは？」

ジェリーの後ろから声が聞こえ、エリザがドラゴンを見降ろしている。ガルムに比べればエリザは恐ろしく見えないようで、ジェリーよりも堂々としてドラゴンは自己紹介を始める。

「私、ドラゴン！炎の神殿から来たの！」

「変わった名前ですね。敵でないのですしたら、歓迎しますが……」

「敵じゃないよ！ほら、丸ごしのドラゴンだよ！」

自然な動きでエリザが砲火器に手を掛けたせいで、ドラゴンは両手を胸の前で降りながら丸腰アピールをしている。エリザは鞆の位置をわずかに直し、腕組みながらに再びドラゴンを見つめている。どの角度から覗いても幼い女の子にしか見えず、不満げに口をとがらせながらも体勢を戻した。

「とにかく、2人ともケガなく帰ってきてくれて何よりです。おや？メラ隊員の武器は燃料が切れていますね」

「あー……敵とは戦わなかったんですけど、ドラゴンが寒そうだったから使ったんです」

「なるほど。先程、ドラゴンさんは、ジェリーの方が戦っていたと言っていました」

「ジェリーは水に詳しいので、道をふさいでる水との戦いですよ……手ごわかったです」

「それならば、よいのですが……」

戦闘に乗り出した事が知られると、またエリザから怒られる。そう考えたメラはドラゴンの頭を左手で押さえこみながら、必死で苦しい言い訳をしている。ただ、無事に帰ってきただけでも褒められる行いであり、エリザとしても疲れている2人を責めたくはないらしい。言いたい事こそありそうだが、甘めの対応で逃がしてくれた。

「あなたたちは、どこへ向かう途中なのですか？」

「フロアー9の方に休憩室があるって聞いたので、そこで少し休もうと思ってます。お父さんが次の行動計画を立ててくれるみたいですし、それまでは何をしたらいいのかも思いつきません」

「解りました。私も司令官から話をうかがっておきます。足止めして、すみませんでした」

「いえ、なんか……ありがとうございます。お父さん、下に行きましたよ」

「そうですか。それでは二人とも、お疲れさまでした。また後で」

エリザは一つ頭を下げてから、メラの指さした方へと走っていく。やや緊張していたメラが一息ついて後ろで、何も話していないジェリーが胸の辺りをさすっている。やはり、ジェリーはメラとメラの家族以外の人が怖い。その割にドラゴンは平気なのだが、それはドラゴンの大きな姿が好みだったからである。

「ちよつと緊張したなあ……今後、ドラゴンには無駄口させないようにしよう」

「私、悪くないもん！ほんとの事を言っただけだもん！」

「本当の事でも、言わない方がいい事があるんです」

「ぬぬ、人間って汚い……！」

「はいはい。さつさと休憩所に行こう行こう」

ドラゴンが人間の……メラの汚さを垣間見ているが、それを受け流してメラは再び休憩所のある場所を探し始めた。ドラゴンは疲労がたまったらしく、またジェリーの肩に登っている。懐く相手を完全に決めたようだ。

言われた通りフロアー9の南側へ行きつくと、その壁には薄そうな板で出来た扉が並んでおり、中に入っていく人や、中から出てくる人が多く見られる。扉の前をふらふらしている隊員がおり、メラは部屋を借りられないか質問している。

「この部屋って、どれか空いてますか？」

「おかえり。君たち、帰ってきてたんだ。えつとね……ちよつと待つて。105……いや、200……ああ、空いてます。空いてるといふか、214番の部屋に『外出組用』って書いてあるから、メラたちの部屋だと思う。鍵は……これね」

「へえ、ありがとうございます！」

女性の隊員は壁に立てかけてある鉄板の文字を読みながら、空室となつてゐる場所を特定している。214号室が空いていると解り、隊員は無骨な鍵をメラへと手渡した。扉に書かれた文字を見て、3人は部屋を探している。

「なあ、私のボムハンマーないんだけど、見なかった？」

「さあ？」

近くを通り過ぎた隊員がボムハンマーを探しており、その会話に驚いたジェリーが注射器を後ろに隠している。すでに拾つたボムハンマーは注射器に吸収されていて、原形を留めていない。

「ここだ。開くかな？」

212……213……214号室を発見。メラは手に持っていた鍵を扉の穴へと捻じ込み、扉を引き倒さんばかりの力で鍵を回している。ただ、なかなか鍵は開いてくれない。やきもきして、ドラゴンがメラを急かしている。

「もう！早く開けてよね！」

「手ごたえが全くない。鍵が壊れてるのかあ？」

「そういう時って……すでに開いてたりするよね」

「……だね」

ジェリーの発想に便乗して、メラはノブを回してみる。やはり開いた。

「やっと休める……と、ベッドが2つしかない。ドラゴンはジェリーと寝てね」

「えー！私も自分のベッド欲しい……」

「しないなあ。それじゃあ、あたしがジェリーと寝るから、ドラゴンは一人で寝なさい。ジェリー、一緒に寝よう」

「ん……そうね」

「え？そ……そう言われると、なんか寂しい……」

小さなベッドにメラとジェリーが寝転がっていて、残されたドラゴンが一人でベッドに座っている。あつちが楽しそうに見えるのか、どこことなく落ち着かない様子。結局、ドラゴンはベッドを引つ張って2つ合体させると、ジェリーの横に収まった。

体が近づくと話しやすい事もあるようで、ジェリーは天井を見ながらメラに喋りかけている。

「……この先、私たちは、どうしていけばいいのかしら。とにかく、水の軍団を追い払ったら、平和になるの？」

「はいそれと星を開けわたす気も、こっちはないからね。あつちが諦めるまで、粘り強く戦うしかないよ。それとも、何か気になる事でもあったの？」

「……うん。どうして、水の軍団は炎の神殿に最終破壊兵器があるって知ってたのかしら。それと、邪魔そうにしてたけど……ドラゴンさんを生かしておいたのも不思議」

「しつように襲われてたじゃん。空まで追いかけてきてたし」

「そうなんだけど、へんな乗り物に追いかけられたけど、弱いつて感じで……あんまり全力つて感じじゃなかった気がする！」

「私も口の中から見てたけど、弱らせておこうとしてるように見えたわ」

「謎だ……しかし、遭難してた敵の兵士も目的までは知らなかったみたいだし、もつと偉い人たちが何か企んでるのかも。うーん……ダメだ。難しい事を考えたら眠くなってきた」

難解な会話を持ちかけたせいで、メラが気を失いかけている。すると、ドラゴンも釣られて眠くなったようで、どちらもジェリーに寄り添う形で目を閉じてしまった。ジェリーも動くに動けない様子で、むしろ抗う事なく眠ってしまう。

どれ程の時間が経ったのか、珍しくメラが2人よりも先に目をさました。いつの間にかベッドからドラゴンがいなくなっている……ように見えたが、下に落ちているだけであった。だが、部屋の外から聞こえていた人の声がなくなっていると気づき、重たげに上半身を起こす。ドアの隙間から顔だけを出して、前の通路をうかがう。

「誰もいないなあ……」

メラは一人で部屋を出て行こうとするも、やはり思い直してジェリーとドラゴンを起こす事にした。ジェリーの肩をゆすつてみると、元からキツめの目元を更に強張らせながら目覚める。ドラゴンは死んだように眠っているのも、またジェリーが背負って連れて行く。

「誰もいないんだ。みんな、どこに行っただろう……」

「……ピクニックに行ったのかしら」

まだ寝ぼけているらしく、ジェリーが呑気な発言をしている。小部屋の扉が並んでいる通路を歩いて行くと、上の階から戻ってきたと思しき人々の声があった。特に恐ろしい事件があった顔はしておらず、メラ達も自分の目で確認しに行く。

上り坂をどんどん登って、山の表面にある道へと出た所で、人々は空を見上げています。その視線を追って、視線を上へ。すぐにメラは異常を察知したのだが、ジェリーは違和感の欠片もなさそう。もう、自分で気づいてもらうのは諦めて、メラがジェリーに説明を始める。

「大きい星が増えるんだよ……いつもは4つあったけど、ほら……5つある」

「え？星って……1つ2つって数えるの？」

「そこを話題にしたい訳じゃあない」

「私……あまり空にロマンを感じない」

「そろそろ、ちゃんと起きて」

まだ8割ほど寝ているのか、ジェリーが寝言を言っている。そこへ、防衛隊若手のホープではないジータ隊員が現れ、ジェリーたちが寝ていた間の事柄を勝手に語り出す。

「お前ら、帰ってきてきたんだな。任務で向かう方角の確認をしようとしたら、いつの間にか大きい星が増えてたらしいんだ。あれは何なのかと、緊急の会議が行われているんだが……そんな話を話していても、しようがないと俺は思う」

「メラメラ……方角と星って、なんの関係があるの？」

「なぜ、あたしの方に聞くのか……あれだよ。あの大きい星は朝昼晩で、見える方角と数が決まってるんだ。」

だから、道に迷ったりしたら、あれを目印にして進めば、進みたい方角に行けるって寸法なの」

「そうだったのか。そこまでは知らなかったぜ」

「あんたは知つときなさいよ……」

ジータ隊員は星の使い方を知らなかったが、相変わらず大きい態度は改めない。そんな会話を済ませると、ジータ隊員は先輩隊員に呼ばれて去っていった。ジェリーは朦朧としていた意識が目覚めてきたのか、まともな意見をやつと述べた。

「……空に煙が立ち込めていたから、星が増えた事に今まで気づかなかつたのね」

「なるほど。そういう事か。そういや、炎の神殿に行く時も、方角が解らなくなつたらと不安で仕方なかったんだよね……」

「無事に到着して良かった……」

「うん」

ここへ帰つてこられた幸せを再び、噛みしめた2人である。野次馬となっているのも疲れるようで、さつさと部屋へ戻ろうとするメラとジェリーである。しかし、丁度いいと言わんばかりの口調で呼びとめられる。

「おい！若者よ！手が空いていれば、こちらへ来て欲しいのだ！」

おっちゃんの手まねきに応じて歩くと、削られた壁から湧き出た大量の砂と対面した。フレイムタウンでは女の人にも力仕事が行ってくるし、司令官のように事務ばかりさせられる男の人も多い。運動不足なジェリーはともかく、メラなどは基本的に運搬作業ばかりさせられる。ひよるひよるしている父親の分まで、娘が働かされる構図である。

睡眠ドラゴンを適当な場所へと安置して、押し車に乗せられた土を土砂置き場へと運ぶ。やっと半分くらい処分したかな……という表情をメラがしていると、高い所の土を削っていた男の人が素つ頓狂な声で叫んだ。

「おーい！何か出たぞ！」

何か出たぞと言われたら、何が出たのか知りたくなるものである。別の場所を掘っていた男の人たちが、背伸びながら後ろから覗いている。叫んだ男の人は土をはらい、ギラギラと輝く鉱物を取り出した。

「グロルジェペリンだな」

「おー、珍しいなあー」

発見されたのはグロルジェペリンと呼ばれる石。聞きおぼえを頼りにし、メラがジェリーに問い掛けている。

「グロル……あれって、コートを作るのに使ったやつだっけ？」

「んん。それはクロルジャッペル」

「別物？」

「大人しい子どもと、子供っぽい大人くらい違うわ」

漠然とした例えを出され、メラは不可解そうに首をひねっていた。その後は特に目ぼしい物も発見されず、荒れ放題であった現場も着々と片付けられていった。コートを着ているメラとジェリーは土や塵を体を受け付けないが、他の男の人達は体が茶色く染まり上がっている。彼らは作業を終えると、体を洗いに行ってしまった。今更、ドラゴンが目覚めて背伸びとかがしている。

「……あれ？ベッドじゃない場所だ！」

「そもそも、あんたはベッドから落ちてたぞ」

「私、石鹼を取ってくるわね。コートを綺麗にしましょう」

「うん。頼む」

石鹼と言つても泡が立つようなものではなく、それで研磨すると汚れを落とせる石である。体を洗うソフトタイプと、石などを磨くハードタイプがあり、ハードタイプで肌を擦るとヒリヒリして堪らない。

「はい。部屋に戻りましょう」

「ありがとう」

手のひらサイズの石鹼をジェリーから受け取り、3人で部屋へ戻ろうとする。その時、メラは自分の火器が燃料切れなのを思い出し、今の内に補給しておく事とする。

「燃料だけ補給しておくから、ドラゴンと一緒に部屋に戻つてよ。これ、鍵」

「解ったわ」

部屋の鍵だけ貰い受け、ジェリーはメラと別れた。来た道に戻ると、空を見上げていた人達も飽きて持ち場へ戻っていた。

ドラゴンが目に見える物へ次々と何か言っているが、ジェリーは「うんうん」と言っている。「壁に犬の落書きしてある!」「うんうん」「おじさんが大きい!」「うんうん」「くしゃみがでそう!」「うんうん」なので、もう少し興味をもつてもよさそうだ。

一方的な会話を続けながら、2人で先程の部屋へと戻ってくる。ジェリーは独りになると考え事を始めてしまう癖があるようで、ベッドに寝転び何やら物想いを始めた。ドラゴンもジェリーの中で一人に換算されていないらしく、すぐ横でドラゴンがジェリーの注射器を触つても気にされない。

ただ、ドラゴンも特に言いたい事がある様子で、ベッドを手でパシッと叩いてから強く訴えた。

「お腹が空いてきた！何か食べないの？」

「うん……メラメラが帰ってきたら、一緒に食べに行きましょう」

「うんうん」

ドラゴンが言いたかったのは、それだけであった。再び沈黙が訪れるも、すぐさまメラの声によって乱された。

「新しい任務が予定されたいらしい」

「おかえりなさい。メラメラも出かけるの？」

「あたしは留守番。まあ、一般隊員だからね。こないだみたいな単独での遠征を任されるの自体、普通じゃないんだよ」

「非常事態だものね」

「ん！炎の匂いがある！下の方から！」

こちらの会話には加わらず、ドラゴンが床に突つ伏している。どこからか炎の石の匂いがしたようで、探しに行こうと言わんばかりに言葉を発した。

「すぐ下？それなら、すぐに見つかりそうだから行ってみようか」

「こつち！」

メラの許しが出るのを待ち、ドラゴンは部屋を抜け出した。前かがみの体勢で走っていくドラゴンの後ろをメラとジェリーが歩いて行く。あんまりドラゴンの歩幅が大きくない為、のんびりしながら後ろの2人は追いかけている。

漠然と『下の方』などと言っていたが、やはり火山の最下層へ辿りつく。それでも、ドラゴンが更に下と行って聞かない。

「もつと下にある！」

「もつと下って……あんだ。ここ火山の一番下……あつ」

なんとなく今後の展開が予想できてしまい、メラは上へ戻ろうと言いだした。

「この探索は困難を極めるだろう。また、次の機会にして、上に戻ろう」

「……ここだけ、地面の色が違うわ。何かあるのかしら」

「掘ってみる！」

ジェリーが余計なものを見つけ、それを聞きつけたドラゴンが道の脇にある硬そうな石を手で掘り始めた。1 mほど掘り続けた先で、更に硬い地盤に当たる。土まみれのドラゴンが顔を出し、もう下に進めないと訴えていた。

「固い地面があつて進めない……」

「意外と手が堅いんだなあ……そーいや、ドラゴンだったっけ」

「穴が空くかは解らないけど……水をぶつけてみる」

「お願い！」

「とんとん拍子に探索するな……」

もう上へ戻りたいメラは止めているのだが、ジェリーとドラゴンは下に行ってみたくて仕方がない。ジェリーは注射器についているスイッチを何度も押した後、ドラゴンの掘った穴に注射器の先を向けた。

「ハイドロドリル！」

水しぶきだけが穴から見えていて、その下では岩を打ちつける音が響き続けている。あまりに音量が大きく、近くにいた工場の男の人たちが駆けつけてきた。

「な……何しているんだ？」

話しかけてきた男の人もいたが、水の音に負けて聞きとれない。数秒後、岩の割れる音が下から届き、ジェリーは注射器の先を穴から持ち上げた。

「……貫通したかしら」

「な……何をしていたんだい？」

「……え？あ……あの」

人が集まっているのに気づかなかったようで、しどろもどろな様子のジェリーである。らちがあかないという顔で、メラは手っ取り早く言い訳をする。もちろん、いらぬ事を言わないよう、ドラゴンの頭は押さえてある。

「こいつが穴に入りたいて言ってたから、ジェリーが掘ってあげてたんです。この小さいの、せまい所が好きなんです」

「そうだったのか。でも、ビックリするから、大きな音は静かにしてね」

「すみませんね」

ドラゴンと穴がフィットしそうなを見て、工場の男の人達は納得したらしい。空いている穴を何度か見た後、周りの人達は去っていった。解放されたドラゴンはメラから離れ、即刻で反発を始める。

「せまい所は好きじゃないよ！」

「でも、この穴に入るんだろう？」

「そうだった！ジェリー！ありがとう！」

「どこまで、穴が空いたかは解らないけど……」

そつと穴の中を見てみるも、暗くて深さが解らない。ただ、風の音が聞こえている事から、どこかへは続いていそう。すぐに飛び降りていきそうなドラゴンの肩を掴み、メラが念を押すように言い聞かせる。

「下には降りれそうだけど、何が潜んでいるのかも解らない。慎重に行った方がいいぞ」

「声がしないから、大きな生き物はいないよ」

「そうなのか？ジェリーからも何か言つてよ……」

「もし怪物がいても……こつちはドラゴンだし」

「そうだった……この姿だと、ドラゴンだつて忘れるなあ」

「早く行つてみよう！」

「はいはい。解つたから、ちよつと待つて」

メラはワイヤーのような物と金具をバッグから取り出し、まずは3つの金具を近くの岩に打ち込む。それにワイヤーをくくり、ワイヤーを穴の中へと落とす。

「3本もあれば、どれか取れても大丈夫でしょ」

「いちばん！」

垂れたワイヤーを使わず、ドラゴンが穴の中に飛び降りて行った。一番を宣言したものの、他の2人は先を争わない。むしろ、メラは譲った。

「どうぞ、お先に」

「私、多分……注射器が詰まるから。後から行くわ」

「ところで……あのドラゴン、一人で石を取って帰って来れるんじゃないかな？待っててみようか」

「それもそうね」

待ってみた。戻ってきた。

「んんん……一人じゃ寂しい……」

「やっぱり戻ってきた……しょうがない。行こう」

ある意味では期待通りの反応だった為、困惑した表情でメラとジェリーが目を合わせている。まずメラが下へと降りて行き、ごつい注射器を縦にしながらジェリーも続けて降りた。火山の下には空洞があり、先が見えない暗闇を詰めてある。視界を良好にせねば足場が見えないとみて、またメラが砲火器に火を灯している。

「ファイアーリード！」

「見やすくなった！ありがとう！」

「……別に、あなたの為じゃないんだから、勘違いしないでよね。水の軍団と戦うのに役立つかもしれないから、手伝ってるだけ」

「む……そうだったのか！もう、ありがとうって言わない！」

メラとドラゴンは馬が合いそうで合わず、つまらない事で喧嘩を始めた。それを後ろでジェリーが見ているのだが、そこらは何も考えていなさそうな顔である。

しばし進むと、話し声の響き方が変わった。メラが広く照らしてみると、深い溝が幾つも空いている場所だと

解る。あわせて、近くにトロッコのような乗り物があり、人が使っていた施設である事も判明した。

「わっ、乗り物だ。乗ろう」

「……随分と古い物のようだけど、誰が使っていたのかしら」

ドラゴンとジェリーが乗り物に乗り込み、中を物珍しげに見物している。メラは近くの溝を覗き、炎の石がなにか探していた。

「ここには無さそうかな。もう少し、先に行ってみよう……」

ふとメラが振り返ると、乗り物がなくなっていた。もちろん、乗っていた2人もいない。

「……おや？」

砲火器の灯りを高く持ち上げてみると、乗り物のレールが暗闇の向こうへと続いている。これはアレです。

「……しまった！ジェリー！」

呼びかけながら駆けだすも、その先のレールは宙を通っており、とても人の足では先に進めない。完全なる緊急事態だが、戸惑う事なくメラは元来た道走り出した。

もう一方、猛進するトロッコに身を任せ、ジェリーとドラゴンは風を受けている。ブレーキなどは見当たらず、誤って動かしたレバーも既にロックされた。水の力でトロッコの動きは止められるかもしれないが、下に見えるのは奈落。注射器の出力を計っている内に終着地点へ到着、その衝撃でトロッコが大破。2人は抱き合う姿勢で、砂溜まりの上に投げ出された。

「……ここ、どこかしら。メラメラもいないわ」

「遠くまで来ちゃったかも……乗り物も壊れちゃった」

メラがない為、灯りを失い見通しが悪い。徐々に目が暗闇に慣れてくると、そこは古い採掘場である事と解った。代わりにトロツコは見当たらず、レーンを使用して戻る術はない。そんな中でも、ドラゴンは炎の石の匂いを感じ取っている。

「……ん！こつちに炎の石がある！それがあれば、空から飛んで帰れるかも！」

「今度は上の方かしら……とにかく、地上に出てみましょう」

「うん！」

ジェリーとドラゴンは炎の石に望みを託し、壁に手をつきながら坂を上り出す。こちらにも長く使用されていないようで、設備は錆びつき、道は土砂に埋もれている。せまそうな場所はドラゴンに掘って広げてもらいつつも、なんとか開けた場所へと抜けた。

「上の方で音が聞こえる！誰かいるのかな？」

「……え？そう？」

あちらこちらに落ちていた謎道具を拾い上げていて、ジェリーは上から落ちてくる音に気づいていない。ドラゴンの指摘を受け、鉄のパイプで補強されている天井を見る。時々、土がパラパラと落ちてくる。どことなく、ジェリーが戦闘の空気を感じ取る。

「……誰か戦ってる？」

「誰？」

「それは解らないけど……」

「のぞいてみよう！」

ともかくにも、地上の様子を偵察しない事には、にっちもさっちもいかない。ドラゴンの提案に頷き、ジェリーも更なる道を探す。

「むむ……道が終わってる。土がネバネバしている」

細い坂を上がってみると、そこで道が終わっていた。ドラゴンが爪を立ててみるが、土は泥の状態となっていて掘り進めない。水で貫こうにも泥が飛び散るとみて、2人は泥の前で腕を組んでいた。しばし経って、ジェリーは思い出したようにバッグから爆弾を取り出した。

「これを試してみよう」

「持ってて良かった！」

「ね」

呑気に笑いあいながらも、ジェリーは爆弾を泥に設置。広い場所まで戻り、あとは爆発するのを待つだけ。3、2、1で、爽快に爆発した。

地上は薄暗いようで、弱い光が穴へと差し込む。ジェリーとドラゴンは開けた道へと進むが、何かを察知して戻ってきた。急いで辺りを見回し、何が入っているかも解らない大きな箱へと飛びこむ。

ジェリーとドラゴンの後ろから、武装した男の人達がやってくる。手には放水機を持っており、一目で水の軍団に関わっていると解る。何名かはジェリーたちが入っている箱をスルーして下の階。残りの2名が広い場所を見回している。

真つ先に敵は箱のフタへと手を掛けるが、ジェリーとドラゴンが2人がかりで引つ張っているので開かない。すると、敵は応援を要請。こちらも2人がかりで箱の攻略に挑む。

「せーのー！よいしょー！」

力を合わせて立ち向かうが、蓋が開くどころか箱が浮き上がってしまった。

「ふう……どうせ何も入っていないだろう。開けるだけ無駄だ」

「……同意」

負け惜しみにしか聞こえない台詞を残し、敵は仲間を追って下へと降りていった。足音が消えるのを待ち、ジェリーがフタをちよつとだけ開ける。

「……うん。もう大丈夫」

「ふたに掴まってブラブラして疲れた……」

全体重で箱のフタを死守し、ドラゴンが腕を疲弊させている。ジェリーはドラゴンを胸の前で持ち上げ、そのまま走って地下の出口へと急いだ。

出口から外を盗み見ると、そこはジェリーが見た事のない街。細長い建物が多く、その幾つかは気持ちよく折れている。敵の姿がない今がチャンスとばかり、ジェリーは灯りのない家の中へと逃げ込んだ。そこで改めて、ドラゴンから問い掛けを受ける。

「……、どこなの？」

「……解らないけど、となりの街だと思う。ところで、炎の石の場所は解る？」

「あそこから匂いがする！」

ドラゴンの指先から真つすぐ先を見つめると、そちらには大きな城が建っていた。その上には巨大な乗り物が飛んでおり、明らかに敵の拠点と化している。即、歩いて帰ると決めた。

「……街の外まで飛べないの？」

「ゆつくりなら飛べるけど……ううん！」

前のめりになり、ドラゴンが力む。すると、人の姿のまま羽根だけが背に広がった。しかし、ゆつくりと飛ぶくらいなら、普通に歩いた方が安全である。ジェリーは徒歩で出る事を念頭に置きつつ、地形を把握するべく建物の上へと向かった。

最上階まで上がらずとも、7階の高さから街の全容が見通せた。街はフレームタウンの5倍はありそうな広さで、あちらこちらに緑色の光が動いている。この街の様子からして、あれが敵の持つ灯りである事は明白。人生で最も難解な判断を迫られ、ジェリーは力なく座りこんだ。

「……どうしよう。メラメラがいてくれたら」

「黄色コートがいなくても、ジェリーがいるから平気だよ！」

「そんな事を言われても……私、昔から自分だけじゃ、何もできないのよ」

「……ジェリーは頭がいいから、あんまり心配してないよ！」

「……」

理屈じゃない事をドラゴンから言われ、ジェリーが弱々しく笑っている。なんにせよ、ここで待っていても助けが来る保証はない。できる事をしてから諦める方が、メラにも顔向けできるといふものだ。

「……そうね。行きましよう」

「行こう！まず、何をすればいいの？」

「ううん……水の軍団の服が、どこかにないかしら。あれを着れば、気づかれずに歩けるかも」

「そうか！そうしよう！」

そうと決まれば話が早い。2人は建物の窓から外を偵察し、水の軍団の服が入手できそうな場所を探す。敵兵の一人を襲う案は思いつきつつも、光の多さから見て団体行動をとっている事は明らか。やはり、敵の拠点となっている城へ侵入するのが確かと判断する。

「ここからなら、お城に行く方が近いかも。室内なら隠れる場所も多いから」

「それなら、そのまま炎の石も貰おう！」

「どの辺りにあるかまで解るの？」

「3階か4階にあると思う」

「それなら、それも貰いましょう」

どんだん強気になってきて、いつしか炎の石まで頂く計画だ。その強気にも理由があるようで、自信ありそうにジェリーは城への侵入作戦を告げた。

「また、これを使ってみましょう」

「爆弾だ」

「なるべく、お城とは逆の方向に撃ち出すから、水の軍団が爆発の方に向かったら、物影を伝って移動するの」  
「なるほど！」

ジェリーは城のある方とは逆側の窓を開け、そこに爆弾をセット。何度かスイッチを押してプログラミングした後、注射器の先を優しく爆弾に当てる。爆弾を起動させ、小さな声で注射器を起動した。

「ハイドロスロウ！」

爆弾は少量の水で撃ち飛ばされ、街の外側へと消えていく。なるべく敵のいない場所を狙ったようで、上手く緑の灯りがない場所へと落ち着く。爆弾は白い閃光を放つと、追って煙を広げながら、うなるような低い音で爆発。敵の動きからも、動揺が手に取るように解る。

「……もう外に出てもいいかな？」

「待つて。もう一個、お城の近くにも投げるから、あなたの持つてる爆弾をちようだい」

「もう一個？うん」

ドラゴンが隠し持っていた爆弾を受け取り、先程と同じ手順でジェリーが再び爆弾を撃ち上げる。ただ、水量の調整を狂わせたらしく、行方が不明になってしまった。しかも、爆発すらしない。

「……失敗。これで最後」

持つている最後の爆弾をショット。次は上手くいった。城から近い広場に爆弾が落ち、爆炎で空が明るむ。

「……行きましょう。多分、城の警備をしてる人達も分散してるはず」

「急ごう！」

建物の外へ出ると、2人はアーケードの下を通って城へと走る。ジェリーの予想通り、城壁の近くにも敵の姿は見えない。ただ予想外だった事と言えば、城門が見当たらない事くらいである。城の周りを歩いてみるが、入れそうな場所が見当たらない。

「どこから入るのかしら……」

「飛んで入っちゃおう？」

「……そうね」

周りに誰もいないのを視認し、ジェリーがドラゴンを抱きしめる。ドラゴンはジェリーの肩を持ち、羽をバタつかせて飛び上がった。

「うーん！うーん！」

ドラゴンから一生懸命さは伝わってくるのだが、その飛行の遅さと言えば大したもの。やつとの事、城壁の高さの3分の1まで達した。そこへ、男の人の声が聞こえてくる。

「敵がいたのか？」

「解らないが、各所で爆発が起きているらしい。この国のやつら、いざという時に心中できるように、自爆スイッチでも仕込んでいたのかもしれない」

ただいま、ドラゴンは城壁の高さの3分の2まで到達。その真下で、敵の会話が続けている。

「国の長が真つ先に逃げ出した国だ。そのような、潔い罫をはるとは思えん」

「王は逃げ出したが、家臣は城に捕えてある。何者かが救出を計っている可能性も否めない」

「あちらは……俺たちを恨んでいるだろうか。こちらだって、このような武力行使を望みはしないが……あの隊長たちの必死な形相を見せられては、何かしらの脅威が迫っていると察する他ない。今は……」

そこまで盗み聞いたところで、ドラゴンが城壁を飛び越える。あとは風を何度か叩きながら、よろめくように下降。暗闇の中、敵の姿がない場所へと落ちた。

「うう……もう少しで見つかつちやうかと思った。羽も痛い」

「どうやら、王様の部下の人達がお城に監禁されてるみたい。助けてあげたいけど……場所までは聞こえなかったわ」

「炎の石があれば、一緒に飛んで逃げられるけど……人のニオイは解んない」

「……まずは炎の石か、水の軍団の服を探しましょう。とにかく、安全を確保しないと」

「了解！」

城門が見当たらなかつた代わり、城へ入れそうな場所は幾つも発見された。窓を塞ぐ鉄格子も緩く、ドラゴン一人なら入り込めそうだ。炎の石に近そうな場所から入ります。

「くんくん……ここ！ここから入ろう！」

「……( )？」

『ここ』とはクズ石が溜まっている場所で、つまりは城中のゴミがダクトを通って転がってくるゴミ捨て場である。そのダクトから中に入ろうと言われたら、ちよつと戸惑うのも解る。

「今は水の軍団が城にいるから、きつと何も転がってこないよ！」

「それなら一番、安全そうね。私も……なんとか通れそう」

「入りやすくするから待ってて！」

手でダクトの入り口をかき分け、邪魔な石ころを外に出す。その後、ドラゴンは誘うようにジェリーの方を見てから、ダクトの中に入っていった。ジェリーが中に入ると、先に行ったドラゴンがスーッと滑って戻ってきた。短い尻尾をジェリーの頭に押しあてながら、ドラゴンが少し恥ずかしそうに謝っている。

「……あつ、ごめんね」

くじけず、再び上りだす。次は上手に登れたようで、そのまま上へ上へと進む。このへんが3階かな……という曖昧な感覚で、ドラゴンはダクトの出口を探した。壁についている鉄板を押し開け、ダクトから顔を覗かせ

る。

「誰もいない部屋だ。ここから出よう」

「簡単に中まで入れてビックリ。ここは、何をする部屋なのかしら……」

部屋の中央に円卓があり、天井にはワイヤーで石炭がつるしてある。部屋の壁際には暖炉が敷き詰められている。

「暖炉部屋かしら……？」

「むっ……部屋の外に誰かいる」

自然な仕草でドアの鍵を閉めると、ジェリーは誰かの声に耳を傾けた。あわよくば、探索のヒントを得られるかもしれない。

「昨日の夕食、何食べた？」

「俺はパン。あっちから持って来たやつ。この星、ほんとに食べる物ないから、早く帰りたい」

ドラゴンは会話の内容に期待を外しているが、ジェリーはパンの正体が気になる様子。その後も他愛のない会話が続き、話題は夕食から眠気の話に変わっただけ。ジェリーとドラゴンが彼らに対する期待を捨てたと同時、第3の人物が会話に参加してくる。

「見つかったか？レッドスター」

「いや、まだだ。ここにはないのかもな」

「神殿って場所にもなかったらしい。フレイマテリアは別の部隊が2個だけ発見しようだが……辺鄙な村の守り神として祭ってあったそう。ありそうな場所になくて、なさそうな場所にあるのはフェイクだなあ」

「ともかく、まだ鍵も見つかっていない。速やかに発見し、フレイマテリアは冷却装置にかけて処分するよう  
に。よろしく」

任務の内容を再確認すると、敵はグループを解散して探索に戻っていく模様。敵の音が消えると、新たに重要な情報を得て、ジェリーは推測で考えをまとめる。

「……レッドスターとか、フレイマテリアというのが、炎の石の事なのかしら？まだ、あちらも探しているとすると、ここにある石は無事みたいね」

「あつちも狙ってるんなら、早く見つけないと処分されちゃう……石は、この階か、この上の階にありそう！  
早く行こう！」

ドラゴンが慎重にドアを開け、廊下の様子を探る。3階の廊下は城を一周する形で続いているようで、道なりに幾つかのドアが設置されていた。抜き足差し足、2人は廊下に忍び出す。

偉そうな人物の銅像が通路の脇に立っており、隠れて進むには好都合。こうして役に立ち、これを作った芸術家も本望だろう。

視界を避けて進みつつ、2人ほど敵をやりすぎず。その内、壁の色が青から赤へと変わり、壁の素材も鉄からレンガへと変化する。この辺りは老朽化が進んでいるのか、手取り早く補修されている。

「……このへんが怪しい。でも、ドアがない」

「匂いがあるの？」

「する！」

壁をコンコと叩いてみるが、特に変わったところもない。石が壁の向こうにあるのは確実なようで、ドラゴン

の自信と動作も大きい。おねだりするような態度で、ドラゴンがジェリーに壁の破壊を依頼する。

「……壊せない？」

「さすがに……大きな音を出すのは危ないわ。もう少し調べて開け方が解らなかつたら、水の軍団の服を探しましょう」

「むむ……口惜しい」

調査を継続してみたものの、やはり石の取り出し方が解明しない。諦めが肝心と、ジェリーがドラゴンに調査の終了を告げる。

「……ここに石があると解つたのだから、またフレイムタウンの人達と探しにきましょう。水の軍団の人達も、探すのに苦労しているようだし」

「……うん」

「……城の人達に聞けば、開け方が解るかも。助け出せたら開けに来ましょう」

「そうだ！その手があった！行こう！は……」

「……あっ！」

「は……はくしっ！」

ジェリーが止めようとした時には既に遅く、ドラゴンがクシヤミと一緒に炎を口から吐き出している。それを聞きつけ、近くにいたと思われる敵の兵隊が駆けつけた。

「むむ……なにやつ！成敗！」

「ハイドロカーペット！」

「うおっ！」

重そうな機械を持った敵に対し、ジェリーは足元をすくうような、広く薄い水を床へ流す。足を取られ、敵は顔を床に打ちつけて盛大に転んだ。

「……」

「……生きてるかしら」

生死の心配をしながら、倒れたままの敵へとジェリーが近づく。完全に沈黙したのを確認すると、ドラゴンと協力して近くの部屋へと引きずり込んだ。あとは服を頂くまでなのだが、ジェリーは気が進まなそうである。

「……脱がさないの？」

「私……男の人、触った事がなくて」

「じゃあ、私が取ってくる！」

意気揚々とドラゴンは男の服に手をかけ、パチパチとバックルを外しにかかる。下着一丁になるまで剥き続け、残った男の人の体は近くのクローゼットに入れた。

「これ着て！」

「ありがとう……着てみるわ」

ドラゴンが持ってきた柔らかな服を見つめ、ジェリーは慣れない様子で袖に腕を通す。幾らか体より大きいのが、服の上にアーマーを着こむと違和感は消えた。

「柔らかい服……何で作られてるのかしら」

「私は、これに入るよ」

男の人が持っていたカバンを開け、ドラゴンはジェリーのコートを抱えたまま中に入る。このまま、ジェリーに運んでもらう作戦らしい。注射器もアルミ製のカーテンで包み、大きいながらも姿は隠せた。かなりの総重量だが、走れないにせよ問題なく歩く事はままなる。

変装も完了し、これにて堂々と歩けるはず……なのだが、やはり緊張するようで、物影に隠れながら移動していた。とにかく、今は撤退するのが吉。元来た道に戻り、ダクトのある部屋を指す。

「……誰か来たみたい」

「変装してるから大丈夫！がんばって！」

バッグの中からドラゴンに応援されつつも、ジェリーは敵から奪ったヘルメットを深く被る。擦れ違いざまにアイサツだけすれば、問題なくかわせるはず。そう信じて、ジェリーは敵と向き合った。そんな気持ちも知らず、敵は気楽そうにアイサツしてくる。

「おつかれ〜」

「お……お疲れ様」

「……あれ？お前」

敵は2人組。一人は難なく通り過ぎたのだが、もう一人の男の人に呼び止められてしまった。ジェリーが何も言わずに立ち止まると、呼びとめた男の人はジェリーの顔をのぞきながら言う。

「ここに来た時、見なかったやつだな。今、到着したのか？」

「ええ……はい」

「……えらく綺麗な顔立ちだなあ。シャーベット隊長様の好みか？」

「そ……そうかな？」

「お前、女の子にモテモテだろ。んん……焦げくさい臭いがするが、火山あたりから戻ってきたのか？」

「そ……そうだよ」

「それじゃ、今からヨロシクな。この国の、お偉いさんたちは6階の王室に捕えてあるから、なにかあったら見に行ってくれ」

「……了解」

聞きたかった事を次々と打ち明け、敵の男たちは通り過ぎていった。ここまで知らされたら、行くしかない。ドラゴンがバッグの中で意気込んでいる。

「6階に行つて、炎の石の取り方を聞こう！」

「え？でも……」

「さっきの人達にもバレなかったから、きっと大丈夫！」

「そうかしら……あら？」

戸惑いながらもダクトのあった部屋へ向かっていると、城の外に大量の水が流れ始めた。城をコーティングした水は瞬時に氷へと変わり、窓もドアも開ける事かなわなくなってしまう。

「……何かしら」

「え？どうしたの？」

ドラゴンに問いかけられるも、そこへ敵の戦闘員が現れ、ジェリーがドラゴンに説明しようとした事を補足してきで解説してくれた。

「侵入者だ！仲間の一人が、身ぐるみ剥がされた状態でロッカーに閉じ込められていた！おそらく……この国の暗殺者に違いない。城は封鎖した故、逃げられないはず！お前も捜索にあたれ！」

「は……はい」

「返事はイエッサーだ！」

「い……イエッサー！」

またまた難なくやり過ぎ、敵がいなくなるのを待つてから、ジェリーはドラゴンに相談を持ちかけた。

「お城が透明な石のようなもので覆われてしまって、窓も開けられないの。たぶん、ダクトも外の入り口が閉ざされてるかも……どうしよう」

「透明な石って、硬いの？叩いて壊せそうなら、私が爪で壊すよ！」

「ちよつと待つて。叩いてみるわ」

手袋をした手で、ジェリーが窓についている氷を叩いてみる。やはり、分厚い氷はビクともせず、削れる様子もない。氷の冷たさが手に伝わり、ジェリーはビクッリして一歩だけ後ろに下がる。

「とても硬そう……それに、体が動かなくなりそうなくらい冷たい」

「冷たいの？やだやだ……やっぱり、炎の石を手に入れて、一気に突き抜ける方がいいかも」

「……そうね。6階まで行ってみましょう」

正体不明の透明な石は打破できないと判断し、ジェリーはドラゴン入りのカバンを持ったまま上の階へと向かった。敵の兵士が大勢いるのだが、みんな怪しい人影を追っておるせいかな、仲間と同じ服を着ているジェリーには向き合わない。そのまま6階の王室と思われる場所までは行き着いたものの、部屋の前には番をしている兵士

が  
いる。

「ドアの前に人がいるわ。どうしよう……」

「う〜ん……どこか別の場所から入れないかな？」

「そんな色々な所から王室に入れたら、王様が危険なんじゃ……」

「う〜ん……う〜ん……」

もう知恵は絞るだけ絞って、ドラゴンからは何も出てこない。ジェリーも良い案が思い浮かばないらしく、柱の影に隠れて目を伏せていた。しかし、安全な作戦を消去して行けば手段自体はあるようで、ドラゴンが入ったバッグを持ち直す。

「……あれ？どっか行くの？」

「少し静かにしていてね」

ジェリーは走り出し、ドアの番をしている兵の前で立ち止まると、低い声で早口にまくしたてた。

「侵入者が上の階に逃げた。人数が多くて手こずっているらしい。城は封鎖されている。侵入者の対処に協力してくれ」

「警戒網が敷かれたとは聞いたが、それほどの相手か。どうせ捕虜は逃げられまい。俺たちも行くぞ！」

ジェリーが駆けだすと、それを追って3人の兵士も走り出す。他の兵士を見かけると、番をしていた兵士が協力を要請した。

「上に侵入者がいるらしい。追い込みにも協力してくれ」

「なに？それは大変！行こう！」

8階が上層部であり、そこまで登った所で兵士は分かれて探索を始める。ジェリーは他の兵士の後ろを走りながらも、曲がり角に差し掛かり叫ぶ。

「いたぞ！待て！」

誰にも見られていない場所へと入り、ジェリーは包んだカーテンから注射器の先端を出す。まるで何かを狙ったかのようにして、天井へと攻撃を仕掛ける。

「ハイドロミサイル！」

巨大な水が回転しながら撃ちあがり、鉄で出来た天井をえぐった。あまりの威力によって、ジェリー本人が尻もちをついている。かけつけた他の兵に何か聞かれるより早く、ジェリーは天井に開いた穴を指さして言う。

「上へ逃げられた。敵は爆発物も所持している。気をつけろ」

「上だ！シャーベット様の所へは行かせるな！急げ！」

ジェリーの攻撃が大音量を出したかいてもあり、敵は完全に敵がいると錯覚したらしい。ジェリーをおいて階段へと走り、総動員で侵入者の捕獲にあたる。遅れたふりをしてジェリーは下の階へ向かい、周りを見渡してから王室へと入った。すぐに鍵もかける。

「はあ……ここは敵がいないみたい」

「……え？どうやって入ったの？」

「……」

バッグの中にあるドラゴンが、終わった作戦の内容を聞いている。しかし、気が動転しているせいでジェリーは上手く言葉にできない。もう、ここにいる事すら落ち着かないとばかり、早足で王室の奥へと進む。

「だ……誰かいないの？」

「何者だ！我々は屈しない！このような暴力には！」

声はすれども、姿が見えない。その後も、その誰かは一人で喚き散らして、その声を頼りにしてジェリーは居場所を探る。王座の後ろに宝箱が置いてあり、ここが見るからに怪しい。カバンから出てきたドラゴンは玉座に乗って休んだりしており、ジェリーだけが宝箱の攻略にかかっている。

聞こえる声の内容からするに敵ではなさそうだが、正体が掴めないせいで宝箱を開けにくい。結局、あつちで遊んでいるドラゴンを呼んで、一緒に中を確かめる。

「敵が出てきたら、すぐに引っかくよ！」

「うん……」

パチンと宝箱の留め具を外し、ジェリーが引けた腰のままフタに手をかける。そつと開けてみると、敵意を含んだ瞳がのぞき、ジェリーは手を離してしまふ。落ちたフタにドラゴンが手をはさめ、痛さに驚いてフタを押し上げる。

「いたいっ！」

「あ……ごめんなさい」

「痛いけど……中に人がいる！」

もう、中の人への対応はドラゴンに任せるとみて、ジェリーは音も立てずに後ろへと下がる。

「誰？名前は？」

「僕は、王国ガルの王子ゲイン。人に名前を聞く時は、まず自ら名のるのが礼儀では？」

「私、ドラゴン！」

「私はジェリー……」

「ドラゴン……つまりコードネームだな。君たちは、どこかの特殊部隊の一員なのか。であれば、この堅牢な城へ潜入できたのも納得だ」

「ダクト周りは堅牢じゃなかったけど……」

ドラゴンのせいで、ジェリーまでコードネームと勘違いされている。王子を縛っている縄へと、ドラゴンが爪を立ててみる。パチパチと縄は切れ、簡単に王子は自由の身。王子は金色の服を着ており、同じく黄金の胸当てや小手は防衛力が高そうである。

「この部屋には、僕の他に2人くらい隠されている。手伝ってくれるかな？」

「どこだー！」

すぐさまドラゴンが人質を探しに向かい、その後ろをジェリーがついていく。王子は隠れやすいよう、宝箱の近くを探しており、ジェリーとドラゴンは部屋の壁際にある箱を開けたり、窓を隠している薄いアルミ箔を退かしたりしている。

「む……誰か来た！」

耳があるのかないのか解らないが、ドラゴンは音に敏感。それを聞いた王子は華麗な動作で宝箱の中へ。ジェリーとドラゴンは垂れているアルミのカーテンをのけ、その中へと入り込んだ。

「……ここは開かないな。つまり、異常なし！」

扉を開けようとする音だけがして、数秒後に結果報告がなされた。結局は誰も入ってこず、カーテンの中でド

キドキしているジェリーも一安心。ふとジェリーが視線を足元へ向けると、グルグルと縄で巻かれている女の人  
がいて、ジェリーは抑えた悲鳴をあげている。

「あつ！見つけた！一人目！」

ドラゴンが捕虜の口に噛ませてある布を切ると、女の人は憎しみ混じりに強い口調で始める。

「このようなマネをして、ただでは済まさない！」

「わわ……私たち、敵ではなくて……」

「助けに来たの！一緒に逃げよう！」

ジェリーは敵の服を着ている為、いわれなき殺意を向けられている。ただ、どう見てもドラゴンが敵の風貌で  
なかったせいも、女の人は状況を理解できず悔しげな表情であった。縄を切つて解放し、部屋に敵がいないのを  
確認してから、3人で表に出た。

「おお、母上！」

「ああ、愛しのゲイン……あなたの無事を祈っていた」

女の人は王子の母親で、つまりは女王であった。先程とは打つて変わった穏やかな声で、ドラゴンとジェリー  
の正体を尋ねる。

「この者たちは？」

「どこかの国の特殊部隊の者たちです。我が国の危機を察知し、精鋭を派遣してくれたに違いありません」

「それは頼もしい。これも、我々の人徳あつての事でしょう。どちらより参られた部隊ぞ？」

「ふれ……ふれいどたうんだけ？忘れたけど」

「……私たち、フレイムタウンから来たの」

「フレイムタウンとな？聞きおぼえはあるが、詳しくはない。どこかの小国か、田舎町か」

フレイムタウンは大国の女王すら存じない、片田舎の小さな街だったのだ。そんな場所に特殊部隊などあるはずもなく、女王と王子も『あれあれ？』という表情になっていく。これ以上は説明せずにいるほうが面倒だとみて、ジェリーが頼りなさそうに告げる。

「わ……私たち、間違つて来てしまったの……だから、特殊部隊なんて大層なものじゃないわ」

「そうか……しかし、ここまで辿りついたのは事実だ。そして、僕たちには戦う力が僅かしかない。協力して、フレイムタウンとやらまで逃げのびよう」

不安そうな母親を見てか、王子が希望の言葉を取り出し出している。もはや、助けに来た側のジェリーも後戻りできない状況ではなく、ただただ王子の言葉に頷くしかない。脱出に向けての作戦は既に決まっており、それをドラゴンが提案している。

「ここ、炎の石があるでしょ？それをもらえれば、飛んで脱出できるよ！」

「炎の石とな……もしかや、聖石ファイを指しておるのか？」

レッドスターだとかフレイマテリアだとか、聖石ファイだとか、それぞれが勝手な名前で呼んでおり正体が定まらない。念の為、ジェリーが別の切り口から話題を投げ込む。

「下の3階あたりにある石だと思うのだけど、入り口が見つからなくて……」

「あれは音の玉を使った仕掛けで開く扉なんだ。王族の声に反応して開く金庫で、外から破壊するのは不可能だ」

「よかった！壊さなくて！」

「そうね……」

王子の答えを聞き、心の底からジェリーは強行突破しなくて良かったと安堵している。そんなドラゴンとジェリーに構わず、王子は部屋にある銅像の裏へと回り、壁に手をつけて喋りかけている。そこも金庫と同じ仕掛けがあるらしく、声を発してから少し経って、ゆっくりと壁に隙間ができる。

「ここから、下の階へ行ける。さあ、行こう」

4人が壁の隙間を通ろうとすると、王室の後ろ側にある鉄製の樽が大きく揺れた。最後に壁を通ろうとしたドラゴンが気づき、急いでジェリーに抱きつく。

「な……なにかいる……おぼけ怖い……」

「他にも、誰か捕まっているの？」

「忘れていた。あれは側近のデベルだ」

「あれは置いていくべきでは？」

「母上……お気持ちは理解しますが、非常時ですので人手は多いに越した事はないかと」

うつつとしそうに女王が樽を見るも、それをなだめながらも王子は樽の蓋を開けた。中には赤い鼻をした老人が入っており、早く解放しろとばかりに王子を見上げていた。近くに挿してあった剣を抜き、王子が老人の縄を慎重に切って解く。

「おお……優しき王子殿。感謝感激であります」

「話は聞いていただろう。早急に脱出する」

「ははー」

わざとらしい声色で王子へ感謝し、側近のデベルも同行となった。女王は側近が気に食わないようで、あまり近寄らずに早足で歩く。城の事は国の人達が詳しいと見て、ドラゴンとジェリーは最後尾で壁の隙間をくぐった。女王が近くの壁を押すと、壁の隙間が塞がる。これにて準備はOK。王子が道を示す。

「ここから階段を下りると、聖石ファイのある階へ行ける」

「これで私どもも助かるのですな！このような場所など、早々と退散しましょうぞ！」

「我が国の城をこのような場所と申すか！愚弄するな！」

「いえいえ……そのような意味合いではありません。王子、声を荒げますと敵に察知されかねませぬ故……」

「黙れ！僕も、これ以上は何も言わない！」

階段は狭く、王子が立ち止まれば後続の人達も立ちぼうけである。それを知ってか、王子は言い争いを切りあげると、肩をいからせながら先へと進んだ。ただ、デベルへの反感で前が見えていなかったせいか、透明な氷が道をふさいでいる事に気づかず、思いつきり頭をぶつけている。

「……いたっ！何やつ！」

「ガラスにも似た岩が階段を行き止まらせております。王子殿、頭をぶつけて、悪くしてはおりませぬか？」  
「人をバカにするのも大概にしろ！なんだ、この透明な岩は！」

氷に怒っているのかデベルに怒っているのか解らない言動で、王子が氷の正体をジェリーたちに尋ねる。ただ、質問を受けた方も詳しくはない為、頭の中にある情報を一握り伝えるのみである。ジェリーは怯えた様子で、城の上から水が流れてきた旨を伝えた。

「……城の上から、水が流れてきたの。それから、城の外側が固まってしまったのよ」

「なんと、摩訶不思議な技よ。およそ、魔術に違いない」

「母上、魔術などありません。なにか、城の上に秘密があるはず」

「……あつ！そういうえば外から見た時、城の上に変な乗り物あつたよ！」

ドラゴンの目撃情報について、ジェリーが無言で頷いている。そこが怪しいと考え、王子が城の上層を探索するよう頼み込む。

「この透明な岩を消さない限り、下の階へは降りられないだろう。城の上の、おかしな乗り物が怪しい。城の上まで案内はする。乗り物を破壊してもらえないだろうか」

「ジェリーがやってくれるよ！すごく強いのだよ！」

「え？」

「君が戦闘員なのか。共に脱出する為、力を貸してほしい」

「……」

ドラゴンからの信頼度が高すぎて、また面倒な仕事を押し付けられた。しかし、この場にいる人達を見ても、ジェリー以外に乗り物と戦えそうな者もおらず、首を縦に振るでも横に振るでもないまま、王子に作戦を言い渡される。

「隠し通路を通れば、最上階までは案内できる。君は乗り物の水が出ている部分、または透明な岩を作っている装置を見つけ、破壊してほしい」

「えっと……そこを壊すだけでいいの？」

「透明な岩さえ消えてなくなれば、聖石ファイが手に入る。それさえあれば、脱出は可能なのだろう？」

「ビューッと飛んで、フレイムタウンまで帰れるよ！」

「そう上手くはいきまずでしようか？あまりに楽天的ではありませぬか？」

懸命に場の空気を暖めている王子の横で、またデベルが余計な言葉をはさみこんでくる。すると、ジェリーも悪い予感がしてしまい、救われぬ表情でドラゴンを見つめていた。とはいえ、王子たちが逃げたと気づかれるのも時間の問題で、王子は作戦を強行したい様子。

「とにかく、上の様子を知りたい。僕が案内しよう。他の者は待機していてくれ。来たまえ」

「うう……」

歩み出した王子の後ろで、ジェリーがドラゴンを見つめている。男の人と2人になるのが不安とみて、ドラゴンと一緒に歩き出す。そうになると、今度は母親とデベルを2人にしたくない王子が、みんなの元へと戻ってきて言う。

「母上と男を2人にはさせられない」

「なにをご心配なされているのか理解しかねますが、私が王女様をお守りいたします。さき、王子は上へ参られまし」

「貴様を窓から投げ捨てた方が、まだ不安なく偵察へ向かえる」

「……もう良い、愛しのゲインよ。私が彼を案内しよう。あなたは待機なさい」

「しかし、知らない男と母上を共に歩かせるなど！」

「……あ。あの、私」

黙って会話の行方をながめていたジェリーだったが、自分が男だと思われている事には気づいたらしい。ジェリーとドラゴンが何か言いたげな顔をしたところ、それを察した王女と王子が気まずそうに。結局、王女とジェリーが2人で上へ向かう事となった。

「女性の方だったのね」

「ええ……一応」

先程の王室まで戻り、王室に誰もいないのを小さな穴から王女が確認する。今度は王室に飾ってある額縁の横へ王女が声をかけ、そこに開いた隙間から隠し通路へと入った。

上や下から敵の足音が響くも、王女が平然と階段を上っており、その後ろをジェリーもついて上る。この2人は雑談が得意ではなく、王女が階段の終わりへ行きつくまでの間、一言も会話はなかった。

王女は慣れた手つきで壁の小窓を開け、最上階に敵の影がない事を見とる。場所をゆずれられ、今度はジェリーが隠し通路の外をのぞいてみた。

最上階は床に広く氷がかかっている、星の光を受けて天井や床が輝いている。その天井は網の目にも似て鉄の板がはってあり、その上に怪しげな乗り物が鎮座。乗り物からは水が流出し続け、一面に冷気が溢れかえっている。

「こちらへ」

壁の近くに柱がある方へとジェリーを案内し、その場所へ王女が声を吹きつける。石の擦れる小さな音が鳴り、一人が通れるくらい道の壁にできた。

「聖石ファイを入手後、貴方を迎えにくる。それまでの間、敵に紛れて耐え忍んで」

「わ……かりました」

「我らには今、あなたしか希望がない。期待しているわ」

ジェリーが隙間から柱の裏へと出ると、開いていた隠し通路が閉じてしまう。もう後戻りもできない。怖々とジェリーは部屋の様子をうかがう。まず、どうやって乗り物のある場所まで登るのか考えなくてはならず、聞いておけば良かったという表情で来た壁を見た。

「おい、お前！ちようどいい所に！」

「はいっ！」

男の人の低い声に呼ばれ、ジェリーは咄嗟に返事。その後で、どこに相手がいるのか探し始めるのだが、右左下と見た後で、上から呼ばれている事に気づいた。

「ここまで登ってこい！」

「ど……どこから」

「そこに水のエレベーターがあるだろう！」

そこと指さされた場所にはゴンドラのようなものがあり、操作できそうなスイッチは一つだけ。ジェリーは足をふるわせつつゴンドラに乗りこんだ後、ボタンに指を押し込んだ。下から噴き上がる水に押され、ゴンドラが宙に上がる。ただ、予想以上の勢いで持ち上がり、ジェリーは転びながら上の階へと運ばれた。

「いたた……」

「寝ぼけているのか？エレベーターを使う時は氣と腰を引き締めるのだ！」

「ごめんなさい……」

駆け寄ってきた男の人にエレベーターの乗り方を注意されるも、あまり怪しまれていない様子がないせいか、ジェリーは曲げていた背筋を軽く伸ばしていた。面と向かって間髪いれず、男の人はジェリーに頼みごとを始める。「お前、いわゆるイケメンというやつだな。今からシャーベット様に、ご報告をしなければならぬのだが、あの方は顔の良くない相手には冷たくあたるのだ。見ての通り、俺は男くさい顔だから、報告をお前に頼みたい」

「……………え？あ……………はい」

「……………先程、城に侵入者があつたと報告があつた。捜索中なのだが、未だに見つかからないのだ。ここが襲われたら氷のバリアが解かれるかもしれない。それをシャーベット様に伝えて欲しいのだ」

「あ……………はい」

「よし、行け！」

「ああ……………はい」

パシンと背中を叩かれ、なしくずしにジェリーは乗り物の入り口に立たされた。ご丁寧に入り口まで開けてもらってしまい、こうなったら行くしかない。

「外で待つてやるのだ。早めに済ませて出てくるのだ」

ジェリーが乗り物の中へ入ると、自動で乗り物の入り口は閉じてしまう。試しに入り口の横にあるボタンを押してみると、乗り物のドアがシュッと開いた。

「入り口のドアで遊ぶと、シャーベット様に怒られる。やめるのだ」

「ああ……………すみません」

ドアで遊ぶと怒られるようで、もうドアを開ける事すら許されない。ひんやりとした空気が漂う乗り物の中へ

目を向けると、薄暗い通路に青白いライトが点々と光っていた。いかにもな怪しい雰囲気にもまれなように、壁に手をつきながら慎重にジェリーは先へと進む。

「……c」

初めは恐怖と戦いながら足を動かしていたジェリーなのだが、いつしか青白いライトの構造が気になってしまい、立ち止まって氷の中にあるライトを見つめていた。

「誰かいるのよね？早く来なさい！」

ジェリーが入ってきた事は奥からでも解るようで、ぼやぼやしていたら怒られた。以前、乗り物の中から聞こえた声と同じであった事から、ジェリーは声の主をシャーベットという女の人だと察した。カーテンを巻いて隠してある武器へと手はかけつつ、呼ばれるままに先を指す。

楽器の姿はないが、どこからかムーディ音楽が。通路は一本道で、迷う要素の一つもなく広い部屋へと辿りつく。部屋の奥には階段があり、その先にステージのような場所がある。柔らかそうなベッドに細身の女の人が寝転がっている。

「あら？こつちへ来なさい。顔をよく見せて」

「……」

不用心に喋ると正体が見破られる可能性をみて、なるべく無言で対処するようジェリーは努めている。ぼやけている敵の姿が、近づくにつれて鮮明になる。シャーベットは長い髪を巻いており、顔からも気の強そうな様子が見受けられる。

「ん。かわいい顔。近くへ座りなさい」

ベッドへ座るよう言われ、そのままにジェリーはベッドへ腰を下ろす。しかし、どうも柔らかいベッドというのが不慣れなようで、腰が沈みこまないよう微妙に浮かせていた。それが緊張して見えたのか、シャーベットが顔を見ようと近寄ってくる。

「……いやだわ。他の女の臭いがする。用を済ませて、さっさと消えなさい」

「は……はい」

メラの臭いか王女の臭いか、はたまたジェリー本人の臭いか、他の女の人の臭いを感じ取ると、不快感を露わとしてシャーベットはジェリーから離れた。ともあれ、ここを離れられるのは幸い。さっさと立ち去ろうと、低い声を作りながらもジェリーは伝言にかかる。

「侵入者……まだ捕まっていない。気をつけて」

「……こつちを向きなさい」

ジェリーが短めに侵入者の件を報告すると、またシャーベットに呼ばれた。そちらを向くと、ビンに入った何かを吹きつけられる。きつい臭いでジェリーが咳き込んでいると、今度は肩からシャーベットに抱きつかれた。

「私に乗り買えちやいなさいよ。どうせ、ろくでもない女でしょ？」

「う……わあ！」

さつきと言っている事が違う。驚き余ってジェリーが逃げ出すも、大部屋へと来た道は閉ざされてしまった。何を悩んでいるのか、何秒かばかり目をつむった後、ジェリーはカーテンで覆いかくしていた注射器を露わとし、先端をシャーベットに向けた。

「お前……見た事がある。火の民の水使いだな！よくも私をだましたな！」

浮気を持ちかけた口で、シャーベットがジェリーに叫ぶ。すると、部屋の両脇にある穴から白い冷気が噴出され、天井から滴り落ちていた水が雪に変わる。

「だから、女は嫌いだ！死ね！」

女王といい、こんなに過激な物言いの女の人には会った事がない為、ジェリーは物怖じしている。フレイムタウンの女の人で、もつとも穏やかでない人ですらメラなのであるからして、このレベルには耐えられない。とにかく、攻撃を仕掛けるまで。

「は……ハイドロキヤノン！」

重い一撃をジェリーが放つも、シャーベットの目の前で水が落ちる。何が起こったのか理解も出来ぬ内、あちらから氷の塊が飛んできた。避けようとするジェリーだったが、足元に落ちた水が既に凍りついており、足を取られながら回避する事となった。

「いた……なに？」

尻もちをついたジェリーの頭上を、3つの氷塊が通り過ぎていく。ただ、ジェリーは足元に氷が出現した訳を知りたいようで、危険を回避した事には気が向かない。なんとか柱の影へと逃げ込み、そこから敵の様子を見る。

「死ね！」

先程まで寝具であったベッドが、冷気を発しながら浮いて戦闘兵器へと化している。夢にでも見そうな兵器を目の当たりとし、ジェリーがバツと顔を柱の後ろに隠す。

シャーベットの乗っている兵器が発した氷塊は、ジェリーが隠れている柱を乱暴にエグッている。この場所も危険であるとみて、水でガードしながら隣の柱まで走ろうとするが……。

「ハイドロセイントガーディアン！あら……？」

注射器の中にある水が凍りつき、スイッチを押しても音しか出ない。それに気づいてジェリーは動作を固めているが、飛んできた氷は幸い一つも当たらず、ジェリーの横と上をかすめていった。すぐさま、ジェリーは別の柱の影へと走り出す。敵が氷を作るのには少しの時間が掛かるようで、次の攻撃を出されるより早く、ジェリーは避難する事ができた。

息は整えられたものの、こちらから攻撃する手段もない。再び注射器のスイッチを押してみるが、やはり水は固まってしまつて出てこない。しかし、ジェリーの中で寒さと水の関係が明らかとなったようで、注射器の中に組み込んだボムハンマーを起動させてみる。

ドンという爆発音。もう一発、続けて爆発させる。一発目で氷が緩み、二発目で半分ほど解凍できた。再び凍つてしまうより早く、ジェリーはシャーベットへと攻撃を仕掛ける。

「ハイドロショットガン！」

今度は攻撃こそ出たが、シャーベットの乗る兵器へと着弾する前に凍りつき、床へと落ちて砕けてしまった。そこで、冷気を発している機械へ、ジェリーは攻撃対象を変更。再び爆発で注射器の水を溶かし、ガードを固めながら部屋の中央に向かう。

「ハイドロセイントガーディアン！」

「無駄無駄！」

ジェリーの出した水は瞬時に凍りつき、氷の壁となつて敵の攻撃をはねのけた。部屋の中央にある筒状の機械へとジェリーは注射器の先を突き立て、最接近で攻撃を仕掛ける。

「ハイドロニードル！」

凍りつきながら飛び出した水に刺され、冷気を排出していた機械は爆発。その勢いでジェリーは後ろへ転がり、強く頭を打ちつけた。しかし、痛がる素振りも少なく、すぐに置き上がって目の前の機械を見る。冷気こそ止まっているが、部屋に立ちこめる空気は白いまま。他の機械も壊さねばならないようだ。

「よくも壊したな！調子に乗るな！」

シャーベットの乗っている兵器より、大量の水が溢れだす。だが、それを見る余裕はジェリーになく、急いで柱の影へと逃げ込もうとする。そこへ巨大な氷の拳が襲いかかり、隠れようとした柱は粉々。そこで初めて、ジェリーはシャーベットの乗っていたメカが、氷の巨人に変貌している様を見た。

「ホワイトジャイアントよ！こいつで殺してあげる！」

巨人の大きさは天井に頭をつける程で、一步として動かずとも部屋の好きな場所へとパンチが届く。ジェリーはボムハンマーを起動させるが、燃料が少なく爆発は起きない。

拳を振り被った巨人に対して、対抗手段もなくジェリーが尻もちをついてしまう。そして、目をつむった。巨人の手が天井に当たり、乗り物全体が振動。それに応じて、今度は巨人の側で、白い閃光を放つ爆発が起こった。

「……なに？新手？」

巨人の拳を下げ、シャーベットが空いた天井の穴を見つめる。しかし、誰かがいる気配はなく、冷気とは違う白い煙が乗り物内に流れ込んでいる。即座にシャーベットの視線が下へ。だが、既にジェリーの姿は見えない。

「……どこへ行った！」

爆発により流れ込んだ白い煙と、部屋の下の方に溜まっている冷気で、ジェリーの姿が全く見えない。戦う手

段が見つからず、ジェリーは這いつくばって身を潜めたようだ。シャーベットは怒り心頭、無差別攻撃を開始。

「うっとおしいネズミめ！碎け散れ！」

こうなると、もう当たるまで攻撃され続けるのみ。一つの対抗策もなく、ジェリーは震えながら部屋の隅で頭を抱えていた。

「メラメラ……ごめんなさい……」

「手ごたえがないわね！さっさと死にな！」

「……わっ！何か中で暴れてる！」

突然の甲高い声を受け、再びシャーベットが天井の穴を見る。そこには大きな目玉があり、目玉の主もシャーベットも驚いて仰けぞる。

「ば……化け物め！」

「わああ！化け物、怖い！」

のぞいていたのはドラゴンだったらしく、恐怖と共に穴へとファイアーブレスを吹き入れた。熱い息から逃げようとし、シャーベットは氷の巨人とメカの部分を離脱させた。

「どっちが化け物よ。あいつも殺す！」

「は……ハイドロブラスター！」

「くそっ！どいつもこいつも！目障りなんだよ！」

熱された水をくみ取り、ジェリーがシャーベットに大量の水で攻撃。しかし、シャーベットの周りに氷の手が現れ、ジェリーの放った水を防ぐ。シャーベットの乗る兵器の周りには冷たい風があり、ジェリーの攻撃を吸収

して氷の手が大きくなる。

「潰してやる！」

攻撃が効かないと解り、またもジェリーは柱の後ろへ。シャーベットも氷塊を作るには時間が掛かるようで、追いつめるようにジェリーを追う。

「……逃げてても無駄よ無駄無駄……ああ？」

「ハイドロショットガン！」

柱の後ろには冷気を発している機械があり、その向こう側からジェリーが水を発射。氷の弾丸となつて、シャーベットの兵器を貫く。

「な……なに？」

「外にいるんですよ！この乗り物をひっくり返して！」

「ジェリーの声だ！よし！」

シャーベットの兵器が動作不良を起こしている隙、ジェリーは外にいるドラゴンへと呼びかける。乗り物を掴む音が聞こえ、徐々に乗り物は傾きを見せた。天井が床に。床が天井に変わる。斜めになった壁をジェリーは駆けのぼり、天井に開いている穴から逃げ出した。

「ハイドロドライブ！」

「わあ！ジェリーだ！無事で良かった！」

ジェリーが注射器から発する水で空を飛んでいると、敵の乗り物を城から投げ落とし、ドラゴンが同じ速さでついてきた。うまくドラゴンの頭に乗り、どうやって炎の石を手に入れたのか尋ねる。

「……私、敵の乗り物は壊せなかったのだけど、どうやって炎の石を手に入れたの？」

「ジェリーが上に行った後、少ししたら透明な石が濡れてきたの！もしやと思つて火を吹いてみたら、先に進めたの！よかつた！」

「王子たちも無事なの？」

「もちろん！このままフレイムタウンへレッツゴー！」

フレイムタウンへ戻る際にも、やはりドラゴンは道を間違えながら飛んだ訳だが、疲れて飛べなくなる前には火山へと到着した。火山の裏側から入るとガルムがいて怖いのか、今回は普通に前へと着地した。

「王子たち、外に出て！」

「まさか、本当にドラゴンになつて飛ぶとは。何事も信じてみるものだ」

ドラゴンの口から、王子たち3人が抜け出してくる。王子はドラゴンの話を半分も信じていなかったようで、物珍しげに大きなドラゴンの姿を見上げていた。

「このような危険な兵器を小国が持っているなど、見過ごしてはおりませんがな」

「貴様！命の恩人に対し、その口ぶりは何事か！礼儀をわきまえないさい！」

「やや。申し上げますが、女王陛下は戦争を知らぬ身。知恵のない発言をされると、国の名誉に関わりませぬぞ」  
「言わせておけば！」

女王とゼベルが喧嘩を始めようとするも、間に入り王子が止める。

「母上……このような輩と言葉をかわすと、頭の中に毒を入られます。怒りを鎮めてください」

「そうであろう。私も大人げがなかつた」

ドラゴンが大きな姿から子どもの姿へと戻り、上に乗っていたジェリーはドラゴンに抱きつきながらも地面へ下りた。ドラゴンの影を見た1人の防衛隊員が外へ駆けつけ、ジェリーの姿を見つけると急いで他の者へ知らせに向かった。

ジェリーたちが火山の入り口に立つと、今度は中からエリザが現れた。

「あなたたち！ どうして勝手な事を！」

「ごめんなさい……」

「うわあ……怒った人こわい……」

「その者たちは僕たちを救ってくれた。どうか、叱責は穏やかにお願いしたい」

「誰ですか！ あなたたちは！ みんなを不安にさせたのですから、それは言って聞かせなくてはなりません！ 口をはさまないでください！」

「……え？ あ……ああ」

親にも怒られた事がないと言いたげな顔で、王子がエリザに怒られている。エリザの怒りが王子の方へと向いている間にも、火山の入り口からメラが現れた。

「じゃ……ジェリー……よかった」

「メラメラ……ううう」

メラの姿を見ると、ジェリーは体を支えていた線が切れたかのように脱力し、倒れ込みながらもメラの体に抱きついた。あれほど平然と戦っていたジェリーが弱さを見せており、その様子にドラゴンはビククリしていた。

「メラメラ……もう離れたくない……」

「甘えんぼだなあ……でも、無事に帰ってきたから許そう」

「……うん」

「ジェリーたちが、帰ってきたというのは本当か！」

メラの父親らしき人物が大慌てで火山の中から現れた。しかし、またしても完全武装していて、顔がマスクで隠れて見えない。それでも視界は良好なようで、ジェリーとドラゴンの姿を目視で確認している。

「……そ……そちらは！王国ガルの王女様と王子様！どうして、このような場所に！」

安心したのも束の間、メラの父親は王子と王女を発見。王子も話の解る者がいたとみて、身分の書かれたプレートを差し出しながら、メラの父親に自己紹介を始めた。

「我々は王国ガルから参りました。僕は王子のゲイン。こちらは女王クリスタ。側近のゼベルでございます。

この度は危機的状况の中でありながら、我が国の危機に救援を向けて頂き、誠に感謝の至りでございます」

「……そうでしたか。ぜひ、お話をお聞かせください。メラ、その子とジェリーを頼む。王国ガル御一行様は、こちらへ。エリザ君も、手伝いをお願いします」

初めはメラの父親を怪しんでいた王女も、マスクを外して顔が見えると、やや不信感は薄れたらしい。ドラゴンとジェリーが何をしでかしてきたのか、どのような戦いがフレイムタウンの外で起こっているのか、情報交換するべくメラの父親は火山の中へと客人をまねき入れた。

ジェリーとドラゴンの事を任されたメラだったが、ジェリーが抱きついて動こうとしない訳で、何もできずに抱きつかれている。

「中、入るわよ。そろそろ離れて」

「やだ……」

「ちつこいのも見てるし、こんな所で恥ずかしいでしょ」

「んん……離れたら死んじゃう」

「……しようがないなあ」

普段よりも3倍ほど聞き訳が悪い為、このままメラはジェリーを背負って中へと運ぶらしい。ただ、その前に。

「火山の人が驚いちやうでしょ。その敵の服は着替えなさい」

「う……うん」

それだけは従ってくれるようで、ジェリーは火山の入り口にて、ドラゴンに預けていたコートに着替える。しかし、やはりメラからは離れたくない素振りで、また後ろから抱きついてきた。

「何があつたのさ……」

「……戦つたら、とても怖い思いをしたわ。もう……メラメラに会えないかと思つたもの」

メラがジェリーを背負って歩き出し、その後ろをドラゴンがついてくる。ただ、ドラゴンの方もジェリーの落ち込みようにショックを隠せず、もじもじしながら近くをウロウロしていた。メラの方はドラゴンの心情が解つたらしく、足は止めずに面白がつて冷やかしていた。

「こんな心か弱い娘を戦線に立たせるなんて、とんだ鬼ドラゴンだなあ」

「む！そんなに心通つてないから、大丈夫だと思つて頼んじゃつたの！たくさん、敵も倒してたから、勘違いしちゃつたの！」

「勘違いですんだら、警察も防衛隊もいらないの」

「黄色コートきらい！」

「結構結構」

ケンカと言う程のものでもない口論をしつつ、3人はエレベータのあった場所まで到着。しかし、エレベータはメラの父親たちが乗っていった為、今はエレベータの置いてあった跡だけが残っている。ここで一旦、メラはジェリーを通路脇の岩に下ろし、自分も腰かけて事情聴取を開始する。

「……何があったのさ」

「……私たちがいなくなつて、メラメラは怒られたりしなかつた？」

「怒られはしなかつたけど、防衛隊の活動が停止したぞ。総隊長は食事中なのに出勤しようとするし、お父さんは火山の地下道を調べると言いだして、なぜか台所の棚をかき回していたし、エリザさんは数少ないジェリーとの思い出を指折り数え始めた」

「……」

混沌とした隊の様子を想像して、どういう顔をしているのかジェリーが迷っている。そこまで心配されているという自覚もなかつたようで、不思議な感情にも襲われている。

「防衛隊の人達、年配の隊員ほど、なぜかジェリーの事を気にかけてるんだよね。うちの父さんも、いなくなつたのがジェリーじゃなければ、あそこまで動揺はしなかつたはずだ」

「……本当の娘じゃないのに」

「どっちにしろ、娘は娘だからね」

「……そっか。うん」

ここでエレベーターが下に戻ってきた。3人で乗り込むと、上に着くまでの時間を使って、今度はメラがジェリーたちの冒険を聞く。

「何が、どうして、君たちは王子や女王や、知らないオジサンをつれてきたのか。その事情を聞きたいものだ」

「うん。ドラゴンさんとトロッコに乗っていったら、王国ガルという国があったの。そこは水の軍団に制圧されていて……もう、城に潜入するしか脱出する方法がなくて」

「……大胆な作戦に出たなあ」

「お城に炎の石の匂いがしたから、取りに言ったけど、なかなか見つからなくて大変！」

「食い意地のはったドラゴンだなあ」

「またバカにした！真面目な話なのよ！もう！」

そうは言いつつも、どうやって火山まで戻ってきたのかは理解できたらしい。続いて、王子たちとの接触について……は興味がないのか、メラはジェリーが何と対峙したのか質問する。

「敵は？」

「……敵の隊長さんと戦う事になって、死んでしまうかと思ったわ。もうメラメラに会えないと思ったら、とても悲しかった」

「ううう……ごめんなさい。ジェリーなら戦っても大丈夫だと思ったの」

「とにかく、あんたはジェリーに無理させない。解った？」

「解った！」

詳細はメラの父親が王子たちから聞くだろうと予想し、それより深くはメラも詮索しない。エレベーターが上まで到達すると、エレベーターを待っていたのか、メラたちを待っていたのか、メラの母親と対面した。

「……本当に帰ってきていたのね。お帰りなさい」

「心配をおかけしました……」

「メラも、これで、ご飯が喉を通るわね」

「だね」

「ご飯が喉を通らない程度には、メラも心配していたとの事。なにはともあれ、防衛隊をかき乱していた問題は解決した。同時にジェリーは別の心配事が頭をよぎり、背筋を伸ばしたままメラに打ち明けている。

「地下が別の国に繋がってるから、水の軍団の人達が地下を通って来てしまうかも……とても危険だわ……」

「それは無理じゃないかな」

「どうして？」

「また気温が上がって、地下が高温のサウナ状態になってるんだ。多分、何人が暖まりがてらに地下を警備してる」

「いいなあ」

「きつと、ジェリーが化け物を倒したから、星が温かくなったのよ！」

メラはドラゴンの推理に無関心だが、ジェリーが変な物と戦ってきた事実だけは、しんと受け止めた。

「ジェリーは、また化け物を退治したの？ハンターなの？」

「育ててもいるわ」

フレイルムタウンで捕まえた、ヌルヌル怪獣入りのピンをジェリーが取りだす。

「気持ち悪いから見せなくていい……」

「何を育てているの？」

「一緒に見よう！私も見るよ！」

「あたしのいないところでやりなさいよ……」

意外とメラの母親が見たがりで、便乗してドラゴンも見たがっていて、メラは見るに耐えがたく壁を見つめている。すると、通りかかった老人が会話に加わり、奇妙な生物鑑賞が長引く事となった。

「……おや、もしや……シロヤモリというやつかあ？」

「ジジイさん、知ってるの？」

「この星にも、まだいたのかあ。初めて見たあ」

「初めて見たのに知ってるの？」

「しかし、思っていたより真っ白でないなあ」

「むむ」

ドラゴンが質問を繰り返すも、その度に疑問は深くなる不思議。知らない人に話しかけるのを億劫にしていたジェリーも、さすがに問い掛けざるを得ない。

「お……おじいさんは、どこでピッピロちゃんの事を知ったの？」

「老岩石に聞いただけだあ」

「老……老岩石？」

「白銀峠の奈落の穴の下にいるだあ。昔、聞いたから知っとるんだあ」

「白銀峠？」

「あごが疲れたあ。ああ……あ……」

声を出し過ぎて、老人はアゴを震わせながら去って行った。残された疑問を無言でジェリーがメラの母親に差し出す、こちらも言葉すらなく首をふる始末。ドラゴンも長く生きていただけで知識は乏しく、ジェリーの期待には応えられそうにない。すると、メラが釘をさすような口調で始める。

「どこにあるか解つたら、探しに行っちゃうんでしょ」

「心当たりはあるの？」

「お父さんなら、少しくらいは知ってるんじゃない？」

「……そう」

「……聞くなら、後にした方がいいよ。今は接待で忙しいだろうし」

ジェリーは心配をかけた人であるから、メラの父親に話しかけるのが怖いのだ。怒られた事がないせいで、余計に怖い。ちなみに母親からも叱られた事がなく、その理由はジェリーが他人に迷惑をかけた事がないからである。

「メラの言う通りよ。ジェリーは防衛隊員ではないのだから、危険な事はしないでね。立ち話も疲れるでしょう。料理は持って行ってあげるから、部屋で、お休みなさい」

「そうだそうだ。お休みしよう」

「あんたは眠くなっただけでしょうが……」

「まぶたが重い……」

メラの母親に心配されて、どこか恥ずかしげなジェリーの横で、うつろ目のドラゴンは早く部屋に行きたいと訴えている。それどころか、訴えているそばから座りこんで寝てしまっている。今回はジェリーも疲労感が透けて見え、さすがに任せられないと察したメラがドラゴンを抱え上げた。

「あたし、2人を部屋まで連れてくよ」

「よろしくね。メラ」

ここで母親と別れ、メラはジェリーと共に石ころだらけの坂へ足をかけた。その先はT字路になっていて、左に進むと山肌へ、右に進むと火山の中央へ出られる。山の外側を回って火山の内側へ入り、多くの部屋が並ぶ休憩所まで向かう。

「怪獣の名前、ピッピロちゃんはないんじゃないか……？」

「……え？かわいいよね？」

「ピッピロちゃんはないよ……」

どうも、メラはジェリーの育てている謎生物の名前が気に入らない。名前以外も気に入らないのだが、今は名前が最も気に入らないのだ。

「じゃあ、なんって呼べばいいの？」

「……クネクネくん」

「かわいい……」

こうして、めでたくピッピロちゃんはクネクネくんになった。そんな会話をしている内、2人は休憩所の自室

へと辿りつく。メラが片手で器用に鍵を取り出し、鍵だけを開けてドアはジェリーに任せた。

「ちよつと、開けてくれるかな？」

「うん」

小さな部屋にベッドは2つあって、右のベッドにドラゴンを転がす。左のベッドにジェリーとメラが座ると、周囲の目がなくなつて気負うものもなくなつたのか、ジェリーがメラに抱きつきながら倒れ込む。

「わっ！ どうした？」

「うう……怖かった。ちよつとだけ、こうしていてもいい？」

「……怖かつたつて言つて、ほんとは甘えたいだけでしょ」

「……イヤ？」

「どうせ、このまま寝ちゃうんでしょ。いいわよ。別に」

「ありがとう……」

「……もう、勝手にいなくならないでよね」

そういつつ抱きつかれていたメラだったが、ジェリーより先に眠気にを負けた。おかげで、ジェリーもメラの抵抗を受けずに添い寝していた。

母親が料理を持ってきてくれるまで、部屋の鍵は開けっぱなし。メラの母親が無音で部屋に入って、静かに料理を置いて、2つある鍵の一つを持って外へ出ていった。よほど疲れていたのか、珍しくメラが目をさますまでジェリーは起きず、ドラゴンも意識がありそうな動きだけをしていて、本当は眠っている。

先に眠りから覚めたメラはジェリーの腕から脱出を計るも、強く抱きしめられていて一筋縄ではいかない。そ

のため、コートの中から抜け出し、コートを匜にしてベッドから逃げ出した。

「……あ」

すでに温度の低くなった料理を発見し、メラは迷うことなく好ましくない食べ物を他の皿へと移しだす。ただ、すぐにジェリーがメラの不在に気づいたから、その作戦は6割がた失敗に終わった。

「あ、また嫌いな物よけてる……」

「じゃ……ジェリーが好きだから、プレゼントだよー」

「そう……ありがとう」

「そう言われると、逆に申し訳ない気持ちになるからやめてよ……」

改めまして、2人は料理をヒザに乗せ、ベッドに並んで座る。目の前で寝ているドラゴンに遠慮する事もなく、普通の音量で会話を始める。

「ジェリー、あたしがいなくてもさ。あれと王子様たちを守って、戦って逃げてきたんだ」

「運が良かったのよ……あぶないところで、何度も助かったもの」

「うわぁ……ねるぞー！ねるぞー！」

あれが2人の目の前で、うるさく寝言を発している。

「もう寝てるじゃん……」

「炎の神殿に一人でいる時も、こんな感じだったのかしら」

まあ、そんなのは、どうでもいい話である。

「ジェリーは凄いいね。正直、なんの役に立つのか解らない科学実験を続けて、それでフレイムタウンの人達

や、王子達まで助けてさ。もしも、ジェリーが炎の神殿にあった最終兵器だったとしても、割と信じちやうかも」

「それはないわよ……それに、最終兵器じゃなくて、最終破壊兵器でしょ？」

「そうだったけ？」

「うん」

「……決めた。あたし、ジェリーが家に来た時の事、お父さんに聞いてみる。ジェリー、本当に昔の事、まったく憶えてないんだよね？」

「まったく」

「そうだよ。行こう。これ食べたら」

「……うん」

決心だけは固まった次第、やっと膝の上で待機している食べ物を食べ始める。以前と比べて白石が料理から減っており、代わりに灰色のクズ石が使われている。それでも栄養のあるものを食べさせたいという願いからか、皿には一つずつ大きな青鉱石が乗せてあった。

「あたし、青鉱石は好き。鉄は嫌い」

「私は鉄も好き」

などと呑気に食事をしていると、部屋のドアをノックする音が聞こえてきた。ただ、ノックした相手は鍵を持っていてらしく、問答無用で部屋のドアを開けた。

「メラ、ジェリー。おつ、食事中か。唐突で悪いが、少し話がある」

「お父さん……ジェリーって、どこで見つけてきた子なの？」

ゴロゴロしているドラゴンの足元に座り、メラの父親が2人と向き合って語り出す。

「どうした……急に。ジェリーを見つけたのは、炎の神殿へ遠征に出た際の事。メラは小さかった……年齢の幼かった頃だな。ふと、私は隠された通路を発見し、炎の神殿の地下へと下りた」

「変な音楽が鳴る通路でしょ？」

「見つけたか？」

「まあね」

「あれはロストテクノロジーを感じた」

「あたしも」

親子でロマンを分かち合っているが、ジェリーは自分の正体を早く知りたい。

「私……どこで発見されたの？」

「更に下へ降りると、ガラスの棺にも似た入れ物があった。その中で、眠っていた少女がジェリー、君だ」

「うおー！うおー！」

「ジェリーの大事な話をしてるとこなんだけど、ドラゴンの大きなイビキで台無しだ」

「すまないが、少し遠ざけよう」

ドラゴンのイビキが会話に干渉してくるから、メラの父親がドラゴンを転がして遠ざける。改めて。

「突然、炎の神殿が地響きのような音を立て、大きく振動を始めた。その場は危険と判断し、隊の者達でケースを破壊。眠っていた少女を救出した」

「その時、他に何か入ってなかった？」

「ジェリーの他にか？」

「うん」

「……いや」

「ほら……やっぱり、ジェリーが最終破壊兵器なんだよ」

「最終破壊兵器とは？」

「そのケースの中に最終破壊兵器が入って、それをドラゴンが守って……守ってなかったけど、守るよう言われてたんだと」

「つまり、ジェリーは爆発でもするのか？」

「その予定はないけど……」

「そうか……ジェリーが……」

何を納得したのか定かでないが、メラの父親は考え込む仕草でジェリーを見つめている。ただ、最終兵器と思われる人物が照れており、そんなに危険な雰囲気じゃない。そこで、無難な回答をメラの父親が取りだす。

「古代の民族は水の軍団が侵攻する事実を知り得ていて、対抗する知恵としてジェリーを残してくれたのだからか」

「ジェリー……何歳なの？」

「いつの時代の人なのかしら……私は」

父親に聞けば解決すると、たかをくくっていた問題が、まったくもって解決しなかった。それどころか、深まるばかりの謎には沈黙する他ない。ところで、メラは聞きたい事がある様子。

「そういや、なんでジェリーの事、あたしに内緒にしてたの？」

「……秘密にする気持ちはなかったのだが、説明できる程、こちらも知識がなかった。そして、神殿で少女が眠っていたと告げられて信じる程、メラはピュアな子でもなかった」

「ふん」

「そこで今回の件だが、地熱の源を調査してみようと計画している。星の温度が上昇する切っ掛けについて、何か心当たりはないか？」

「つまり、何をしたら温度が上がったかって事？どうなの？最終破壊兵器さん」

「そうね……火山の周りの水が少なくなったからとか？」

最終破壊兵器いわく、地面にある水が減ると、地面の熱が上がるのだとか。しかし、そのような当然の事をメラの父親は聞きに来た訳じゃない。

「現在までに二度、爆発的に気温が上昇した。一度目は炎の神殿へ向かったメラとジェリーが帰還した時。二度目はジェリーや王子様方がドラゴンと共に戻った時だ。何か、特別な行動はなかったか？」

「……あ、炎の石。あれをドラゴンさんが食べてたわ」

「炎の石とは？」

「石の中に炎が入ってるような……不思議な石よ」

「本人を起こせば？こらー、起きろー」

「わ……うああー！」

メラは普通に呼びかけただけなのだが、ドラゴンが驚き余ってベッドから転がり落ちている。メラの父親がド

ラゴンの手を持って引つ張り上げると、気を動転させてドラゴンがメラの父親の横へ落ち着く。

「落ちた……ビックリした……」

「さて、炎の石について、お聞かせ願いたい」

「……え？ 炎の石は食べると、体ぽかぽかするから好き」

「それ以外の効果は？」

「でも、ちよつと辛いよ。でも、もし見つけたら持つてきて！」

「そうか。これらの話は隊の者たちへも報告しておく。次の作戦も、メラは火山で待機。本拠点の防衛を頼む」

「あたしは待機か……よかった。他の人達は？」

「三隊に分かれ、炎の神殿、黒鋼峠、王国ガル周辺の調査へ当たる。私はエリザ君たちと黒鋼峠へ向かう」

「黒鋼峠？ そこ、何かあったっけ？」

「ご老人からの情報によると、古代文明の遺跡が存在しているらしい。ジェリーの過去についても、何かしら進展がある……かもしれない。期待して欲しい」

得たい情報は大方、知り得たようで、メラの父親は足腰に力を込めて立ち上がった。最後、忘れていたとばかりに振り向き、ジェリーが着て帰ってきた服について承諾を求める。

「火山の入り口に脱ぎ捨ててあった服なのだが、拝借しても構わないだろうか。水の軍団の服と見られる。水への耐性があるかも解らない」

「ええ」

「ありがたい」

成すべき事を済ませ、メラの父親が部屋を去る。その後になって、ジェリーは自分の聞きたかった事を思い出した。

「私、老岩石について聞き忘れたわ……」

「追いかければ、まだ近くににいるんじゃない？」

「でも、まだ料理を食べ終えていないわ……」

「あれが盗み食いしないよう、見てあげてよ」

「もう一人、食べそうな人がいるけど……」

「そんな人はいない。さっさと行った行った」

「はい」

けれども信用はないようで、青鉱石だけ手に持ってジェリーは部屋を出た。青鉱石を舐めながらメラの父親が向かっていそうな方向へ歩くも、一向に姿は見当たらない。

火山の上へ行ってしまったと見て諦め、来た道をとぼとぼ戻り始めた。すると、向こうから防衛隊のエリザが歩いて来た為、そそとして道の端に寄ったのだが、どうやら相手はジェリーに用があるらしい。走って逃げ出すが、あつという間に肩を掴まれた。

「ジェリーさん。お話が」

「あ……はい」

「あなたの事が知りたい。あの武器を持って、一人で火山の二層にある採掘場まで来てください」

「でも……メラメラに相談して……」

「他言は無用。司令の娘さんには関係のない話です。それでは」

ここでは話しくい事なのか、本題には入らずエリザとは別れた。断れる状況ではなかったにしろ、言いたい事を残したまま、ジェリーはエリザの後ろ姿を見送る。やっかいなイベントが増えてしまい、重荷を背負ったような足取りでジェリーが部屋へと戻る。

ドラゴンは自分の分の料理を食べており、ジェリーの残していった食べ物も同じ状態で残っている。しかし、もはや食欲も失せてしまい、ジェリーは食べかけの青鉱石をメラに託す。

「これ、あげる」

「いいの？ラッキー」

ジェリーが落ち込んだるとか、そんな事には勘づきもせず、もらった石をメラは嬉しそうに舐めている。ところで。

「で、お父さんは見つかった？」

「見当たらなかったわ。でも……」

「でも？エリザさんかガルムさんでも見かけた？」

「う……うん」

「ガルムさんは、すれ違うだけでも怖いけど、エリザさんは普段は優しいよね」

「そうね」

優しいエリザさんと、少し話をするだけ。そう割り切ったら気持ちが悪くなったのか、ジェリーも食べ残しに手をつける元気がでたようだ。約束の時間は指定されていないものの、相手より遅れると都合が悪い。コートと

注射器を準備して、静かに部屋を出ようとす。したら、寝転がっているメラに呼びとめられた。

「どこ行くの？」

「お腹が、いっぱいになったから……少し散歩でもと」

「あたしも一緒に行こうかな」

「え？それは……ダメ」

「なんで？さみしくない？大丈夫？」

「一人になりたいの……」

「さつきは離れたくないって言ってたのに……」

「う……すぐに戻るから」

こういう時に限って、なぜか甘えてくる人もいるものである。ただ、あまり詳しくは説明できず、逃げるようにしてジェリーは部屋から出ていった。その後、メラが地味に落ち込んだのは語る必要のない話である。

待ち合わせ場所は火山の二層。下から二つ目の地層にある採掘場で、休憩室からの道程でいえば、まずは長い坂道を下って行き、エレベーターに乗る……のだが、またしても動いてくれない。そろそろ作り直すべきボロさだが、まだ大丈夫まだ大丈夫と先延ばしにしてきたツケである。

階段で火山の四層まで下り、中央に溶岩が溜まっている場所から山肌へ出る。青空が綺麗だなーと視線を投げながら崖に沿って降り、3つ並んで見える横穴の近いものへと入る。すると、無造作に鉄の樽が置かれている部屋であった。次の穴は道として続いていて、奥の暗い場所には朽ちかけの階段が設置されていた。その下が採掘場となっており、立ち入り禁止の看板が裏返して置いてある。

「わあ」

鉄の棒が組んである出入り口をくぐると、その先には天井の高い広々とした場所があり、始めて来たジェリーは不意に声を出していた。部屋の面積としては広いのだが、あちらこちらに石くずが山となっており、あまり見通しはよくない。

先にエリザが来ているのか解らず、中央へ向いて歩いていると、上の方から石の転がる音。ジェリーが音の方へ目をやる。何かが飛びかかってくるのを知り、ジェリーはヘッドスライディングさながら回避する。

「なな……なに？」

速やかに振り返ると、どこかで見おぼえのある姿がある。それが水の軍団の服だと解ると、更に状況も解らずジェリーは逃げ出した。

「……え？ええ」

これだけ至近距離で接触してしまうと、身を隠したところで意味がない。すぐにジェリーは向き直り、敵を遠ざけようとする。

「ハイドロウォール！」

とりあえず、ジェリーが水の壁を噴き上げる。相手は怯む動作こそ見せるが、すかさず大きな刃物で水の壁に斬りかかった。切れ味とは関係なく、刃物の降られた勢いで壁は吹き飛び、波となつてジェリーの元へと返る。ジェリーは近くにあった立て札の裏へ入り、水しぶきだけ防いだ後に立て札を叩き飛ばす。

「ハイドロハンマー！」

水と鉄板の勢いで敵は押されるも、刀身が鉄板から突き出しており、すぐに勢いは殺されてしまう。突き刺し

た鉄板を振り払い、敵が接近してくる。その頃にはジェリーも石山の裏へと入っており、目の前の岩山へ水をぶつける。

「ハイドロジェット……バスター！」

石つぶてが弾丸となり、その大量が敵を襲う。もはや土煙と泥で何も見えないが、ジェリーとしては手ごたえがあったようで、攻撃の手を緩める。敵の姿が現れるより先、ジェリーは採掘場の出口を目指した。

「……あっ！」

走る足に投石を受け、もたれてジェリーが転がる。駆けてくる敵の姿に慌てながらも、次の技を準備すべく、スイッチを押す。しかし、今度は別の人影がジェリーの前へと躍り出て、面した敵も走る足を止めた。

「エリザさんですよ？何が目的ですか」

「メラ隊員……ごめんなさい。手加減はしていたのですが、思いの外……」

メラに火器を向けられると、敵は深く被っていたカブトを持ち上げ、紅潮した顔で言い訳を始めた。現行犯はエリザだが、共謀犯もいたようで、総隊長が武器を携えて現れる。そちらが何か言う間もなく次に司令官が登場し、血相を変えて怒鳴り出す。

「何か企んでいると思えば、このような真似を！その武器について探りたいのならば、ジェリーに直接、尋ねれば済む話でしょう！」

「ジェリー……大丈夫か？」

「うん……」

メラに助け起こされ、ジェリーは状況説明が欲しそうに司令官を見つめている。すると、悔い改める事のない

大声で総隊長が説明してくれた。

「耳にする活躍や王国ガルー一行の話聞く内、その武器については把握しておかねばならん事柄と考えた。だが、我々が問い掛けたところで、ジェリーが素直に武器の力を見せるとは思えん」

「総隊長！ジェリーがネクラだからって、こんな乱暴しなくても……行こう！」

「う……うん」

後の事は父親に任せる事としたようで、メラはジェリーをつれて採掘場から出る。ジェリーはネクラな自覚があるらしく、そこに関しては遺憾ない。採掘場の出入り口にはドラゴンがいて、やや困惑気味にメラとジェリーの後ろをついてくる。

「敵じゃなかったの？なんで戦ってたの？」

「あの人たち、あらゆる面で短絡的なんだよ。お父さんが怒ってたから、強く言い聞かせてくれるだろう」

「そっかあ。でも、あのエリザとかいう人……敵じゃなくてよかった。ジェリーが全く敵わなかったもん」

「あたしだって、襲われているのがジェリーじゃなかったら、武器もって出て行きたくなかったよ。あの人を止められる隊員なんて、街にも3人くらいしかいないんだから。普段は優しくして良い人なんだけど……」

「ふん」

メラとジェリーの全体的な強さが把握できたのか、ドラゴンは解ったような素振りで見ている。その会話が終わるのを待って、言い出しづらそうにジェリーが呟いている。

「でも……メラメラが助けに来てくれて、王子様みたいでカッコよかった」

「王子を助けてきた人が、何を言ってるんだ……それと、ジェリーは命乞いする事をおぼえるんだ。王子達だ

って捕虜にされてたんだから、敵わない相手になら降伏した方が安全でしょ」

「うん」

「解ったなら、部屋もどるよ」

「うん」

後ろから聞こえる父親の叱り声を遠ざけながら、さつきジェリーが来た道を元通り歩いて部屋へと戻る。隣を歩くジェリーが精神的に参って見えたのか、わざとらしい程の軽い口調でメラが話します。

「でも、エリザさんと戦って、よく攻撃までこぎつけたよね。他の隊員は、およそ出会った一瞬でやられちゃうのに」

「手加減してくれてたみたいだし、攻撃するつもりはなかったんじゃない……」

「最初の方は、よく見えなかったんだけど、看板をぶつけた辺りから、あっち戦闘モードだったよ……絶対」

「………そういえば、いつから見たの？」

「………心配だったから、ドラゴンと2人で後ろをつけてきたんだよ。最初は何でエリザさんがジェリーを襲ってるのか解らなかったんだけど、やばそうだったから助けに入ったんだ……ドラゴンには、お父さんをつれてくるように出して出した」

「そうだったの………本気だったって解ったら、今さら怖くなったわ」

「今回みたいな事、今後はないだろうし、あたしも、お父さんも注意してるから心配いらないよ。一つ言っておくなら、戦場で逃げるなら、ガルムさんのいる方に逃げた方が安全。エリザさんは攻撃が大胆だから、近づく  
と危険だし」

「ガラムさん……火山の裏にいた人よね？」

「うわあ……あの人も怖い……もつとマトモな人いないの？」

「あたしの経験からして、強い人ほど、どこか頭おかし……変な人が多いような印象。ガラムさんで観念しな  
さっ」

「メラメラが言うなら……安全な人なのよね」

「ううう……強い人こわい……」

意外と防衛隊が役に立つと解った代わり、気安く近づいてはならない危険な人達だと発覚してしまった。もう、出歩いても良い事がありそうもなし、ジェリーは暫く部屋で休憩するようだ。そして、ここにおいてもジェリーの高感度を上げるくらいしかやる事もなし、メラは野暮な用事を作って部屋から出る事とする。

「そうだ。老岩石と、フレイムタウンにいた謎生物について聞いて来てあげるよ」

「クネクネくんも持っていた方がいいかしら？」

「それは止めておく……ドラゴン隊員は、ジェリーが変な人に連れ出されないよう見張っておくんだぞ」

「え〜……じゃあ、おみやげ持ってきて」

「石炭くらいなら拾ってくるよ。日が上がりきるまでには戻ると思う」

「やった。早く行ってきて！」

ジェリーのケアはドラゴンに任せて、メラは防衛隊の臨時拠点となっている火山の上層を目指す。メラと同じく火山で待機となった歴戦の隊員達が隅の方で雑談しており、そこで情報の調達を計る。

「今、ちよつといいですか？」

「おうおう」

「お尋ねしますが……老岩石って、どこにあるか知ってます？」

「あれだ。奈落にあるという。話す岩じゃ」

「岩が話すとは、にわかには信じがたいですね」

「おい、ハゲ！ゲンさん、こっち呼んどくれや！」

「おうい。ゲンさん」

髪のない老人が鈍く立ち上がり、壁に寄りかかって寝ている肌の黒い老人を呼ぶ。その眠っている老人は下の層でクネクネくんについて教えてくれた人と同一人物で、傍目に見れば生きているのか疑わしいが、ややレスポンスも悪く呼ばれた方を向いた。

「なにぞや？」

「ゲンさん。老岩石ってのの話が聞きたいらしいが。どうだ？調子いいかの？」

「おお……おお……」

禿げた老人に手を借り、みんなが集まっている場所へとゲンはつれていってもらおう。しかし、いざゲンを連れてきたものの、あまりテキパキとは喋れない様子。そこで、周囲の面々が彼から聞いた情報を出し始める。

「老岩石つつーのは。大昔の戦争の最中、ゲンさんが白銀峠の奈落で遭難した際に見た岩だと。巨大な岩石に顔のようなもんがあつて、ひび割れた姿が老人に見えたのが名の由来と」

「白銀峠？あたしは遠征に出た事のない場所だ。黒鋼峠とは別の場所なの？」

「そりゃあ、黒鋼峠の上の方じゃ」

「上の方なのに奈落って……おかしくない？」

「解らん。ゲンさんの話じゃ、そうなつとるんだ。ゲンさんも生き字引だもんで、なんでも知つとるはずだが、口が上手く動かんのだのう」

「なら、他に誰も老岩石を見た人はいないんだ？」

「ねえな。でだ。遭難中、脱出の道筋が発見できるまで、ゲンさんは老岩石の言葉を聞いたそうな。話をしたというより、無造作に取りだされる言葉を得たんだと」

「ふくん。じゃあ、クネクネくん……シロヤモリについても、その老岩石が言ってたんだ」

「んだな。この星の歴史は、ゲンさんが聞いた老岩石の言葉を頼りに書かれたもんだ。そろそろ、情報を更新する時期かもしれん。が、この村で学がありそうなもんじゃないやあ、司令官先生くらいなもんだ」

「あたしも勉強は苦手だ……でも、そういうのが得意な人は身近にいる」

「新世代。頼りにしとつぞ」

「うん。それじゃ、これで失礼します」

結局、ゲン本人からは何も聞かないものの、必要な知識は得られた。軽い足取りで部屋へと戻る途中、燃料保管庫に寄って大きめの石炭を拾っていく。部屋の鍵は閉まったままになっていて、メラは持っている鍵を使って中へと入った。

「……メラメラ？おかえりなさい」

「核心はつかないまでも、面白い話は聞けた」

「黄色コート！おみやげは!？」

「これでいい？」

「これこれ。これよ」

石炭をドラゴンに渡すと、じゃれるように部屋の隅へ持っていく、息で火をつけて暖まり始めた。これで静かに話ができる訳で、メラはベッドに座り込み、仕入れた知識をジェリーに渡す。

「まず、老岩石つてのは白銀峠という場所の奈落にあつて、白銀峠は黒鋼峠の上の方にあるらしい」

「つまり、黒鋼峠が上がってから、白銀峠の中を降りればいいの？」

「うん。ゲンさんつていう人以外は行った事がないから、どういう構造になつてのかは解らないんだけど……そうなのかもしれない。しかも、脱出するには一くせあるみたいなんだ。それと、老岩石つてのも会話ができる岩じゃなくて、ぶつぶつ独り言を言つてる岩なんだと」

「そうなの？変なの」

「そうそう。変なのよ。こんな変なの、調査できる人なんて、お父さんとジェリーくらいだと思うんだ」

「お父さんたちが良いつていうなら……行つてもいいよ？」

「いいの？」

「メラメラも来てくれるなら……」

「そうだよね」

そこまでの問答は予想通りだったようで、ためらう素振りもなくメラは話を流す。

「多分、この水の軍団事件の端っこの片隅くらいには、地味にジェリーが関わつて、それには防衛隊の人達というか……お父さんも薄々は感じていて。でも、ただ単純に、あたしはジェリーが誰なのか気になるの。OK？」

「私も、自分が誰なのか地味に知りたい」

「OK。それじゃあ、黒鋼峠へ向かう隊に混ぜてもらえるよう、お父さんと総隊長に伝えてみよう。こらっ…  
…そこで人事みたいに聞いているけど、お前も行くんだぞ」

「ふっ…え？なんで？」

無頓着なドラゴンをメラが指さすと、あつちは本気で理由を知りたいという表情のまま振り向く。その理由は簡単である。

「お前が最終破壊兵器を守ってなかったから、事が大きくなった節もあるんだぞ。ちよつとは手伝いなさいよ」  
「守ってたの！守ってたけど無くなっただけ！」

「…それはそれで反省しなさいよ」

「ぬぬ……」

反論不可能につき、ドラゴンの負けである。何も言い返さず、本意を体で表すかのように石炭の火へあたっていた。そういうえげと、代わってジェリーがドラゴンに問い掛ける。

「あなた……神殿の人達と会った事があるのよね？その人達は……私に似ていたのかしら」

「ん？こんな黒ずんだ宝石みたいな人、見た事ないけど」

「その例えは喜びにくいわ……」

「そもそも、ほめられてないぞ。でも、だとしたら……ジェリーは昔の人たちじゃないのか？」

「昔の人達は水とか飲めたけど、ジェリーと黄色コートは飲めないんでしょ？」

「……え？どういう事？」

何気ない返答にジェリーが不安そうな反応を示した為、ドラゴンも不思議と姿勢を正して答える。

「私が寝てる内に、この星は水がなくなつてたの。昔より、あつたかくなつたから、私は嬉しいんだけど……景色は緑がなくなつて寂しくなつちやつた」

「だったら……パンつてなんだか知ってるのか？」

「あれでしょ？ごはんだよ！やわらかくて白くて軽いやつよ！」

「……か……軽石かな？」

メラの疑問に対し、ドラゴンが当たり前というふうで返答している。メラとジェリーは混乱する仕草で俯いた。ドラゴンは説明が上手くなく、これ以上は聞いても無駄だと見て、メラもジェリーも残りの疑問は未だ見ぬ老岩石へと託した。

思い立ったら、すぐ行動。メラは父親への直談判にジェリーを誘いつつ、小さなバッグだけ持って立ち上がる。

「早く言わなきゃ、置いて行かれちゃうかも。行こう」

「うん」

「私は部屋にいる」

「メラメラの、お父さん……まだ下にいるかしら」

「説教しても効果ないって解ってるから、もう上に戻ってるでしょ」

「うう……やっぱ行く！」

ドラゴンが部屋への残留をほめかしてみるも、誰も誘ってくれない。さみしくなり付いて行くと言いますが、やはりメラもジェリーも構ってくれない。いつも適当な事ばかり言っているの、身から出た錆なのである。

メラが老岩石の話を聞きに行った時と同じ道のりの上、ドラゴンが思い出したかのように王子たちの話を持ち出す。

「私が助けた王子達、どこに行ったのかしら？ほうびの一つも欲しいわよ」

「多分、VIPルームだよ。王子と王女と……もう一人も偉そうだったし」

「……そんな部屋が火山にあるの？」

「……ないや」

メラは自分で言っておいて、ジェリーに指摘されると、ただちに否定した。そんな実のない話をしながら、ぶらぶら歩いていると、話題的であった王子達一行がメラの父親と共に歩いて来た。

「王国ガルー行様。こちら、VIPルームとなっております」

「ありがたい。互いに過酷な環境の中、最大の計らい、感謝いたします」

大層な言葉を添えて、メラの父親が王子達3人を小部屋へ案内している。さすがに部屋は3つ貸し出すようで、複数の鍵を手にしていた。王子と王女は礼をして部屋へ入り、その後側近の者はジェリーとドラゴンを睨みつけてから、メラの父親へ言い放つ。

「水使いと、空を飛ぶ化け物は得体がしれぬ。ここへは近づけぬよう心得なさい」

「……承知いたしました」

メラの父親から鍵を受け取り、側近のデベルも部屋へと入る。直前の発言にジェリーとドラゴンはノーリアクシオンだが、代わりにメラが激怒している。

「なんだ、あれは。助けてもらった側の発言にしては強気だ。2人とも、何か言い返しても良かったんだぞ」

「でも、メラメラが代わりに怒ってくれるから……」

「そ……それでいいのか？」

「うん」

「また2人だけで仲良くしてる……むむ」

もつと構って欲しいのだが、意図せず仲間はずれにされており、ドラゴンは不服な様子。その一方、父親は現状に満足していると見られる。

「昔、ジェリーを家に連れてきた時は近づきもしなかった娘だが、ここまで今は互いに支えあっている。父親として感謝している」

「仲良すぎて、私が入って行けない……」

ドラゴンの存在感が薄くなっている事に興味もなく、ジェリーがメラの父親へ訴えを始める。

「あの……お父さん」

「なにかな？」

「……私も、自分の事が知りたい。黒鋼峠の調査に同行したいの」

「……よかった。先程、総隊長からジェリーを貸してほしいと要望があったのだが、丁重に断りを入れたばかりなんだ」

「総隊長、強いやつ大好きだからね……あたしも一緒に行くし、絶対にジェリーを守る。だから、お願い。お父さん」

「そうか。まあ……ここだけの話、お前も貸し出して欲しいと何人かから頼まれたが、そちらも断固として拒

否した」

「目をつけられた……やっかいな仕事を押し付けられるのはゴメンだ……」  
なんでも引き受けていると、司令官やエリザのように使われてしまうのだ。

「むむ……私も王子とか乗せて助けたし、評価してほしい……」

「拠点を守る壁にされかねないぞ……やめときなさいよ」

メラの意外な人気が発覚しつつも、黒鋼峠への出向には賛成をもらえたようだ。念の為、同行するメンバーも尋ねておかねばと、メラが小声で父親に聞く。

「……誰が一緒のチーム？」

「峠は道が狭く、入り組んでいる。地形を把握している者と、少数精鋭で向かう。二番隊隊長コハク君。三番隊副隊長エディ君。東門警備のファルファ君。火山裏警備のガルム。そして、私。以上のメンバーで臨む」

「メラメラ……全員、男の人なの？」

「コハクさんとファルファさんは女の人だよ。コハクさんは姉御肌で、お父さんより少し年下。エディさんとファルファさんは優しいし、強くて頼りになるよ。でも、よくガルムさん来てくれるって言うてくれたね」

「お父さんはね。弱みを握っているから、ここぞという時に助けてもらえるんだぞ」

「おだやかな顔で言われても、娘として複雑だ……」

「とにかく、非戦闘員であるジェリーを含む特殊なチームとなる為、戦力面でのフォローは最大限に努める。その点は安心しなさい。作戦決行は後々、五つ目の星が空に現れるのを合図にする」

「夜に出るんだ？珍しいね」

「道中、ザルバ溪谷を通過する。あの地の獣は夜目の効かないものが多い」

「なるほど……それじゃ、夜までに準備しておくね」

「粗相をすると、コハク君に渴を入れられるぞ。気を引き締めておきなさい」  
作戦概要を得て、メラ達は父親と別れた。そういや、ドラゴンが。

「……あっ！私、行くなって黄色コートのパパに言っただし！」

「問題ないよ。いてもいなくても同じだし」

「さつきは来いって言っただのに！」

「来るっていう行為が大切なんだよ。気持ちっていうのかな。責任とかさ」

「む……難しい事を言われたら何も言い返せない！」

ドラゴンは意外とマジメだから、論点をずらされてしまうと、何を言い返したらいいか解らなくなってしまうのだ。メラと初対面した当初はジェリーも気圧され気味だったのだが、今では適当に頷いておけばいいと気づいて、とても楽である。そんなジェリーが、出発までの予定をメラに尋ねる。

「これから夜まで、どうしよう」

「あたしは燃料の補給も済んでるし、かといって探索ポイントの情報も今以上には集まらないだろうし……また寝ておくしかない」

「え？また寝るの？たくさん寝たから寝れない……」

「あんたは神殿で、ずーっと寝てたんだから、また寝るくらい簡単だろうが」

「まくら変わると寝れない……ジェリー、抱き枕して」

「……3人で寝ましょう」

そんな、やりとりがあり、部屋で夜まで仲良く眠った。まあまあの方が過ぎ、やかましくドアを叩く音が聞こえ、それに驚いてドラゴンが目覚めると同時、ジェリーも横になったまま細工している手を止めた。メラは依然として眠っている。ドラゴンはジェリーと目を合わせた後、広げた両手でパタパタとメラを叩いた。

「ドアから怒ってる音がするの！黄色コート！起きて！」

「……」

「……死んでる。ジェリー……おねがい」

「……私が開けてくるわ」

睡眠時間を考慮した結果、殴ったってメラは起きないと判断し、諦めてジェリーがドアへと近づく。ドアのノブについた鍵を捻ると、叩かれた勢いでドアが開き、とっさにジェリーが後ろへ避難する。

「出撃の時まで、残り僅かだ！いつまで眠っている！」

メラの母親より少し若そうな女の人が、口から煙を吐き出しつつ部屋へと侵入する。その人はジェリーを横目で見るも、眠ったままのメラに意気りだした。

「メラ隊員！起きろ！さもなければ、引きずって放りだす！」

「……」

「父親に似て、ふてぶてしいやつめ……お前たち、こいつの武器を運搬しろ！」

女の人はメラの首を掴み、本当に引きずって部屋から退出。ジェリーとドラゴンは言われるがまま、その後を追った。

「ジェリー……あれ誰なの？黄色コートの何？」

「……いえ。知らないけど」

「聞いてみて……おねがい」

「う……ううん」

メラを引きずっている女の人はエレベータのある場所へ向かっており、振り返る事なく前進し続けている。どこの誰なのかはジェリーにも解らないが、メラが着崩しているのと同じ防衛隊支給品装備をつけている為、敵でない事だけはジェリーにも解る。とはいえ、有無を言わせない迫力に負け、2人は質問を投げかけられないでいる。

エレベータ乗り場近辺の窓から外を見ると、空は薄紫色であった。つまり、集合の時刻までは少々の余裕がある。ここで勇氣を持って、ドラゴンが憤りをぶつけてみる。

「まだ外が明るい！まだ少し寝れたけど、なんで起こしたの！」

「予定より早い行動を心掛ける！あらゆるミスへ対処できるよう、迅速に行動しろ！」

「……ん？なにになに？」

「……ギリギリに起きると、忘れ物があったりした時に取りに戻れないって話だと思う」

「飲み込みの早いやつは好きだ。解らないやつは無理にでも飲み込んでおけ！」

「むむ……私、食べ物とか飲み込むの早いから、好きって言われたかもしれない」

ジェリーの補足を受け、ドラゴンが女の人の説教を都合よく飲み込んだ。その後はエレベータの中まで沈黙を持ち込み、謎の女の人と、エレベータの床に転がされたメラと、もじもじしながら女の人を見ているドラゴンと、

メラの荷物を持ちながら緊張しているジェリーが、エレベーターが1階へ到着するのを待っている。  
エレベーターは移動中です。しばらく、お待ちください。

……

……

……

一階へ到着する。女の人はメラの足首を掴み、再び地面とメラを擦り合わせながら運ぶ。ドラゴンとジェリーも後を歩き、火山の正面出入り口にメラの父親がいるのを見つけ、ちよつとばかりの安心を得た。

「司令官！お前の娘は、どうかしている！目を覚ます気配もない！」

「頭が良くないなりに、考えを巡らせて疲れたのでしょうか。他のメンバーが到着するまで、寝かせておいてください」

「未だ集合に至っていない者がいるのか？おいつ！ファルファ隊員！」

「コハク隊長。わたくしめは、こちらに」

声に引かれて目をやると、火山の出入り口近くにいる細身の女の人が手を揚げています。その会話から、ジェリーは2人の女の人が任務に同行する隊員だと察した。

「エディ隊員とガラムが不在か！気が、たるんでいる！司令官、言い訳ぐらいしろ！」

「エディ君には支給品を取りに行ってもらいました。ガラム隊員の事は解りません」

「誘ったのであれば、所在地くらい把握しておけ！」

「左様ですね」

適当な言葉で司令官に話を避けられ、コハクは足を組みながら近くの岩へと座りこむ。そこへファルファが砲火器を差し出し、それを受け取ったコハクが、口から出している煙を武器へと吹き当てつつ拭いていた。

司令官もバッグの中を整理しており、他の事には気が向かない。仰向けに投げ捨てられているメラの体を運び、ジェリーが火山の出入り口脇にある壁へと背もたれさせる。他に居場所が見つからず、当然のようにドラゴンもジェリーの横に居座る。

「司令官せんせー！こちらでヨロシカッタでしょうかー！」

火山の奥から声が響き、たくましい風貌の男の人が、重厚感ある金属製の箱を抱えて現れる。メラの父親は男の人に近づき、箱の置き場所を指示している。

「そちらへ置いてください」

「はい！で、こりゃあ何が入ってるんすか？」

「先に話しておきましょう。コハク君、ファルファ君、こちらへ」

司令官は手招きで2人を呼び、箱の中身を持ち出して見せる。灰色のコートや、鉄で作られた傘のようなものを手に取り、使い方を実演しているのだが、あまりコハクは理解してくれない。とにかく、司令官に文句は言いたいらしく、コートの着心地などに不満をこぼしている。

「こんなものを着ていては、身動きに支障が出る。死ぬつもりか？」

「空から降る水を防ぐため、小屋を持ち運ぶ案もありましたが、どちらが好ましいでしょうか？」

「常識で物事を考えろ」

「同感です」

「これで水をはね飛ばすんですねえ！解りました！」

エディが傘らしきものを手に取り、くるくると回して遊んでいる。ある意味、使い方としては正しい。一方、ファルファはジェリー達の持ち物を発見したようで、その幾つかを腕に抱えて持ってきてくれた。

「小さいコートがあります。おそらく、その子の着物でしょう」

「……私のもあるの？わあい！」

小さいコートをドラゴンの頭に乗せ、残りをメラの膝上へ置く。ファルファはジェリーが任務同行者だと知っているようで、気休め程度の言葉を残した。

「この度の遠征任務。お互い、がんばりましょう」

「あ……ええ。うん」

それだけ言うと、ファルファは再び司令官の元へ戻る。代わって、ガルムが火山の中から現れ、それに驚いたジェリーがメラに抱きついている。

「わりい。火山の裏口を封鎖するのに時間かかっちゃって、ちと遅れた」

「いや、集合には遅れていない。念の為、コハク君に言い訳だけしておけ」

「司令官！人を口うるさい女のように言うな！」

「自己分析ができてるじゃないか！成長したなあ！」

「黙れ！刀しか振れんアホが！」

メラの父親とコハク、ガルムは昔からの付き合いらしく、親しげにケンカなどしている。その様が珍しいのか、司令官の娘が不思議そうにジェリーへ声をこぼしている。

「お父さんとガラムさん、仲良かったんだ。あんまり会ってるの見た事ないや」

「お……起きてたの？」

「それより聞いてよ。あたしは部屋で寝てたはずが、起きたら火山の入り口にいたんだ。どう思う？」

「ふ……不思議な事もあるものね……」

抱きついていた姿勢をそっと離し、あんまり言いたくないとばかりにジェリーが、とぼけている。だが、そんな事よりメラは膝に置いてある物が気になったようで、折りたたんだ傘である傘らしきものを広げた。

「なにこれ？さては、これを回して、水をはね飛ばすんだな。便利グッズだ」

やはり、それが正しい使い方のようで、エディと同じく傘をくるくる回していた。

メラが目をさましたものの、出発の準備は完全でなく、すぐ行くこう今行こうなメンバーをどうしようと、なだめている。そこへ、メラの母親と防衛隊の女の子が、縦長の箱を持って火山から出てくる。

「もうメンバーは、そろっているのね……持ってくるのに手間どってしまつて」

「いや、食料がなければ、どのみち遠出はできない。気にする事はない」

運ばれてきた箱から、また小さな箱が幾つも出てくる。その弁当箱を3つずつ、各隊員に渡す。エディは大量に食べるからか、一人だけ弁当箱を5つ受け取っていた。

「ありがとうございますっ！街を取り戻したら、また奥さんの店に行きますわ！」

「エディさん……うちの人たち3人は、あまり戦いじや役に立たないでしょうから、あなたたちが頼りです。どうか、みんなを守ってあげてください」

「お任せしてください！」

家族3人が出勤となり、残されるメラの母親も、いつになく心労を抱えている。見かねた司令官は彼女の肩に手を置くと、言葉に気を入れて伝えた。

「一人たりとも欠けさせはしない。必ず、全員で帰還する」

「……はい。お願いします」

「恰好をつけるのはいいが、実戦をになうのは私たちだ。あまり出しやばるなよ」

「コハクちゃん……うちの人達をよろしく、お願いします」

「学院の先輩後輩とはいえ、コハクちゃんってガラかよ」

「ガルムさん。実質、あなたが攻防の要です。信頼しています」

「……頼まれた」

茶化す様子のガルムだったが、メラの母親には強く出られない態度を見せている。そうならば、その内情を知りたがる人もいるもので、当然のような顔でファルフアが首をつっこんでくる。

「ガルムさんと司令官の奥さまは、面識のある、ご関係で？」

「ファルフア。このオッサンたちにも、若い頃があつたという話だ。なんなら、道中で明かしてやろう」

「おい。コハクちゃん……やめろ」

「では、私もコハク君が昔、砂場にハマった話をしてさしあげようかと……」

「司令官……やめろ」

出勤前だというのにも関わらず、歓談に花を咲かせている。誰か止めに入らないと話が進まないとみて、その場のぎの得意なメラが腰を上げた。

「娘の前で、過去の恋模様を話題に出さないでもらいたい」

「……え？そういう話だったの？」

ジェリーは鈍感である。

「じゃあ、ちよつと間違えば、黄色コートの、お父さんは、あの怖い人だったの？」

「その、ちっこいの。間違えばは人間が悪いぞ」

ドラゴンが、とんちんかんな事を言つて、ガルムに渋い顔をされている。だが、そんな事はメラにとって、どうでもいい。

「父上！準備が整ったのであれば、さつさと出発しよう。早く行動するに越した事はない」

「あ……ああ」

5分前まで寝てたやつが仕切り出し、父親も庄され気味。ただ、正論を言い出したら誰にも止められない訳で、こういった面だけで司令官の娘という本性が垣間に見える。

「目的地まで、おそらく1夜はかかる。黒鋼峠、およびザルバ溪谷の情報に関しては、向かう道中で聞きます。では、行ってくる。火山の皆を頼む」

「……あなた。行ってらっしゃい」

無駄な話題を投げ合いながらも、出撃メンバーは支度を済ませていたらしい。メラ以外の人達は司令官が妻へアイサツすると同じタイミングで、荷物を持って立ち上がった。結局、バッグに入らないものはドラゴンの手に預け、急いでメラも足並みに加わる。

火山の正面口から真つすぐ進めばフレイムタウンがあり、およそ東の方角に遙か行けば王国ガルが存在。その

逆、今回は西の方角へと向けて山道を降りる。まず最初の関門はザルバ溪谷であるからして、その地の概容を司令官がファルファに問い掛ける。

「ザルバ溪谷について、お願いします」

「はい。ザルバ溪谷は細く尖ったジラ岩石からなる、高低差5600mの溪谷です。足場は脆く、わずかな衝撃や高音波でも崩れ落ちる危険性があります。ですが、ジラ岩石は熱によつて結合する物質なので、日当たりのよい、崖上の高所を進むと足場が定まります。ザルバは飛行する生物も多く、高い場所を歩くと襲われる危険性があるので、生物の視認機能が利かない夜の間に通過します」

「ファルファ隊員、ありがとうございます。何か質問はございますか？」

「お父さん……ファルファさんつて偵察隊じゃなくて、普通の防衛隊員だよ？なんで、遠い場所の地形に詳しいの？」

「ああ……それは、ファルファ隊員の趣味が探検だからだ」

「はい。戦闘の面では他の隊員に後れを取りませんが、地の利を活かす事で対等に渡り合えると、コハク隊長に教わりまして、探査に、のめり込んでしまいました」

趣味で探検したり、趣味で水科学を探求したり、そういった自由な活動が今になって実を結んでいるのだ。ちなみにエディは砲火器の取り扱いに長けており、そつなく修理もこなす。そんなエディにも疑問があるらしく、投げかけるような大声でコハクに質問している。

「コハク隊長、射撃訓練ではエリザと同じスコアじゃないですかあ。戦闘じゃ不自由ないと思うんですが、他にも気にかけてる事あるんすか？」

「戦場では、思考が停止した奴から先に死ぬ。おぼえておけ。その点、力以外に一つ長所のある者、対応力・応用力のある者として、お前やファルファを評価している」

「お……恐縮っす！」

思わぬところで褒められてしまい、エディとファルファが恥ずかしそうに空を仰いでいる。そのついで、司令官が余った情報を漏らす。

「本日のチーム構成についても、コハク君にアドバイスを頂きまして……」

そんな事情をうかがいつつも、飛び入りで参加してきたメラの態度が大きい。

「あたしはジェリーと約束しましたから、帰れと言われても帰りませんよ」

「安心しろ。司令官の娘も、希望メンバーには含めた。常識知らずを一名、チームに控えさせておくとチームの生還率が上がる。私の持論だ」

「……ジェリー。あたしは、けなされたのか？ほめられたのか？」

「期待してくれてるのよ……」

よく解っていない様子だが、ジェリーの一言でメラは機嫌を良くしている。この頃には山を下り終え、なだらかで特徴のない土地へと足を踏み入れている。

フレイムタウンの位置する方角へ目を向けると、見上げる程の巨大な柱が壁の如く、そびえている。それを見つけると、思いつける口調で、ガルムが司令官に告げた。

「今のとこ、あそこへ入る事になるやつは一人もいないのか？」

「これだけの被害がありながら、死者が一名も出ていないのは奇跡か、もしくは何らかの思惑が絡んでいるの

だろう」

「思惑か……あいつらの目的も、はつきりしてねえしな。欲しいもんがあるなら、やるから帰れと言いたい」「それなら知ってる！みんな、炎の石を探してるの！王子の家で聞いたよ！」

あまり褒められていない自覚があるようで、はきはきとドラゴンは王国ガルで水の兵士が話していた内容を出す。ただ、ドラゴンだけでは信憑性に欠けると思われ、すぐに質問の矛先はジェリーへ向いた。

「ジェリー。詳しく聞かせてもらいたい」

「……ちよつと聞いたただけなのだけど、あちらはレッドスターとか、フレイマテリアというものを探していて、王国ガルには炎の石が隠してあったの」

「それを欲しがってるのか……だが、決めつけるにや、ちと尚早だな」

「……あとは何も解らないわ」

ガルの冷静な意見を受け、ドラゴンは他に何かないかと、ジェリーに視線で求めている。ただ、何も思い出せなかったのか、ジェリーは自信なさそうに頭を下げた。

「……もしかして、これなんじゃないの？レッドスターって」

どの話題から流れをくみとったのか、メラがペンダントを見せつけてきた。たゆまず足を進めている面々も、要領を得ずに立ち止まる。すると、そのペンダントの出処は解説せざるを得ない。

「これ、ジェリーが初めて家に来た時から、ポケットに入ってたらしいんだ。昔の人がジェリーに渡したものだとしたら、何か関係があるかもしれない」

「レッドスター……それは銀色だが」

「お父さん。見た目で物を判断するなど、偉い人が格言を残していると噂で聞いた事がある」

「うゝむ……考慮しておく。まずは情報が必要だ。それに伴い、おのずと知りえる事実もあるだろう」

メラの意見は根拠こそないが、現段階では証拠が足りず否定もできないから、司令官の頭の中で保留となった。足元が砂地へと変わり、ファルファアが注意を促すように発言する。

「そろそろ、ザルバ渓谷です。不安定な足場となります。ご注意ください」

「空が暗くなるタイミングもベストですね。先導はファルファアに任せませ」

「了解」

今まで先頭を歩いてきたエディが引き、ファルファアが道案内をかつてでる。慣れた道らしく、中央に広がる道らしい道は歩かず、そこは道なのかと問いたただいたくなる場所へ足をかけた。

「この巨岩を足場にして、崖の上へ上がりましょう。ピンを打ちますので、それを手がかりにしてください……」

「……ちようど良く、段々に積んであらあ。ファルファアが作った道かい？」

「自然の神秘です……素晴らしい」

ファルファアは小さな鉄製のピンをハンマーで幾つかカチ込み、先に上へ昇って敵がないのを確認。他の隊員も上がってくるよう、手でサインを送る。

ジェリーとドラゴンは高さの問題で上がるのに苦労しており、そこはメラのフォローが入った。そんなメラも身長が低い為、エディに手を引かれている。エディは手を引きつつも、背が低い事実を突き付けている。

「司令官先生も奥さんも、背は低くないが、メラは小さいねえ。好き嫌いでもしてんのかい？」

「おいしくないという時点で、体が欲してないんだよ。食べるだけ無駄」

「大人になると、味覚が鈍っちゃうから、その味は今の内に味わっときなよ」

「解りました、お父さん」

「まあ、お兄さんにしといててくれよ」

「じゃあ俺は、おじちゃんでもいいぞ」

「私は総隊長でいいぞ」

「ガルムさんが意外と気さくだ……コハクさんを総隊長と呼ぶのは、総隊長を倒してからにしましょう」

「パパでいいぞ」

「解りました。お父さん」

メラは実の父をパパと呼びたくない。敵地へ向かっている訳でないせいか、あまり緊張感がない。先程の会話を聞いて、ジェリーも兄弟が欲しくなっている。

「私も、兄弟がいたらいいのに……」

「もしかすると、いたんじゃないの？ 炎の神殿で眠る前は」

「……そうかも。何も憶えてないけど」

「そろそろ、頂上に到達します。火器の使用は最小限に」

薄暗い空の下、空が広く見える地点まで登頂。そこで、ファルファから火器の使用を厳禁された。その理由をエディが尋ねる。

「火器を使用すると、一体どうなる？」

「フレイムウイングという鳥が火を目指して、矢のように飛んできます……」

「……ヤバイねえ」

「なら、俺が先を歩くぜ。砲火器以外の武器を持つてるやつは、俺の後ろに続いてくれ」

刀を持つガラムが先頭に出て、弾丸の出る銃器を携えコハクが続く。ジェリーは注射器状の水銃を所持しているが、ドラゴンと共に最後尾を歩いた。地形は狭くないものの高所であり、やはり暗さのせいで危険だ。

奈落の闇と煌びやかな星々を鑑賞しながら先へ行くと、鳥のような生き物の他に四足歩行の生き物が現れた。その正体について、ガラムが質問を後ろのファルファへ投げる。

「黒いケモノが、うろうろしてるが……ありやなんだ？」

「ハウンドです。あれも夜目が利かない生物なので、ぶつかなければ問題ありません。ですが……」

「なにか不審な点でも？」

「こんな高い所にいるはずがないんです。崖下に巣穴を作る生物ですから」

司令官の声に答える形で、問題点となりそうな事がらを報告。崖下は暗さで目視できないが、似たような一件をジェリーは思い出す。

「………天空の岩場に住んでいる生き物が、ファイアーフラワー地帯にいた事あったよね」

「ああ、岩場が水浸しだったからね。居場所がなくなったら、危険な場所にも出てくるよ」

「………エディさん。その大きな岩、谷底に落としてみてくれますか？」

「急に、どうした？ちよつと待つてな……」

ファルファから頼まれ事を受け、エディは体より大きな岩を持ち上げた。投げ出された岩は深淵に消え、数秒

後に水の弾ける音。ジェリーとメラが反応するのを待ち、ファルファが周りに説明を始める。

「想像の通りなら、大量の水が下に……」

「おい。今のが、水の音でいいのかよ」

「うん。間違いないよ。あたしは飽きるほど聞いたし」

ガラムが引きだしたメラの証言で、メンバーの顔色が変わる。ただし、周囲に敵の気配がない事、野生動物が喚かない事などが不可解。それを踏まえ、司令官が予想を語る。

「確か、水は高い場所から低い場所へ流れるのでしたね。とすると、ここより先にある黒鋼峠が占拠されている可能性は高い。空を含め、敵の目に注意して前進してください」

「……司令官。いいか？」

「はい。コハク君」

司令官から注意を受け、すかさずコハクが発言権を主張。作戦を提案する。

「おちおち調査するのは止めだ。行く場所を絞る」

「……なるほど。では、効率よく白銀峠を目指しましょう」

「ごめん……お父さん。どういう事？」

メンバーを代表して、当たり前前の疑問をメラが取り出す。コハクはコメカミの部分を目指しつつきながら、簡潔に解説する。

「白銀峠は黒鋼峠の、どこかにある。考えるに、探しているものは、こちらも敵さんも近しいだろう。水の軍団は水を武器としているが、水の中での行動は得意じゃあない。つまりは、水の溜まつていない場所だけを調査

すればいい」

「水の中の行動は、得意じゃない？散々、水の軍団と呼ばれた末に滑稽だな」

「いや、あながち……その線は濃いでしょう。なぜなら、戦闘を仕掛ける際、真つ先に敵陣を水没させていない」

「……どうだかな」

半信半疑なガラムも、司令官の言葉を聞くと、考える表情で地面へ視線を落とした。そこでメラも思い出した事があり、ジェリーと目を合わせて証言する。

「……最初、フレイムタウンに水をけしかけようとした時も、調査が終わる合図を待ってたのかな？炎の遺跡は水浸しだったから、レッドスターを探し終わってたんだね」

「でも……それなら、メラメラのペンダントが探し物ではないのよね？」

「……あたしの宝物入れ、ゴミ箱に似てるからね」

「ずさんな調査から逃れたのね……」

どれも予想の範疇を出ないが、思い当たる節もある意見である。ただ、この話題が持つ最大の狙いは苦しい現状を思わせない、楽観的なムードを作る事だ。そこで、結論を司令官が持ち出す。

「あちらが目的の物を先に見つけている場合や、調査して見落としている場合、同じ場所を我々が探索する余裕はありません。目当てのものが残っている可能性の高い場所へ直行します」

「んじゃあ、ついでだ。ファルファ。お前が思う、探し物がありそうな場所を教えてください。そこを目指すぜ」  
「承知しました……渓谷を通過後、ルートを変更して進みましょう」

ガラムに促されて向かうべき場所を変えるも、まずは溪谷を抜ける事が最優先。やや崖際から離れた場所を歩きつつ、ここはガラムを先頭として前進する。ただ、ここまでの会話に付いてこられない人というか……ドラゴンが一匹おり、不満げにジェリーの背中を押している。

「難しい話されても困っちゃう……面白い話ないの？」

「……そんな事を言われても……あつ。逆になんだけど、昔の話を聞きたいわ」

「草がボーボーだった頃の話？ いいよ！」

「ぼーぼー？ 何か燃やしてるのか？」

「そう！ 草は燃えるよ！」

「メラメラ……私が詳しく聞いてみるわね」

この話題になると、今現在の常識と食い違いが酷く、頭では理解しがたい。やぶから棒なメラを黙らせ、辛抱強くジェリーが聞く。

「どうして、草はなくなっちゃったの？」

「暑すぎるからよ！ きつと全部、燃えちゃったの！」

「みんなの武器に入っている燃料の、祖先にあたるのかしら……？」

「うーん……使い方は似てるわね。もつと軽かった」

「あとは、何かなくなっただけのものはあるの？」

「飛んでみて解ったんだけど、大きい水溜りがなくなっただかも！」

「大きい……水たまり？ フレイムタウンくらいの大きさ？」

「もつと大きいの！はしつこが見えないくらいの水たまり！なんつていうのかな……名前は忘れちゃった」

「そう……その中に昔の人は住んでたの？」

「住んではなかった」

「じゃあ……なんの為にあつたの？」

「ん……知らない」

このような、もどかしい会話が背後より聞こえてくるせいで、他のメンバーは口をはさみたくて仕方ない。ただ、ここで遮ってしまえば、話が脱線してしまうと予想しているせいか、苦くクチビルを噛んで耐えている。

「……昔の人つて……もしかして、水の軍団の人たちに似ていた？」

「なんで？」

「……なんとなく」

急に聞き返され、ジェリーの方が目をそらす。ところが、ドラゴンの方は思い出せなくて都合が悪かっただけらしく、また軽い口調で、あいまいに答えた。

「うん……どつちかつていうと、ジェリーや黄色コートよりは、水の軍団に似てたよ」

「……皆さん。ここから足場が下がります。ワイヤーを下ろしますので、少々お待ちください」

ドラゴンの返答が終わるのを待ち、ファルファが道程についての指示を再開する。打ち込んだピンにワイヤーをくり、安全を確認してから下へ降りる。

「私に続いて、降りて来てくださいー！」

さすがに崖を下る動作ながらに雑談はできず、ドラゴンとジェリーの会話も途絶えた。ここを乗り越えれば、

第一関門は突破。それぞれ体は痛むが、まだ気力は足りている。

溪谷の高さが違うのか、上る時より下る方が何倍も時間が掛かった。その途中、遠景に黒くて巨大な街が見えてくる。それをメラが最初に発見し、父親に尋ねた。

「お父さん……あの街は、なんだろう？」

「……あれが黒鋼峠だ。私も始めは、人工建造物と見誤った」

峠や山、そういった表現が似合わない、要塞のような地帯を目の当たりとする。見方によっては、根を下ろした巨大な黒い花にも例えられる。

なんとか、空が紺色に変わり始める頃合いで、溪谷を抜ける事に成功した。再びファルファの指示に従い、適切な休憩場所を確保する。今回は岩場の表面に見づらいドアがついた、立派な部屋を紹介された。

「ここは、私の秘密基地です。やや狭いですが、地形にカモフラージュしているので、安全な場所です。お食事になさいますか？お砂でエステになさいますか？それとも……」

「いや、俺は寝るぜ」

「私も、まずは睡眠をとりたい」

「司令官せんせーに同じく。俺も寝むくて仕方がねえ」

「うむ。ファルファも、しつかり寝むつておく事だな」

あまりにつれない返事が続き、ファルファは独りで、しょんぼりした。

さすがにベッドなどはなく、各々は壁に背をつけて休んだり、地面に倒れ伏せたりしながら眠っている。溪谷での移動が相当な疲れだったせい、ファルファを含めた全員が気だるそうにしていた。

始めに起床したのはコハクで、扉をわずかに開いて空色を確認。弁当箱を取り出すと、一番飯をとった。次にジェリーが目をさましたものの、コハクだけが起きているのを知ると、やや気まずそうに、そつと眼を閉じちゃう。この子はコミュニケーションが得意ではない。

あとはドラゴンから歳の順に目をさまし、やつぱり最後まで寝ていて、起こされたのはメラであった。

「メラメラ……みんな、もう起きてるわよ」

「……んん……どこ？どこ？」

「溪谷を抜けた先の秘密基地よ……もう、目を覚まして」

「ん。ちゃんとジェリーを守るよう、体力の回復を頑張らすぎた結果だよ……」

これが、友人を守ると言った任務中のナイトである。どうしようもなさすぎて、ガルムからもバカにされていく。

「言う事は達者でやがる。やつぱり司令官の娘だぜ。ふてぶてしいもんで、絶対に褒めない」と心に誓ってる」

「奇遇だな。私もだ」

「つまり、ほめるべき部分自体は多いという事ですね」

この切り返しが、にくたらしいと言われる所以である。そんなやりとりに父親は関与せず、そっぽを向いて食事に励んでいる。対して、エディは褒めて伸ばすタイプ。

「だが、メラほど死んでも死ななそうな隊員も他に見ないんだなあ」

「あたしだって、死んだら死にますよ……加減してください」

「でも、黄色コートよりジェリーの方が強いんだよね」

「ほお。頼もしいねえ。おれあ戦つてんのを見た事ないが、頼りにしてるぜ」

「は……はあ。はい」

とりあえず、エディが口を開けば、角が立たない。今まさにメラが弁当箱を開けた訳で、まだ出発には時間がかかる。そのすき、これからの行き先をエディが案内役に問う。

「それで、目的地の見当はついてんのかい？」

「すでに黒鋼峠は探索済みなのですが、3か所だけ、私には行けなかった場所があります。白銀峠の入り口があるのなら、そちらが有力かと」

「ほう、それはどこだい？」

「まず、峠の頂上から見下ろす事ができる大きな穴。ワイヤーが足りず、下へは辿りつけませんでした。底知れない穴ですので、降りるには勇気がいるかと」

「頂上か。敵は飛行する乗り物を有していると耳にした」

「フレイムタウンの偵察へ向かった際、残留メンバーが目にはしています。しかし、大装束な飛行を得意としてゐるらしく、穴などを降りるに適しているかは疑問です」

コハクの確認に対し、司令官が、よどみない答えを返す。それで、あと2か所は。

「あとは……ここを出て地下へ潜った先に、クリスタルの塊が道に詰まっている場所を発見しました。爆発性の武器があれば、突破できるはずですよ」

「地下か……大ききによっちゃあ、俺がどかすぜ」

「逆に聞きますが、ガラム隊員は、総隊長の家と同じ大ききクリスタルを破壊できますか？」

「やってできない事はないぜ？ただよ。燃料は代えがねえし、できれば節約したいが……」

「……そんなら、ジェリーに頼めばいいよ。幸い、水なら補給できるし」

「ああ、それで頼むぜ」

ジェリーの能力に半信半疑。そんな反応をみんなが示すも、ガラムがメラの申し出を安く受けた為、ジェリーも無言で頷いた。

「……残りの1か所は、私の憶測でしかないのですが……よろしいですか？」

「……耳には入れておきましょう」

司令官の許しを得ると、自信のない声でファルファが続ける。

「黒鋼峠の南側に大きな鏡面の壁がありまして、どうも……そちらに違和感が」

「違和感……というと？」

「……見間違えかもしれませんが、壁に映っているものが、違う気がして」

「……ん？」

真摯に聞いていた司令官が、よく要点を得ずに聞き返した。つまり、こういう話である。

「背後の景色と似てはいるのですが、若干……何か足りないといえますか。何が足りないのかは解らないですが。これは私の見解なので、信じて頂かなくとも構いません」

「……実は鏡でなくて絵だとか、壁の中に似た地形が収まっていたり、そういった可能性はありますね。実際に見てみなければ、なんとも言えませんが」

「パズルやクイズは司令官に任せる。まずは地下の通路を確認し、進行が難しいようならば頂上を目指す。司

令官の娘、お前の準備が完了次第、出発する」

「じゃあ、あと60数えるくらいかかるので、その間は皆さん、ゆつくりできますね」

コハクから急かされながらも、十分に120数える程の時間をかけて、ようやくメラが立ちあがった。昨日に引き続き、先頭はガラムとファルファが引く。

ひび割れた大地の亀裂を行き、黒鋼峠の入り口である狭い道を進まず、花びらのように広がる外壁へ沿って進む。すると、もの凄く目立たない場所に穴が開いており、そこから地下へと潜る事ができる。あまりに地味な道だった為、エディが見つけた事を感じしている。

「こりゃ……よく見つけて、入ろうと思ったもんだねえ」

「壁伝いに進む。先に発見した道から探索する。これが、基本なので」

独自の探索ノウハウであり、誰に教わったものでもない。コハクですら知らない基本である。

穴の中へはジャンプして飛び降り、転がっている岩を積み上げるにも容易い。コハクが下にいるファルファへとドラゴンを放り落とし、最後に穴の中へと入った。

「……キャッチー。どうぞ」

「……え？ああ……はい」

ドラゴンの所有権はジェリーにあるのか、すぐにファルファが手渡してきた。また、抱っこして行く。

地下の道は狭く、その先も下り坂。しばし進むと、分かれ道に行きつく。どの道へ進むか、司令官がファルファに委ねる。

「どちららへ？」

「えー……少々、お待ちください」

ファルファが自分の靴の裏を覗き、その鉄板に書かれた文字を読んでいる。メモする場所がない場合、なりふり構わない。

「右……左、左、真ん中、下、右、真ん中。こちらの道順で最深部へ到達できます」

「じゃあ、帰りは真ん中、左、上、真ん中、右、右、左だね」

「憶えきれねえよ。ランプ石を隠しながら置いていく」

メラは記憶したようだが、ガラムは自信がないらしい。赤白く光る小さな石をバッグから出し、少し振ってから道筋に置いておく。途中、上から水が滴っている場所に遭遇するが、そこは鉄製の傘が役に立った。特に難もなく、結晶の詰まっている地点へ到達。

「ここが、怪しい場所なのですが……」

ファルファが立ち止まった場所は広く、一固まりの透明な岩に行く手をふさがれている。非常に冷え込んでおり、ジェリーとメラ以外の者は歯を食いしばっている。

「温度の低下が著しく……私は、ここで引き返しました」

「ところで、メラとジェリーは寒くないのか？」

「うん。多分、お父さんが着てるのは、ちよつと違うんだよ。水にも入れるし」

「じゃあ、入れて！うん……あつたかい！」

メラの言葉を聞き、ドラゴンがメラのコートの中に潜り込む。メラの体温が籠っていて、やや温かい。ガラムは寒いのが特に苦手なようで、早くジェリーに道を開くよう頼む。

「……ここじや力が出せねえ。頼む」

「……やってみる。下がっていて」

また注射器についているボタンを何度も押し、筒内の仕掛けを複雑に動かしている。その後、ジェリーは注射器の先端を透明な岩の壁へと向けた。

「ハイドロドリル！」

太い水の螺旋が岩に突き刺さり、破れる音を響かせながら蒸気を上げる。7秒ほど突き刺し、放出を止めてキリが晴れるまで待つ。

「……あら？」

攻撃の壮絶さに似合わず、岩に広がった窪みは浅く、むしろゴツゴツ具合は悪化した。そんな岩の形が気になつたらしく、ドラゴンが走って行って近くで見つめ始めた。

「……これ！王子の家にあった透明な岩と同じだ！あつたためると、水になるよ！」

「これが水だつて？面白い。俺がやってみるぜ」

「大丈夫……もう一度」

ガラムが剣を抜くより早く、ジェリーは注射器についている取っ手を引いた。爆発するような音が鳴り、注射器内の水が気泡を上げる。

「ハイドロファイアー！」

今度は熱湯が先端から噴きだし、見る見るうちに岩は削れていく。そのまま押し込み、貫通させ、水の中に通路を作った。

「また変な機能を増やしてる……あつたかい水も出せるの?」

「ボムハンマーの爆発を使って、水を温めるようにしたの。役に立ってよかった……」

見慣れたメラは平凡な質問を投げかけているのだが、ジェリーの武器を初めて目にした人々は呆然としている。そんな中でも、なんとか言葉を絞り出し司令官がジェリーに問い掛ける。

「……水は熱量を記憶する性質があるのか?少量の水が熱で消える姿は見た事がある」

「うん……温度が高すぎると消えてしまうのだけど、消えない温度で温めれば大丈夫。たぶん、この固い透明な岩は、逆に冷えた水のカタマリなんだと思う」

「ああ、鉄も熱すれば緩く、冷やせば硬くなるからねえ。似た性質なんじゃないか?」

足りない知識をエディに補われ、ジェリーは自信も少なく頷く。これも鉄工場では常識なのだが、ファルファやジェリーといった、工房へ立ち入った事のない者には馴染みのない話。メラも工房へ遊びに行っただけ遊びに行っただけで勉強をしている訳がない。

「立ち話もなんだ。せっかくだから中に入ろうぜ」

自分の家のごとく、ガルムが氷の通路内へと誘っている。ただ、中は更に寒い。ジェリーとメラをのぞく他のメンバーは耐えられず、ダッシュで戻ってくる。

「さ……さむいです……コハク隊長。わたくしたちの装備では進めません」

「心頭を熱すれば水もまた……いや、これは耐えられん……」

「こりゃあ……俺たちには無理だぜ。どうする、司令官」

ガルムに判断をおおがれるも、当の司令官すら凍えてものを言えない。

「あ……ああ……そそ……そうだな。メラとジェリーは何事もないだろうか？」

「あたしたちのコート、水に入っても平気なんだよ。摩訶不思議だ」

「設計書が水没したから、もうロストテクノロジーだけ……」

すぐにロストテクノロジーを生み出す、恐るべき逸材なのだ。そうと決まれば、この先の探索は2人に任せるといい。メラがコートのカギをきつく締め直し、司令官に出発を宣告する。

「あたしとジェリーで先を見てくる。お父さんたちは待っていていいよ」

「いい……いや、ここにガルムを置いておく。残りのメンバーで……別のポイントを目指しましょう。よろしいですか？」

「わわ……解った。お前ら、危険を察知したら、一目散に戻ってこい。俺は、ここにいます」

刀を地面に転がし、ガルムはコートフードを被って座りこむ。その様が、あまりにも凍えて見えただけか、不憫に思ったメラは気休め程度の言葉を残した。

「なるべく早く帰ってくるよ……」

「ああ……そうしろ」

氷の中にできた通路は風を吹き出しており、ちらちらとした氷の塵が風に流れている。通路の先は薄暗く、またメラが砲火器に火を灯す。

「ファイアーリード」

「よく見えるようになった！」

すっとメラのコートから、ドラゴンが顔を出した。

「あんた、ガルムさんと待ってた方がよかつたんじゃないの？」

「知らない人と一緒やだもん」

「……いうほど、私たちも知ってる人じゃないわよね」

単にガルムと一緒にいたくないのだ。ドラゴンは温かくて居心地よさそうだが、メラはドラゴンが前に入っているせいで、妊娠した人のようになっていて歩きづらい。よろよろと歩みを進めると氷の壁が終わり、銀板を繋いだようなサイバー部屋へと辿りついた。

「まあ、綺麗な部屋」

「炎の神殿の地下みたいなお部屋だ。窓みたいなのがあるけど……真っ暗で何も見えない」

黒い窓の下にはつまみや、スイッチのような凹凸が複数ある。ジェリーはボタンを押しこんでいるが、何も起こらない。メラは先へと進み、部屋の隅を調べている。

「……これ、ドア……かな？でも、ノブがない」

「どうやって開けるのかしら……」

部屋の端に広い窪みがあり、どう見てもドア。なのだが、手をかけるところもなければ、押してグラつきもしない。メラが色々触ってみるが、開く様子も見せない。

「気になるなあ……ここまで来て、戻るのも癪だ」

「やっぱり開かないの？」

メラが名残惜しそうにドアを見つめていると、今度はジェリーがドアを調査し始めた。人差し指が触れた途端、ドアが横にスライドする。

「……開いたわ」

「気難しいドアだ」

納得いかない表情ながらも、メラは先の部屋へと足を踏み入れる。すると、床の光が走り、部屋全体を白く明るめた。

「うわっ！まぶしい！」

「……白い炎かしら」

「昔の人は電気って言ってたよ。雷みたいなものだった」

ドラゴンが光の正体を解説しているが、メラもジェリーもイマイチしっくりきていない。全容の浮かび上がった部屋は円の形をしており、中央にガラスで作られた巨大な筒が、そびえたっている。天井は遙か、どこまで続いているのか解らない。

「……清潔な部屋だ。水の軍団が帰ったら、うちの別荘にしてもいいんじゃないかな」

「……そういえば、総隊長さんは自分で家を作ってたけど、お父さんは個人で色んな資産を保有してるわよね」  
「総隊長は隊のマスコットで、お父さんは司令官だからね。収入に差があるんだよ」

そんな関係のない話をしている内にも、ガルムは寒くて震えている。それを思い出し、ただちに調査を再開した。

「……なんか聞こえる！こつち！」

メラをコートの中から引つ張り、ドラゴンが奥へと先急ぐ。真つ白な壁に埋め込まれている十字型をした、ひびだらけな黒い物体が奥にあり、その中から声が響いていた。誰が言い出すでもなく、これが老岩石だと3人は

察した。

「石っていうか、岩ぐらいが妥当な感じだね」

「……」

「……ジェリー？どうしたの？」

「……なにか思い出しそう」

「なに？なにを？」

「……や……ごめんなさい。何も思い出さなかったわ」

「……なんだよー」

安堵とも期待外れとも取れる様子で、メラがコートの中のドラゴンを抱えたまま、壁の凹凸に寄りかかる。押し出される形でドラゴンがコートの外に出されるも、この部屋は比較的、寒くない気温だ。

「あんまり寒くない！」

自由行動権を得て、ドラゴンもジェリーと一緒に老岩石の話聞く。ヒビの中から淡い光を放ち、老岩石は老いた男の声で話す。

『58週目。実験体ナンバー1・ワイズ。異常なし。ナンバー2・ザラ。体調に異変。隔離した後、観察を続ける。ナンバー3・リディア。身体には異常なし。ナンバー4・セラ。異常なし』

「これ、武器に使ってる音の玉と同じ原理で声、出てるのかな。話の内容は解らないけど、ジェリーには解る？」

「音の出てる仕組みは、そうかも。話の内容は、全然。とりあえず、ザラという生き物が、何らかの異常を持つていたみたい」

「名前だけ聞くと……ウロコだらけの生物っぽいよね」

掴みどころのない憶測も交えつつ、更に発言を拾う。しばしして、シロヤモリという単語が聞きとれた。

『黒鋼峠。気温上昇。白ヤモリ、体長の縮小を確認。ザルバ、気温上昇。以上の計測により、タイムリミットは……68週』

「これは解るぞ。クネクネ君の観察記録だ」

やっと知っている言葉を見つけて、メラが強気に提唱。そこから、またジェリーが推測する。

「クネクネ君の体の大きさを気にしてる……吸った水で体の大きさが変わるから、土地の水分量を計測してるのかも。でも……これは、いつの記録なのかしら」

「ゲンさんは、土地の名前と干からび具合だけ聞いて、ちよつと昔の事だと勘違いしたんだろうか。そもそも水なんて、あたしたちの先祖ですら、そんなに記録してないわけだし」

「ドラゴンさん。水が大量にあつたのは、いつの頃なの？」

「うーん……」

また自信なさそうに下を見て、あるのかないのか解らない記憶をドラゴンが探しだそうとしている。結局、いつもの答えが出る。

「あんまり解んない。ずっと前、私が最初に目をさました時だもん」

「最初に？あなた……どこから生まれたの？」

「それも解んない……」

神殿で長く寝すぎて、記憶が薄れている。そう言われても言い訳できない程の曖昧さである。そんな事よりも

食欲が勝ってしまったらしく、ドラゴンは壁から良い匂いをかぎつけた。

「……炎の石がある！それも、たくさん！」

鼻をひくひくさせながら、なんの変哲もない壁をかいでいる。開けてくれと言わんばかり、ジェリーの方をじつと見つめてもいる。

「そこにあるの？」

「絶対！」

まず、ジェリーが壁へと近づき、遅ればせメラが歩み寄る。それを待っていたかのタイミングで、部屋の光が真っ赤に変わった。

『防衛システム起動。生物兵器を精製』

「……メラメラ、なんて事を」

「……え？あたし何もしてないよ？」

と、いつものテンションで慌てている。だが、壁から突出しているパイプが唸り、その中から大きな赤黒い物体が排出されると、危険を感じて青ざめた。赤い物体は4本足をもがかせつつ、おぞましい怪物の形へ変身。にぶい動きで5つの目を動かし、侵入者を定めた。

「……やばい！逃げろっ！」

メラはジェリーの手を引き、大急ぎ部屋のドアへと走る。だが、さっきまで開いたはずのドアが開かないという、お決まりの展開である。謎の怪物は口から緑色の液をたらしながら、はいずりつつ接近。ドラゴンも敵の姿に怖気、戦う意思もなさそうにジェリーの後ろへと隠れた。

「ジェリー……怖い」

「私も怖いわ……」

「あたしがやる！そのへん隠れてて！」

相手の注意をひく為、メラは砲火器から火柱を上げる。視線が動いたのを確認後、部屋の広い場所へ、おびき寄せた。怪物は鉋爪で床をくぼませながら移動し、長い首を伸ばしてメラに喰らいつこうとする。

「うわっ！」

回避行動に乗じてスライディングし、うまくメラが怪物の喉元へ入り込む。ここで一撃。

「デルタフレーム！」

お返しとばかり、砲火器の先端から三股となった炎が吹き出る。炎を噴出したまま、剣の如く武器を降り、怪物の腹を焼き切ろうとする。

「うわっ……ブーストファイア！」

全く効いていないと見て、メラは武器の炎をジェット代わりに使い、勢いよく脱出した。間伐いれず、ウロコとウロコの間、弱点と思われる場所に向けて水晶のナイフを投げ込んでもみる……が、まったく効き目なく、ナイフが砕け散った。

攻撃した勢いだけは落とさず、そのままジェリーに助けを求める。

「ダメだ！炎もナイフも効かない！交代！」

「え？私？」

こうなったら、やるしかない。選手交代。メラは開かないドアでも開けようとしてください。

「……ハイドロオメガ！」

音もなく、水の線が怪物を貫き、二秒後に爆発。部屋の壁を貫いて怪物ともども吹き飛ばす。壁に開いた穴から、怪獣が顔を出す。すかさず、次の技を発動する。

「ハイドロデストロイ！」

注射器を床に置き、全体重で固定する。爆発音だけが聞こえるも、発射された水すら目に見えぬ内、怪物は壁の奥の奥まで押しやられる。どんどん戦闘力が上がって行く元ウエイトレスについて、現防衛隊員から一言あるように。

「……まさか、ほんとに倒すとは思わなかった」

「……私も。でも、水が一滴もなくなっただわ」

とか言っていると、またパイプが唸り始めた。先程のと同じものが一匹。それと、おかわりもいる。

「……私、もう戦えない。ごめんなさい」

「防衛隊の支給武器が安っぽいばかりに……」

最期の最期、嘆く事は防衛隊のケチさであった。ジェリーに抱きつかれたまま、メラが力なく武器を構える。先のものより大ききの増した怪物が迫り、ちっぽけな炎でメラが無理にでも仕掛けようとした……その直前、最後の壁を切り裂き、ガルムが飛び込んできた。

「勝手に死ぬなよ！一の太刀・炎迅！」

一発で2匹の怪物を打ち飛ばし、破けた壁の奥深くまで追いやる。防衛システムを押し切ったらしく、部屋の光も白色へ戻った。そこへ、姿の見えなかったドラゴンも現れた。

「壁に穴があつたから、おじさんを呼んできたよ！」

「……通路は寒いが、こっちはマシだな。また帰り、あそこを通んのは死ぬるが」

メラに何か言われるより先、ドラゴンは自分の働きを報告している。ただ、メラの方は褒める気力もないように、ガルムを見ながらジェリーに抱きついていて。

「た……助かった」

「メラメラ……帰ったら、武器の改善提案を出そう」

「そそ……そうだね」

「炎の石も手に入れたわよ！」

ボロボロになつた壁の隙間に入って、ドラゴンが壁の裏から炎の石を見つけしてきた。たくさんあるのか、両腕いっぱい抱えている。ガルムは吹き飛ばした怪物を気味悪がつており、早く脱出したい面持ち。

「あいつら、まだ奥で様子を見てやがる。やる事がねえんなら、早く出るぜ」

「ちよつと待つて……」

ちよつと仲間を待たせつつ、トンカチとピックを突き立て、ジェリーが老岩石を削りだす。これを全て砕いて持つて帰ろうとしているのかと、その懸念をメラが声に出した。

「どのくらいかかりそう？どのくらいの重さになる？」

「多分、この黒い石は拡声器。声が吹き込まれてる石は中に……」

『人類……新たな……ヴウウ……』

「あつた。これだけ、持つて帰りましょう」

青白い鈴のようなものを10個ほど老岩石から取り出すと、しゃべり続けていた岩の声が消えた。ジェリーが鈴を固いバッグの中へと転がしている。持ち帰って聞けるようにすればいいのだと理解し、他の人達も安心したように頷いていた。

その横で、ポケットいっぱい炎の石をつめたドラゴンも現れた。他に目的も見当たらない故、これにて退散となる。

「黄色コートは活躍なかったから、炎の石もって」

「これからこれから」

2個だけ炎の石を受け取りながらも、めげないメラ。風が吹きつける通路を行く際は、凍えるガルムの前と後ろをメラとジェリーが歩いた。なんとか通路を抜け、幾つもの分かれ道がある場所まで戻る。

「さ……さみいな。暖炉石を燃やす。少し待ってろ」

茶色い石に砲火器で火をつけ、ガルムが服の中へ入れている。黒鋼峠の調査が終わったとみて、まったりとメラが遠征任務の感想などを述べている。

「過酷な自然環境、敵対勢力の存在に行く手を阻まれたが、事なく調査は完了した。日々の鍛錬が成果を結んだと自負している」

「お父さんが言いそうね」

「家に帰るまでが任務だぜ。と……俺も、こんなジジイくさい事いうようになったか……」

気休め程度の暖をとり、ガルムが戻ってきた。通ってきた道の分岐はメラが記憶していて、軽い足取りで洞窟を戻り始める。そういえばと、ジェリーが思いだして言葉にする。

「結局、さっきの天井の见えない部屋が白銀峠だったのかしら」

「白い部屋だったし、多分そうだよ。老岩石もあつたし」

「おじいさん……よく、こんな入り組んだ洞窟の奥まで来れたわね」

入るには入れたが、先人は戻る道が解らなくなつて脱出に時間を要した……そう、4人は総じて考えていた。しかし、いくら道を戻れども出口へ辿りつかず、そうではないと理解が一致した。

「黄色コート……道、まちがってない？」

「いや、俺が置いた目印の通りだ。道はあつてる」

ガラムが光る石を手を手に転がしている。このまま進んでもラチがあかないとみて、4人は狭い洞窟の中で足を止めた。まず、メラが司令官チームの心配をしている。

「お父さんたちは、ここから出られたのかな？」

「むむ……他の人達は……いないと思う。どこからも音が響いてこないから」

「……お前の耳は、どこまであてになるんだか」

「すごい聞こえるから、すごい耳だよ！」

「……まあ、いいぞ。中にいりやあ協力して出られる。外にいりやあ探す手間が省ける」

また、あるのかないのか解らないドラゴンの耳が本領を發揮している。しかし、ガラムは話をするのも寒くて億劫なのか、問題を自己完結した。そうなると、推理はジェリーしかない。

「さっきの変な生き物も、私たちが来たのを知って出てきたわ。扉も開かなくなつた。じゃあ、この通路も……私たちが老岩石に近づいてから変形したのかも」

「昔の人達、あたしたちより進歩したテクノロジーをもってたっぽいからね。空を飛んだり、どうくつを變形させるくらいやりかねない」

「ねえ、なんで黄色コートたちって頭が悪いの？」

「なにおう！」

語弊のある言い方だったせいで、すぐさまドラゴンがメラに怒られた。やりなおし。

「……なんで黄色コートたちって、昔の人より技術がないの？」

「知るか。ジェリーに聞きなさいよ」

「……どこかの時代で、文明がリセットされたのかも。昔の人達がいなくなってから今の人が誕生した可能性もあるけど……それにしても、昔の施設が綺麗なのよね」

「ふん。よく解んない」

「……私も含めて、今の人達って、何者なのかしら……って事」

「まあ……調査結果つてのは、持ち帰って初めて意味がある。貴重な推察考察ご立派だが、今は出る方法を考えようぜ」

ずれた論点を引き戻しつつ、ガルムが洞窟の壁に片手をつけて歩き出した。そうして歩けば、大抵の迷路は抜けられる……はずだが、そうはさせまいと目の前の通路が変動を開始する。

「……総当たりで出られるもんじゃねえな」

「……ジェリー。なんか、カバンがウルサイんだけど」

メラに指摘されてカバンを開けてみる。ビンに入れてあるシロヤモリが活発に動いており、それを見たガルム

が珍しく動揺している。

「……なんだそりゃあ。ビンから出すなよ」

「あれ？ガルムさん、怖いんですか？見かけによらないですね」

「てめえ。なら素手で触ってみろよ」

「勘弁してください……知り合いの娘の可愛いジョークじゃないですか」

父親とガルムが知り合いだと解つて以来、メラの馴れ馴れしさが上がった。一方、ジェリーとドラゴンはガルムが怖いようで、いまだに目を合わせない。ジェリーはシロヤモリが伝えたい事を知り得たようで、のんびりと普段通りに他の人へ伝えた。

「水……水がくるみたい」

「水？水なら、さっきの通路で天井から流れてたじゃん」

「もつと多い……きた！」

ザーツという音と共に洞窟の水が流れ、4人の足をさらいに来た。ガルムは耐えきれず、水が少ない洞窟の奥へと逃げ出す。

「まずいぜ！逃げろ！」

逃げろと言いつつ後ろを見たら、もうメラもジェリーも逃げ出していた。のろのろしているドラゴンを持ち上げ、ガルムも後に続く。

「ガルムさん！また寒いとこ通りますよー！」

「またかよ……」

結局、戻るだけ戻ったら先程の部屋まで逃げねばならず、ガルトは凍えながら寒い通路を通らねばならない。あつたかドラゴンを抱きつつ、後ろからメラに押されながら、なんとかガルトも氷の通路を通り過ぎた。

水は流れる量を増しており、老岩石の安置してあつた部屋まで問題なく流れてくる。ここで行き止まりであり、すでに足元は水浸し。ガルトだけは水を避ける為、壁の突起に足をかけて上っている。

「くそっ！俺だけピンチじゃねえかよっ！お前ら！なんか考えろ！」

助けに来た時の勇ましさは、いずこやら。なんか考えろとアバウトな要望を出している。

「ドラゴンさあ。この上を突き破って空まで行けないの？水晶の洞窟ではきたじゃん」

「うん……もろかつたら行けるけど……天井が硬かつたら痛いからヤダ……」

部屋の上側は高さが知れず、何があるのか解らない暗闇をたちこめている。勢いよく飛び立って、鉄鉱石にでも頭を打ってしまえば、今なお少ないドラゴンの記憶が更に飛ぶ。

「……この部屋、壁に小さな穴が空いてたつて、さつきドラゴンさん、言つてたよね」

空の注射器に流れる水を入れつつ、時間を稼ぎながらジェリーがドラゴンに問う。さすがに数分前の事なら忘れていないようで、自信満々にドラゴンが答えを出した。

「人が一人、通れるくらいの穴！そこに空いてたよ！」

「……そう。だとするとゲンさんは、この部屋まで来たんだと思う」

「穴をあけてまで、わざわざ意味の解らない部屋まで入つたの？」

「きつと、来たくて来たんじゃないわ。まちがって入ってしまったって、ドアが開かないから、壁に穴を作つて出たのよ。それで手間どつて、出るのに一難あつた。その作業中、老岩石の声をずっと聞いてたのかも」

「なら、どこから入ったっていうのよ……」

「……上から……落ちてきたんだと思う。現時点で、それが可能性としては高い」

「ジェリーも言ってるぞ。ほら、飛ぼうよ。このままだと、ガルムさんが水の中で孤独に死んでしまう」

「うう……あたま痛くするくらいなら、おじさん死んでも仕方ない……」

「てめえ……」

「怖い……」

おどしてでも飛ばそうと睨みつけるが、ドラゴンも意外と強情。壁に爪を立て、ドラゴンが一人で上に登っていく。すると、それを呼びとめるようにして、ジェリーが更なる作戦を持ち出す。

「天井があるのかないのか解らないなら……先に壊してみる。ハイドロミサイル！」

注射器の先端を真上へと向け、発射する力を溜める。一瞬だけ動作が制止した後、注射器からネジ巻き状に水が放たれた。弾道は一途に上へ向き、暗闇に姿をくらます。

「……あつ。水が落ちてくるかも」

「先に言えよ！」

ガルムが鉄の傘を開き、戻ってくる水に備える。しかし、撃ち上げた水は返らない。

「……水が戻ってこないぞ！上には何もない！行けっ！ドラゴンロケット発射だ！」

「よーし！」

メラの勢いに押されて、ドラゴンは炎の石を一つ、口に放り込む。まばゆい光の中で変身し、大きな竜の姿になる。我先と、ガルムが飛び乗った。

「頼むぜ！お前らも来い！」

「ガラムさんが必死だ……ジェリー、行こう」

「うん」

前に乗った時と同じく、ドラゴンの大きな口へと避難。3人は飛び立つのを待つ。

「行くぞー！」

部屋の中で、なんとか翼を振る。5回の羽ばたきで体を浮かせ、もうひと行きで飛び出した。部屋の上側、暗闇をぐんぐん進む。

「……光だ！ジェリー、外に出られるぞ！」

ドラゴンの口から前を見て、メラが光を発見。光の中にドラゴンが飛び込むも、そこは壁の片側が透明になっている場所。まだ通路は上に続く。

「なにかしら……変な通路ね」

そのまま、ドラゴンが山の頂にある火口のような場所から飛び出た。ここがファルファの言っていた、もう一つの探索できなかった場所。火口の周辺に目を向けると、司令官一行の姿も発見された。

「敵きたっ！逃げる！」

「ちよ……お父さんたち、下にいたぞ！どこ行くんだよう！」

「敵の乗り物きたの！でっかいの！」

口の中からは見えないが、ドラゴンが敵に追われているようだ。すぐさま、ジェリーが狙撃の体勢に入る。

「私が応戦する……後ろを向けない？」

「無理無理！10コくらいいるもん！逃げるので、いっぱいいっぱい！ボスみたいなのもいる！」

『炎の民の水使いたちだな！幾度となくジャマしくさりおって！』

グアングアンと、効果のなかった声が響く。その声、前に火山の頂上で戦ったアマカゼ隊長のものである。

「あたし、聞いた事ある気がするけど、よく思い出せない声だ！」

「老岩石と同じ技術で、声を大きくしてるのかしら……」

メラもジェリーも、あまり敵には興味がない。とはいえ、このまま帰還すれば隊の潜伏場所が割れ、司令官たちの救出もままならない。解決は撃退に限られる。

「ファイアーブレスでいけないのかー？」

「そんなの溜めてるヒマないわよ！」

ファイアーブレスは溜め技なので、2秒くらい余裕がないとダメ。そうして断ったところ、追加でメラが迷案を取り出した。

「……あっ、そうだ！ガルムさんを口から出して、手に持てばいい！」

「なに言ってるんだ、てめえ！あんま言わねえが、あえて言うぞ！バカか！」

「ガルムおじさんなら、やれますよ！ドラゴンが腕を振るのに合わせて、刀で斬る簡単な仕事ですよ！」

「簡単じゃねえよ！」

「むむ……それしかない。やろう！」

「……おいおい」

やる気ドラゴンである。口の中に手を入れ、ガルムの体を持って取り出した。いうなれば

ガラムソードである。

「よーし……ええい！」

「しかたねえな……おりゃあ！」

適当にドラゴンが手を振ると、ガラムが刀身から噴きだす炎で敵を撃墜した。その調子で三連撃を繰り返して、うまく4機を墜落させた。

「おもしろい！ どんどん倒そう！」

面白くように近くの敵機が不時着していき、文字通りドラゴンが面白がっている。みるみる内に敵は地面に墜ち、あとはアマカゼが搭乗するボスを残すのみ。

『奇妙な武器を持ちおって！ 返り撃ちにしてやるわ！ 全弾、発射用意！』

「させるかよお！」

アマカゼ機が全砲台一斉射撃の準備を始めたところ、発射前にガラムから突き刺された。右翼を破損し、くるくると回りながら落ちていく。

『ばば……馬鹿なあ！』

「ずらかるぜ！ 早いところ下の連中を拾え！」

「解ったー！」

ドラゴンは宙返り後に高度を落とし、そのまま司令官一行に接近。ガツと右手で4人をつかまえ、大きな口へと放り込む。そのまま、火山のある方角へと飛行を始めた。

「……おおい、生きてんのか？ おれはあ？」

「エディさん！無事で何よりです！」

ファルファと司令官はショックで目を回しており、誰より先にエディが自分の生存を確認している。結果、メラの再確認を得た。コハクは物珍しげにドラゴンの体内を観察しながらも、目的のものが見つかったのかとジェリーに尋ねている。

「撤退行動を見るに、白銀峠は制圧したのだろうか？」

「え……えと、うん。これ」

「でかした！やはり、私が見込んだ隊員だ！」

恐ろしながらも老岩石の一部……銀色の鈴を見せると、喜び露わとした表情でコハクに頭を掴まれた。ジェリーは驚いているのか怖がっているのか、されるがまま。そこへ、ドラゴンの武器も戻ってくる。

「……司令官の娘をぶん殴りたい気持ちは山々だが、もう疲れて気力もねえ。司令官には文句いっとくからな」

「うん。解った。ドラゴン、今どこ？」

「黄色コートには教えないー！」

「これ、あの子かよお！大きくなるもんだねえ」

エディは声を聞いて、初めてドラゴンがアレだと気づいた。その時、ドラゴンはザルバ溪谷の上空を飛んでいて、あと10分もすれば火山へ到着する。追手などもなく、ドラゴンも急ぐ様子はない。

前と同じく、火山の裏手にある灰溜まりへと着地。中の人達を吐き出すと、ドラゴンは地面の上でゴロゴロし始めた。

「あゝ。灰の上、気持ちいい」

「……調子に乗っていると、口に入つてムセるぞー」

「む……ごほっ！ごほっ！」

メラに言われたそばから、灰を吸いこんでムせていた。小さい女の子の姿に戻り、顔を灰まみれにしながら、他の人達の後ろを黙つてついてくる。その前では吐き出された時に目を覚ましたファルフアが、いまだ気絶している司令官を運んでいた。あまりに起きないから、ガルムが心配しだす始末。

「こいつ死んでるんじゃないか？」

「おじさん。防衛隊つて、死んだら昇進する制度あるの？」

「ねえよ。得する事ねえから死ぬなよ」

「メラメラの、お父さんの心配は誰もしないんだ……」

実の娘に心配してもらえず、司令官はキレイな寝顔のまま火山へ帰還した。ガルムが火山裏の扉を蹴るので、中で監視していたセグ隊員が慌てて扉を開く。

「蹴るなよ！」

「手が痛えんだよ。勘弁しろ」

「……うわあ、コハク隊長！司令官！ご無事で何よりです！」

「監視任務、ご苦労。ガルム隊員も歳だ。交代まで休ませてやれ」

「御意」

「いうほどの歳じゃねえよ……」

コハクと司令官には敬礼し、他の面子は適当に流している。そんなセグ隊員について、火山の通路を進みなが

らジェリーがメラへと問う。

「あの人……誰？」

「セグさんだよ。横に大砲があつたでしょ？あれの使い手だよ」

「狙撃手？」

「いや、あれを肩に担いで、撃つたり殴つたり」

「撃つたり殴つたり……」

メラの説明がアバウトなせいで、余計に何者なのか解らない。すると、ガラムが横から話に加わってくる。

「あいつ、尊敬できるとかできないとか言いやがつて……仲間にも撃ちこんできやがる」

「私も。戦力としては、一人で前線をはれる貴重な人物ですが……」

ファルファも撃ち込まれていた。以上の参考意見を受け、これがジェリーの結論。

「……悪い人？」

「悪いと言うか……素直なんだよ。嫌いな人は嫌いだから邪険にするし、好きな人には尽くすし、そういう人」

「そう……メラメラも撃たれるの？」

「全部、避けるけどね」

撃たれる事は撃たれるらしい。ただし、当たらなければ問題はない。エレベータの近くまで歩き、そこで司令

官が目覚めます。近況報告。

「……ここは？」

「司令官よ。お前が寝ている内に作戦は終了した。現在地はフレイムタウン付近の火山だ」

言いたい事を言われているが、親子そろって神経が太い。全く意に介さず、これからの活動について話題を進める。

「えー……収穫物を金庫へ保管。ひとまず、今作戦の出撃メンバーは待機をお願いします」

「了解つす。解析や調査は、頭のいい人らに任せます。武器が壊れてたら、言ってくれりゃあ直しますんで」  
「私も、これで……」

「エディ隊員。ファルファ隊員。ありがとう」

「俺も少し寝る。お前は寝てた分、これから仕事しろ」

「ガラム隊員。お疲れ様」

各隊員が解散して行く中、コハクが腕を組んだまま、指令の声を待っている。何を言って欲しいのか、司令官も理解している。

「……で、どのような成り行きで？」

「ドラゴンに食われ、そのまま帰還。収穫物は、その黒い娘が持ち帰った白い石だ」

「白い石を見せてくれないか？」

「これ……老岩石の発声に使われていた石」

ジェリーのバッグを受け取り、中の石を見つめる。要点を理解し、改めて指令を出した。

「なるほど。この石から声を引き出せば、新たな事実に触れられるかもしれない。技術班に持ち込んでみる。これは預かっていいかな？」

「うん……」

「ありがとう。ゆっくり休んでくれ」

収穫物を手に取ると、それに関して解決策を出し合いつつ、司令官とコハクがエレベータへ向かった。司令官たちから視線をはずし、メラがジェリーを見つめる。すると、強くジェリーから抱きしめられた。

「……わっ！どど……どうした！」

「……つかれた。もう動けない」

「……そうだね。休もう」

近くの資材置き場までドラゴンとメラはジェリーを運び、あとは何もしたくないとばかりに砂の上へ寝そべった。ただ、ドラゴンは炎の石の効果で元気。

「あゝ。砂の上、気持ちいい」

「うるさいぞ。寝なさいよ」

「眠くない」

こんな事を言っているが、メラとジェリーが眠ってしまうとヒマになり、いつとも解らずドラゴンも眠った。火山は益々の熱気ぶりで、部屋の中は赤く揺れて見える。ガラクタと砂と石くらいしかない資材置き場へくる者もなく、その場は時間だけが動き続けていた。

『……ジェリー……まで……繰り返す……まで来るように』

「……うゝん。なんか上から聞こえる？黄色コート聞いてきて」

「……」

メラが起きる訳もなく、ジェリーも今回は静か。しばらく無視していたら、再び放送が聞こえてきた。資材置

き場には放送の通る鉄管がない理由から、誰の声なのかも判別できない。

「もう！誰も聞きに行かないから、私が聞いてくる！感謝してよね！」

砂が溜まっている鉄の箱からハシゴで降り、部屋から退室するドラゴン。しかし、聞こうと待機していると、なぜか放送が流れてくれない。

「……聞こえなくなつた。待ちきれない！」

埒があかない訳で、火山の上層まで聞きに行った。大体、20分くらいで下に戻つてきた。メラとジェリーは一向に起きない。

「まだ寝てる……寝ぼすけさんね。ジェリーの事、呼んでたわよ！起きて！」

「……な……なに？」

「やつと起きた。あの弱そうな男の人が、ジェリーを探してたわよ」

「メラメラの、お父さん？」

弱そうな男の人。お父さんと認識が出来ており、意思の疎通が穏便である。メラを叩き起こすのは疲れるからか、そのまま資材置き場に置き去り。エレベーターの場所まで移動しつつ、何用かと問う。

「もしかして……老岩石の声を出せる機械ができたの？」

「これから、難しい事を調べるんだって。黄色コートは来なくていいって」

「あなたも来るの？」

「私は寝るから、弱そうな男の人のところ、ちゃんと行ってね」

「うん」

エレベーターに乗る場所でドラゴンと別れ、ジェリーは一人でエレベーターに乗る。いつもメラと一緒にだが、基本的に独りが好きな人なので、こういう個室は落ち着くらしい。

エレベーターは火山の途中までしか上がらない為、そこから先は徒歩。道で擦れ違う人は忙しそうだったり、それでもなかったり。しかし、ジェリーが防衛隊に混じって何かしている噂はきいているようで、たまに知らない人が挨拶をしてきたりする。

「ジェリー。下にいたのか」

溶岩の溜まっている道までくると、そこで司令官に見つかった。詳しい話を聞かせてもらう。

「石から声を取り出す装置が発見された。これより、メッセージの解読に入る」

「……発見？作らなくてもよかったの？」

「砲火器に用いられる音声認証機能をそのまま転用できたのだが、仕様のあうものが古いタイプの機器でな。機材置場から発掘する羽目になった」

「……うん」

「おそらく、調査は私とジェリーで行う事になるが、問題ないだろうか？」

「お父さんは怖くないから、大丈夫。メラメラはいなくていいの……？」

「何か役に立つだろうか……」

「役には立たないけど……」

「……迂闊に呼ぶと、邪魔になる……な。会議に使用した部屋を空けてある。行こう」

そのまま、火山上層に位置する小部屋へと入る。無骨なテーブルの上に筒状の機械が置かれていて、その中央

にある窪みへ白い石がはめられている。隣に小槌が置かれており、使用方法は明白。

「この筒を叩くの？」

「すれば、石に込められている音が順に鳴る。それを聞いて一節一節、解き明かす他ない。しかし……この中には、ジェリー。君の出生や過去が含まれている可能性もある。調査協力は、無理強いしない」

「……」

ジェリーが口ごもっている、そこへドアのノック音。工事作業員らしき男の人が中へ入り、ひかえめな声で司令官に指示を仰ぐ。

「いや、失礼。こないだ来た王子さんが、なんか仕事をさせるとおっしゃるんですわ。石ころ運ばせんのも身分相応じゃないもんで、どうすりゃあいいんですかね」

「そうですね……こちらへ通してもらえますか？」

「頼みます」

一度、男の人が立ち去る。すると、ジェリーは申告しづらそうに。

「あの……私……ちよつと怖い。私の正体が解って、メラメラに……街の人たちに嫌われたら、もう居場所がなくなるもの」

「……ならば、素性が知れるまで、君は街の人々と一緒にいるべきだ。そして、どのような事実が発覚すれば私がジェリーを煙たく思うのか、全く想像がつかない。それを理解してくれ」

「……ごめんなさい。ありがとう」

「司令官殿！僕は王国ガルの王子、ゲイン！貢献の心をもって参った！」

己の使命感と、いてもたってもいられなさを露わ、ゲイン王子が部屋の戸を開く。世話になっている身の、何か仕事か欲しいのです。

「重要な、お仕事がございます。私と交代で、この鉄の管を叩いては頂けませんか？」

「お安い御用を。身を粉にして、精を出しましょう」

やる気まんまん王子に使命を預け、ジェリーは小部屋を後にした。気をつかってもらい、頼まれ事をお断りした次第、ジェリーの心は空白である。すぐにメラの元へ帰るのも足が進まず、誰も来なような物影に座り込んだ。せつかく見つけた誰も来なような場所だったのだが、防衛隊のジータ隊員が来た。なぜか、つるはしなどを持っている。

「このことか、どうかな……うわ！いつもメラ隊員の後ろにいる女の子！」

「あ……わわ……」

「……な……ながあつたか俺は知らないけど、お前には仲間がいるからな。じゃあな！」

ここで気のきいた事をいえないのが、ジータ隊員たる由縁である。微妙に頼りありそうなセリフを残して、スキップしながら立ち去った。ジェリーも場所を独占するのが申し訳なくなったのか、その場をそつと離れる事とした。

火山の中は仕事が止まず、今も物音や声のやりとりが響く。とはいえ、母親の店で手伝いをした事しかなく、こうした事態に率先して何かする勇気がない。しかし、メラの寝ている場所へ戻るのも気が引けるのか、勇気を出して近くの男の人へ話しかけてみた。

「……何か、手伝える事、ありますか？」

「……………おお。いや、あんた任務で遠くから帰ってきたばっかじゃろ？みんな知つとるから、休んどけじゃ」  
「あ……………はい」

男の人はシャベルで石を投げながら、優しい言葉をジェリーに返している。そう言われたら、お言葉に甘えてしまふ。きつと母親に同じ質問をしても、返ってくる答えは同じ。だから、大人しくジェリーはメラの寝ている場所へと帰る。

まだメラは寝ている。ドラゴンは砂溜まりから落ち、また床で寝ている。それをいい事にジェリーはメラの横に寝転んで、のん気に寝ているメラの顔を見ていた。

「……………眠ってる。かわいい」

誰にも聞こえていないのだが、自分の独り言で恥ずかしそうなジェリー。しかし、ひとたび行動を起こしてしまふとエスカレートするもので、抵抗しないメラを胸に抱き寄せて、『んゝつ』としたりしていた。

「……………ん？わっ……………ジェ……………ジェリー？どうしたのさ？」

「メラメラ。あの……………デート……………しよう」

「な……………何を言ひ出すんだ君は……………彼氏でも見つけてしなさいよ」

「今、デートしたいの。誰でもいいの」

「ええ？だ……………誰でもいいの？」

誰でも良いと言いつつ、ジェリーはメラを抱きしめて放さない。積極的なジェリーに気圧され、メラも承諾するしかない。

「遠征に出た隊員は暫く、働かなくても小言されないからね。そんなに見るとこないけど、探検してみよつか」

「ありがとう。ドラゴンさんは寝てるから、2人で行きましょう」

ジェリーに手を引かれてメラも起き上がると、落ちていたドラゴンを2人で砂の上に戻した。着たままだったコートをメラが脱ぎだすと、もったいないとばかりにメラが止める。

「せっかく、おそろいなのに……」

「だって、動きづらいし……」

「デートなのに……」

「彼女の手作りで、ペアルックか……一生懸命、愛されるなあ」

冗談めかして、メラは脱いだコートを着直す。納得したのか、ジェリーがメラの手を持って、資材置き場から連れ出した。どこへ行くのかは決めていない。

「あたし、デートなんかした事ないし、どんな事するか解らないよ？」

「私も……でも、とりあえず何か食べたい」

「ああ。最後に食べたの、ファルファさんの秘密基地でもんね。お母さんにも、まだ会ってないし、行ってみよう」

生存報告も兼ねて、母親の元を尋ねてみる。おそらく、母親は台所で食事を作っているか、配膳しているかである。他の事をしていたら、もはや居場所の見当もつかない。

「どこにもいないなあ。聞いてみよう。すいません。うちの母、見ませんでしたか？」

台所で石を調理している女の人を見つけ、メラが呼びかけながら尋ねる。すると、よく聞こえない声を発しつつ、女の人は下を指さしていた。

「ん？下？なんだろう。あ、ありがとうございましたー」

「下？また戻る？」

「下だもんね」

言われた通り、下へと向かう。火山の入り口に大きな猫車が幾つかあり、防衛隊の人たち十数人と、メラの母親が何か相談している。

「母さん。どうしたの？」

「……あら、あなたたち……どこにいたの？さっき、お父さんが探してたわよ」

「あ……それは大丈夫。私、会ってきた。でも……期待に比べられなかった……」

ジェリーは上の階で父親と話した件を報告し、メラと母親が「ほう」と納得している。その後、母親は猫車の中を指さしながら、中の代物について説明を始めた。

「隊の方たちが、フレイムタウン近くの食糧庫からステーキ石を持ってきてくれたの。かわり映えない食事も、少しは味が出るかしら」

「ステーキ石なんて、貯蓄してあったんだ。どこにあったの？」

「はは。食いしんぼうに食べられないよう、内緒の食糧庫に隠してあるのさ」

「そっか。じゃあ、あたしが知らない場所だ」

猫車の上に登っている隊員が、そう言いながら茶色く光る石を放ってきた。2つ目を受け取ると、食いしんぼうながらも大きい方の石をジェリーに渡す。

「みんなの分、ある見積もりだから、あなたたちも貰って行っていいわよ」

「ありがとう。行こう。ジェリー」

「うん。ありがとう」

片手にステーキ石、片手にメラの手を放さず、2人で一緒に火山の中へと戻る。次は向かう場所が決まっているようで、またエレベーターに乗り込んだ。行き先へ着くより先、メラが誘いの言葉を出す。

「溶岩の見えるところに行こうよ」

「キレイなものね」

「せっかくだから、あつたかくして石を食べたいよね」

目的はズレているが、互いに満足のいく結論となる。この10年ほど、この2人は、こんな感じ付き合ってきた適当なコンビなのだ。粘度の高い溶岩が溜まっている場所の一つ上の階で、鉄の柵から身を乗り出して、メラが石をあぶっている。その後ろで、ジェリーは石をなめている。

「これ、表面がテラテラしてきたら食べ頃なんだよね」

「私は、そのままが好き……ん？」

食べ物談義をする最中、メラの後ろへ忍び寄る影が。その女の子はジェリーに内緒の「しーっ」をし、メラの腰に強く指を突き立てた。

「んああ！あ……あつ！」

メラの持っていた石が溶岩に落ちていき、指で突いた女の子は慌てて逃げて行った。メラがコートを脱ぎながら溶岩へ飛び降りようとしており、すぐさまジェリーに止められる。その下で、ステーキ石が溶岩に飲み込まれてゆく。

「くっ……誰が、こんな酷い事を。あたし、この戦いが終わったら、さっきの犯人を見つけ出して溶岩に沈める！」

「髪が金色の女の子だったわ」

「2番隊のブラスだな！すぐ戻る！待っていて！」

全力のダッシュで、メラが走り去っていく。置いて行かれたジェリーは心細そうながら、壁際に座り込んだ。考えもなしに正面の道をながめていると、王国ガルからつれてきた側近のデベルが、辺りをうかがいながら工具入れをあさっているのが見えた。

目が合うと、デベルがジェリーを睨みつけ、ジェリーは気分が悪そうに視線をそらす。そこへ、炭鋏夫と思われる男の人たちがやってきて、興味深そうにジェリーへと声をかけた。

「いいもん持ってんじゃん。どこにあったのかな？」

「え？あ……別に」

「腹が減ったなあ。俺も美味しいもんが食いたい」

「……その」

「ステーキ石なら、下に押し車いっぱいにあっただぞ。次の食事を出してくれるって」

「ほんとかよ。見に行ってみようぜ」

結局、探し人は見つからなかった様子で、メラがジェリーの所へ帰ってきた。ステーキ石があると解り、男の人たちはテンション高めに通り過ぎる。メラはジェリーの横に座ると、なにやら愚痴を始めた。

「あの子、ほんと逃げ足の速さが異常だ。諜報部にいるだけの事はある」

「……私にはメラメラと、その……お父さんと、お母さんしかいないけど、メラメラには他にも友達が大勢いるんだものね」

「あたし人気者だからね。でも、休みの日に一人で歩いてると、今日はジェリーいないのかって、みんなに聞かれるんだよ……あたしはジェリーの、おまけか」

「……そうなの？」

「あたしの、たった一人の妹だから、半端なやつとは仲良くさせんけど」

「メラメラ、お姉ちゃんだったの？」

「昔は、あたしの方が背は高かった」

「なら、今は私が、お姉さんね」

「すぐ追い抜くから大丈夫よ」

実現が厳しそうな事を言っていると、割ったステーキ石をジェリーが半分だけ差し出す。

「ジェリーの味がしそう……」

「じゃあ、あげない」

「お姉ちゃん、大好き」

「……じゃあ、あげる」

寄り添い下手に出たら、簡単にくれた。2人で仲良くしていると、そこへ防衛隊のエリザが通りかかる。

「……仲がよろしいようで。それはともかく、遠くまで出張の任務、お疲れ様でした」

「エリザさん。お疲れ様です！」

一目で解る程にジェリーが怯えており、それを知ってエリザも半歩だけ態度を引く。しかし、一つ咳こんでから任務の会話を続けた。

「ううん……非常に立派な、方々のチームでしたので心配でしたが、全員が無傷で帰還とは恐れ入ります」

「まったくチームワークなかったですけど、司令官以外の人たちで頑張りましたからね」

「……あまりに危なっかしいので、私も同行を志願したのですが」

「う……頼もしいですが……ジェリーが怖がるので、ちよつと」

「……ジェリーさん。私は、あなたの味方ですから、安心して頼りにしてください」

「え？あ……はい」

エリザが手袋をした手でジェリーの手を握り、されるがままジェリーは握られていた。それを見て、メラがエリザに軽く触りながら。

「ジェリーとデートごっこ中ですから、あんまり介入しないでくださいー」

「女の子2人で？新しいですね……」

「ごっこなのでいいんです」

なぜか怖気た様子で、エリザが手を振りながら退散する。そうしたら、火山下層で寝ていたドラゴンが怒り心頭で駆けてきた。

「また置いて行った！あつ！おいしそうな食べてる！」

「さつき下で貰ったんだ」

「もらってくる！」

ドラゴンが来た道に戻って行った為、また2人きりである。ステーキ石を食べ終わり、また別の場所へ移動するようだ。なにげなく立ち上がったメラに対し、ジェリーが行き先を聞く。

「どこに行くの？」

「そろそろ空が暗くなる。上に行ってみよう」

メラに手を引かれてジェリーが立ちあがるも、メラの背丈が足りない。そのままジェリーはメラの肩に手を置いて、後ろから押していった。

『上』と漠然ながら言われ、足が向くまま火山を上る。数段の鉄階段を上り、細く枝分かれた道を上る。その上には広間があり、防衛隊制服を着た人にメラが呼びとめられ、誘いを断っていたりする。

その道は火山の外に続いていて、山肌にある上り坂を行くと、ついに火山の火口へ到達する。他の人は誰もおらず、火口からは溶岩の灯りが広がっていた。その光には火の粉が浮いており、光の濃淡は水明りにも似ている。

「夜は、こう見えるのね……きれい」

「ちよつと座ろう」

火口部分で行う仕事は特にない為、イスなども設置されておらず、2人は岩壁に背もたれて腰を下ろす。あとは双方、ずっと考えていた事を告げるタイムミングに悩みつつ、メラが先に話を切りだした。

「あたしが寝てる間に、何かあったの？」

「……解る？」

「ジェリーが変な事を言いだす時は必ず、そうでもん」

「そう……」

ジェリーがメラの猫っ毛な髪をなでており、くすぐったそうにメラは目を閉じている。

「お父さんが今、白銀峠から持ち帰った石を調べてくれるの。でも、私は怖くて一緒に調査できなかったから」

「……でも、気になってるんでしよう？」

「気になる」

「あたしが一緒なら、調べに行く？」

「ずっと一緒にいてくれる？」

「しようがないわねえ……」

「うん」

それから2時間ほど、何をやりとりするでもなく2人で過ごした。繊細な仕草でメラがジェリーの腕から抜けて出して立ちあがると、ジェリーも惜しみつつ腰を上げた。

「どこで石の調査してるのさ」

「前に会議していた部屋よ」

「あの会議っぽい事をしてた部屋か。行こう」

火山の火口から会議室まで20分くらいかかり、徒歩の最中は雑談も進む。

「私と入れ替わりで、王子様が入ってきたけど……」

「優しそうな王子なら、ジェリーと交際してもらえるか持ちかけてみよう」

「……その時は自分で言うから、大丈夫」

やんわりと王子の噂などもしつつ、会議室へと到着。メラがノックもせずドアを開くと、司令官と王子が鈍い動きでメラを見た。

「メラか。何か用でも？」

「……ああ、話にあつた娘さんですか」

こちらもちちらで、時間の合間に娘の話などをしていた様子。司令官も王子も妙に疲れた顔をしているが、その割にはテンションが高い。

「あの……ごめんさい。やつぱり、手伝いに来たの……」

「あ……ああ！あなたは！どうぞ、お座りになってください！」

王子がジェリーにイスを開けている。訳も解らずジェリーは座らせられ、メラは冷やかしてみたりする。

「やったねジェリー。脈ありじゃん」

「……え？」

「王子様と石の内部音声について調査していたのだが、どうもジェリーらしき人物が、我々の先祖の一人なのではないかと解読できた」

「あの……お父さん。詳しく聞かせてもらいたいんだけど……」

「よし」

司令官は細い棒を持ち、あれこれ書かれている黒板をさしつつ説明し出す。

「ここまでのデータをまとめると、過去に我々とは別の人種が、この星を制していたようだ。だが、徐々に星の温度が上昇し、彼らの肉体では耐えられない環境へと変化を始める。ここまではいいかな？」

「はい」

「うんうん」

「指令。ぜひ、続きを」

王子に続きを促され、司令官が頷きつつも次の題へと事を進める。

「そこで、彼らは星を脱出する者、環境へ適合しようとする者の二派に分かれる事となる。環境へ適合しようとする派閥は人体改造の研究に際して、熱に強い体を持つ人工生命体を作ったらしいのだが……体質が酷似している点から、それが我々の先祖にあたるとみている」

「はい先生」

「メラ、なにかな？」

「じゃあ、なんでジェリーは隔離されてたの？」

「ザラという被検体が、体の異常を理由に別室へと隔離され、その後の情報が検出されない。黒色の人物は他に確認されていない為、こちらがジェリーの過去だと思われる」

「隔離されて、そのまま忘れられたんだろなあ。そこもザラらしい」

「ザラって、ウロコだらけの生物みたいな名前よね」

ジェリーは白銀峠で言われた事を憶えていたが、言った本人は全く悪びれない。

「まだ全容を把握した訳ではない。全ては憶測に過ぎないが、それは更なる調査によって信憑性を増すはずだ」  
「指令のおっしゃる通り、調査は序盤。引き続き、情報の収集に励む」

「……この人は父さんの助手か何かなのか？」

「黄色コートの少女よ。僕は王国ガルの王子ゲイン。今こそ、君たちへの恩義を果たそう」

「暑苦しい王子だなあ……」

ここでメラが王子と交代し、石を叩いて音を出す機械に触り始めた。残りの3人は付近に座り、耳を澄ましている。そこへ、防衛隊員の男の人が入室。

「司令官先生！デラ空洞の探索に出ていたチームが、炎の石を発見！持ち帰りました！どちらかに保管しましょう！」

「地下の資材置き場へ、他の炎の石と共に保管してください」

「ラジャ」

男の人が退室。すると、すかさず別の隊員が入室。

「諜報部隊より通告。王国ガルの一般市民と接触到の事。避難場所は王国ガルから離れた地下洞窟。国民、全員の無事を確認！」

「王子様。朗報でございます。ご返信を」

「ありがたい。避難場所や経路の伝達。あわせ、メッセージを預かっていただきたい」

「承ります」

「国民は各自、自治隊長の指示に従い現地にて待機。そして、こう伝えて頂きたい。王国ガルの王子ゲイン。および女王クリスタは健在である！」

「お言葉、お預かりしました。必ず、ご報告いたします」

敬礼の後、防衛隊員が撤収。一連の流れを見つめ、メラが2人をなじっている。

「2人とも、意外と忙しいんだなあ」

「そうぞ。お父さんを尊敬するように」

「下に行ったけど、おいしそうな石もらえなかったわよ！」

今度はドラゴンが入ってきた。石を見つけられなかったらしい。

「そんなら、お母さんのところに行きなさいよ……」

「黄色コートの事は信じない！ジェリー……おねがいおねがい」

「お母さんが下の階の台所にいるだろうから、そこで聞くといいわ」

「解った！行ってみる！」

ジェリーの助言には応じるようで、素直にドラゴンはメラの母親を探しに行った。すると、メラの立場がない訳である。だからといって、普段の行いをわびるつもりはない。

「あたし、人気ないな」

「……私はメラメラの事、好きよ」

「知ってる知ってる。そろそろ、調査再開してもいいかな？」

「どうぞ。ご進行を」

王子の薦めで、調査は続行された。長丁場となった為、ここはダイジエストでお送りする。これはメラと王子の会話。

「白銀峠って、本当は王国ガルの近くにある地名っぽいなあ」

「現在では銀の岸と呼ばれている地だろう。彼の地、オパール王国の領土である」

「白銀峠が銀の岸で……じゃあ、黒鋼峠の下にあった場所は、なんて呼べばいいんだろう」

「黒鋼峠深部では？」

「それだ」

次が王子と司令官の会話である。

「僕たちが作られた生命体だという事実は、皆に公表すべきなのだろうか。不用に動揺を煽る事態は避けたい」

「私はフレイムタウンの全員に発表する予定でございますが」

「心配はないのですか？」

「我々はタフネスとして、『あと少しで全員、死亡する』ような事実でない限り、恐らく誰も慌てふためきはしないので」

「そう……ですか」

「こちらはジェリーと司令官の雑談。

「ドラゴンさんはクネクネくんの人口改良種なのね。しっぽのようなものは、星に熱を送り込む器官で」

「……クネクネくんとは？」

「この子なんですけど……」

「うわ。なにそれ……」

「こちらがジェリーと王子の会話である。

「ご先祖様。ご要望がございましたら、なんなりと僕に」

「……いえ、特には」

「僕ごときでは、満足いただけないと。なれば……王国ガルに伝わる一発芸をご覧に……」

「ごめんなさい……それはいいです」

ジェリーとメラが疲れて眠り、司令官と王子が石の声を片耳に入れつつ、何気ない身の上話をしている。

「王子様、ご家族は？」

「共に城へと残った母上が一人。父上は水の軍団との戦に出撃し、現在は避難した国民の護衛に励んでおられます。そして、僕には許嫁がおります……ベイグランドは、ご存知ですか？」

「こちらからだと、夜の青い星が示す方角にある国だとか」

「そちらの姫が、僕の婚約者でございます。オリオン姫……ご無事を祈っております」

「少し前、ご懐妊されたと耳にしましたが……」

「え!？」

そして、指令と王子が仮眠を取っている際の、メラとジェリー。

「生き物を作るって……どういふ事なのかしら。私たち、なにで出来てるの？」

「石を食べてるんだから、石だよ。たぶん」

「……柔らかい石を食べたら、体も柔らかくなる？」

「ジェリーの髪は柔らかくてキレイだよね」

「メラメラの髪だって、弾力性があってビヨンビヨンよね」

「それは、ほめてないよね？」

「司令官先生殿！」

「ごつごつとした体格の隊員が部屋へと飛び込み、寝ている司令官の顔の上で何か白い物をパタパタしている。うなざれだした司令官を気の毒に思い、メラが隊員に声をかけている。

「なんですか？それ」

「娘！私は、それを知り得たく参ったのだ！こちらに同様のものが、野山の至る場所に散りばめられている！」「どれどれ……」

白くて薄い物を隊員の手から引き抜くと、何か文字らしきものが見え、メラとジェリーは文面へと視線を下げた。書いてある通り、メラが読み上げる。

『降伏宣言。惑星ウルネア一同。白き光の柱にて対話を望む。青衣着物の水使い並び、ドラゴン、ドラゴンの片手剣を除く少人数、交渉へ差し出せ』だって」

「この白いペラペラしたのは、何でできているのかしら……」

「会えそうだから、それも聞いてきてもらったらいいよ……たぶん、青衣着物の水使いはジェリーだと思うけど」

「なに！？ならば、こちらの通告は水の軍団より発せされしものか！毘の可能性は！？」

「そうかもですけど、ドラゴンとガラムさんが大暴れしたから……それで勝ち目ないって思った線もありますね。司令官に伝えておきますから、あと大丈夫ですよ」

「任務は引き継いだ！成し遂げるように！」

隊員は任務をメラへと引き継ぎ、一つ敬礼を見せた後に退室。メラは父親を起こす作業に入る。

「お父さん、起きて」

「……んん？どうした？」

「水の軍団から、メッセージが届いたみたいなの……パパ、起きて」

「……ジェリーのパパは、嬉しいな」

意識朦朧としている父親を呼び起こし、先程のペラペラを手わたす。一読して、残った謎を指さす。

「青衣着物の水使いはジェリーだろう。ドラゴンは無論、あの娘だ、ドラゴンの片手剣とは？」

「ガラムさんだよ。黒鋼峠では、ドラゴンの武器だったんだ」

「ふむ……惑星ウルネアは水の軍団の故郷と仮定するとして、この文では我々と似た言語を用いている。石の声のあった内容と、繋がったかもしれない」

「彼らは、この星を脱出した一族の末裔と推測されますね」

騒がしきで目覚めた王子が、司令官の考えを飲み込んで丸めた。残る謎は白き光の柱、対話の目的。そして。

「結局、この白いペラペラしたのは、何でできてるのかしら……」

「聞いてきてもらったらいいよ……」

「私はフレイムタウン市民の様子をうかがってこよう。王子様、同行を願えますか？メラとジェリーは調査を続けてほしい」

「了解。すぐに参りましょう」

白いペラペラを携え、司令官と王子が部屋を後にした。有無を言わず残されたメラとジェリーだったが、2人きりになると会話が円滑である。

「急展開って、こういう事なのかしら……」

「誰も触れないけど、相手が降伏したって事は、勝ったって事だしね。やっぱりあれかな。ドラゴンとガルムさんの大攻勢が、敵にショックを与えたんだらうか」

「これで終わればいいのに……あつ」

「なに？」

「……でも、負けてもいいなら、なんで水の軍団は、この星に来たのかしら」

「……まだ終わらなそうだね」

考えても仕方がない事は不明にしたまま、2人は石から聞こえる声の調査を再開した。しかし、聞けども聞けども退屈な地熱の温度報告や、生物改良の提案や反応レポートが続く。昼に食べたもの話とか交えてもらわないと、眠くなって仕方がない。

「……腕が疲れた。あたし休むよ」

「待って。今、私の名前が聞こえたような……」

「そう？」

両手を上へと伸ばしたメラに代わって、ジェリーがハンマーで機械を叩く。

『試験体・ザラに関して。皮膚が完治した。生命維持装置を外す。黒曜石に似た硬質の……一方、硬い肌を持つ。眼光は鋭い。精神状態は不安定で臆病、残忍かつ暴力的。隔離を続ける。精神状態の回復は望めるだらうか……』

なんとなく都合が悪くなったのか、ジェリーは叩く手を止めた。

「今まではジェリーがザラなのかイマイチ解んなかったけど、目つきが悪くて黒い色って、完全にジェリーだ

よね」

「……やんちゃだった過去を知られたような気持ちだわ」

こうなってしまうと、もう作業をする気力もでない。2人で部屋の隅にあるベンチへと倒れ込み、体の筋を伸ばしていた。そこへ、意気揚々と出て行った司令官と王子様が戻り、黒板に書かれている調査結果を別の石版へ書き映しながら、事の成り行きを語りだす。

「相手の要望に受けてたつ事となった。総隊長、私、エリザ君、ゲイン王子の4名にて、指定の場所へ向かう」  
「へえ、王子も行くんだ」

「黄色い着物の娘よ。僕は幼少より外交の場へと立ち合い、数々の歴史的瞬間を目の当たりとした生き証人。険しい交渉となれば、必ず役目を果たしてみせよう」

「暑苦しい王子だなあ」

「がんばって……」

王子が暑苦しげられたりジェリーから応援されたりしているものの、同行する司令官は心配してもらえない。素っ気ない様子で、司令官もアピールしてみる。

「敵の畏という可能性も否めない。危険な作戦となるだろう」

「だって、水対策した総隊長とエリザさんつれていくんでしょ？戦いになったら、敵軍の半壊は避けられないじゃん……」

「水の軍団と会う場所は解ってるの？」

防衛隊の主戦力を携えていくせいで、あまり心配されない。もはや、ジェリーに至っては約束の場所を気にし

だす始末。

「ここよりフレイムタウンへ向かう道中の丘にて、謎の発光物体が発見されたらしい。これ見よがしな光線が天へと伸びている事から、ここが指定のポイントと推測される」

「で、父さんと王子は何を書き始めたのさ？」

「私が帰らぬ人となった場合、しゃべる石についての調査記録を町民へ伝える者がいなくなってしまう。先に情報をまとめ、新聞に載せるよう伝えて行く」

「僕が何らかの事故で故人となれば、王国ガルの国民はフレイムタウンに不信感をもつだろう。それは許されない。決断の証として、手記をここに残そう」

頼りないように見えて、あれこれと考えているのだ。そんな忙しい2人の横で、メラとジェリーは伸び伸びしているのだが、お互いに何を言うでもない。その静かな部屋へ、うるさい動作でドラゴンが入ってくる。

「ステーキ石もらった！」

「よかったじゃん」

「よかったの！」

茶色い石に噛み付きながら、ドラゴンは寝ているメラの足元へ座る。一応、メラは調査で解った事をドラゴンに伝えるようだ。

「ドラゴン、クネクネ君の種類なんだってさ」

「そうなんだ！親近感！」

「あと、炎の石を食べると、その熱が尻尾から星に伝わるんだって」

「しつぽピンってなるから、そうかも」

こちらも自分の事実には、あまり動揺しない。そんな事より、ステーキ石を食べる方が重要なのである。そんな不要だったかもしれない会話が終わると、司令官と王子の手も止まる。

「支度を始めましょう。メラ、ジェリー。おとなしく留守番をしているように」

「やつと大人しく留守番ができるぞ」

「メラメラ、おるすばん好きなのよね」

「楽だしね」

「また部屋を出る。あとは任せたぞ」

生意気な娘たちを残し、再び司令官と王子は資料を持って部屋から出た。あとは司令官たちが出発する時間に見送りをするだけであり、それまではメラとジェリーも休憩してしまう。他に発覚した事実はないのかとドラゴンに尋ねられるも、メラは。

「別にないよ」

と一蹴である。メラもジェリーも眠ってしまい、ドラゴンも寄り添って寝てしまった。

『ご連絡。隊長一行が、ご出発となります。お見送りの方は、火山正面入り口まで』

ポーンという効果音に混じり、壁の鉄管から放送が流れる。その声が母親のものであったからか、ジェリーより先にメラが目を覚ました。

「見送りに行くこうか」

「……心配なものね」

ドラゴンは起きなかった為、メラとジェリーだけが火山の入り口へ向かう。司令官から聞いていた人数より、チームのメンバーが増えていた。

「セグさんとグライン隊長が増員されてる……」

「あの、黒鋼峠に一緒に行った、大きい女の人は行かないのかしら……」

「司令官と総隊長が失墜すると、あの人が実権を握れるからなあ」

知ったような口をきいたメラが頭を後ろから掴まれ、コハクに何処かへ連れて行かれた。

「ああ……メラメラが」

連行されていくメラを見送りつつも、父親は妻との別れに言葉を残している。

「話をつけて、すぐに戻る。心配はしなくていい」

「これだけの手だれぞろいなだから、お相手が手を出さないでくれる事を願うわ……」

出発する面子が家族との名残を惜しんでおり、ジェリーも母親の横に並ぶ。遅れて、メラもコハクと一緒に来た。

「ジェリーは調査を続けてほしい。情報は多いに越した事はない」

「うん」

「メラは迷惑をかけないように」

「うん……うん？誰に？」

「司令官よ。精神を強く持て。お前が脱落すれば、チームは四散する」

「はい。コハク隊員も、街の皆さんについては任せました」

「あなた。気をつけて、いつてらっしゃい」

「ああ」

情報交換を終え、チームは謎の軍団との交渉へ向かう。初の任務となる王子の背を見つめつつ、気をもんでいる様子の王女も伺えた。王子の見送りだと言うのに、側近は姿が見えない。それに気づくと、なぜかメラが不機嫌そうである。

「あのオッサンは、どこで遊んでるんだらうか」

「怖い人よね……」

「しかも、ジェリーを化け物よばわりする態度が気に食わない。今度あったら、砂をまいてやるうか」  
などと愚痴っていたら、

「鼻の赤い、挙動不審な男か？老人に威張り散らしていた次第、厳しく叱りつけた」

「すつきりしました。一生ついていきます」

「ついてくるのは、たまにいい。邪魔だ」

コハクの自治活動を通して、全く無関係なメラがスッキリした。それはさておき、いつまでも外で立っている訳にもいかない。それぞれ、やることはあるのだ。

「調査に戻らないと」

「その前に、ごはん食べないと気力が沸かないや……」

「畑から熟成黒石を持ってきてもらったから、それを温めてあげるわ。食堂に、いらっしゃい」

メラが空腹を訴え、母親に献立を教えるももらったりしている。ただ、防衛隊員のエディが近くにいるのを発見

すると、忘れていた用事を取り出した。

「あつ！エディさん。ちよつと武器の事でいいですか？」

「ああ、なにかい？」

「もう少し、武器を強化したいんですけど、改良の余地ありますか？」

「どれ、見せてみな」

なにやら相談が始まったものの、ジェリーは砲火器について知識と興味がなく、空などを見上げている。すると、通りすがりのジータ隊員に声をかけられた。

「紫の空だ。星がキレイだな」

「え……あ、うん。あの……」

「俺もやる事があるんだ……それじゃあな」

「あの……ちよつと待って」

「え？なんだ？」

どうしても気になる事があるらしく、珍しくジェリーが人を呼びとめる。そして、ひととき青い星を指さして疑問。

「あの星……あんなに大きかったかしら」

「………どうだろう。でも、悪い星じゃないと思うぜ」

極めて抽象的かつ、なんのアドバイスにもならない台詞を発し、ほがらかにジータ隊員は去った。したら、ジェリーの方も大した問題じゃないような気がしてしまつたらしく、不可解そうながらも納得した。

「ごめん。行こう」

武器をエディに手わたし、身軽となったメラが戻ってきた。家族3人で階段を上り、ドラゴンを残してきた部屋まで戻る。一応、ジェリーが声をかけてみるらしい。

「ごはん食べに行くわよ。いる？」  
いない。

「また、いないの？どこ遊びにいったんだか」

ドラゴンは不在であった。部屋の隅にも転がっていないので、どこかへ出かけたのだろうと察したのだ。そこから少し離れた場所にある食堂……として使われている大きな部屋は大勢の雑踏で溢れており、隊員の制服を着た者も幾らか見受けられる。その壁際の席へジェリーたちが腰を落ち着けると、司令官の残した研究成果が雑談として聞こえてくる。

「俺たちが昔に作られた生物だったって。だから、何を思うでもないって事よ」

「飯うめー」

意に介さない様子を見て、ジェリーも安堵の息である。ただ、ジェリーの過去については誰も聞かされていないのか、食堂に入ってから一度も声を掛けられていない。会話するでもなく3人で座っていると。母親が調理仲間から心配される。

「ご主人、また出勤だったって？大変ねえ」

「他の人たちがケガだらけでも、一人だけピンピンして戻ってくるんじゃないかと、気が気じゃないわ……」  
「またまた。あんまし無理しないでね」

こんな事を言っているが、短い休憩時間で出発を見送りに行くくらいには心配しているのだ。テーブルまで配達してもらった鉄板には砕いた石が色とりどりに乗っており、赤い石は辛く、青い石は酢風味、緑色は味がなく、白い石は甘い。まぶされている黒い粉は塩っぱい。

「あたし、この黒いのキラインなんだ〜」

「私は、なんでも好き」

「親が同じでも、姉妹で性格が違うんだから不思議だ」

「メラを悪い子に育てた責任は感じてるのよ。ごめんね。ジェリーだけをいい子に育てちゃって」

「その返しはキツイ……」

大体、両親と話すときメラは勝てないのである。なるべく良い子になるよう、食事は残さず食べさせられた。その後、メラとジェリーは母親と別れて、再び調査部屋へと戻る。

「さて、やるぞ」

と気力を出し、まだ調査していない最後の一つになる石をハンマーで叩くと。

『いずれにせよ、時間はない。私も場所を移し、研究所にて仕上げを見届ける。建設中となるレッドスターに  
関して……ッ……ッ……ッ……第53レポート・調査報告を開始』

「メラメラ、ちよつと止めてちょうだい」

「……うん。なに？」

小槌を振り上げていたメラが、ジェリーの呼びかけで手を止める。その理由は簡単。

「最初に戻ったわ……次の石もない」

「じゃあ、なにか？これで全部って事？」

「全部……だとすると、最後まで記録が続いてない」

「他の石にも少しずつ出てきたけど、レッドスターってなんなんだ」

「解んない……でも、最後の脈絡からするに、この人は別の研究施設へ移動したんだと思う。だとすると、白銀峠には以降のレポートはなかったのかも」

「どこなのさ。別の研究施設って……」

「白銀峠から長い道のり離れていなくて、謎の研究施設……」

「……あそこかなあ」

「うん……」

2人とも自信はないのだが、該当しそうな建物におぼえがある。メラは臨時の小型武器を、ジェリーは注射器型放水機を小脇に抱え、すぐに部屋を出た。エレベータに2人だけで乗り込み、しばし沈黙した後、メラが確認するように。

「そういや、ジェリーが水の研究してた建物、あれなんなのさ」

「2人だけの秘密基地だったのに、メラメラが来てくれなくなったから……構ってくれなくて、ちょっと寂しかった」

「隊に入ったら忙しくて……でも、いつもジェリーの事は思ってたから……」

なぜか気まづくなったところで、エレベータが下まで到着。ジェリーが気難しい顔をしており、メラは小声で謝罪していた。

火山の入り口から研究所までは遠くなく、徒歩なら30分程度。遠くに見える白い光の柱を見つめつつ歩く。見知った謎の建物は水の軍団から攻撃を受けたようで、その影も形もなくなっている。がれきを退けると、地下への入り口は発見された。

「ジェリー、なにか心当たりはないの？」

「ない……あつ。ある」

「あるの？」

「地下に、たまに光る壁があるの」

「初めて聞いた。なんで、今まで言わなかったの？」

「あんまり興味なかったから……」

「君は、水以外に興味ある事ないのか？」

「ない……あつ。ある」

「なにかね。言ってごらん」

「……メラメラには教えない」

明らかに光って怪しい壁があると知り、2人は地下へと降りてみる。地下には足首の高さあたりまで水が溜まっていて、ジェリーの研究器具あれこれが浮いている。光る壁はハシゴの横にあり、すぐに見つかった。

「ここだな。叩いてみよう」

といつつ、メラが壁を蹴り始めた。少し土は崩れたが、まだまだ頑丈。

「こういう掘りたい時に限って、どうしてドラゴンいないんだろう」

「私がやってみる。ハイドロクラッシュ！」

散弾銃の要領で水の弾を発射し、壁の土を溶かして削る。一撃で作業は終了するも、メラとジェリーは泥だらけになった。

「……ごめんなさい」

「……帰ったら、石鹼で体をみがこう」

土煙が収まり、再び2人は光壁へ視線を戻す。今度は数字のようなものが画面に表示されている鉄の壁が現れ、2人は壁の泥を手で払いながら、またしても首をかしげる。

「こういう謎解きが必要な時に限って、お父さんいないのはなんなんだろう……」

「こうして頼られるから、いつも忙しそうなのね」

画面には2つの数字が並んでおり、片方は小数点まで表示され変動、もう片方は正数のみ表示の不動である。変動している側の数字が不動のものに比べて小さい。

「……ジェリー、任せたい」

「そう言われても……とにかく、壊せないか試してみましよう。ハイドロファイアー！」

水しぶきと湯気は消えるが、鉄の壁は消えない。少しだけ、変動している値が上昇している。

「おつ。数字が増えたぞ。あたしもやってみよう。ダイナモファイアー！」

メラが鉄の壁を火であぶってみる。わずかに数字が上昇するも、それだけの事である。

「もうちょっとで、横の数字を追い越すんだけどなあ……なんだろう」

「まだ20くらい差があるけど……」

「……ダメだ。お手上げ。帰ろ」

何も思いつかなくなつた時、人は諦めてしまうのだ。メラがハシゴに足を乗せると、どこかで大爆発が発生。激しい揺れが地面を伝う。肌で解るほど、気温が急上昇する。

「な……なんだなんだ？」

ハシゴから落ちてきたメラをキャッチし、一緒になってジェリーが尻もちをついている。なんとかハシゴに掴まって、揺れが収まるのを待つ。地下室は壁の表面こそ土だが、中は鉄の壁で囲まれていて、土砂で崩れはしなかつた。

気温の変化が著しく、メラもジェリーも頬を赤くしている。すると、鉄の壁に表示されている数字がグングンと上がり、変動値が不動の値を追い越した。それを待っていたかの如く、鉄の壁はガチリと音を立てて揺れる。

「……もう大丈夫だから、ジェリー放してちょうだい」

「あ……うん。あの壁、開いてる？」

「よく解らないけど、開いたみたい」

よく解らないが開いた為、メラが恐る恐る手で引いてみる。中は個室となっていて、木で作られた箱が台の上にドカッと置いてある。もちろん、開ける。

「なんだろう……防衛隊の人が持ってたのと同じ、白いペラペラが入ってるぞ。あと、何かの石だ」

「何か書いてある？」

「読むぞ。『気温の上昇に伴い、ついに研究も大詰めとなる。レッドスターの起動条件を一つ、ここに残す。二つ目は私の愛しいデータバンクへと託そう。三つ目は時間が有する。環境対策統括大臣、ジルベ・グライガー』

だつて」

「ジルベ？ジルベ……聞いた事ある。あ……あ……」

「どうした？」

ジェリーが右手を頭に当て、よろけてヒザをつく。メラは応急手当の知識がなく、なにもせず慌てている。頭の中を締めつけるような痛み、それも数秒で遠のく。ゆっくりジェリーが立ちあがると、メラは訳もなさそうにジェリーの背中をさすっていた。

「目まいか？どこか痛いのか？」

「大丈夫……全部、昔の事が戻ってきただけ」

「え……なんで？」

「ジルベ・グライガーは、私を作った人の……一人だから……」

「記憶が……ジェリー。ジェリーは、ジェリーのままだよね？」

「うん」

「……みんなのところに帰ろう」

外で鳴った大爆発も気がかりなのか、メラはジェリーを引張ってハシゴの下まで連れて行く。じつとジェリーの顔を見てから、急いで地上へと戻った。

「……うわあ。火山から火柱が上がってるよ」

「あらまあ」

もはやマグマでもない、なにか赤い発光物体が火口より立ち昇っている。ただごとではない火山の様子を目に

見て、2人も小走りで帰路に行く。火山の入り口には司令官一行が戻ってきており、メラとジェリーの姿を見た途端、珍しく司令官は気が動転した様子で。

「水の軍団改め、惑星ウルネア軍より事の一部始終を伺った。この星は、惑星ウルネアと衝突する！」

「ちよ……お父さん。気は確かですか？」

「冗談を言っている場合ではない。あの空にある青い星が惑星ウルネアだ。星の温度が上がった理由も不明。みなさん、大至急で情報の収集を！」

指令を受け、エリザ、セグ、グラインが火山の中へと入って行き、一緒に司令官も走り去る。総隊長はドンと構えており、ゲイン王子の背中を叩きつつ、聞いてきた話を自慢する。

「どうも奴ら、母星が黒コゲにならぬよう、この星を冷却しておったようだ」

「彼らのマザーベースが一機、後に火山の近くへと移動してくるらしい。緊急事態である故、フレイムタウンの所有資源を提供すると司令官殿が決定した」

「……総隊長！レッドスターについて、何か言っただけでなかったか？」

「む？う……うゝむ」

よく憶えていないらしく、総隊長はメラの疑問をそのまま王子に流した。

「レッドスターという名の気温補助装置が昔、この星には開発・設置されたようだ。それを彼らは搜索していたようだが、未だ手がかりがない。先に白銀峠を攻略された事でレッドスターのヒントを奪われたと見て、今回の対話をもちかけたようだ」

「レッドスターのレポートは僅かだけど、記憶にある。場所は黒の研究所……白銀峠の最深部。起動のキーは

……これだと思う」

ジェリーは研究所で見つけた石を取り出し、総隊長に手わたす。いぶかしげに石をのぞき込むも、総隊長は大きな手のひらに収めた。

「一旦、これは預かる。指令のやつも見たかろう」

「……でもさ。起動のカギは3つって書いてあるよね？一つは石だとして、データバンクに託された二つ目と、時間が有する三つ目はなんなんだ？」

「レッドスターは大量の水を地下に溜めこみ、それを特殊な砲台から発射する装置なの。どうして使用されなかったのかっていうと、水が足りなくなったから。以来、一度も使われていないから、地下水のチャージは完了してはるはず」

「データバンクは？」

「……それは記憶にないのだけど、私がレッドスターの場所を知ってるから、私の知識の事かも」

「なるほど。総隊長！そうらしいです！」

「情報は固まった！準備に行くぞ！」

「援助いたします。共に参りましょう」

猶予がないといわんばかり、王子に急かされ総隊長も仕事へ向かう。その姿が暗闇に消えると、メラとジェリーは最後にモーターの爆音を受け、細めた目で空を見た。そこには大量の水を放水しながら飛ぶ、巨大な戦艦があった。

「……逃げよう！」

「う……うん」

迫りくる波から逃れようと、メラがジェリーの手を引いて走り出す。エレベーターは偉い人たちが乗って行ってしまう、乗り場には残っていない。迷わず階段を上がり、火山の通路に押し寄せた水より免れた。

火山の3合目にある横穴から外の景色を見て、視界を覆いかくす程の飛行戦艦と対面。その発射ポートには小さな飛行機が幾つか乗っており、王国ガルで遭遇した氷を出す乗り物も発見できた。すると、ドラゴンとの2人旅を思い出してしまい、ジェリーは急いで顔を窓から引込めた。

「すごいなあ……火山と同じくらい大きいぞ」

「……怖いから、奥に行きましょう」

「そう？じゃあ、なんか手伝いに行こっか」

着陸した敵船が全く動作しないのを確認した後、メラとジェリーは火山の奥へと向かった。とはいえ、レポートの調査も終了してしまったし、フレイムタウンの住民たちは敵船の襲来に大騒ぎ。何から手をつけようかも考えつかず、2人は壁際に立って様子を見ていた。

「各隊長が総出で説得に当たってる……これを納めるのが、父さんたちの今の仕事かな」

「大変そう……」

『……ジェリー。たすけて。ジェリー』

「……メラメラ、なにか言った？」

「え？何を？」

かぼそい声で名前を呼ばれた……ような気がして、ジェリーがメラに尋ねている。念入りに耳を澄ませてみる

と、やっぱり聞こえた。

『ジェリー。たすけて。おねがい』

「ドラゴンさんの声……下の方から聞こえたわ」

「なんつて？」

「おねがいって」

「どうせ、また何かをねだってるんだよ。大した事じゃない」

『むむ……黄色コートのカカ！』

「む。あたしにも聞こえたぞ！下だ！」

悪口だけは耳に入るようで、メラもドラゴンの居場所を知った。上がったばかりの階段を降り、すでに水の引けた一階へ。資材置き場の扉を開き、その辺を探してみる。

「……いないなあ」

「でも、この辺りから聞こえたわ……」

「からかってたりしたら、しっぽつねりあげてやろうか……ん？」

「ふ……ふんでる。いたいいたい」

歩み出したメラの足の下には小さいトカゲが落ちていて、かつてのドラゴンである。しっぽをつまんでメラが高い所に乗せてみるも、無気力さながら腹を上にして落ちている。詳しく話を聞いてみようと、ジェリーが優しく声をかけてみる。

「どうしたの？疲れたの？」

「あゝあ、こんなに小さくなってしまつて」

「部屋で寝てたんだけど……目がさめたら、くさりでグルグル巻きにされて、怖いオジサンが炎の石を食べさせたの……」

「よかつたじゃん。たくさん食べれて」

「よくないの！無理に体あつたためると、痛くなっちゃうの！あつたかみはシツポから地面に流したけど……痛くて動けない……」

「あの……怖いオジサンって誰？」

「王子と一緒に来たオジサン！もうヤダって言つても、どんどん炎の石を食べさせるの！水の軍団を締め出すとか言つて！」

「なるほど。それで火山が噴火した訳か。この件は……父さんに言おう」

「うん……言つておこう」

ジェリーはドラゴンを頭の上に乗せて、メラと共に資材置き場を出た。今度はエレベーターが下に降りており、上の階に戻るのも楽である。

「このウスノロどもめがあ！」

と、人々がザワついていたフロアへ戻つてみると、聞きなれない怒声。人々に囲まれ、王子と一緒に来たオジサンが何かをわめいている。

「この街の上官どもは、簡単な解決策を知らながら、今まで手をこまねいていた！私が腕を振るおうならば、火山活性、敵軍撤退！全て順風に事が進むのだ！あのような奴ら、失脚させるが街の為である！」

「……あつ、司令官先生。いいところに。話を聞いてやってください」

手柄話をふるっているオジサンに困り、炭鉱夫らしき男の人が司令官を呼ぶ。面倒そうな様子も見せず、司令官がオジサンの前まで歩いてくる。

「貴様が知恵頭か！あれほどの情報が判明している現状、すぐに手を下せぬ者が指令を名乗ろうとは片腹が痛い！みなさん、このような若造に判断を任せていては危険です！いま一度、党首を威厳と実績により選定すべき……ふ……お！」

熱弁オジサンの右頬を殴って凹ませ、司令官は涼しい顔で場を後にした。周りの人々は嬉しそうな様子で拍手などしている。もちろん、おじさんとしては憤慨の事である。

「ば……隊の一派が無能ならば、村人も習って無知であるか！救いようもない！」

「デベル。もうやめないか」

「ああ、王子。私は民の……星の為を思い行動を起こしたのです。どうか、ご理解を……」

司令官に代わり、王子がデベルの対応にあたる。王子も立ち振る舞いは穏やかであるが、顔色こそ優れない。

「慢心は、貴様の方だろう！常に人々の不安を煽り、地位にしがみついていたのだ！つくづく愛想が尽きた！」

「……であれば、私を国より追放なさいますか。その暁、王国ガルの未来を暗く染めてやりましょうぞ！後悔はなさりませんか！」

「貴様は王国ガル特攻隊長に推薦する！兵の見本となる生き様、期待しているぞ！」

「……な！王子！貴様あ！」

その問答を見て、フレイムタウンの人々は笑顔であった。結果は問わず、迷いのない判断は賞賛されるのだ。

とはいえ、娘にも手を挙げた事がない父親が、知らないオジサンを殴っている光景は娘たちからすれば異様である。いまだにメラは感心した素振りで腕を組んでおり、ジェリーは特に驚いた表情であった。

「ジェリー、話がある。至急、研究室へ来てくれ」

「お父さん、手は大丈夫？」

「少し痛むが、問題ない」

手をグーパーグーパーしつつも、司令官は火山上層へと歩き出す。ついさっきの行動が父親らしくなかったせいか、父親の後ろを歩きつつも、メラが暴行の真意を尋ねている。

「珍しいね。父さんが手を出すの」

「……ん？ああ、あれが一番、早い解決を望めたからな。彼は人々の精神をゆさぶる知恵こそ優れているが、その土地その土地の気風を理解していない」

「ふうん。やつぱり、父さんもフレイムタウンの人だな」

「すまない。私もフレイムタウンの人なんだ。ところで、ジェリーの上の生き物は？」

「ドラゴンさん」

「怖いオジサンにイジメられた……しよぼしよぼ」

「……大方の事情は把握した。老岩石の声を調査していた部屋を戸締りしなかったのは、私のミスだな。さて、話というのはレッドスターについてだ。隊長から聞いたが、ジェリーは過去の記憶を取り戻したのか？」

「取り戻した……はず」

「ウルネア星団より聴取したレッドスターに関する情報と、ジェリーの記憶を照らし合わせ、私たちがしなけ

ればならない事を探し出す。惑星ウルネアの方々には火山の外で待機して頂いているが、彼らが星に滞在している時は長くないだろう」

そんな話を聞かされている内にも、老岩石の声について調べていた部屋の扉が見えてくる。扉を開けると総隊長の大きな態度で座っており、待ちかねたとばかりに待ちかねたと言っている。

「待ちかねたぞ！司令官！わしの伝言通り、娘が事件解決のカギを知っていただろう」

「総隊長が話を正確に伝える訳ないから、王子様が伝えたんだろう」

「娘、何か言ったな？」

「晩ご飯の話ですよ。気にしないでください」

「なら良い。司令官、作戦会議を始めろ」

「では、失礼して……ジェリー。レッドスターが白銀峠最深部に眠っていると聞くが、それで正しいかな？」

「私の記憶では……そうなってる」

ジェリーの答えを待ち、司令官は石版を取り出す。これには水の軍団から知り得た情報が書き記してあり、それを黒板に写しながら続ける。

「レッドスターは大量の水を放出し、星の温度を現在の平均より下げるとある。ジェリーの話と照合がとれたので、間違いはないだろう。問題は……最深部への入り口は、どこなのか。誰が起動に向かうのか」

「ちよつと待った。お父さん、レッドスターとやらを起動させる気まんまんだけど、それは異なんじゃないの？」

「メラ、良い質問だ。我々はレッドスター起動作戦の前夜、ウルネア唯一の惑星間飛行船内部へ、数種類の爆弾を計300個、場所を決めず散りばめて仕掛ける予定だ」

「……お父さん、それはなんの解決になるんだろうか」

「惑星間飛行船が一つしかない事実は、相手が口をすべらせた。飛行船を失えば、ウルネア星は我々の星の状況が解らず、手出しができない」

「うむ。やつら、わしが乗り物を蹴とばしてやると、首の根をしめられるかのような面持ちで自白しおったわ！  
がはは！」

「総隊長が脅したのか……それはいいとして、惑星間を行き来する乗り物くらい、また作ればいいだけじゃないの？今の来てる人達は捨て駒にして、違う人達が星を冷やしにくるかもしれない」

「ジェリー、この星を脱出した人々が、どのような星に向かったか、知っているかな？」

「うん。総面積でいうと、ここから炎の神殿までくらいしかない小さな星」

「空に見える星影からも、非常に小さな惑星であると解る。総人口5万人、水の軍団の隊員は4000人。常識で考えたならば、人材を切り捨てる判断はできない」

「とはいえ、100%ではないんじゃない？」

「念には念を入れ、我々がレッドスター起動へ向かうのは、彼らが宇宙へ避難すると同時に行う。罠であれば、相手は実力行使に出る」

「つまり……まだ相手側は、こちらがレッドスターを起動させに行くか」

「約束はしていない。おそらく、相当に気をもんでいることだろう」

質問攻めにするも、軽く受け返された。メラとジェリーは無言で顔を見合わせて頷き、司令官に話の続きを促した。

「話を戻そう。白銀峠の最深部へは、どこから入るのか。それに伴い、どのような装備が好ましいのか。それらについて、ジェリーから情報を仕入れたい」

「白銀峠最深部へ侵入するには、白銀峠にあるメインコンピュータへログインした後、電子ロックを解除すれば大丈夫」

「め……めんこをでんろく？ジェリー、なんだって？」

「メラメラも見たと思うけど、白銀峠の壁の装置が作動すると、黒い窓に様々な情報が表示されるの。それ」  
「なるほど。あれを動かすのか……あ！じゃ……じゃあ、ジェリーも作戦に同行するの？」

「……私、この星の人たちを助きたい。あと、私を作ってくれた人たちの仲間……水の軍団の人たちも。やれる事はなんでもしたい」

「……うん。レッドスターが水を溜め込んでるって事は、白銀峠最深部は水浸しになってるかも。だったら、あたしも留守番はできないよ。お父さん」

「ああ……この戦い、最後の作戦だ。父親としては情けないが……私は戦力外ゆえに同行はできないだろう。ジェリー、そのコートの精製方法について、何か思い出せないだろうか？」

「今なら、作れる。素材があれば。でも、完全に成分を付着させるまでに、朝晩二回くらいかかると思う。たぶん、クロルジヤッペルの量にもよるけど、きつと何着かは作れる」

「クロルジヤッペルだな。取り急ぎ、かき集める。総隊長、私は武術の心を知りません。屈強な隊員を選出してください。お願いします」

「よшきた！全て任せておけ！」

得意分野を任せてもらい、総隊長は早速といわんばかり部屋を後に。司令官も資材の確保に動かねばならず、すぐさま総隊長に続く。ジェリーは弱ったトカゲ……ドラゴンを石の釜へと入れ、回復などを計っている。

「うあ。じんわり温かい」

「ドラゴンさんは、ここで休んでいて。私も、行かないと」

ドラゴンを安置し、ジェリーも行動に移る。話の流れとしては、コート作りの準備に入るのだが、メラは念入りに詳細を尋ねている。

「コートを作るには、何が必要なんだろう」

「大きなタライがあれば問題ないと思う。あとで、資材置き場から借りてきましょう。でも、その前に……」  
シロイモリが入っているビンをジェリーが取り出し、それを見たメラが2歩ばかり退いている。事情は通路を歩きながら聞く。

「急に星が熱くなって、外の動物さんたちもビックリしてると思うの。だから、クネクネ君に情報の伝達を頼んでおきたいの」

「……ま……待って。クネクネ君、他の動物と会話とかできるの？」

「え？」

「……えっ？」

お互い、いまいち相手の意図が掴めず、無意識に足を止めている。再度、メラが確認しつつ、歩みを進める。  
「クネクネ君、他の動物と会話できるの？」

「え？」

「……あれなの？天然ボケなの？」

「でも……してたでしょ？」

「え？誰と？」

「この火山に住んでる火ネズミさんとか、ファイアーフラワー地帯の動物さんとか」

「なんで、会話してたって解るのさ」

「え？聞こえなかったの？」

「え？」

エレベーターが設置されている場所まで向かう途中、またしても足を止める。

「ジェリー……動物の言葉、解るの？」

「う……うん」

「じゃあ、ザルバ溪谷のオオカミみたいなもの、なんつて言ってた？」

「急に寒くなってヤダね……っつて」

「……なんとなく、他の人がジェリーをどう思ってるのか、理解できた気がする」

「……そうなの？」

メラは同じ屋根の下に住んでいて気づかなかったようだが、同居していた人が不思議系ヒロインであると遂に解ってしまった。すると、どことなくメラも意識してしまうようで、一歩後ろからジェリーの背中を見つめてみたりしていた。

エレベーターには土を運んでいる人が2人ほど乗っていて、一階に降りると濡れた部分に土をかけていた。メラ

とジェリーは火山の入り口から外へ出て、ずっとビンに入っていたシロイモリを解放する。

「おねがい。みんなに星の危機を伝えて」

注射器から汲み出した水をかけると、シロヤモリはグングンと大きくなり、すぐにジェリーたちよりも大きな体格を得る。声こそ出さないが、使命感を帯びた様子で駆けだした。

「……あれ？あいつ、もしかしてドラゴンより立派なんじゃないか？言われた事できるし」

「水の軍団が特殊機関で育成した、第一級生体兵器って自分で言ってたもの」

「なんかイメージ変わるなあ……」

重大な仕事をエリート謎生物に託し、ついでに水対策のコートを作るためのタライも資材置き場より拝借。メラがタライの底をボンボンと叩いていると、鉄の大きな箱からススだらけの父親が出てきた。

「はい……なんだ。メラとジェリーか」

「……パパ。もしかして、コートの素材を探してくれてるの？」

「ああ。火山の上層でも発掘を続けているが、希少な鉱石だ。街でも高値で取引される」

「ジェリーの、お小遣いをすりへらした犯人だからね」

メラは鉱石など買った事がないが、これでジェリーが貧しくなったのだろうと推測はできた。

「街の人たち、いつも頑張ってるねって言っつて、お小遣いくれるけど、ちゃんと断った」

「ジェリー、えらいぞ」

「えへへ……」

教育の賜物であり、父親としても鼻高々である。しかし、隣の娘は街の人たちから食べ物をもらったりしてい

るから、ここはダンマリをきめこんでいる。そこへ、壁の鉄管を通して、落ち着いた声の放送が響いてくる。

『メラ隊員、武器が凄い事になったぜ。早いとこ高炉まで来てみなあ』

「エディさんだ。いい声だなあ」

「うん。いい声」

「以前、アナウンサーにならないかと頼んだが、もつと華のある人に頼んだ方がいいと断られた」

「いい声で、しかも謙虚だ。ああいう、お兄ちゃんが欲しかった」

「私も」

「私も若い頃に、ああいう兄貴分が欲しかった」

この騒動の中、みんな誰かを頼りたい様子である。下つ端のメラは良いとして、司令官とジェリーは立場上、より所が少ないのだ。

「あたし、ちよつと武器の様子を見てくる。エディさんに預けたんだ」

「うん。行ってらっしゃい」

凄い事になったらしい武器を見に行く用事で、メラが資材置き場から出て行った。タライにコートの素材をジャラジャラ入れて、司令官とジェリーで協力して運ぶ。メラは階段で行った訳で、エレベータは下に残っていた。火山の上層に出ると、そこで母親と対面する。やや気に病んだ顔であったが、司令官とタライを運んでいる娘を見て、安堵の息をついた。

「ジェリー……記憶が戻ったのね」

「うん。でも、それだけ」

「よかった……」

「ジェリーなら、この通りだ。今、手が空いているのであれば、ジェリーの手伝いをしてあげてくれないか？」  
コートの耐水とか練成とかより、まずはコート自体を作らないといけないのだ。その作業とは、薄くて軟い金属をホチキスでつむぐ裁法である。ジェリーは器用だが仕事は遅いので、そこは任せてしまうと多大な時間を要する。

「皆さんが気をまわしてくれて、お暇を頂いたから……出発まで、家族でいるといいって」

「そうか。私は総隊長と話をしてくる。晩には手をあげるよう努める」

メラとジェリー、おまけでドラゴンが寝ていた個室までタライを運ぶと、ジェリーの事を母親に任せて、また司令官は総隊長の面倒を見に行く。ジェリーと一緒に持ってきたアルミを伸ばし始め、母親も手身近な切れを合わせ始める。どのくらいの大きさに作ろうかと、ジェリーに相談したりもする。

「どのくらい必要なのかしら」

「コートを作るのだけど、誰が着るか解らないから大きめに作っておかないと……強い人が作戦に参加してくれるって言うてた」

「だったら、エリザさんとガルムさん、それとセグさんが任命されるはずよ。あの人たちに付いていける人が、今の防衛隊にいれば話は別だけど」

「お母さん……昔、防衛隊にいたの？」

「お母さんは、親の手伝いで食事を運んでいただけで、その時に隊員の人たちから話を聞いていたの。結婚してからは自分の店を持てたから、あんまり基地までは足を運んでいないけど……コハクちゃんや、エリザさんが

夜に食事へ誘ってくれるからね」

「会った事ないけど……おじいちゃんたち、どこに行ったの？」

「ジェリーとメラの、おばあちゃん2人は、早くに亡くなってね。元々、仲の良かった、おじいちゃん2人は、隠居に合わせて2人で旅に出たのよ。郵便でメッセージは届くから、今頃は水の軍団もない遠い場所にいるのかも」

「遠いところ……この星の裏側、今頃どうなってるのかしら」

「星の……裏側？」

「うん。王国ガルより、黒鋼峠より、もっと向こう。何もなくなっただかもしれない場所」

「……いつか、見てみたいわね」

「うん」

昔の記憶と今の記憶が錯綜しており、ジェリーは夢とも現実とも境がない発言をしている。その真意こそ理解していないが、母親はジェリーの言葉を受け入れた。コートを繋ぐ作業は空が暗くなるまで続き、ジェリーが一着と母親が二着を作成した。コートの繋ぎ目が粗くないか確認した後、砕いた資材が入っているタライへコートをしずめる。そこへ、オケを両手に父親が入室してきた。

「わずかだが、追加のクロルジャツペルだ。あとは発見される見込みが薄い」

「ありがとう、お父さん」

「……前々から謎だったのだが、どのような構造でコートは水を避けているのだろうか。浸水すれば、必ず肌に水が触れるはずだが」

「コートが水を防いでるんじゃないなくて、コートの素材が私たちの体に干渉して、性質を変化させてるの。普通の状態でも水に触れると水が体に溜まって痛むのだけど、コートを着てると水を受け流す体になるから、一部に滞留しないの。つまり、ちよつと体が、ふつくらする」

ふつくらしているようだが、ふつくらしたかは肉眼で認識できない。残念である。

「では、コートの形でなくても、体に触れてさえいいのだろうか」

「全身で水を受け流さないといけないし、体を包んでいないと体温が外へ流れて行くから、コートの形じゃないと上手くいかなかったの」

「……納得はした」

納得だけはしたようだが、司令官は不可解そうにアゴをさすつたりしている。あとは丁寧に説明する事もできず、ジェリーが困っている。それを見かねて、母親が簡単に締めくくる。

「ジェリーの研究が、メラの事も守ってくれたのよね。ジェリー、よく頑張ったわね」

「うん。がんばった」

「そうだな。ところで、メラとジェリーが任務に就く可能性を高いと見て、隊の皆が一家団欒の時間を設けてくれるらしいのだが、どうしたいだろうか？」

父親の提案を受けると、母親は腕を組みながら短めに黙り、簡潔に申し出た。

「一家団欒なら、任務が終われば幾らでもできるもの。私は、メラとジェリー……それに同行してくれる隊の人たちが無事に帰って来られるよう、任務の直前まで何かしてあげたい」

「……ジェリーは、どうしたい？」

「私、絶対に帰ってくる。みんなです。それに……お母さんと久々に2人で話せて、満足」

「……解った。私も作戦準備に尽力しよう」

ここにいない娘の意見は聞かれず、家族の合意は得られた。あと、任務につくであろう隊員も目星がついている様子。

「どうやら総隊長の様子を見る限り、優先的に任務へ同行する隊員はエリザ君とガルム、セグ隊員となる見込みだ」

「お母さんの言った通りだね」

「だって、その人達しか考えられないもの。ガルムさんがいるなら、何が襲ってきても安心ね」

「……しかし、ガルム隊員は配慮に欠ける。昔から頭も固い」

「ガルムさんを褒めたからって、やきもち焼かなくてもいいの。こんなところで休んできると、また総隊長に呼ばれるわよ」

『司令官！司令官！解らず屋どもが小うるさい！至急、收拾に来い！』

「ほら。早く行ってあげなさい」

「うむ。では、行ってくる」

壁のパイプから総隊長の声がガンガンと鳴り、混乱を鎮めるよう頼み込んでいる。したら、さっさと行かねば問題が大きくなる訳で、小走りで司令官は部屋を後にした。父親が頑張っているのだからと、再びジェリーも装備を作る作業に移った。

その後、なかなかメラは部屋に戻って来ず、とてもジェリーは作業が捗った。母親がコートを作りつつも、ジ

エリーはコートに別の鉱石をまぶしたりして、改良の余地を塗り潰している。したら、前触れもなく大きな地震が発生。

「ジェリー、こつち！」

「う……うん」

逆さにした大きなタライを母親が被っていて、そこへジェリーを呼び込む。部屋天井から石が落ち、壁はヒビ割れ。それでも火山は形を保った。頑丈だ。

「お母さんは外の様子を見てくるけど、一緒に来る？」

「行く」

2人で部屋を出る。通路にも所々に亀裂が見え、他の部屋の人たちも見物に出ている。ただ、フレイムタウンの人たちは土を掘る能力が高い為、生き埋めにされても自力で脱出を図れる訳で、あまり不安気ではない。ただ、この地形をいつまで維持できるかは、ジェリーの母親も問題点として挙げている。

「ここも……住むには問題が出てくるかもね」

「水を流されたり、急に噴火したり忙しかったから……大変だったね」

ねぎらいの言葉を火山にかけたりしていると、ゴツさの増した武器を背に携えメラが駆けてきた。

「お母さんたち、無事だったんだ……よかった。なんか下に水の軍団の人が来てさ。お父さんたちをつれていったんだよ」

「え？どこに？」

「あの大きな乗り物」

ジェリーに聞かれて、メラが何処を指させばいいのか解らず、適当な方角を指さして言う。そして、次のセリフである。

「……敵をジラしたから、処刑されるのかもしれない」

「え？メラメラ、そうなの？」

「解んないけど」

「メラメラ、解らないの？」

「いや、解んないけど」

「いやね。あの人が、わざわざ処刑されについていけないでしょ」

「それもそうだ。母さんの言う通り」

とはいいつつ、3人で火山の入り口まで偵察へ。ただ、途中の道で見えた景観に違和感を覚え、ふとジェリーが足を止める。

「……まあ、地面がシワだらけ」

「今にも星が割れそうだ……」

「……メラメラ。星が割れたら、何が出てくるの？」

「カチカチの黄身と白身かな」

適当な会話をしつつエレベーターで下まで降り、火山の出入り口へ。そこで父親と遭遇し、早速といった様子でメラが詳しい事情を尋ねる。

「なにか用事だったの？」

「う……ああ、うん」

「……？」

「なんか……この星、このままでは大爆発するみたい」

「……ええ？父さん、なに言ってるの？」

「前回の対談にて、その可能性は提示されていたのだが……予兆が観測できなかつたため、余裕はあると見ていた。しかし、このありさまだ……」

腕組みしつつも司令官が体を寄せ、メラは火山の入り口から見える世界をのぞく。すでに地面は黒く焦がれて、随所の亀裂からは赤い光が漏れだしている。まがまがしく映る世界に気を取られていると、水の軍団が乗ってきた宇宙船より、メカニカルなスーツを着た人々が降りてくる。

「事態の悪化は急速に進んでいる。そちら側も判断に悩む時間はないだろう」

聞き覚えのある声を受け、ジェリーが顔を上げる。顔こそ見えないが、スーツの中にいるのは火山頂上で戦った隊長らしい。そんな人の事などメラは忘れていたから、まったくの無反応である。メラの後ろに隠れてしまったジェリーに対して、父親はコート作成の進捗を確認する。

「ジェリー、防水装備の完成には、まだかかるのだろうか？」

「……3着は作ったけど、素材が馴染むまで一晩はかかるかも」

「ならば、完成に一夜、黒鋼峠へ向かうまでに一昼夜、これは作戦開始までに必ず要する」

「……回りくどいわ。私たちが星へ滞在してられる限界も近い。宇宙圏へ避難する前に、お前たちをレッドスターがある研究所へ置いて行けばいい。あとは青いコートの女がなんとかしなさい」

今度は王国ガルで戦ったキツイ女の声を聞き、ジェリーが母親の後ろに隠れてしまう。司令官はジェリーの態度を気にしつつ、彼らの紹介をしたりしている。

「こちら、惑星ウルネアより、お越しいただいたアマカゼ隊長、補佐のシャーベットさん。あと、メカニックと呼ばれる皆さんだ」

「黄色いコートと青いコートの者、貴様らの姿は忘れん。このアマカゼを撃った技の数々、いつかは見破ってみせる」

「まさか、青コートの娘が地球原住民の作ったプロトタイプだとはね。どおりで古臭い顔な訳だわ」

「そっちの女の人……やけにジェリーにつつかかるけど、なんかあった？」

「……いえ。な……なにも」

そう言いつつジェリーは耳をふさいでしまい、メラは謎を溜め込んで腕組みなどしている。呑気な人達を急かす仕草で、司令官が話を進める。

「彼らの言葉が信用に値するか、それは私には解らない。だが、私はジェリーの言葉ならば信用できる。ジェリー……レッドスターは我々にとって救いとなる存在なのだろうか」

「……記憶が戻って、私も少しだけど、自分を作った人たちの事、思い出した。優しい声の人だったから……私も信じた。あの人が作った装置の事」

「……そうだな。解った。私は至急、作戦準備を進める。次、空が明るむ頃を見て、任務を執行する」  
「……ありがとう」

司令官が火山の中へ入ると、熱くて外に居たくないとはばかり、水の軍団も船に戻る。なにやらボーツとしてい

るジェリーへ、メラが今の状況を説明している。

「防衛隊の人たちが準備とか必要あるわけない……つまり。全員、ジェリー待ち」

「大丈夫？おしやれとかしない？」

「……エリザさんはするかもしれない」

「あの子は、絶対するわね。昔から、そうだった」

エリザさんがオシヤレしそうなので、あと少し余裕できた。とはいえ、くつろいでいる程の時間はない。部屋に戻ってコート作りに努めよう……と足を急がせていると、メラが炭鉱にてジータ隊員の姿を見つけた。

「何してるんだろ……」

「ジータおめえ、ずっと土けずってるが、防衛隊ん仕事やんねえでいいのかよお！」

「……俺、戦ったら強くないけど、こつこつやるのは得意なんだ！鉱石を探すの、手伝わせてくれよ！」

「……もしかして、パパが持ってきてくれたクロルジャッペル、あの人が探してくれたのかも」

その懸命な姿と炭鉱夫の言葉を知り、ジェリーとメラが感心している。

「おめえ、その割に何も見つけてねえぞ！石の臭いとか解ってるのか！」

「しらねえ！」

「とにかく、きたねえから体は洗ってこい！な！」

何も見つかっていないが、頑張つてクロルジャッペルを探しているのだ。汚いオジサンたちに心配されるレベルで穴を掘っているので、メラもジェリーも心の中で応援しつつ、ただ通り過ぎる事とした。

「また、私は、お弁当を作りに行くわね。ジェリー、がんばって」

「…………うん」

母親は弁当を作りに行く目的から、火山の中層で別れた。コート作りを再開しようと、ジェリーとメラは部屋に戻る。

「ジェリー、あと何する予定なの？」

「コートをホチキスでパチパチする。手伝ってくれるの？」

「手伝うと仕事が増えるからなく」

「じゃあ、一人でやる」

メラが手伝った場合、仕事が増えるのではなく、仕事を増やされるのである。メラは迷惑をかけないよう、ベッドに横たわってしまう。それから10分くらいはメラの睡眠とジェリーの作業が並行線であったが、何か重要な事に気づいたとばかり、メラが起き上がって質問を投げる。

「ジェリー、どこまで思い出したの」

「…………なにを？」

「ほら。あたしたち、これから黒鋼峠最深部を攻略にかかるわけじゃん？具体的な攻略情報が知りたいわけよ」

「…………レッドスターは私にデータが移植された後に完成したみたいで、私はログイン方法と起動の手順、大雑把なシステムについてしか解らないの…………あ、でも重大な事を思い出した」

「なにになに？」

「私、ザラじゃなかった。凶暴じゃなかった」

「そ…………そうですか」

この際、ジェリーの本名など大した情報ではないのだ。

「メラメラ……私の事、興味ない？」

「……や。あの……あたしにとっては、ジェリーはジェリーだから」

「……そっか」

言ったら言ったでメラも照れてしまうし、ジェリーはメラが好きすぎるので照れている。結局、残りの時間は静かに流れた。

「ねえ。ジェリー」

「なに？」

「……うちに来てくれて、ありがとうね」

「……メラメラ。優しくしてくれて、ありがとう」

「……いや、別に優しくしてないよ」

「これからも、よろしくね」

「……うん」

やはり出発までにコートは完成せず、ジェリーは最後の仕上げに金の粉を振りまいている。様々な鉱物でゴロと満たされているタライを2人で持ち上げ、メラとジェリーは火山の入り口まで移動を開始する。総重量300キロは固いが、運ぶには2人で事足りた。

エレベータの近くへはフレイムタウンの人たちが押しかけていて、水の軍団が乗ってきた宇宙船をながめている者や、これから出かける隊員を送り出そうとしている者、楽しそうだから来てみた者、目的は様々である。た

だ、楽しそうだから来た人が最も多い。

「ジェリー！星を救いに行くんだろう！がんばれよお！」

「ジェリー！古代人の生き残りなんだって？応援してるぞ！」

「ジェリージェリーって、あたしも行くっつーの」

「メラ！迷惑かけるなよお！」

「メラ！行くのやめるなら、今の内だぜ？」

「道を開けろ！道を！」

やかましいとばかり、メラが声を振り切つて人々をどかしている。エレベータで最下層まで降りるも、やはり人だけ。それでも何とか火山の入り口へ到達すると、そこでガルムと会った。

「収拾つかねえ！さつさと飛行船に乗り込め！」

「ええ？まだ、父さんにもアイサツしてないよ？そんなに急いでるの？」

「これじゃ、絶対に来れないだろ……諦めろ」

2人の運んでいるタライを奪い取つて、ガルムが一人で持つていく。半ば強制的に宇宙船へ乗るよう勧められ、メラとジェリーも水の軍団の人が待つている場所へと向かう。水の軍団の兵隊を見つけ、また街の人たちがエキサイトしている。

「あつ！水の軍団の隊員だ！よくも、俺たちの街を！」

「謝れ！とりあえず謝れコラ！」

「いやいや、こつちも必死な訳よ。上に参りますー」

逃げるようにしてゴンドラを作動させ、足場を宇宙船内部へと移動させる。その際に噴出した水を避けて、フレイルタウンの人々も宇宙船から離れる。宇宙船の中は水の軍団に適温であり、中に入ったら入ったで寒い。

「なんだよ……おい。どこか温かい場所を教えろ」

「その階段を上がった窓際が、こころなしか温かいぞ」

「そうか……じゃあな」

ガルムは兵隊の言う通り、タライを持ったまま、日向を求めて上の階へ。その後、兵隊は知った様子でメラとジェリーに関わってくる。

「よう。無事だったようだな。おかげさまで、俺も無事だ」

「……誰だっけ？」

「……もしかして、炎の神殿に行く途中で会った人？」

「そうそう。あのあと。俺も仲間と合流できた訳。青コートと黄色コートが船に来ると聞いて、俺が接待に来たのよ」

やはりメラは記憶にないが、ジェリーは微かに彼の存在をおぼえていた。そんな彼は何か見せたいものがあるらしく、カバンから紙の包みを取り出した。

「せつかくだから、お前らにパンを見せてやろうと思ってな。これがパンだ」

「茶色い……石か？」

メラが包みの中身を受け取ると、怪しい手つきでパンをもみ始めた。その感触に驚きつつ、パンをジェリーに渡す。

「ジェ……ジェリー！これ、やらかいよ！やらかしいよ！」

「……あら、本当」

「ガルムさんにも見せよう！」

喜びを分かち合おうと、メラとジェリーはパンを持ったまま、急いで階段を上がって行った。水の軍団の人は役目を終えたとばかり、満足げに腕など組んで置いてけぼりにされていた。

上の階には広めの通路があり、壁の右手一面がガラス張り。ここにしか居場所がないとばかり、ガルムとセグ隊員、エリザが座りこんでいる。メラがガルムにパンを手わたすと、彼は寒さをまぎらわす仕草で、適当にパンを握っていた。

「炎の民の諸君、我が隊の船へ歓迎する」

近くのエレベーターが開き、アマカゼ隊長を筆頭に数人が現れる。歓迎されてはいるが、そちらを見たのはジェリーだけである。

「……事情は理解してくれているだろう。我々は今、君たちの力に頼る他ない。必要とあらば、最大の助力は惜しまない。遠慮せずに言って欲しい」

「……部屋の温度、もっと上がらないですか？」

「……右に同じ」

「早く発進してほしい」

遠慮せず、エリザが室温を上げて欲しい言っており、ガルムも同じ。セグに至っては早く帰りたいのか、体を震わせながら発進を促している。とはいえ、アマカゼ隊長も言いたい事はある。

「そちらの司令官より必要最低限の情報は受けているが、いま一度の確認である。レッドスターの起動条件は満たしているか」

「えーと……一つはジェリーの記憶でしょ。一つは研究所の地下で見つけた石でしょ。あとは地下に溜まっている水。これで、OK？」

「……うん。今のところ、それしか考えつかないもん。でも……地下の研究所で見つけた石、今どこ？」

「あ……そういえば、総隊長に渡したままで」

メラとジェリーは呑気だが、忘れ物をしかけたのかと水の軍団は青ざめている。しかし、探し物はセグ隊員が受け取っており、それを静かに掲げている。

「司令官殿より授かった。だが、戦闘態勢になれば肌身に邪魔だ。誰かに託す」

周りの面子をグルツと見て、手わたす相手を探す。ジェリーは黒鋼峠の最深部に降りない為、他の3人から選ぶ他ない。

「ガルトでいいか……ほら」

「……ああ」

「持ったまま死ぬなよ」

「お前より先には死なねえよ」

などと挑発しあいつつ、ゆっくりとした動作で石は持ち主を移動する。忘れ物はない……と断定しようも、そこで一つだけメラが思い出す。

「……お弁当。お弁当をもらってない！」

「アマカゼ隊長！地面がヤバイです！ここに留まれません！」

「なにいー！？緊急発進！上空へ避難せよ！」

お弁当を待つ余裕もなく、宇宙船は大量の水を噴射しながら浮かび上がる。水に押され、地面は土砂となって下へと流れる。水しぶきを避けようと、下にいるフレイムタウン住民も火山へ避難している。そんな様子を窓から見下ろしていると、火山の中層通路にいる両親と総隊長の姿をジェリーが発見した。

「お父さんと、お母さんだ」

「あの大きい箱が、お弁当の入ってる箱だなあ」

ジェリーは両親を見ているが、メラは弁当が気になって仕方ない。どちらにせよ、星を救わないと爆発する訳で、爆発したら帰って来られない。宇宙船が高くまで上がってしまうと、2人も作戦に向けて気を改めた。

タライに入れたコートをかきまわしつつ、どのくらいで着くのかとジェリーがメラに聞く。

「どのくらいで着くのかしら」

「なんで、あたしに聞くんだ……あの、隊長。どのくらいで着くんですか？」

「ん。20分で到着の予定である」

「……20分って、どのくらいなのか」

「昼飯の買いだしに行き、帰ってくる程度の経過だ」

「解りました！」

的確な例えをもらい、メラも満足である。残りの時間は少しあると解り、ガラムやエリザと同様に窓際へ座りこんで、武器の銃口などをのぞいていた。

メラ以外の出撃メンバーは面持ちが重く、それなりに緊張している。緊張していたのだが、ガルムは居眠りを始めた。エリザは吐きそうな顔をしていて無口。セグは暇を潰しに硬い小石を噛み潰し、ジェリーはタライに入ったコートをながめている。そうしていたら、窓から外を見ていたメラがジェリーを手まねき。

「ジェリー。こつち来てよ」

「うん。今いく」

手についた粉を落としながら、ジェリーが広い窓から視線を落とす。

「うわぁ……」

宇宙船の高さはドラゴンが飛ぶ高度を遥かに超えて、この世界を見渡せる高さ。雲のない星を遠く見通すと、大陸の果てがクリーンに映る。そこには高い壁が、そびえていて、その向こうには何も無い。底の見えない暗闇が、星の裏側に広がっている。すると、なにか不満げにメラが文句を言いだす。

「星の裏側って、ああなってるんだなあ。もつとこう……華やかな自然を想像してたから、なんか物足りない」

「……昔は海っていうのがあったの。今は大きな穴になってるのね」

「海？」

「大きな水たまり……でも、惑星ウルネアを移住地として開拓するため、この水は使い果たしちゃった」

「ふん」

あまり理解していない様子で、メラが視線を下げている。ジェリーは無表情のまま、遠くの暗闇を見物していた。すると、横で座り込んでいたセグ隊員が外を指さし、小さな声でメラに何か聞いている。

「……あれが、黒鋼峠か」

「……そうですね。セグさん、行った事あるんですか？」

「ない。だって僕、ガルムと交代で火山の裏の警備でしょ？」

「ああ……そうですね」

「どうせ敵など来ないからと、司令官殿が食事に連れ出してくれるのが唯一の救いだ」

「……ああ。だから、うちの父さんには優しいのか」

父親が隊員のケアに勤しんでいると解ったところで、水の軍団の一人が駆けてきた。

「み……みなさん、そろそろ目的地です。こちらへ」

男の人が足を震えさせながら呼んでいるものの、フレイムタウンの人たちはマイペース。エリザはムツとしていて、ガルムは半分くらい寝ていて、セグ隊員は腕や指を鳴らしている。メラはコートの出来栄えについて、ジエリーにインタビュ。

「到着してみたんだ。そうそう、コートが完成した心境は？」

「……大丈夫。満足です」

タライから出した3着のコートは緑、赤、白の色をしており、それぞれサイズが違う。母親の手伝いもあって、緑のコートはエリザ。赤はセグ、白はガルムの体にフィットした。それでも、ガルムは文句を言ってみる。

「体にピッタリすぎじゃねえか？」

「ガルムさん、なんで恥ずかしそうなんですか？」

「俺は昔から、ファッションにコダワリねえから」

「うちの父さんとは逆だ……なるほど」

「だから、なんなんだよ……」

この期に及んで、先輩にケンカをうっていくメラ。その横で、コートの色に不服ある様子のエリザ。待ちくたびれているセグ。とにかく、準備が整った次第、水の軍団の隊員に続いて階段を降りた。

先程、宇宙船に入った場所へと戻ると、手すり越しにハッチが開いている。外からは吹き荒れる風の音。

「ちよつと失礼」

「……なに？」

安全そうなジェリーを選んで、水の軍団の隊員が後ろから近づく。背中に何か背負わされ、それをジェリーはメラ達に見せている。

「そちらは、落下スピードを落とす装置です。ここから飛び降りた後、風が弱まった場所で、そちらを起動させて着地に備えてください」

「……え？落下するの？」

「着地って……飛び降りると？」

簡単な説明を聞くと、メラとジェリーは顔を見合わせながら、2人で疑問符を浮かべている。すぐに状況が解ると、それをメラが他の3人に呼びかけた。

「……あ……あたしたち、ここから飛び降りる事になってるみたいなんですけど、だ……大丈夫なんですか!？」

「ああ？早く行けよ」

「………そうですよ。早く降りましょう」

「どここに降りればいい？」

ガラムとエリザは早く降りたい様子で、セグ隊員も降りる場所をジェリーに聞いている。

「黒鋼峠のテッペンの、大きな穴から白銀峠に入れるの……」

「行こう」

真つ先、セグ隊員が飛び降りて行き、ガラムとエリザも装置を受け取ると、セグの後を追っていく。意外とジェリーも物怖気せず、もはや行く気は満々。

「ジェリー……怖くないの？」

「……もしかして、怖いメラメラ？」

「……ちよ……ちよつと」

「……」

「……」

「メラメラ、私を守ってくれるって言ったのに……し……し……しつぼうしちゃうわ！」

「ちよ……」

わざとらしいセリフを残して、ジェリーが棒立ちのままピョンと外へ出て行った。こうなると、行くしかない。

「あの……あたしの背中、おお……お……お……押ししてください」

「え？なに？」

装置をつけてくれた男の人に対し、メラが何か願っている。

「自分じゃ行けないんです！お願いします！」

「や……やだよ。これで、あんた死んだら、後味が悪いじゃん」

「呪ったり、たたったりしないから！お願い！」

「……しようがないなあ。それ」

「……え。うわ」

両手で肩を押され、メラは足をすべらせるように落ちて行った。もうジェリーの姿は遠く、開いたパラシュートが見える。落下を遅らせる装置がアナログな事に落胆しつつ、メラも風が弱まったところでパラシュートを開く。

ウルネア星人よりも体重が重い事から、パラシュート落下する精度は高く、メラもジェリーも無事に黒鋼峠の山頂から内部へ入る。そのまま景色を見つつ、今は喋らない老岩石の場所まで到着した。

「……はあ。ジェ……ジェリー。見捨てないで」

「……あ……うん。大丈夫？」

「……おい。来るのが遅すぎて、眠っちゃまいそうだったぜ」

ゆかには3つの窪みがあり、ガラムもエリザもセグ隊員もパラシュートは開いていない。そんな人たちに遅いと言いがかりをつけられつつも、ジェリーはコンピュータに手をかざす。すると、壁についている複数の21インチディスプレイが起動。目の前の巨大モニターが光り、意味があるのかないのかも解らない文字列がラッシュされる。

「……よく解んねえが、明るくなって助かる」

「うちにも一枚、欲しいですね」

「エリザさん……外さないでください」

エリザがディスプレイをカタカタ揺らして、取れないか試しているので珍しくメラが注意している。その間にも、ジェリーはログインとメニュー選択を済ませ、最深部への入り口を開きにかかる。

「気をつけて。どこかが開くから……」

そう言われて他の4人が身構えるも、どこも開かなかった。

「……うーん……ジェリー。なんか間違ってるんじゃないの？」

「……でも、画面には開いたって書いてあるし」

黙りこんでいると、腕組したままセグが尋ねてくる。

「……その、穴が空いている場所じゃないのか？」

「そこは……前にジェリーが怪物を吹き飛ばした時、開いた穴だったよね」

「……やっぱり、そこみたい」

最深部への入り口は以前、ジェリーが力づくで空けていた。そうと解り、セグが作戦の概要をまとめる。

「僕たちは最深部を目指す。ジェリーは、ここで何をやるんだ？」

「……レッドスターを起動するブースターは最深部にあるのだけど、その途中には何枚ものセキュリティがある。ここで私は、それを止める係。メラメラ、研究所で見つけた石、持ってきた？」

「セグさんが持ってたはず」

「僕はガルムに渡した」

「……ああ、俺だ」

雑にポケットから取り出し、ガルムが手のひらで転がしている。準備は整った。武器の柄に手をかざしながら、

ジェリーを残して4人で道を進む。したら、メラだけ戻ってきた。

「……一緒にいた方がいい？さみしくない？」

「……正直、今は大丈夫そう」

「よかった」

その返事が欲しかったのか、それだけ聞くとメラは戻っていった。他に誰もいなくなった部屋で、ジェリーがトラックボールらしきものを転がしている。

「……今、大事な仕事をしているの。近づかないでね」

前の調査で来た時に作りだされた怪獣が、影からジェリーの様子をうかがっている。ただ、ジェリーに拒絶の言葉を投げかけられると、白銀峠の隅に、うずくまってしまった。

一方、メラ達4人は塗装がなされていない鉄色の道を行き、行き止まり壁へと辿りついた。すかさず、エリザが砲火器を引きぬく。

「道を切り開きましょう」

「待て。監視機能がある以上、無闇に傷つけるのは危険だ。お前がリタイアするのは構わんが……というか、前に来た事あるんならガラムが止めるよ」

「なんか出てきた方が退屈しねえし、俺はいい」

トラブルを欲しているガラムはともかく、エリザは愚直である。あまり好かれていないとはいえ、セグ隊員がいてくれるおかげで、メラは横で頷いているだけでいいから助かっている。そうこうしていると、壁が中央から分かれ、勝手に道が開けた。今度はセグ隊員が、ジェリーの仕事をほめている。

「さすが、司令官殿の教育した娘。ジェリーは優秀だ」

「……………どうやら、司令官には優秀な娘が2人いるみたいですよ」

「知らん」

メラは自分の噂を流してみるも、やはりセグ隊員に流されてしまった。自動扉の先は幅30mほどもありそんな広い通路になっており、その先は再び行き止まり。周りを見渡しつつ、ジェリーを信じて待つ。

「……………うわ！」

ガンと床が動き、エレベーターとなって降下する。手すりこそ現れたものの、その登場が遅くてメラだけ尻もちをついている。

エレベーターは白銀峠を下っているのだが、壁ガラスの向こうに映る黒鋼峠の景色は上がっている。窓をのぞいていたエリザが目元をおさえて、メラの肩に手をつけている。

「う……………気持ち悪い……………」

「酔っちゃったんですか？う〜ん……………白銀峠が変形してるんですかね」

「そうみたいだな」

セグ隊員はエレベーターの上部についている画面を見つめていて、そこには黒鋼峠全体が映像として流れている。エレベーターが動作を停止すると、画面の中の黒鋼峠は先端を広げて花のように広がった。

「あれが今現在の光景だとすれば、黒鋼峠が主砲のような形状に変形している」

「セグさん。じゃあ、これがレッドスターなんですか？」

「僕に聞かれても困る。そもそも、レッドスターが何かなど、ジェリーにしか解らない」

メラ達がエレベーターで降りているのと時を同じくして、ジェリーは次のセキュリティを解除し終わる。一息ついたところで、ディスプレイの中央に素っ気ない丸のアイコンが表示された。

『リディアへ』

「……………なに？」

画面のアイコンに指をつけると、画面が暗転。その後、40代半ばと思われる女の人が映り、何度かカメラの位置を直しつつ、メッセージを声で発する。

『……………この映像が再生されたという事は、無事に目覚めたのね。おめでとう、リディア』

「リディア……………私の、昔の名前」

すると、女の人の正体に働き、ジェリーは姿勢を前へ。次の声を待った。

『久しぶり……………いや、顔をあわせるのは、はじめてね。私はジルベ・グライガー。どこまで……………あなたは、知っているのかしら。今……………いえ、あなたにとつての遙か昔、地球は気温が急激に上昇し、人間の暮らせる場所ではなくなってしまった。そこで立ち上がったのが、人間の肉体改造計画。そして、地球の一斉冷却を行う装置の開発。これらプロジェクトの統括をしていたのが、私。そして……………』

カメラを動かし、地球儀のようなものを見せる。

『別件として動いていたのが、惑星間移民計画。これは人類が生活可能な星を人工的に開拓し、地球を捨て、移住する計画。しかし、もちろん全ての地球人が宇宙船に乗れる訳じゃあない。なるべく多くの人を救おうと、私たちはプロジェクトを推し進めた。でも……………想定した成果を上げられなかった。私たちの詰めが甘いせいで、あなたが目を覚ます事もなく……………でも、これだけは信じて欲しい。私たちは、あなたの幸せを望んで、最後まで

研究を続けた。地球人たちが宇宙へ旅立ったあと……』

「……博士は、この星に残ったんだ」

食い入るように見つめていたジェリーが、一歩だけ下がって視線を下げる。再び、画面の中の人物が声を出すと、ゆっくり顔を上げた。

『話が長くなって、ごめんなさい。ここからが本題。ここにリディアがいるとなれば、この星は最期の時を迎えようとしているはず。たしかにレッドスターは水の膜で空を覆い、星の温度を一定に保つ機能を持つ。システムは完成、可動テストも終了している。ただ……そのままの状態で起動したとしても、恐らくは100%の力を発揮しない。なぜなら、私たちは知り得ない……』

鈍い響きが白銀峠を揺らし、部屋の手が大きく傾く。斜めになった床を上り、ジェリーが画面を見つめる。映像は続いているが、音声が消えている。

「スピーカーが……映像を他の機器に転送。うん……ネットワークが独立してる……」

すぐさま、外部記録装置を探す。しかし、不要なデータは消去されており、近くの引き出しを開けても何一つ入っていない。

「……どうしよう」

ジェリーが立ち往生している頃、メラたちの乗っているエレベータは下降を終えていた。開きっぱなしの扉をガラムが進むと、そこは果ての見えないプールの真ん中であった。プールの上に鉄の橋が掛けられており、それだけが道らしき道である。やはり、ガラムは足を止めている。

「……水の地獄だ」

「あたし、もう見慣れちゃったなあ」

臆せずして、メラが橋に足をかける。その矢先、何かの崩れる音が聞こえ、世界が30度ほど傾く。

「ガラムさん、冗談はやめてくださいよ……」

「なにもしてねえよ……」

などとメラとガラムが混乱している内、見るからに危なっかしげな兵器が水の中から顔を出す。時間がないとばかり、セグ隊員が橋の上へと駆けだす。

「緊急事態だ！急げ！」

部屋に赤いランプが灯り、砲台が弾丸を撃ちだしてくる。対人用装置だが、炎の民の人々は体が硬く、痛くても傷はできない。

「……排除します！」

手すりを一部だけ切り取り、棒状にしてエリザが投げ込む。砲台の根元に攻撃が刺さり、折れた砲台はプールに落ち込む。だが、すぐに別の砲台が現れた。

「手すりが幾つあってもキリがない……足場も使いましょう」

「おい、無視して行こうぜ……」

足場が斜めな事もあり、手すりが少なくなるとガラムは心細いのである。プールのある部屋は広大で出口が見えないものの、もはや進むしかない。全力進行すると、しだいに砲台は姿を消した。

「……終わりか？手優しいな」

セグ隊員のセリフを待っていたとばかり、プールの水が大きく動く。メラが下をのぞくと、大岩を思わせる形

の魚ロボットが遊泳している。

「下！銀色の魚だ！」

魚ロボットは3体おり、2体は金網を飛び越しながら、重たい水の弾を放つ。後の1体は金網に下から当たり、侵入者を振り落としにかかる。

「フレイムガン！」

水の弾を避けつつ手すりに乗りかかり、水へ戻ろうとする魚をメラが追撃。鎧となるウロコを焼き切り、尻尾を撃ち飛ばした。

「強くなってる！さすが、エデイさんが見てくれただけの事はある！」

「逃がすか！」

水の中で影となっているロボットへ目がけ、セグ隊員がバズーカを構える。曲線を描いて大玉が撃たれ、数秒後に爆風が飛沫を上げた。散り散り、魚ロボットの部品がプールに浮かぶ。

「……おい。一発、俺に当たったぞ」

「そんなところにいるからだ」

流れ弾はガラムに当たったが、セグ隊員は反省しない。魚ロボットを撃退して間もなく、天井の模様が動き出す。それに気づき、エリザが気持ち悪くなっている。

「天井が……酔いそうです」

「なんとなく、エリザさんが遠出ししない理由は解りました……それはそれとして、あれ敵の隊群です！ファイアーオーケストラ！」

などと言いながら、メラは砲火器を分断。細い銃を両手に持ち、長く伸びる炎で、天井を狙い撃つ。動いていた天井は飛行兵器の隊群で、メラが炎で弧を描くと、一斉に引火して大爆発した。

火の粉が舞い、赤く点滅していたランプも割れる。薄暗い部屋の中、4人は息も荒げず次の攻撃を待つ。

「……落ち着いたようですね」

「なら、早いところ行こうぜ」

エリザの確認を得て、ガルムが走り出す。すると、遙か遠くで光が円を描き、瞳のように輝いた。エネルギーが集約される。フラッシュ、目の前を覆い尽くすほどのレーザーが放たれた。

「おらっ！」

ガルムが目の前の足場を切断し、切れ目から力づくで持ち上げる。レーザーは持ち上げられた足場に沿って上方へ飛び上がった。レーザーが消え去るのを待ち、エリザがガルムを踏み台にしてジャンプ。レーザーの発射台へ目掛けて、炎を発射する。

「ファーストブレッド！」

光の瞳は中央に槍のような炎を受け、クモの巣の如くヒビを広げる。遙か遠く、壁が崩れ去った。ゴールを見つければ、メラが勝手に一安心している。

「あそこで終わりだ。助かった……」

「この調子では、ジェリーが警備を解除していても無駄だな。急ごう」

先程のレーザーのせいでも、更に白銀峠は足場が揺れている。セグ隊員は真つ先に走り出すと、他の3人も後れをとらず、壁に穴のある場所を目指した。

その一方、なんとかして映像の音声を再生しようと頑張っているジェリー。その目途も立たず、ひとまずメインコンピュータの前へと戻ってきた。

「…………あ」

白銀峠全体に異常信号が出ており、解除したはずのセキュリティが全て稼働している。このままにしているのは、道が閉ざされたままである。

「…………最終防衛壁を開くには…………警備システムをシャットダウンしないと。でも…………うう」

恐ろしいものが脳裏をよぎり、ジェリーが悩ましく目を閉じる。

「信じないと…………みんなだから、大丈夫。大丈夫…………」

決心の指先で、一文字ずつパスワードを入力する。警告メッセージが表示される。

「…………お願い。メラメラに…………みんなに手を出さないで」

息を一つついてから、一拍おいて、中央のボタンを押しこむ。画面で赤くなっていた場所が黒くなり、レッドスターの機能制御についてのみ継続して情報が展開されている。

「…………やらなきゃ。私も」

目の前にある問題をかたづけなければと、ジェリーはディスプレイをマップモードからメインモードへ変更。過去からのメッセージにヒントを探すため、音声のない映像を再生した。

『…………』

「…………システム、ハードは完成してる。でも、このままではダメ。何が足りないの？」  
映像にシロヤモリが映り、博士が何かを計測している。

「水。水は……可動基準値に達してる。地下に溜め続けてた水の事？いえ……でも、さつき。私たちでは解らないって言った。データ……なんの？今と昔で違うもの……あつ！」

はつきり、自信をもって解ってしまった。手早く、ディスプレイの画面をメインメニューへ。その最上段に環境設定という項目があり、選択すると各種パラメータを入力する画面が現れた。湿度、温度、干ばつの状況、地形の起伏差など、設定値がズラリと並ぶ。

「ええと……」

各観測機器は生きており、データベースを見れば星のステータスは知り得る事ができる。ただし、一部の値は明らかに数値が狂っており、勘を研ぎ澄ませる必要に迫られた。

自分で踏みしめた事、吸い込んだ事、飲み込んだ事、肌に触れた事、感じ取った全て。この星で生きてきた、ジェリーの十数年を頼り、一つ一つ空白を埋める。機械では計れない、何より間違いない答えだ。思い出を。記憶を辿り、ふとマブタを閉じる。

「お父さん……お母さん……この星の、みんな……メラメラ……今度は、私が守るから……」

ジェリーが数字と悪戦苦闘している時、メラ達はプール部屋の壁際へ行きついていた。自動ではなくなっている自動ドアをガラムが無理やり開き、暗闇の縦穴となったドアの向こうを見降ろしている。

「……道か？これ」

「……千切れたワイヤーが上にあります。きつと、エレベータのようなものがあつたのでしよう」

エリザが上を指さしており、それを見て他の3人が納得。すると、そのタイミングで部屋が揺れ、更に10度ほど増して白銀峠が傾く。

「早く行こう」

「セグさん……行ったら戻れないかもしれないですけど」

「行かなくても、勝手に星が減びる」

「……ですね。解りました！行きます！」

そう言われてしまったら、もう行くしかない。意を決して、メラが穴に飛び込む。続いてガルム、エリザが飛び込み、最後にセグが後を追った。

ひたすら穴は下へと続いていて、ところどころに赤いランプと、閉まった扉がついている。そろそろスピードを落とそうと、メラが壁に突き刺す為のナイフへ手をかけると……なにか下の方で、ぶよぶよとした物体が動いているのを見つけた。

「ガルムさん！なにあれ！？」

「しらねえよ！つつきれ！」

「ヒートブラスター！」

メラの武器から熱光線が発せられ、柔らかな何かを貫き通す。男の悲鳴にも似た音が響き、その中をメラとガルムとエリザが突き抜けた。3人が下へと落ちて行つたあと、セグ隊員だけは異変を感じ、近くの扉に掴まって制止。見降ろすと、謎の物体が苦しげに渦を巻いていた。

「……生きて会おう」

下へ落ちるのを諦め、セグ隊員は横の扉を開いた。急がば回れである。その頃、突き進んだメラ達3人は下に落ちたエレベーターの天井を壊し、無理やり最深部へと到達した。

「おらあ！」

ガルムがエレベーターの扉を破壊し、速やかに薄暗い通路へと出る。先程の物体が追ってこないよう、すぐに走り出し……ぬかるんでいる床に足を取られて、3人で仲良く転がっていた。

「うわあ！なんか、ぬるぬるしてるぞ！」

「さっきの物体が通ったあとでしようか……あつ！セグさんがいませんよ！」

「くわれたんだろ……惜しいやつをなくした」

心にもない発言をしつつ、ガルムは立ち上がって壁の案内板を見る。さすがにレッドスターの場所までは書かれていない。

「どこ行きやあいんだよ……」

「ここが最下層で、一つ上の階が研究室。ふむ……お手洗い、聞きおぼえない場所ですね。ここにレッドスターが……」

「エリザさん……ちよつと部屋が、せますぎるんじゃないですか？」

近くの部屋だったので開けてみたが、どうも違う。エリザが案内板の前へ戻ってきた。じつと案内を見つめて、今度はメラが提案。

「……むしろ、道があるのに何も書いてない場所とか、どうなんですか？」

「面倒だ……とにかく、そこ行こうぜ」

考えていても埒があかないと見て、3人はメラの示した場所へと移動を開始した。途中の扉などは開いており、セキュリティは全く稼働していない。横長いカプセルのような形の部屋からは外が見え、歯車や謎の装置がジャ

ングルのように入り組んでいる。

「ガルムさん……あれ、レッドスターの一部ですか？」

「お前……俺に質問して、答え出た事あるか？」

「ジェリーがないから……せめて誰かに声かけないと落ち着かないんです」

「あいついないとダメなのか、お前……」

「とはいえ、2人でデートまでするのは限度があるかと……」

「この隊、そんなに良い男いねえの？」

エリザとガルムが隊を憂いているが、メラは気にしない。次の扉を開くと、下に機械群が敷かれている広い通路に出た。向こう側の巨大な扉にはレッドスターと大きく書かれており、その先にあるものを確認している。

「ありましたよ！」

「あとは石をはめ込めば、任務は完了という訳ですね」

メラとエリザが走り出すのだが、足場の横から何か出てきたのを察し、エリザがメラを抱え込んで振り返ってくる。それを足で止めつつ、ガルムが剣をさやから抜き取る。

「……さっきのが追ってきたみたいだぜ。最後の一仕事だ」

同じ頃、セグ隊員は下へと降りる階段を探し、暗い通路を駆け抜けている。バズーカの前から赤い炎を出して、視界に問題はない。角を曲がった先で、炎とは別の光を見つけた。

「……なんだ？」

ドア上の板には生体薬品……なんとかと消えかかった文字で書かれており、そのドアは開いている。電灯が2

つだけチカチカと点滅していて、そのまた奥で緑色のランプが輝いている。近寄ってみると、ランプのついたボンベには瞬殺剤と印刷されていた。

物騒な文字に釣られてセグ隊員が見まわしてみると、部屋は謎の液体が入った瓶が陳列されていて、しかし他のピンは汚れて使い物にならない。まるで、そのボンベのみが特別に保管されているようで、自然と近くにあるボタンへ触れる。メモらしきものが、小さな画面の中に光る。

『試験体の多くは健全な体と心を持ち、研究員たちからは子供のよう扱われた。全ての試験体が、そうではない。急な温度変化に耐えられる身体と引き換え、現在の平均気温では成長せず、目覚めないリディア。そして、人の姿すら持つ事のできなかったザラ』

「リディア……ザラ……？」

機器の使い方は解らないながらも、右側についている小さなローラーを指で回すと、なめらかに画面がスクロールする。

『我々は、責任をとらねばならない。おそらく、地球に残った人間は死に絶える。試験体には生活する空間を残そう。リディアは遠く、別の場所に送り管理する。ザラ。彼に我々が可能な処置は、命を止める事。その名目上、薬は完成した』

ここで文字は終わっていて、これ以上は画面が変わらない。画面つき機械を近くの台に置くと、セグ隊員はボンベを小脇に抱えて部屋から出た。

出勤したメンバーが、それぞれ忙しい中、フレイムタウン近くの火山では防衛隊員たちが空を見上げており、その先には空の大半を隠す大きな星。水の膜に覆われた惑星ウルネアを必死で指さしながら、ジータ隊員が総隊

長に呼びかけている。

「総隊長！あれが落ちてくるって本当なのか！」

「なに。我が隊が総力を結集しさえすれば、両手で押し返すも容易！総員！両手を上げろ！」

「やっぱり、そうなのか！おーしっ！任せとけ！」

「ガラムたちが帰ってくるまで、なんと少しでも食い止める！」

隊員たちは他に案もないとみて、全力でトスする姿勢。そうして隊員たちが懸命に対応しているのをよそ、一人だけ火山の中で釜を探っている人がいる。横で見ている妻が、その行動に疑問を浮かべている。

「あなた。何をしているの？」

「……レッドスターを起動後、メラやジェリーを徒歩で帰還させる訳にもいかない。他のメンバーは自力で帰ってきそうだが……そこで、移動手段の確保だ」

「うわ……くすぐったい」

司令官は釜の中へ両手を入れ、中型犬くらいの大きさまで回復したドラゴンを持ち出す。それを奥さんへ見せると、彼女も合点がいったとばかり両手を合わせた。

そして、こちらはレッドスター起動エンジン近く。道をふさぐ程の体積をもつ紫色の泥っぽいものが、意思を持って流れる。その形が人間の腕にも似て、近くのをなぎはらおうとする。そこへ一足だけ歩み出て、ガラムが謎の物体を叩き斬る。

「二の太刀、豪霸！」

剣が炎をはじき上げ、ブツリと真つ二つに敵を分ける。すると、液状の物体が飛び散り、中央にある核が一瞬

だけ目に見えた。それは漆黒の肌を持ち、顔らしきものをうつむかせている。口のような穴からは紫色の泥が流れ出ていて、同時に低い声で、うめいている。

「……あれが弱点だな」

「そうに違いありません。セカンドブレットド！」

右と同じと意見をあわせ、すぐさまエリザが仕掛ける。弾力のあるネバネバが炎に焼かれ、中央に渦状の穴が空く。勢いのまま、エリザが中の本体を狙う。

「サードブレットド！」

熱を帯びた刃で、中の黒い体をくたく。それは細かな欠片となり、周りの液体に吸収された。

「……わ！」

足場に落ちている泥が緩み、そこへエリザが足をつける。すると、分裂した敵の体が宙へ浮いた。

「エリザさん！くらえ……ブレイズシューター！」

メラの武器からへびに似た炎が飛び出て、星くずのような光を散らしながらエリザの周りを撃つ。体についた泥を武器で払いながら、エリザがメラたちの元へと急いで戻ってきた。

「本体をくきましたが……まだ生きています」

「ありや、なんだ？生き物か？」

「……」

ガラムが誰にもなく聞いているが、誰も答えられない。ただ、メラは一人、悩ましげな顔をしていた。逃げ場を探しつつ立ち往生していると、今度は泥が合体し、人型になって襲いかかった。その数、ゆうに30体は超

えている。

「お前ら！別んどこ行け！」

敵の大群をガラムが一手に引き受け、エリザがメラを抱えて壁へと飛ぶ。壁の下にはガラス板があり、透明な足場を透かして遙か下が見える。壁から生えている謎の機材にエリザとメラがつかまっているものの、そのガラスゆかから先には敵が来ない。

「……意外と臆病なようで」

「エリザさん。ここを伝つて、とびらのとこまでいけないですか？」

「……すると、あれは倒さないのですか？」

「いや、あたしたちの目的、あれを倒す事じゃないですし……たぶん、あれは……おっと！」

会話などしていると、上から紫の泥が垂れてきた。ガラムは近づく謎の泥を払うだけで手いっぱい。見るからに助けは期待できない。エリザとメラは壁伝い、レッドスターと書かれた巨大な扉を目指す。

部屋の反対側まで来ると、いつせいでメラとエリザは壁から飛び降り、扉の元へと駆けだした。

「ファーストブレッド！」

「いけ！フレイムガン！」

攻撃と同時に走り、敵を蹴散らしながら目的地へ。エリザの攻撃が危険だった為、メラは少し後ろを走って扉の元へと到達。自然とエリザが敵の撃退を、メラが扉の開放を担う。

「うりゃ〜……開きません！お願いします！」

「交代します」

交替し、今度はエリザが扉の突起に手をかけた。扉は片側にスライドする一枚板で、白銀峠全体が扉の動く方向と逆に傾いているせいか、なかなか動いてくれない。

「はあーっ……!」

わずか、10cmほど開き、エリザが踏ん張っている。レッドスターを起動する石はガルトムが持っているのを目指し出し、メラが手を振りながら呼んでいる。

「開きました!ガルトムさん!石くださいー!」

「ほらよ!」

ガルトムが放った石はメラの方へと的確に飛んだ……それと同時に部屋の中央で、謎のブヨブヨが爆発。部屋全体に飛び散る。すぐにエリザは扉から手を放し、メラの前に飛び出す。

「シールド!」

炎の渦がメラとエリザを囲み、弾丸の如く飛ぶ液体を散らす。安全を確かめ、メラが石を拾い上げる。そして、振り返る。しかし、扉は見えない。天井から壁まで、全てが謎の液体で覆われている。3人は急いで集合し、重く波うつ部屋を見上げた。

「おい、石はあんのか?」

「あります……うわ。スーパードヴァア!」

天井を模した粘着物体が、重力に任せて落ちてくる。逃げ場はない。メラが銃口を上げ、音のない大爆発を起こした。落ちてきた物体は壁へと飛び散り、光を避ける動きで壁を厚くする。扉が見えない為に見動きはできないが、敵の攻撃を一時だけ退け、3人は次の攻撃に備えた。

「切っても切ってもきりがねえな。なんなんだ、ありや」

「……あれ、きつとジェリーの兄弟です。ザラって言ったかな」

「ジェリーさんの？」

「たぶん……」

メラの答えを聞き、ガルムとエリザは思いこむ様子で紫色を見つめている。メラも自分の見解に自信があるように、心が空白になったような面持ちだ。ただ、壁の液体が鋭利な形状に変わると、思い直し視線を上げる。

「……俺たちの目的は、レッドスターとかいうのを起動させる事だよなあ？」

「……え？う……うん」

「なら、一人でも先へ進めばいい。エリザ！」

「はい」

「わ……え……エリザさん？」

ガルムが刀を逆手に持つており、エリザも自分の役割を得てメラをかつぐ。

「五の太刀・空牙！」

炎をまとった刀をガルムが力の限り投げ込み、紫の液体ごと、扉に小さな穴を開けた。液体から、鈍い悲鳴が聞こえる。

「あなたなら小さ……通れるはず！頼みました！」

「ちよつと……うわっ！」

すかさず、貫通した部分を液体が覆い隠そうとする。それより早く、エリザがメラを投げ飛ばし、間一髪で扉

を通過させた。

「……いてて。乱暴だ」

真つ赤な部屋に転がり込み、打った頭を抑えながらメラが置きあがる。横にはガルの刀が落ちていて、背後からは鉄の千切れる音。振り返らず、メラは前を見て走り出した。

すぐ先には行き止まり、壁には何を通るのかも解らないパイプが入り組む。小さな金庫らしきものが壁についていて、取っ手を引くと簡単に開いた。カギ穴にも似た小さな穴、そこへメラは手にした石を押し付ける。

「これでいいのか……ん？あれ？」

キレイにハマりはした。が、どこか緩く、やや違和感がある。しかも、何も起きない。

「……何か動いた？」

周りを見渡してみるも、明らかに動いていない。うんともすんともしない。何度も石を入れ直してみるが、何事も起きない。

「……うわあ。ダメじゃん。もう……どうしようもないじゃん」

一気に力が抜けたのか、メラは尻もちをつく仕草で座り込んでしまった。遠く、ガラムとエリザが戦っていると思しき音を聞く。その甲斐あつてか、紫の物体はメラを追ってこない。それが一層、メラの悔しさに拍車をかけた。

「……どうしよう。ジェリー」

そんな事態とは知らず、ジェリーは数値の入力に集中している。一通りのパラメータチェックを終え、ふと上を見てみる。

「……あ」

何か、気づきそうである。

「……あ！かたむいてる！」

ようやく、黒鋼峠が大きく傾いている事実と、それがレッドスターの効果へ及ぼす影響について、頭の中で結びついた。こうしてはいられないと、ジェリーは巨大注射器を持ち上げる。その後、山頂の穴を目指して飛び上がった。

入った時と比べて、3倍近くも黒鋼峠の先端は長く変形していて、脱出にも幾らかの時間がかかった。

「……ハイドロボバー！」

上空へと抜けだし、そこで水の噴射をもちいて空中浮遊。どちらへ黒鋼峠が傾いているのか確認し、倒れ掛かっている方の根元を目指して降下した。

「メラメラ……もう少しだけ待って」

待っているというか、まだメラは落ち込んでいる。

「ごめんね。ジェリー。あたし……」

力なく呟き、メラはコートの胸元から、ジェリーに貰ったペンダントを取り出した。しばらく、ぎゅっとペンダントを握りしめていたメラだったが、次第に心のモヤが晴れてくる。

「……」

心が穏やかになると同時、悩みの中に光が差した。

「……あっ！これ！」

さつきハメ込んだ石を取り出し、ワイヤーを外したペンダントと組み合わせる。

「やっぱり合わないや……」

それはメラが不器用だっただけで、見るからに形は合致している。よしと気合を入れ、再びメラは工作を始めた。

その頃、ジェリーは傾いている黒鋼峠の根元へ降り立ち、早急に注射器の先を巨大な岩の塊へ向ける。

「ハイドロ……プレッシャー！」

一撃。地響きと共にジェリーは後ろに吹き飛び、黒鋼峠が重い動きで揺れ上がる。この状態を保とうと、ジェリーは追撃を向ける。

「ハイドロポンプ！」

水を黒鋼峠の壁面に押しあてつつ、傾きから生まれた溝に水を流し込む。しかし、徐々に押され、黒鋼峠の下に溜まった水が押し出される。

「……うう！」

次第に黒鋼峠が揺れ、角度を元に戻し始める。そのような状況の中で、ジェリーは思い出したようにバッグへ手を入れ、粉の入ったビンを取り出した。

「一か八か……えいつ！」

ビンのフタを開け、水の中へと投げ入れる。水は注射器の半分を切っており、この威力で放出を続ければ3分ほどで空になる。続けるしかない。自分を、仲間を信じて、水を流し続けた。

「ダメ……かな」

諦めかけるも、次第に黒鋼峠の動きが止まる。下を見る。すると、水が半固体に柔らかくなっており、潰されながらも黒鋼峠を支えていた。もう一息。押し返す。

「やった。ハイドロ……インパクト！」

擬音にもできない音が一鳴りし、黒鋼峠が垂直に戻る。同じくして、メラも石のカギを完成させる。

「よしっ！これでどうだ！」

石の先にペンダントが挿しこまれていて、今度は穴にブレなく挿しこまれた。左、動きそうな方向へカギを回す。一瞬の沈黙。そして、部屋のパイプ群が大きく振動を始めた。

「……やった！あ……うわっ！」

ザザという音が聞こえ、まもなくメラの足元に水が渦巻く。見る見る間に水は量を増し、メラの体を飲み込んだ。

黒鋼峠の山頂より、水の柱が上がる。その勢いは凄まじく、噴き出した飛沫は霧か小雨となり、発射された水は星を覆う膜となった。誰も傷つけず、零れず、うるおいを優しく与えた。その光景を、ジェリーは地上より眺めていた。

「……迎えに行かないと」

次第に雨が弱まると、ジェリーは再び飛び立つ。メラを、仲間を迎えに行く。どこへ行こうか考えず、とにかく黒鋼峠の山頂を目的地とした。

どこまでも、雲を追い越し上がり続け、レッドスターの発射口となった場所へ。そこで、倒れている、黄色いコート的人物が見えた。ジェリーは顔を近づけ、背を持って助け起こす。

「……メラメラ。大丈夫？」

「……あ……ジェリー。あたし、やったよ」

「……」

「最後に助けてくれたの……やつぱりジェリーだった。ありがとう……」

「……メラメラ……よかった。大好き！」

「う……くるし」

ジェリーに抱きしめられ、メラが苦しそうに、だけど嬉しそうにしている。そこへ、レッドスター主砲に溜まっている水を泳いで、ガルムたちが上まで脱出してきた。

「お前ら。帰るまで気は抜くなよ」

「……僕も、早く帰りたいよ」

そういうガルムとセグ隊員は見慣れない、黒い肌の人を支えている。その正体をメラとジェリーが聞きた気にしていると、エリザが困惑の表情で教えてくれる。

「地下で対峙した謎の生物に薬を投入したところ、このように姿が定まりました……」

「眠っているが、体温もある。ジェリーの兄弟……ザラといったな。つれてきた」

セグ隊員がザラを横たわらせ、命の有無を確認。ザラの顔を見て、ジェリーは不可思議そうにメラへ尋ねた。

「……私の、おにいちゃん？」

「見た目、お父さんって感じだけだね」

ザラが薄く、眼を開く。何人にも顔をのぞかれているのを知ると、ビクリとした仕草で後ずさった。

「……な……お……俺は。くるしくない……痛くない。もう、こわく……ない」

「変わったやつだな。すっかりしろ」

「あ……ああ」

なぜかセグ隊員にザラが渴を入れられていると、今度は空からグオオオという音が聞こえた。見上げると、星の周りを包みこんだ水の膜へ、惑星ウルネアが不時着していた。

すべてが終わった。それを感じ取り、その場の全員が座りこんだ。見慣れない景色と、空を見つめ、疲れたような、安心したような、清々しい表情をしていた。息をする。少しずつ、体についた水が引ける。

「……ガラム隊員。これから、どうして帰りましょう」

「エリザ……お前に任せる」

「任せられますも……」

「お〜い！ジェリー！黄色コート！」

エリザとガラムの会話を割って、どこからかドラゴンの声。メラが座っている方へ眼をやると、バサバサと飛んでくるドラゴンがいた。開いた口の中から、司令官と総隊長の姿も見えた。

こうしてドラゴンタクシーに乗り、無事に全員が火山へ帰った。星を押し返そうと全力で待機していた隊員たちも、腰を抜かしたように倒れ込んで、楽しそうにドラゴンの帰りを待っていた。

こうして、水の軍団が攻めてきた、大事件は幕を閉じた。未知の惑星との交流、環境保全、ザラの看病、これからの問題は山積みだ。しかし、そんな事は考えず、今はメラもジェリーも、大好きな人たちに囲まれて笑っていた。

「ジェリー……ありがとうね」

「メラメラ……いつも助けてくれて、ありがとう」

「……別に助けてないよ」

「これからも、よろしくね……」

「……うん」

おわり